

牢獄の花嫁

吉川英治

青空文庫

こうふくじん
幸福人

あの座敷に寝ころんで見たら、房総ぼうそうの海も江戸の町も、一望ひとめであろうと思われる高たかな輪わの鶉うずらぎ坂かに、久しくかかっていた疑問の建築たてものが、やっと、この秋になって、九分九厘まで竣工できた。

お茶屋でもなし、寺でもなし、下屋敷しもやしきという造りでもない。一体、どんな大家族が住むのであろうと、下町では、話題になつていたが、さていよいよ、引越しの当日、ここへ移つて来たものは、瘦軀せうく鶴にも似たる老人が、たつた一人。

尤ももつと、召使いは、四、五人ほど来たらしいけれど、荷物と言つては、古びた書籍ほんぼこと机と、いと貧しい世帯道具ひとくるまが一車、ガタクラと、その宏こうそう壮なる新屋敷へはいったのみである。

孤独な、古い先のない身で、こんな大きな建築たてものをやつて、彼は一体、何が満足なのだろう。単なる、普請狂ふしんきやうとも思われない。

彼は毎日、家のまわりを、ひとりで逍遙しょうようして、独りでニヤニヤしていた。そういう

時の彼の笑い顔は、実に柔和で、明るいかやきが溢れている。人の性格や境遇が、その時々によって、ありのままに人相にあらわれるものならば、彼は現在、よほど幸福であるにちがひなかつた。

やがて嫁よめ

「おう！ これや初はつきやく客きゃくじゃ！ 富武とみたけい五百い之おのしん進殿しんが、初客はつきやくにござつたとはかたじけない。

——なに、花世はなよさんもご一緒か、これはいよいようれしい」

「これ花世、何が恥しい、こちらへ参つて、ご挨拶を申さぬか。——どうも、いつまでも、子供で困る」

「なに、子供どころか、貴公よりは、背丈せたいが高い。それに、しばらく見うけぬうちに、たいそう美人になったのう、あはははは。……何せい、よく訪ねてくれた。——ま、早速だが、見てくれい、わしの建てたこの家を」

人恋しいのであろう、意外な訪問者を迎えて、老人のよろこびかたは非常なものであつた。

「……ほう、部屋数が二十七もあつては、たいへんだな。どうじゃ花世、広いものではないか、ウム……眺望もすばらしい」

富武五百之進とは、誰も知る、番町の旗本、四十四、五の年配で、見るからに、几帳面きちやうめんそんな人物。

いわゆる、御番衆ごばんしゆうというのと、いったいに、風儀ふうぎの悪い方だが、江戸城でも、書院詰しよいんづめのものだけは、悪風に染まず、品行が正しいといわれている。

わけでも、五百之進などは、その代表的な人物で、学才もあり、思想も健全で、私行上にも役目にも、かつて曲がつたことがない。剛直、竹の節ふしのような性格だった。

——に、ひきかえて、娘の花世は、女性的な上にも女性的な、嫺なよやかな、可憐な、松の根に咲いた山桔梗やまぎぎようにもたとえたいほどに——潔きよく、ういういしい。

いい父娘おやこだ。

誰も、この父と、この娘の、正しき、優やさしさが、上品な愛を醸かもしているのをながめて、褒めぬものはない。

鶉坂の老人は、五百之進とは、刎頸ふんけいの交際まじわりがあつた。そして、わが子郁次郎いくじろうの許嫁いなすけである花世を、ほんとの子みたいに可愛がっていた。

一巡すると、老人はまた、わら草履をはいて、

「さ、こんどは、わしの住居すまいを見てくれい」

と、二人を伴ともなつて、外へ出た。

やはりこの大きな建物は、老人の罫ねぐらではないらしい。彼は、先に立って、崖がけ庭にわを歩き出した。しばらく行くと、同じ向きの崖に、これはまた、ばかに小さな一つのお堂が立っていた。

「愛繩堂あいじようどう」

三井親和の贈った隷書れいしょの木額もくがくが、かかっている。

「……愛繩堂」

五百之進は、つぶやきながら、中をのぞいた。

堂の内部は、畳たたみ二十枚ほど敷ける。炉ろと、机こと、書箱ほんばこのほか、何も無いが、奥の方に、小さな棚が幾だんもあつて、それに、さまざまな姿態しただいをした木彫もくちやう人形にんぎやうが、五百羅漢ごひやくらかのように並んでいる。

僧そうぎ形ぎやうの雲水うんすい、結綿ゆいわたの娘むすめ、藤とうたけたる貴女きよめ、魔まに似たる兕漢じかん、遊女あそびめ、博徒はくど、不具者ぶぐしや、

覆面の武士ふくめん、腕うでのない浪人なみのり、刺青ほりもののある百姓ひやくしやう、虚無僧きよめ、乞食ものごい、鮓箱すしばこをかついだ男、

等、等、等——一つ一つ見てゆくとあらゆる階級の諸相諸悪のすがたをもった人間が、呼べば、答えそうに、うす暗い壁へ、無数の影を重ねている。

「ウーム、おびただしい数だな」

「三十年のお役目は、ふり顧れば、一瞬間の間、自分でも、こんなに多かろうとは思わなかった」

「……怖ろしい！ 拙者はこれを見ていると、世の中が、怖くなる」

と、五百之進は、潔癖な眉をして、気味悪そうに、顔をそむけた。

そこへ、下男の姿が見えた。一通の飛脚をもって、

「——老先生、長崎から、お手紙でござります」

「さあ、郁次郎から参ったか」

と、老人は、また一つのよろこびを受取つて、ほとんど、その手紙へ涎を垂らさんばかりにホクホクしながら、

「ちようどよい折。五百之進殿、郁次郎からの便りでござる」

「どれ、どれ」

と、五百之進も、顔を寄せて行つたが、花世は、桜貝のように耳を紅くして、父と

老人が、低声で読む手紙の内容を、うつとりと、鼓動の胸へうけ容れていた。

前身

「いつ着くな、郁次郎殿は」

「この手紙では、九月の末——十月には相違なく帰るじやろう。帰府の上は、早速にも、婚儀を挙げたいと思うているが、そちらのご都合は」

「師走しわすではいかがかと考えておる。——十二月、そして、新春を迎える」

「なるほど。郁次郎めも、こう早く帰府いたすというのは、一日千秋の思いで、一刻もはやく、花世さんの顔が見たいのじやろう」

聞かない振りをして、空を見ていた花世は、火のようになって、父のうしろに隠れた。

「はははは。恥しいことはない。郁次郎が帰れば、あの屋敷は、二人のもの。わしはこの草堂あらしの主になって、仲のよい若夫婦を眺めて暮す。……それが唯一の希望のぞみじや。オオ、そういうば五百之進殿、お願いしておいた公こう辺へんへのお届けは」

「そのことなら心配はない。御老中方も、趣旨を聞かれて、さすがは塙老人、殊勝である

と、すぐにご聴許になった」

「それで安心いたした。公儀のお許しがすめば、もう世間へ知れてもよい」

「では、いずれ近日に、改めて、結納ゆいのうを持って出直して参る」

「左様か、では、婚儀の日どりは、その時のご相談としようか」

五百之進は、花世を連れて帰った。

老人はふたりを送り出してから、大工に大きな櫓けやきの板けずを削らせ、それへ太筆ふとふでに墨をふくませて、「塙はなわらん蘭らん医い養生所ようじょうしよ」と書いて、

「きようは欣よろこばしい日だったせいか、ばかに、文字も気持ちがよく書けた」

と、愛繩あいじよう堂どうの中に立てかけて、墨を乾かしておいた。

これで分った。鶉うずら坂ざかの大きな建物は、病人を容れる養生所になるのだ。幕府せやくの施せやく

薬院いんとしては、小石川養生所と青山に一個所あるが、それは、両方とも漢方医の病院。

老人は、ここで本朝ほんちよう最初の蘭医らんいの施療所せりようじよをやるとうとう思い立ちらしい。

では、彼は医者かというに、否いな、否、否、たいへんな職業いさちがいだ。

この老人こそ、享和、文化、文政の三時代にわたって、十手捕繩てとりなわをとって三十年、目め明あかし小頭こがしらの下役から、同心どうしん、与力よりきと出世して、歴代の江戸町奉行をたすけ、その非凡

な大眼識と巨腕は、近代稀れな鬼才と称された名探偵——塙隼人はなわはやとであった。

が、数年前に、その道を隠退してからは、好きな木彫もくちようや読書に耽りふけ、号を江漢漁こうかんぎよ史しといつて、外へ出るのも、書画会ぐらいなもの。

あの柔和な相そう、明るい笑い顔、その何処にも、彼がそんな鋭利な眼と才と腕とをもつて、社会のあらゆる悪と戦つて来た人とは見えない。

捕縄供養とりなわくよう

四、五日すると、富武とみたけい五百之進おのしんが、正式に結納ゆいのうを持つて来た。

婚儀は、十二月ときまる。

江漢老人と五百之進とは、心と心をゆるし合つた莫逆ばくぎやくの友。その子と娘ことは、おさない頃から親の目にもわかつていた初恋の仲——。何も改めて、仲人なこうども要るまい——で、事は至つて簡略にすすんで、もう郁次郎の帰りを待つばかり。

「きようで、五日経つた、もう長崎をだいで離れた頃だろう」

老人は、指ばかり繰っている。

「彼も、出島の蘭医館へ遊学にやつてから、まる五年、二十七歳になる。手紙を見ても、学業はすすんだようだ。——わしは生涯、十手捕縄をつかんで、悪党とはいえ、数百名の人間を獄門へ送つて来たから、俸には、世人を救う仕事をさせたいと考えて、医学を習ばせ、自分が多年のあいだの蓄積と、諸家から礼に贈られた金とをあわせて、貧者や、出牢しても寄るべのない病人などを救う施療所を建て、それを新しい若夫婦にまかせて、わしは愛繩堂で、余生を自適するつもり……。ああ、はやくそうなりたいものだ。そうなれば、初めて自分は、生涯の重荷が下りた気がするだろう」

彼は、希望にみたされていた。

と、そのうちに——「江漢老先生が、ご子息が長崎の遊学を終えて帰ると共に、貧者のために、蘭医養生所をひらくそうだ」と、その噂が、ぱつとひろがった。

何しろ、あらゆる方面に顔はひろい。隠退してから七、八年になるが、いまだに町奉行所でも、何か重大な難事件に行き悩むと、老先生を訪ねて、探索の方針について教えを乞うのが常だった。それが、神眼で指すようにいつもキツパリと謎の核心をつかむ。——それくらいであるから、江漢の名声は、まだ少しも落ちてはいない。

毎日、鶉坂へは、たいへんな贈り物が来る。

江漢老人は、大迷惑な顔で、

「わしは、今日まで、殺生せつしようをした罪ほろぼしに、これからは、倅せがれと共に、人だすけをやるつもりじゃ。それを、人様迷惑になつては、大いに困る」

と、怒らんばかりに断つたが、次々にやつて来ては、怒りきれない。たちまち、養生所の家具一切から、庭、門、垣根まで、寄附で出来てしまった。

「あの、愛繩堂とは、どういうわけですか」

と、来る客は皆、必ず、その木額の意味と、奥の変な木彫人形の由来いわれをたずねた。

老人は、きまつて、こう話した。

「——十手捕繩をもつ人間は、鬼のごとく無慈悲なものと思われているが、人間皆悪みなあく、人間皆善、情涙じょうなみには誰も変りはない」

「成程、そういうものでしょうか」

「で——わしは、ひとりの罪人を獄門へ送ると、必ず、一つの木像を彫つて、朝と夕に、供養くようしておつた。——それが三十年のあいだなので、いつのまにやら、あんな数になつたんじゃ」

世間は、奇を好む。

この話が伝わると、誰が発起ほつきともなく、養生所の新築披露ひろめ目をかねて、一つ、希有けうな大与力いよりきの隠退を記念する捕縄供養とりなわくようをやるうではないか——イヤ、やらせようではないかと他はたから騒さわぎでした。

席は、愛繩堂で、あの悪像を回向えしやうし、その後で酒もよし、三味もよし、席画もよし。

老人に指導をうけた八丁堀はつちやうぼりの若手や、難事件に墜ちて手にかかった人々などが、相談をまとめてから、この話を、鶉坂へ持ちこんだ。

「なんじゃ、捕縄供養とは？」

「前例のないことですが、老先生のようなお方も、前後に珍しいことですから」

「で、どんな事をするというのか」

「こちらの愛繩堂を拝借して、名月の夜は、心ある者が集り、あの老先生の手彫りてぼの悪霊どもを供養しまして、序ついでながら、ご隠退を惜しみたいと存じますので」

「でも、わしはもう、とうにお役退やくびきをしておるンじゃ」

「けれど、世間では、こんどのご普請で、初めて老先生のお覚悟をはつきりと知ったのですから、古いお馴染なじみがいいに、一いっせき夕ぐらい、ゆるゆると、お膝を合わせて語りたいたと熱望しております」

「そうか。……じゃ皆のよいように、やって貰おう」

拒みかねて、老人も遂に、任した。

やがて、案内状は、知人の間へ配られる。そして間もなく、捕縄供養のその日が来た。

仲秋の名月——八月十五夜。

実にいい月であった。盛会であった。

しかし、この晩！ ああこの晩！

彼が、塙隼人の若い時代から、多年の間、十手にかけて、捕縄にかけて、獄門台へ罪人を送るごとに、一体、二体と刻んで来た無数の手彫の悪像どもが、こぞって崇りを初めたのだらうか、これから愛の余生にはいろうとする老先生をして、三十年の体験にもなかつた苦闘の熱地に立たせ、塙家の幸福を、暴風的に覆えした大悪魔は、この夜、皎々と冴えた名月の巷に、初めて、ひよいと顔を出したのであった。

さんぼんざり
三本錐

「いい十五夜だなあ、昼のようだ」

「オイオイ波越なみこし」

「なんだ、加山かやま」

「月にばかり見惚みとれていないで、少し急いそごうじやないか。公用で少し遅刻したが、吾々は今夜の世話人の中にはいつているんだ」

「そうだ、こん夜の捕縄供養は、老先生が生涯に一度の思い出だ。おれも貴様も、老先生には、訓育のご恩をうけている師弟のあいだ。それが遅く参つては、参会者も不都合な奴と怒つておるかも知れん。早く参ろう」

南町奉行所の同心、波越八弥はちやと、加山耀藏ようぞうの二人だった。どっちも元気がいい、鋭敏な眼まなざしをもち、若手として、働はたらきざかりである。

土橋を渡つてから、ふたりの影は足早になった。大股を争うように急いだ。四ツ辻へ来ると、その町口から、左の方に月の海が光つて見えた。

やがて、その息で、増上寺ぞうじょうじの山内へはいった。

ひろい御成道おなりみちは、白と黒の寂地じやくちだった。白は月、黒は巨木の影、その中を急いでゆくと、顔にも肩にも、袴はかまにも、ちらちらと、海月くらげのような光線がたかつて、後ろへ飛んで行く。

「しッ……耀蔵」

釘を踏んづけたように、ぎくと足をとめて、

「待てよ、ちよツと」

「どうした？」

「あれに、妙な奴が佇んでいる。……今、ホウ、ホウ、と口笛を吹いた」

「いや、そう聞えたのは、梟だろう」

「そうか、しかし、怪しい風態じゃないか。……オヤこつちへ来た」

蟋 蟀 のように、カサリと、草の中にかがみ込んで見ていると、静かに、雪駄を摺る

足音が近づいて来る。

夜目にも色の白い侍だ。が、惜しいことに、その白さは目と鼻のあいだがちらりと見えるだけで、眉深に頭巾に隠されている。服装も黒づくめで、刀の鐙が羽織の裾を蝙蝠のつばさのようにぴんとさせていた。

静かに——チャラリ、チャラリ、と眼の前を通り過ぎて行く。

「なんのこった、山猫をひやかして帰る御家人か、どこぞの次男坊じゃないか」

二人は、草の中で、黙笑を見合ったが、すぐに飛び出すわけにも行かないので、登音

をやりすごしていると、また一つ、御霊廟みたまやのうしろの方から黒い人影みかげが来るのを見た。

月の斑ふが、チラチラと視覚まぎを紛らわして、はつきりと判らないが、脚絆きゃはん手甲てっこうをかけたている百姓ひやくしやうてい態の大男だった。背中に、何やら重そうな物を背負いこみ、手には、杖つえみたいなものをついて、ずんぐりした体を屈かがみ加減にして、歩いて来る。

「や、あいつ、御霊廟のうしろから出て来たぞ」

「あの裏は、往来でない筈だが」

「鎧よろいびつ櫃びつを背負しよっているじゃないか」

「ウム……おやつ？ ……こいつあ、臭い」

二人の六感は、何ということもなく一致した。近づくのを待って、ばらッと、露を蹴つて躍り出すが早いか、左右から打ぶつかるように駈け寄って、

「待てッ」

「何処へ参る！」

と、右の腕、左の腕、両方からグイと捻ねじ上げた。

「？ ……」

男は、呆あつ気けにとられた顔をして、目や、鼻や、口を、異様に動かしたが、うんともす

んとも言わなかつた。

そして肩越しに、どんぐり 団栗のような大きな白眼を、ギョロリと後ろへ送っているの、波越八弥が、はつとその視線を辿ると、先へ行った黒づくめの服装をした侍が、足をとめてぎよつとしたようにこつちを振り顧っていた。

「おツ——あいつの連れだ！」

八弥が、そう気がついて、駈け出そうとした途端に、侍の影は、からもんみち 唐門道の真つ白な月下を、夜鳥のように、躍りながら、右の手をひるがえして、何か投げた。

「わっ」

くらくらとして、八弥は、思わず自分のこめかみを抑えたまま、よろめいた。——風を切つて来た小石は、彼の頭から刎ね返つて、地上へ小さい音を転がせた。

すると、同時に、よろいびつ 鎧櫃を背負つたままき 腕をうで 捻じ上げられている百姓男は、耀蔵の手を振り放つて、猛然と、杖みたいな棒を、横に構えた。

「耀蔵、油断するな！ そいつは、さんほんぎり 三本錐だぞ」

八弥は、こう呶鳴つて、注意せざるを得なかつた。杖の先には、鋭いみ 三つ股のまた 錐がついている。それを横に構えて、ぶんと投げるか、突ツかかつて来るつもりか、男の眼は、殺

気に燃えあがっているのだった。

謎の櫃なぞひつ

「生意気な！」

と、加山耀藏ようざうは、八弥はちやの注意を聞きながしながら、敢然と、男の手もとへ飛びこんだ。
——男は、野獣のように、体を屈曲して、三本錐さんほんぎりを自由自在に使い出した。それは、棒にもなり、槍にもなり、どうかすると、手を離れて飛んで来そうにもなる。

こんな奴に、十手を翳かざすのは大人げない、というような気もしたが、耀藏は遂に、武器を持たずにはいられなくなった。無論、八弥も側面から力をあわせて、息もつかせずに、挑みかかったが、男は容易に屈伏しない。

いや、かえって二人の方が、しばしば、三本錐に見舞われて、どこともなく、血まみれになつてしまった。

そのうちに、男の運の尽きだったことには、背負っている鎧櫃よろいびつの片紐かたひもが切れたため、それが、ずるツと背中をすべこつた途端に、仰向けに足を浮かしたのである。しめた！

と耀蔵はその浮き腰を蹴とぼした。八弥の十手は、男の頬骨をイヤというほど撲りつけた。よほど強情な人間とみえて、それでも男は、わツとも、すツとも言わなかった。二人は呼吸を弾ませながら、男をがんじ絡めに縛り上げておいて、番屋の者をよび、鎧櫃と三本錐をかつがせて、急いで、一たん奉行所へ引返した。

そしてすぐに、報告だけをしておいて、二人はまた捕縄供養の席へ、出直すつもりだったが、短い道のりを、駕で飛ばしている間に、耀蔵は頭がふらふらとして来るし、八弥は、薄黒くあせた唇を噛みしめて、意識さえ、あやしくなる。

奉行所の医者に、熱い薬湯やくとうの茶碗を手に持たせられ、喉のどを焼かれるように感じた時、ハツと気がついてみると、八弥は自分の体も、側にいる耀蔵も、白い布ぬのに巻かれて、蘇鉄そてつのようになっているのを見た。駕にのるまで、さほどに感じなかった三本錐の傷が、腕うでや股ももに、ずきずきと激痛の脈をうつ。

「気がついたか」

前を仰ぐと、吟味所ぎんみしよの床に、奉行と与力がいる、書記が机をひかえている。獄吏が六尺をかかえこんで取り巻いている。——そして、鎧櫃と、三本錐の兇器を、怨めしげに睨みながら、百姓男は、棒立ちに、立っていた。

「どうじゃ、両名、苦しいのか」

「いえ、なんの、面目ない儀です、不覚を仕りました」

「不覚どころではない、これや、案外な大罪人かも知れぬぞ。暫時傷手をこらえて、召捕つた時の模様を、話して聞かせい」

時の江戸町奉行は、さかきばらかずえのかみ榎原主計頭。

その晩の立会与力は、とうぎさぶろべえ東儀三郎兵衛、奉行所中の上席であつた。

二人の申し立てが終ると、奉行はうなずいた。係りは、東儀与力の手にうつる。

捕われて来た百姓男は、よく、田舎から江戸へ出て来る黒焼売りのような泥くさい風態をしている。

「おいッ、坐れ！」

東儀与力の吟味の峻しゅんれつ烈さは有名なものである。いきなり、雷声を発して、光を放射する窓のような眼をもつて、男を睨んだ。

「ひかえろ！」

わりだけうな割竹が唸る。

獄吏が叱りとばす。

だが、男は、ぽかんとしたまま、無感覚であった。そして、両方の手で、耳を引ツ張つてみせた。妙な、張合い抜けが、瞬間ではあったが、吟味所を白けさせた。

「これや、一筋縄で恐れている曲者じやない。お奉行、あれに口を開かせるには、だいぶ時刻がかかります。てまえに、お任せ下さいませようか。……では其奴を、ひとまず、湯灌させておきますが」

湯灌とは、何の意味か、奉行がうなずくと、獄吏たちは、男を拉して、暗い棟と棟とが重なつた獄舎の露地へ引つ立てて行つた。

と——すぐに、東儀与力は、眼くばせをして、鎧櫃のそばへ寄つた。八弥と耀蔵とは、苦痛をこらえながら、燭を持つた。

「怪しいのはこれだ。……ウーム、かなり重い、どこかの武家屋敷から盗み出した贓品だな。や、入念に、定紋まで削り落してある」

錠前を打ち壊して、ほんど、蓋をあけた。

「あつ？」

とたんに、誰もが、思わず面をそむけた。

死笑靨しにえくぼ

燭よろいびつの灯が、墨のように、またたいた。
 鏝よろいびつ櫃の中からは、むうつと、霧のような血ちなまぐさ腥せきいものが立って、かざしている蠟燭の灯が、墨のように、またたいた。

「死骸だ！」

「——女じゃないか」

白い仮面めんのような女の顔——バラリと黒髪がかかって、簾すだれど越こしの月のように、やわらかい紬ぬめと長襦袢ながじゆばんの中に埋まっている。その髪の毛を、搔かきよせてみると、どうだろう、白蟻はくろうみたいな女の頬は、ニツと、笑靨えくぼが泛うかんでいるのだ、いかにも、死を満足しているように——。しかも、まだ死んでから幾時間も経ってはいない。口紅の色さえ、光っている。

東儀与力は、手をさし込んだ。引き摺り出してみると、ああ、やつぱり駄目だ！ 女の体は、鼓つづみのように、細紐で巻き締めてあって、左の乳の下に、鮫柄さめづかの短刀が、根まで突きとおして、抜かずにある。

簪かんざし、櫛くしの紋、はこせこ、帯留おびどめ、何か手がかりとなる一品でもないかと検あらためてみたが、

装身具は、すべてり取つてあつて、素性を暗示するものは、一点もない。

一つ、短刀であるが、それは道具屋にでも、さらに転がっているような物で、何らの特徴もなかった。ただ——幾度見ても、つくづく嘆息の禁じ得ないのは、女の美貌なことである、死顔とはいえ、実に美しい、肌といい、眉目びもくといい、麗玉れいぎよくのようだ、もし、これで生きていたら——と、思わずにいられない。

奉行は、ここで退席した。

そして、この事件の専役せんやくを東儀与力に命じた。同時に、八弥と耀蔵ようぞうも、力を協あわせて、一日もはやく下手人を召捕あけるように言い渡された。

「幾歳いくつだろう、女は」

東儀与力は、腰をすえて、考えこんだ。

「十九か、二十歳はたちぐらいに見えますが」

「ウム、おれもその辺に見当をつけているが、身分は、何者だろう」

「さあ、髪はこわしてあるし、帯はないし、当りがつきませぬが、ただどこか上品な面影があるように見えますが」

「いかにも、公卿くげの娘といつても、恥しくない」

「ことによると、どこかご大身の方の寵妾もちものではないでしょうか」

「鎧櫃に入れてかつぎ出された点からみても、武家屋敷だという推量はつく」

「しかし、どうして、女の死顔が笑っているのでしょうか」

「眠っているところを、一突きに、刺し殺されたものと思う。——情痴じょうちの遺恨だな、これは」

「お説に同感です。けれど、ここに不審があります」

「何か」

「死骸の左の手を検あめてみると、人差指が一本切り取ッてあります」

「情痴の下手人が、持ち去つたものだろう」

「それならば、髪の毛とか、小指とかを、切りそうなものですが」

「いや、争う場合に、切り落されるといふ例もままあるから、その指は、あまり証あかしにはならぬ。もつと重要なことは、女の髪油かみあぶらの匂においだ。——江戸の女は、上うつ方かたで、伽羅油きゃらゆ、町方いづつでは井筒まつかか松金油ねあぶらと限いっている」

「なるほど、少し、薫かりが違いますな」

「その匂においは、長崎土産みやげの薔薇香そうびこうという舶載油はくさいあぶらにちがいない。まだある、その長ながじ

襦袢ゆばんの模様は、唐人船とうじんぶねではないか。してみると、この女の情じょう人にんか、主あるじかは、長崎

の方に知行所を持つ武家か、縁のある男と見て、大体、間違いはあるまい」

「それだけ伺えば、だいぶ目星がつけ易くなりました。兩名して、きつと女の素性を洗つて参ります」

「いや、その手傷じや、二、三日は無理だろう。充分に加療して、それから働いてもらいたい」

翌日、東儀与力は、引つかりの仕事をすべて他の者に受けつがせて、役室で、一ぷく吸いながら、

「おい、ゆうべの男は、何かしているか、ちょッと覗いて来い」

と、獄吏ごくりに言いつけた。

獄吏は、すぐに戻つて来て――

「呆あきれた奴です、寝ております」

「なに、寝ている」

「正体なく、鼾いびきをかいておるので」

「よし―！」

彼は、煙管をぷツといわせて、首斬場へのぞむ時のように、硬ばった顔をして出て行った。

生壁問答

蟋蟀、みみず、陰湿な虫が昼間でもチチと啼いている牢露地をぬけると、塀際の隅に、

低い、石倉がある。

そこには人間の、悲鳴や呻きを作る機械——血や肉をしぼる拷問道具の、あらゆる種類の物がいっているのです、一通りの強情者は、一晚泊らせられれば、参ってしまふ。

それを獄吏のことで、湯灌をするというらしい。——ところが、東儀与力の耳には、近づくに従って、象のような躰が聞えた。

「起きろ！ おいッ」

彼は、石責め道具の台のうえに腰を下ろした。中はうす暗く、小窓一つしかない。妙な木製車のついている柱には、血汐の斑痕がありありと分るし、大きな銅鍋には、硫黄色の鉛が蚯蚓のようにこびりついている。

「こらつ、起きないかッ」

肩に足をかけて、ぐりぐりと小突くと、男は、けろりと見上げて、東儀与力と同じように、拷問道具へ腰を下ろした。

——^{がま}臺のように口をむすんでいる。

まったく不解な男だ。古沼からひきずり出した山椒^{さんしょう}の魚の化け物みたいな人間だ。神経の反射とか、感覚とかいうものがまるでない。

(この野郎、拙者を呑んでかかっているな。面白い、唾^{おし}にもなれ、糞^{つんぼ}にも化けろ、おれも南町奉行所に彼ありといわれた東儀三郎兵衛だぞ)

肚にたたみながら、しばらく、睨みくらべの形である。

「これ、町人。貴様は手足の皮があつい所を見ると、田舎者に相違ないが、どこの国の者だ。黒焼売りか、百姓か」

「……………」

墓^{がまげん}然とした口は、相変らず、への字のままである。

「ゆうべの鎧櫃^{よろいびつ}には、何がはいっていたか、知っているだろうな」

男は、眼と鼻をクシヤクシヤと歪^{ゆが}めて、両方の腕を天井へ上げた。喉^{のどぼとけ}仏^{ぼつ}の見えるよ

うな大きな口から、欠伸あくびが出た。

東儀与力は、じりじりする忿怒ふんぬを抑えて、

「おい大将、唾嚙つよめのまねなんざあもう古手ふるてだぞ。この石倉の中の道具は何に使用するものか知ってるだろう。そんな無駄な世話を焼かすもんじやない。奉行所で貴様を下手人と睨めば、なにも、こんな生ぬるい吟味をしてはいない。下手人のホシは他についているのだが、しかし漫然と放免は出来ぬから、役目の手前として、一ひとと通りだけのことを訊ねるのだ。はやく済まして、貴様も今夜は、女房のそばへ帰って、晩酌ばんしやくでもやった方がいいじゃないか」

「……………」

「どうしても、口を開あかん！　いつまで猫をかぶっていると、為にならんぞ！」

「……………」

彼の顔いろに、男は少し硬直した。

(こいつ、本物かしら?) —— そう思わざるを得なかった。それじゃ、唾として対話しない以上は、通わじる理わけはない。

彼は、紙と矢立やたてを出して、筆談を試みようとしたが、全然、盲目だ。冗じょうだん戯だんを書いて

みせても、笑いもしない。

こんどは、手や、指や、顔の表情で、いろいろに問いかけた。白洲に唾嚙をひき出す場合も稀にはあるので、唾の世話には馴れている彼であつたが、この男には、それすら通じなかつた。いや、通じない顔をしているのかも知れない。まるで生壁へものを言つていようだ。

彼は、煙草を吸うと見せて、いきなり、そばに隠しておいた短銃をつかみ、轟然と一発天井へ向けて放した。

「あつ！」

と、初めて吃驚したような声を聞いた。

「ざまを見ろ！ 偽嚙！」

彼は、自分の機智に凱歌をあげた。

男には、耳がある、声が出る。

が
ん
り
き
は
い
し
ゃ
く
眼
力
拝
借

だが——東儀与力のよろこびは早すぎた。男は決して、ビクリとした様子もない。怪訝けげんな顔をして、煙を見まわしているのみで、依然たる聾啞ろうあを守りきっているのだ。

では、あツといった声は、誰の口から出たのだろうか。

その錯覚さつかくは、次の驚きで、瞬間にケシ飛ばされた。鉄棒てつぼうの嵌はまっている石倉いしぐらの採光窓さいこうまどの外へ、白い女の顔が、落ツこちたように隠れた。

「やつ？」

東儀与力は、愕然がくぜんとして、外へ駈け出した。彼の声に、獄吏は棒をかかえて飛んで来た。だが、八方への狂奔きようほんは、雲をつかむような騒ぎに帰した。一つのお笑い事で終りを告げた。

「何か、お見違えではござらぬか。ここは、奉行所の中、ことには白昼。あんな所から、まことに婦人が覗いたとすれば、それは、狐でしょう。……なに、この辺でもまだ狐はいるので、諸侯の屋敷のお庭などには、昼でも啼ないでいることがままござりますからな」と、小役人たちは、彼の渋面じゆうめんを慰め顔なぐさめがほに囁ささやった。

× × ×

ゆうべの雨で、道には、団栗どんぐりや萩の花がこぼれている。十五夜をすぎると、秋は急に

深まってくる。

「——ぜひ先生の、ご名断を仰ぎたいと存じまして」

東儀三郎兵衛は元気がない。まったく、あの唾聾の吟味に根気をつからしたものと見え、数日の後、とうとう兜をぬいで、鶉坂うずらざかの大先輩、塙老人はなわのまえに辞を低くして、教えを仰いだのである。

老人はひと通り聞いて、

「それやあ、惜しいことをした。実に、惜しい」

「えっ、何か、ぬかりがあつたでしょうか」

「だが、貴公の落度ではない。最初に、唾聾を捕えた時の二人の手ぬかりじや。まだ若いからしかたがないようなものの、残念なことじやつた」

「ははあ？ ……とは何故で」

「唾聾は、何者かにあやつられてゐる手先とわしは観みる。張本人は、その折、先へ行つた黒衣くろいの侍だつた」

「あつ、なるほど」

「いちど懲こらした魚は、なかなか二度針を食わぬ。これや、難事件になるな」

「殺害せつがいされた女が、万一、ご大身の部屋方であつては、後日に、大失態と、お奉行も心痛はしておりますが、皆目かいもく五里霧中の状態なので、ほとんど、困惑しております」

「いまだに、何処から、届けも出ねば、騒ぎ出しても来ぬ点を見ると、よほど身分のある婦人か、でなければ、巧みに現場を伏せてあるものとみえる」

「何しろ、捕えた男が、稀代きたいな変物で、それに根気を摺り減すへらしました。一体、彼奴きやつは、ほんとの唾聲つばなでございましょうか、それとも偽者でございましょうか」

「それや、立派な、ほんものじゃよ」

「では、女の素性に就いては」

「まだ、どうとも、断言ができませんが、下手人には充分に余裕があつた。死骸たんしよから端緒はなはを

求めようとするのは徒勞たうらうじゃな」

「髪油かみあぶらの薔薇香そうびこうは」

「ちよつと、面白いな。だが船載はくさいの化粧油が江戸にないとは言いきれん」

「短刀は」

「それも、下手人の周密な用意、出来心でない証拠だ、痴情の殺人と申すのは違つとる」

「左様でしょうか」

「下手人は両刀を帯びた侍、なんで、そんな短刀を選ぶ必要があるだろう。後日の鑑定を紛わすからくりさ」

「そのために、故意に、突き刺したまま、抜かずにおいたものでござりましょうか」

「いや、突かれた時は、声をあげぬが、抜く時には、悲鳴を発するものだ」

「怖いほど細心な曲者とみえまする」

「なにせい、殺した現場をつきとめる事に急ぎなさい。悪くすると、この下手人の大胆さでは、後の証拠まで、きれいに掃除してしまうじやろう」

「さ。そこでござります、神の如きご眼力で、何とかこの迷霧のうちから一活路を見出すご思案を仰げないものでござりましょうか」

「そこじやて……」

と、老人は半眼をふさいで、考えこんだが、その時ふと、東儀与力の眸を、稲妻のように脅ろかしたものがある。

あの顔

それは、鶉坂うずらざかの門から、ここへ上つて来た瘦せぎすの美しい小娘だ。何か、重箱のような物を胸にかかえて、愛繩堂あいじようどうの方へ来かけたが、客がいたので、ついと、養生所の方へ戻つてしまった。

「や。や。あの女だ！ あの女だ！」

彼は、あぶなく口走るところだった。——昨日、唾嚙おとといを石倉で調べた時、鉄砲の轟ごうお音おんといつしよに、窓から消えた奇怪な女の顔！

その女と、今の娘。

どこと言つて違ふところはない。確かにあの顔だ。これが自分の眼の狂いだったら、与力の職を抛なげうつてもかまわない。

彼は、昂たかぶる動悸どうきを、丹田たんでんで抑えつけながら、

「老先生——」

「なんじゃ」

「妙なことを伺いまするが……」

つとめて平静よそおを装つても、舌しほがかわく、眉まゆが硬こわばる。ごくりと、唾つばを嚙のんで、

「今、あちらへ参つた美しい処女おとめは、ご当家の召使いにございませうか」

「いや」

と、かぶりを振りながら、老人は、堂の窓から木の間を透かして、

「違う。わしの手元に、女子はおらん」

「では、出入りの町人の娘か何かで？」

「いや」

「どちらのお女中でございますな」

「あれや、実を申すと、長崎表に遊学中の倅郁次郎の許嫁、花世さんじゃ」

「えつ、では、ではあの……」

「まだ内聞じゃから、そのおつもりでな」

「はい、ご吹聴はいたしませぬ。左様でございましたか……あのお方が、御書院番、

富武五百之進殿のお嬢様でございまするか、ウーム……」

「どうした、たいそう考えこんでしまったが」

「イヤ、何、余りお美しくいられるので……」

老人は、自分のことを褒められたように、相好をくずして、

「近頃はまた、めツきり艶やかになって、水が滴るようになった。みなが言うよ、花世ど

のは美しい、富武氏の娘御は氣質きだてがよいとな。……む！　そこで、前の話に戻って、名案という一件だが」

「は。……はっ」

彼の返辞は、どこへ向って投げているのか、自分でも分らなかつた。老人は、猫のように、肩骨を尖らして、眼まで活いき活いきと、

「あるよ！　あるよ！　たつた一つの鍵が。思案と申せば、まず、それをやることだな」

と、徐おもむろに口を開いた老人、さてどんな名案を彼に授けようとするか？

だが、塙江漢はなわこうかんも、やはり神ではなかつた。何ぞ知らん、やがて南北両派の捕物戦となり、江戸、上方まで沸わき立たせたこの怪事件は、他人ひとの禍わざいではなかつた、江漢老人自身みづかみの運命を孕はらんでいた。

傀あやつり儡おしの唾

隠退した名与力塙江漢のために捕繩とりなわく供養くようの催された十五夜の晩である。

重おもそうな鎧よろい櫃びつを背負かかってさまよつていた妙な唾男——波越八弥、加山耀藏よっせうのふた

りの同心の悪闘——そして名月の夜更けに闇から明るみへ出た花のごとき妙齡の死骸——
ふしぎな彼女の死笑靨——おまけに蠟細工の欠けたように左手の人さし指がない、酷
くも切りとられている。

その時、三本錐さんほんぎりをもっていた唾男が、激しく暴れたので、加山、波越のふたりは、数
カ所の傷さえうけて、やっと召捕った者であつたけれど、吟味にかかると、かんじんなそ
の男が、唾でつんぼと来ている。どう責めてみても、生壁なまかべに問答をしているようなもの
で、一向に通じない。

手懸りも皆無かひむである。文字どおり事件は迷宮めいきゆうにはいつてしまった。

そこで弱りはてた南町奉行所の与力、東儀三郎兵衛は、高輪鶉坂の大先輩塙江漢老人を
たずねて、謹んで教えを乞うたところが、耳かたむけていた老人が、やがて口をひらいて、
たつた一つの鍵がある！　と言う。

——そこまでが発端ほつたんであつた。

× × ×

「えつ、ありますか」

「ある！」

と、老人は、重く、つよく言った。

東儀三郎兵衛は、もう事件の曙光しよこうを見せられたように、わくわくと、頼もしげに、

「して、その鍵とは？」

「やはりあの唾男だな」

「老先生のお考えもそこにござりましたか。して、その唾男を、何といたしますか」

「獄から出してやる」

「出して？」

「む」

「出して、それから？」

分らん男だなあというように、江漢老人はちよつと舌うちを鳴らして、

「逃がしてやるんじや」

「げッ！」

東儀与力は身ぶるいをした。そして、呆れ返ったように老人の顔をながめてしまった。

一世の名探偵といわれた塙隼人はなわはやとも、老ゆれば駄馬に劣る麒麟きりんにもひとしい。——ははあ、

老先生もひどく耄碌もうろくをなさされたわい、とここへ訪ねてきたのが今さら悔やまれてくる。

「東儀」

「は……」

「何をわしの顔を見ておるのか」

「でも、奉行所としては、唯一の手懸りとしている唾男を放免せよとは、老先生にも似あわぬお考えかと……」

「ハハハハ、早合点をいたしておるな。放免せよといっても、それは一つの策、その前に、加山と波越に旨をふくませておいて、唾めが、牢を放されたら何処へ帰ってゆくか？――

――その先をつきとめる。つまり唾は、あやつり傀儡じゃ」

「あ。――なるほど！」

と、東儀与力は、間がわるそうに膝を打って、

「恐れ入ったご深慮、凡智の及ぶところではございません」

「しかし、放してやっても、唾めが、尾行つけられていることを覚ればもう効力はないから、すぐにその場から縛りあげて、牢へ戻せ」

「早速、立ち帰って、そういたしましょう。――ついでには老先生」

「何かまだ話があるのか」

「これは、お奉行からの伝言ですが、この度の難事件は、死骸の女の身元次第では、容易ならぬことになるやも分りませぬ。従つて、ご迷惑ながらこの後も何かと手懸りのあり次第に、ご意見伺いに出ますゆえ、よろしくお指図を願いまする」

「わしは町奉行じやないから、越権えつけんなことは言えんよ。ま、困つたらおいで」

「は。そのお町奉行が、只今、ご承知のとおり、御評定所の月番つきばんにあたっており、また柳りゅうえい 営えい お目付も兼役しておりますので、ほとんど、町方の事件はてまえが任されております」

「だから、しつかりヤンなさい、出世のしどころじゃ」

「老先生のお力にすぎるほかはございません」

「できるだけの相談相手にはなつて上げたいが、わしも、知つての通り隠退をするような老年、近いうちに、伴郁次郎が長崎から帰り次第に、花世と婚礼もさせねばならぬ、また蘭らんい 医養生所の方もひらかねばならぬ。そうなると、いくらいんとん 隠遁いんとん の身でもなかなか忙しいから、これはひとつ、八丁堀にいる捕物の上じょうず 手おかくちらちようさい、岡倉鳥齋おかくちらちようさい を抱きこんで、あれに頼んだらどうだ」

「その岡倉殿は、数カ月まえに、幕府のおいつけに依つて、蝦夷えぞ 松前の漁場公事くじのお調

べに出張中でございます」

「ハハア、そうかそうか、そんな噂だったな。では？ ……」

と老人、しばらく眼をふさいで考えていたが、やがてある人間を思いうかべたらしく、

「む、ちようどいい人物がある。あれならば、年は若いし、頭脳あたまはすばらしくよいし、決してこの江漢にも負けはとらぬ名捕手と思う。わしが推挙すれば、彼よりほかはない」

と口を極めて、賞めた。

南、北の両奉行のうちで、今、老先生にも負けをとらない名捕手とはいったい誰であろうか、と東儀与力は、首をひねった。

星夜せいや潜行せんこう

達眼たつがんは達眼を知るといふ。江漢老人の眼識めがねで見て、あれほどに賞ほめる人物ならば確かなものであると、と東儀与力は、はやくその誰であるかを聞きたい気もちに駆られた。

「だが東儀、それは江戸詰えどづめの人間ではないぞ」

「や、それでは困りますな」

「なに困りやせん。折よくも彼は、永らく公暇こうかをいただいて、目下東都へ遊歴りゆうれきに来ておるんじゃ」

「いったいそれは、どこの何人なんびとでござりまするか」

「名をいえば、お前も知つていよう、大坂町方役では錚々そうそうの聞えある若与力わかよりき、羅門らもん塔十郎とうじゅうろうだよ」

「えつ、羅門塔十郎が、いま江戸表へ来ておりますか」

「あれや、大塩おおしおの洗心洞せんしんどう出身で、いわば、藍あゐより出でいて藍よりも濃い男、その上にまだ勉強する気で、こつそりと東都に居をかまえ、お膝ひざもと下の奉行所の組織、番屋川筋見張はり等の配置から、江戸流捕物術と上方流との比較など、なかなか研究しているらしい上に、余暇には聞えのある学者を訪ね、谷文晁たにぶんちようの画塾へ通つたりして、絵などもやつてゐるという話、わしの所へも一、二度やつて来たが、どうも若いに似あわん落着きのある人間だよ。ああいうのが鬼才きさいというのだろう」

「ちつとも存じませんでした」

「礼をつくして、いちど相談してみるがよい」

「そういたしましたよう」

「じゃ、わしはあちらに、せがれ伴の許嫁いいなすけ花世さんが、何か用事があつて来ているらしいから、これでご免をこうむるよ」

と、老先生は愛繩堂を出て、

「才あきびよりいい秋日和じゃの。……郁次郎もこのぶんでは、道中つつがなく、帰府の旅をいそいでおるじやろう」

と空を仰いでも、親心に、やがて長崎から帰るわが子のことを思いながら、歩調ゆるく、養生所の方へ行つてしまった。

花世？ ——

東儀与力はまたしても、さつきチラと見た怖ろしい疑惑にとら囚われ出したが、いやいや、と自分の錯覚をうち消すように首を振った。

そんなことは疑つてみるだけでも罪悪である。あんな人格者である老先生が選んだご息の許嫁ではないか。また大番組のうちでもわけて実直家な富武いおのしん五百之進の愛まなむすめ娘ではないか。

——それをたとえどう顔が似ているにしても、白昼、奉行所の奥へしのびこんで、唾男を吟味している拷問倉ごうもんくらなどをぞいた奇怪な女性、大胆な女性と誰がいきれようか。

「よそう、よそう、そんなくだらぬ迷いは」

と、東儀三郎兵衛は思い直して、いそぎ足に奉行所へ帰った。

そして早速、同心の加山と波越のふたりをよんで、江漢老人の鬼策を話すと、

「なるほどそれは妙案だ」

と、ふたりも手を打って、それぞれ手配にかかった。加山耀蔵は鉄砲箆をかついで紙屑屋に化け、波越八弥はどこから見つけて来たかと思うほどひどいボロを着こんで、頭から酒菰をかぶり、うまうまと非人に変装した。

時刻をしめしあわせて、その晩、伝馬町の牢役所の外にひそんでいる。

星空の仄あかり青く、こういう尾行仕事には、あつらえ向きな晩。

むろん、唾男をつかまえた時に、ひどい手抗いをされて懲りている例があるから、二人のほかにも辻々には捕手がびつしりと影を沈めこんでいる。

——一方では東儀与力、彼も伝馬牢へ出張して、最前から役室の自鳴鐘をじつと睨みながら、

「おい、牢番」

「は」

「唾嚙のやつは、どうしておるか」

「さつき晩の獄飯ごくはんを与えました」

「ウム」

「それをガツガツと食べ終りますと、手真似てまねをして、もつとくれいと強請せがみましたから、いかん、と首を振ってみせたら、さまざまあだをいたして、いやはや手古摺てこずりました」
 「吟味にかかると、まるで腑抜けふぬのように、目鼻もうごかさなくせに、そんな振舞をいたすのか」

「只今のぞいてみると、またぐうぐういびき鼾をかいて寝ております」

「なぜ獄則どおりにせんか。割竹ろうざやをもつて牢鞆ろうざやをぶツ叩け」

「つんぼですから、びくともいたしません」

「あ。そうか」

と、微苦笑びくしやうをもらしながら、しばらく、腕をこまぬいて黙想に耽っていたが、やがてジジジジと机の自鳴鐘とけいが鳴り出すと共に、

「お、支度だぞ」

と、九番という木札のついている牢の合鍵をはずして役室を出て行った。

常闇とこやみの牢長屋の奥で、ガチャンと冷たい鉄の音がする。

寝ているところを揺り起されて、牢鞞ろうざやの外へ引っぱり出された唾男は、きよとんとした顔で、

「? ……」

東儀与力の顔を、顔負けがするほど、じいっと、見ている。

放免状を読んで——といつても形式だけであるが、手真似と表情とで、牢を出して帰宅をゆるすからどこへでも行け、という意味を呑みこませてやる。

が——唾はうれしそうな顔もしなかった。

張合いのないこと夥おびただしいが、こつちには計画があるから、予定を運んで、召捕った時に、彼が持っていた穢きたない財布——むろん沢山ははいつていないが——それと吠かますの煙草入れ、鼻紙などを、返してやる。

それで唾も、やっと少しわかつたらしく、ぺこんと一つお辞儀をして、伝馬牢の裏門から突き出された。

さて、どこへ行くだろうか?

老先生の妙智、果たして中あたるかどうか。——と東儀与力も気が気ではないのである。

だが、その姿のまま、後ろから尾ついてゆけば、加山、波越のふたりの潜行に邪魔をするよ
うなものだから、いったん門を閉しめて、雨水溜だめの天水桶を踏み台にして、高い塀の上
に
すがり、首が生えたようにして、見送っていた。

「ウム……紙屑屋の加山がうまくからんで行くな。オ、波越も横丁から出て尾つけて行つた。
あのすがたでは唾も気がつくまい」

と、少し安心してはいたが、そのうちに何を見て驚いたのか、
「ややつ！」

と、東儀与力は絶叫して、そこからすべり落ちそうになった。

に
逃げる夜雲雀

彼が、愕がくぜん然としたのは何だろうか？

東儀与力として、それを驚かずにいられるものではない。なぜかならば、不意に牢を出
されて、夢みるように歩いてゆく唾男の影が、ひろい草原を斜めに抜けて、向うの片側町
の灯を見ながらのろのろと進んでゆくとすぐに、頭巾をかぶっている一人の女が、すつと、

草むらから伸び上がったのである。

そして、ちょうど近所に住む者が、買物にでも出るように何気ないさまをして、唾男のそばを摺り抜けて、彼の背中へ、手でもふれようとしているらしいが、屑屋と非人の眼が光っているの、怪しまれてはと、しきりに苦心をしているらしい様子。

そのうちに、ひよいと振り顧つて、塀の上から見送っている東儀与力の首に気がつくといかにもぎよツとしたように、小走りに横へ駈け出したのである。

オオその夜目にもわかる白い顔よ。

きょうもきょうとて鶉坂の老先生の庭で、ちらと見たあの花世にそっくりな輪廓だ。

また、つい二、三日前には、拷問倉ごうもんぐらの窓から唾男の吟味をのぞきこんでいた、あの妖美な顔ではないか。

「畜生ッ」

そのまま、ひらりと、東儀与力は塀の外へ跳び降りたのであった。

唾男の鈍重きわまるのにひきかえて、女はまた怖ろしく鋭利な感覚と、すばしっこい動作力をもっている。

——来た！ と気がつくくと女はすぐに目的をあきらめて、元来た草原の小道をスススス

ツとまるで低く飛ぶ雲雀ひばりのように。

「うぬ、今夜こそは」

と、東儀与力もまた、歩速のあらんかぎりを出して、つんのめるように追い駆けた。

男の歩速あしと、女の歩速——

またたくまにその距離は迫ったけれど、もう一步という所で、女は、混み入った裏町の露路へまぎれこんでしまった。

うす暗い職人町の露路を、彼の眼がせわしなく光って、隈くまなく歩き廻っていたが、どうしても、姿が見あたらない。

そのうちに、川端へ出た。

右手をふり向くと、京橋口の大通りの灯がチラチラ見える。ああいう敏捷びんしょうな女だから、かえってこっちの裏をかいて、明々あかあかと町家ちやうかの灯が往来を照らしている中を、洒然しゃぜんとあるいているかも知れない。

こう考えて、彼は、仲通りを大股にあるき出した。——すると、ものの三町も行かないうちに、彼は、動悸を衝つうような欣びに遭遇した。

いた！ 女はいた！

しかも大胆にも、かぶっている頭巾まで解いて、丸八という大きな呉服屋の暖簾のれんの蔭に腰かけこんで、帯地か何かを見ているのである。

この女が、姿の優美なものにも似あわなない不敵者だということとは、真昼中、奉行所ごうもの拷問倉もんぐらまでしので来たことだけで充分に分つていたが、まさか、こうまで機変に富んで巧妙に澄ましこんでいようとは、思いのほかだった。

「ウーム、要いりもしない物を出させて、わざとここで時刻をつぶしているな」

彼が、袖暖簾そでのれんのかけに身をすくめて、出て来るのを待っているのも知らずに、女はやがて、頭巾に顔をくるんで、

「では明日にでも、それと、あの帯皮を、届けてくださいましね」

と、腰を上げた気ぶり。

しめた、呉服屋へはもう女の住居すまいまで洩れている、捕まえる機会といっしよに、自白させる端緒たんしょまで揃そろつてしまふとは、何という恵まれた晩よるこだろうか——と彼が欣よろこびの笑みをもらしていると、すうと、細ほつそりした頭巾のうしろ姿が、眼のまえをさえぎって、おおよそ、十歩ばかり大通りの方へ向いて。

今だ！ 夢とも知らない女。

東儀与力は音もなく近づくが早いか、

「女。待てッ！」

と、するどい一喝に相手の耳を衝つて、跳びついた両腕を、うしろから胸へ廻して締めつけた。

びつくりしたに違いない、女は、顔いろを失つて、じつと、肩越しに黒い眸をながしたが、気を沈めるように、

「あつ……貴方は、東儀様ではございませぬか。何をなされます、こんな場所で」

「えッ……拙者を東儀と？ やや、貴女は」

「ごぞんじの筈ではございませぬか、富武五百之進の娘、花世でござります。……何かお人ちがいでも」

「こ、これは、飛んでもない失礼を仕りました。……ウウム、やはり貴女は花世殿だ、花世殿にちがいない」

と、恐縮と疑惑と、迷いと否定と、交 《こもごも》な気もちに乱れて、まるで心の滅走した人間のように、茫然と手を離れた。

花世の寒いほど麗輝な顔ばせは、ようやく、驚きからホホ笑ましげに和んで――

「東儀様、ご得心が参りましたか」

「は、は、よく相分りました、まったくの人違いで」

「他人のそら似ということもままございますから……」

「面目ない失礼でござった。どうか、お父上にはご内聞に」

「はい、私も女子おんなのくせに、夜の外出そとでは父に知れば叱られますから」

「しかし、供もお連れ遊ばさずに、おひとりでどちらへ」

花世は、もじもじと、答えかねていたが、東儀与力の眼まなざしが、まだ何か、充分に疑わ

しげに見ているので、

「貴方様も、老先生から、ほぼお聞き及びではございませぬか。……あの、塙はなわ様のご子息

郁次郎いくじろう様が、もう近いうちに、長崎からお帰りでございまする」

「む、それならば承りました、こちらへご帰府になるとすぐに、貴女あなたとご婚儀をおあげに

なるそうで」

「で……お恥しいことではございますが、道中おつつがないようにと、每晚、白魚橋しらおぼしの

水天宮まで、そつとお詣りまいをいたしております」

「が、今何か、その辺でお買物かいものをなされておられたようですが」

「はい」

と、花世はいよいよ恥かしそうに、

「娶とつぐにつけて、永らく世話をしてくれました乳母うばと召使いに、心ばかりの品をやりたいと存じまして」

「成程。いや、なかなかお手廻しのよいことですね」

こういわれてみると、事毎に、疑う点は微塵みじんもないのである。だが、心の一隅には、まだ探索心理が虫のようにならずいてやまない。

「お送りいたそう、お屋敷の前まで」

「いえ、もうどうぞ」

と、花世はいたく迷惑そうに、

「今もお話しいたしましたように、父には内緒でございますから」

「言いようのないご無礼をして、このままでは心苦しい、お詫びのつもりで」

と、構わずいつしよに歩きだした。

橋を渡つて、八官町の旗本町まで来ると、花世は礼をのべて、とある門の袖潜りを静かに開けて、中へ姿を消してしまった。そこはたしかに、大番組御書院方、富武五百之進の

邸にちがいない。

「むむ……どうも解げせない。あの美しい姿は、いったい一人なものか、二人なのか、何だかおれには分らなくなってしまった。といつて……この事ばかりは老先生に訊くわけにも行かないし……」

塀つまこいにもたれて、考えこんでいると、奥ふかい邸の木の間からみやびた八雲やくもごと箏の音が、良人つまこい恋しと弾ひくように洩れてきた。

二度追放

「お！ この事にばかり心を囚とらわれていては果てしが無い。唾つよの方の結果も心配だ」
彼は気がついて、大急ぎで、伝馬牢へ引つ返してきた。——詰所をのぞいてみると、加山も波越もまだ戻っていない。

「さてはうまく行つたな」

と、いささか慰めていると、そこへ牢番同心がのつそりとはいつて来て、妙な顔をして鬱ふさいでいる。

「おい、どうした」

と、少し弾んだ声で慰問すると、牢番同心は、初めて気がついたように、

「あ、東儀様でございますか、今し方まで、加山殿と波越殿が、非常にさがしておいでになりましたが」

「えつ、では一度ここへ立ち帰ったのか」

「はい、戻るとすぐに、身なりもあのままで、よほどなご急用とみえて、ご両所とも町まち駕がを飛ばしてどこへかお急ぎになりました」

「はてな？ ……そして唾男の行く先は首尾よく突き止めたようか」

「まるで目的あてが外はずれました」

「やつ、逃げ失せたか」

「いえ、その唾奴は、ご両所の帰るより前に、ひとりでのこのこと伝馬牢に舞い戻つて来て、あげくの果てに、ひとりで牢へはいって澄ましこんでおるのです。——何でも波越殿にお話を承ると、唾めは、おふたりが尾行つかけしていたことは全く知らない様子で、ここを出ると、しばらくうろうろ歩いていたようですが、やがて、一軒のけんどん屋で、饅頭うどんをこたま食べこみ、また町の辻々をうろついて、今度は饅頭まんじゅうを買ってそれをふところに入

れたと思うと、前と同じ道を真つ正直に戻つて、再び伝馬牢の中へのこのこと帰つて来てしまつたというわけでござります」

なるほど、それでは全然大目的おおあてはずれだ。東儀与力は開いた口がふさがらないように、「ウーム怖ろしい奴だ。いつたい彼は、稀世きせいの大馬鹿者か、それとも、天下の大智者か。江漢先生の裏を搔くほどの代物しろものじゃ、とてもおれの手におえんのは当りまえだ」

と、匙さじを投げるように、嘆息を放つた。

すると、そこへ、同心の加山耀蔵ようぞうと波越八弥のふたりが、あわただしく帰つて来て、東儀与力の顔を見ると、

「あつ、ここにおいででしたか」

「今、話を聞いていたところだが、唾への計略は、すっかり目的あてが外れたはずそうだな」

「お聞きになりましたか。吾々も随分いろいろな罪人を手がけましたが、あんな奇怪な男には初めてぶつかりました」

「して、すぐ町駕で飛ばしたそうだが、どこへ行つて来たのか」

「一応ご相談の上と思いましたが、結果が余り意表外なので、鶉坂の老先生をお起ししてご意見を伺つて参つたので」

「ム。よく気がつかれた。して老先生は何と言われたか」

「それは手順が足りない。今夜のうちにやり直したがよかろうと仰っしゃるので」

「どの手順が抜けているのだろう」

「奉行所で吟味をした上、外の見えない盲目駕で伝馬牢へ差送りしましたが、それが第一いけない、唾は全くの愚鈍で、その上、江戸の地理にうといと見えるから、元の奉行所へいちど戻し、また、初め召捕った増上寺の境内けいだいへ連れて行って、そこで放せと仰せられます。で、帰りがけに奉行所の方へ寄って、すべての打合せを済まして参りました」

「してみると鶉坂の老先生は、飽くまで唾を、大愚者と見ておられるのだな」

「何しろ世話の焼ける奴です」

「ともかく、その手順どおりに踏んでみよう」

夜は更ふけているが、一日経てば一日だけ捜査は至難になるばかりだ。呆おろつ気を取られている唾を、再び牢から出して盲目駕の中に括くりつけ、奉行所に納めて、最初の晩のように、増上寺の境内まで連れて来た。

ちようど、この辺が彼を縛からめ捕った場所だという所で、駕から出して、行け！ という手振りを示して押おつ放はなすと、

「? ……」

唾はしばらく、四方を眺め廻して考えていたが、やがて黙々と、御靈廟みたまやのうしろの方へ向つて歩き出した。

「おや、あそこは通り道ではないのに」

「よろいびつ 鎧櫃しよを背負つてきた晩も、あの御靈廟の裏から出てきたのですから」

「ははあ……では今度こそ、その晩、出て来た所へ戻るつもりだろう。では、兩人、ひと足先へ」

と、東儀与力は、物蔭に頃あいを計っている加山と波越へ眼くばせをして急がせ、また、ふところからは一通の書面をとり出して、

「先刻、密使をつかわしてあるから、委細はお聞き及びの通りであるが——と申し添えて、これをお奉行の手へ届け、羅門塔十郎に交渉わたりをつけること、よろしくご配慮を仰ぐと申して、来い」

と、ひとりの部下に耳打ちをして、すぐにその場から走らせた。

女笛師

増上寺の五重の塔を見上げたり、伽藍がらんの横の松の樹を撫でて見たり、塀のそばに近づいて見たりしながら、唾は、空疎くうそに、鈍々どんどんとした歩調で、御霊廟の裏へ曲がって行く。

層屋の加山と、非人ひにんに変装した波越とは、見え隠れに尾ついて行った。その二人の影をみてあてとして、また東儀与力が尾ついてゆくから、ちようど三段尾行である。

「おや、また石燈籠いしどうろうのそばへ顔を寄せているぞ」

曲がるたびに、唾は、必ず何かの物体へ眼を近づけて考えこむ風なので、波越八弥があとからいちいち検察してゆくと、あの晩携えていた三本錐さんほんぎりの尖さきで傷つけたらしく、道の覚おぼえ印しるしが引つ搔かいてあつた。

「うむ、やつぱり老先生のお眼鑑めききどおり、唾のやつは、全く田舎のぽつと出でで、江戸の地理は皆目知らないのだ……」

そうしている間に、幾曲りして、御霊廟の裏から僧房の裏まで突き当たると、道はもうないはずであるが、唾男は、がさがさと、一方の雑木山へ登り出した。

「あつ、成程」

常識はいつも探索に失敗と迂遠うえんな笑いを招く。道とばかり考えているから思いつかなか

つたが、そこは増上寺の寺領で、遠く麻布あさぶの台町まで林つづきである。人目にかからずに歩くには、屈くつきよう 竟きやうな道だ。

やがて、その地域をぬける、淋しい溜池ためいけした下である。それを右手に、唾つばは、靈れいなんざか南坂なんざかを登つて、やがてまた、飯いいくら倉くらの屋敷町の方へだらだらと降りた。

大きな銀いぢよう杏けやきだの櫺けやきだのが落葉している閑静なしもたや町の一軒。

「? ……」

唾つばは、その前に、突つ立つた。

—— おおくくららりりゆゆう
大蔵流おおくらりゆう 京笛御指南ぎやしなん、鷺江ゆき女さぎえ。

かなり隔てている波越八弥の眼にも、その家の風雅ふうがな小門にかけてある看板の文字が、ありありとこう読めた。看板の木が新しいからである。

唾つばは、小門の戸に手をかけて、がたがたと揺すり始めた。——もうそれだけで充分である。

「それっ」

と、東儀与力が手を振ると、加山、波越、そのほかの捕手がすぐ唾つばを縛り上げて、用意して来た盲目駕に抛り込んで、すぐ伝馬牢へ送り戻してしまった。

「さ、いよいよ兇行の場所はここと極った」

三人だけは残つて、静かに門の戸をコジ開けにかかる。

「どなた様ですか」

すると、生垣隣りの、しもたやの窓が開いて、四十前後の女が、寝衣すがたで外を覗いた。

よい者が起きてくれたと、東儀与力は窓の下へ寄つて、

「静かにしてくれ、吾々は、奉行所の者だから」

「えつ、あのお奉行の……」

と、女はふるえ出した。

「いや心配することはない。ただ用意として聞いておきたいが、そちの家は、何商売だな」

「するがちよう駿河町の三井に通つております」

「ばんとう通い番頭か」

「は、はい」

「平常隣家と懇意にいたしておるか」

「口をきいたこともございません」

「主は女で、笛の指南だな」

「そうらしゆうございます。ほかに、小間使い風の玉枝さんという女もいたようでございますが、十日ほど前から、ちつとも見えません」

「門が閉まっているな」

「はい、その頃から、上方へでも行つたような様子で、女主人のお雪様も見えませぬし、笛の音もしたことがございません」

すると——小門を開けて先へはいつた加山耀蔵と波越八弥のふたりが、何を屋内に見出したのか、

「東儀与力！ 早く、大変です！」

と、絶叫して呼んだ。

何事かと、あわただしく駈けこんでみると、京普請の小間どりの奥の一室、そこに、当夜の兇行を物語るすべてのものが、八弥と耀蔵のかざす紙燭のもとにまざまざと照らし出されているのだった。

部屋は、十六畳の客間、或いは、指南間ともいえるであろう、まず床には狩野派の清洒な細軸、江月の書額、螺鈿彫の千鳥棚、隅には琉球朱の机、中ほどに

は華やかな鍋島絨毯が敷かれてあつて、その上にすばらしく巨大な花梨の客卓がどっしりとすえてある。

家具の配置は、ぎつと、こんな按配であるが、そこに散雑している物は、薩摩焼の茶碗だの、笛だの、血みどろな女の衣裳だの、燃えさしの蠟燭だの。……目も向けられない惨状。

そして、まだまだ驚くべきものがあつた。

それは、商人態しやうにんていの、四十前後の、男の死骸である。

男の死骸には、刀痕とうこんはなかつた。絨毯じゅうたんやふすまや障子からに乾びからついている黒い血し

おの斑痕はんこんは、すべて十五夜の晩に、鎧櫃よろいびつに入れて運び出された死笑しにえくぼを泛うかべて

いた美人——この女主人のお雪様の血しおと見ていい。

「どうでしょう与力、この態は」

「案外だな。……しかしなかなかいい暮しをしていたとみえる、すべてが大名道具だ」

「だが下手人の思慮にも似あわしくなく、どうして今日まで、このもう一つの死骸や、兇行のあと始末をつけないのでしょうか」

「あの晩、鎧櫃に入れて、二度にして運んで隠すつもりだったろうが、その最初に、唾が

捕まったので、余ほとぼり燼をさましているのだろう。今に必ず、気がかりになって、ほんとの下手人が覗きに来るにちがいない。ウム……こうしよう」

東儀与力が一代の智慧をしぼって、ふたりに何か囁いた。——以来この家の小門は、前のおりに閉めて、森しんとしたまま、二、三日を経過した。

無論、隣り近所にもかたく口止めをしてある。そして二人は外に、東儀与力は屋内にひそみ、指南間の大きな花梨かりんの客卓を衝ついたて立のように立てかけて、その蔭に、息をころして張りこんでいた。

三日目……四日目……何事も起らない。

すると、五日目の夜半である。少しつかれてとろとろしかけたところへ、よほど勝手に知っているらしい男が、庭の網代門あじろもんをこじ開けて、こっそりと雨戸の外に忍び寄り、

「玉枝……玉枝……。ここを開けてくれい」

と、四隣を憚はばかるような声で、ほとほと、軽くそこをたたいた。

羅門らもん・来るきた！

「む、来たな……」

と、東儀与力は、自分の鼓動こどうを聞きながら、じつとがまのように、客卓の蔭にかがみこんでいた。

「……いないのか、玉枝は」

すうつ、と風が流れこんで来たので、曲者くせものが戸を開けたことは察さしられた。——東儀与力はとたんにハツと息がつまった。

のっそりとそこにはいつて来たのは、眉深まぶかな黒の頭巾に、黒の羽織、すべて黒づくめに装った色の白い武士である。まさしく、加山と波越なみごが増上寺で逸した、唾男つよおの連れだといふあの武士にちがいない。

が——黒衣くろいの武士は、そこに立つとすぐに、はてな？ という風に嗅きゆう覚かくを働かせた。真つ暗であるが、なんとなく屋内の空気のうちには、新しく蟬せみ燭そくの燃えた匂いと、人間の息とも臭気ともいえないものが、感じられたと見える。

はツとしたように、武士が左足を退いたので、おのれ逃がしては、と焦心あせツた東儀与力が、

「曲者くせものツ」

と、怒鳴りながら、大客卓の蔭から立とうとした。

とたんに、びゅツと白い切ツ尖さきが匆はねて来た。あつと、思わず首を竦すくめたせつなに、黒衣ろくの武士が、足をあげて、鉄板のように重い花梨かりんの大卓を蹴たおしたので、東儀与力はその下に押しつぶされて、

「うッ」

と、何か叫ぼうとした。

曲者は、絨じゅうたん毯たんをつかんで、ぼつと、その上に押しかぶせると、冷蔑れいべつをこめた笑みをにやりと投げて、ふところ手をしたまま、表から出て行ってしまった。

「残念ツ、残念。——おいつ、加山、波越ツ、二人ともおらんのか！」

卓の下から、手足をもがき出しながら、彼のが罵り騒のしいでいると、その声に吃驚びっくりして、裏口と表から、二人が駈ばんけこんで、盤ばん石じやくのような大卓を持ち上げた。

「与力、どうなされました」

彼は、部下に対する間の悪さを、憤怒に変らせて叱りとばした。

「どうなされたじゃない、今、出て行った曲者をなぜ捕えぬのだ。居眠っていたのであるう、たわけ者め」

「曲者？ 与力こそ何をとぼけているのですか、そんな者は、出て来ませんが」

「幽鬼ではあるまいし、姿を見せずに出てゆけるか。たしかに表から出て行った。——それもたツた今ではないか」

「なるほど、今、一人の武士が出て行きましたが、あれは与力がお呼びになつた奉行所の使いでございましょう」

「ええ、何をたわごとを言う。拙者が曲者を呼ぶ理由があるか」

「でも、その武士を糺すと、そう言うのです」

「貴公、同心のお役をご辞退したらどうだな。曲者の言い訳を、そのまま信じるようじゃ勤まらん」

「でもその武士は、袂たもとの中から、南町奉行の烙印やきいんのある与力鑑札よりきかんざつを立派に示したのです」

「作り物だ、それは」

「いや、奉行所鑑札が作り物かどうかぐらいはてまえにも分ります。決して、偽鑑札にせかんざつではありません」

と、折角、畏わなにかかった本体の曲者を逸して、その口惜しさと、気まずさと、異様な昂

奮とに、三名は、地だんだを踏んで、後の祭りをくり返した。

夜は、いつのまにか、白々と庭の樹々に明けている。東儀与力はまだ余憤よぶんがしずまらないで、

「こんな馬鹿な目にあつたとは、老先生にも話が出来ぬ。以後はきつと気をつけろ！」
と、どこまで、部下のせいのように、加山と波越を叱りとばした。

「おはよう。——南町奉行所の東儀殿はここへ来ておられますか」
客の来くべきところでない暗黒な血の家に、朝の明るい客の訪れ。

誰かと思つて出てみると、ふし糸の茶無地の羽織に、ひだのきちんと通っている袴はかまをはき、朝、梳すいて来たばかりらしい水々とした髪に、浅黒い、そしてつややかな面おもて、眉眼まゆがんくちびるに至るまで、何となく非凡な風格をそなえた三十歳前後の武家。

「やつ、貴方は」

「拙者は、お奉行さかき榎原主計ばら殿のご懇望けんぼうもだしがたく、若輩じゃくはいの烏濱おこがましいとは存
じながら、ご助勢すけに参つた、羅門塔らもんとう十郎じゅうろうと申しますもの」

「才、では貴殿が、有名な羅門らもん氏うじでござつたか」

「拙者がおひきうけをして、浅学ながら口出しをする以上は、一命を賭としても、必ず処理

してごらんに入れるが、そもそも、江戸流の捕物術と上方流の捕物法とは、根本から手ぐちの違ふところがござるが、その辺もご異存なくご服従くださるであらうか」

「それはもう、ご方針のままに。——吾々にもよい後学こうがくに相成りますから」

「では、ご免——」

と、草履をぬいであがるとすぐに、羅門塔十郎のするどい眼は、もう何ものかを観破したように、ぴたつと、部屋の一隅に吸いついた。

唐木細工からぎざいの小さな棚には、無数の笛が、架かけてあつた。

となりとしま
隣家の年増

「ほう。……さすがは女笛師の家だけあつて、たいそう種いろ々な笛が蒐あつめてあるな」

室内に立った羅門塔十郎の第一歩は、迷うことなく、すぐに床脇の棚へ向つてすすんでいた。

何か、ひとりで領うなずくと、彼は、笛掛けに架けてある無数の横笛へ手をのばして、上から順々に、緻密ちみつな眼まなざしで調べはじめた。

上方流の捕物とりものでは、関東の塙江漢はなわこうかんと並び称されている活眼家羅門塔十郎が、今、初めてこの事件に一指いっしを染めはじめたのである。

——やがてどんなことばが、その引き締まった唇から洩れるであろうか、と東儀与力も、加山、波越の二同心もかたずを嚙のんで彼のいっぴん一蹙いっしゆくを見まもっていた。

だが、塔十郎はべつに奇言も吐かない。何の発見もなかったように、無興味にやがてそこを離れて、

「この現場は、当夜のままでござろうな」

と、室内を見廻して、東儀与力にたずねた。

「左様。ただ死骸だけを庭へ移しましたが」

「死骸？ 誰の？」

「素姓不明の町人でござるが、この屋内に絶息しておりました者で」

「そういう大事な被害者の位置を移してしまつては詮議せんぎの上に非常な不便を来すが……」

「いや、正確な凶取ずとりを写しておきましたゆえ、そのご懸念には及びませぬ」

「あ、そうか。……どれ、その凶面をこれへ」

と塔十郎とうじゅうろうは、写しを取り寄せて、仔細に室内の器物の位置や血痕などを見くらべて、

「三井の通い番頭とかいう隣家の夫婦者は、無論、禁^{きん}足^{そく}を申しつけてありましような」
 東儀与力は、自分の手落ちを意識したように、

「いやまだそれは」

と、軽い狼狽を見せた。

「隣家の夫婦者に足どめを命じておかれぬのはご不覚であった」

と、塔十郎は一本釘を刺して、

「留守かも知れぬが、いたらば、主人でも女房の方でもよろしいが、すぐにこれへ呼んで戴きたい」

「承知いたしました」

と、東儀はうしろを向いて、

「八弥、ご苦労だが」と、顎^{すく}を極う。

「はっ」

と、波越八弥はすぐに塀隣りの隣家へ行つて、やがて、ひとりの年増女を連れて戻つて来た。女は薄い髪の毛を櫛^{くし}巻^{まき}にしていた。美人という程ではないが、ふだん着のままでも、ちよつと魅力のある顔^{かお}容^{だち}で、どこか世間馴れた風があった。

羅門塔十郎は、庭先へ膝をついた彼女をじろりと一いちべん晒しながら、

「おまえか、隣家の女房は」

と、縁へ腰をおろした。

「はい、お蔭つたと申しまする」

「主人は不在かの」

「毎日、駿河町の三井様へ、通い番頭をつとめておりますので、夜分でなければ宅にいた

ことはございませぬ」

「そうか」

と、塔十郎はうなずいて、

「ではお前でもよいが——いやお前の方がむしろくわしく承知しておるであろうが、この家の女主人おんなあるじ——殺害された鷺江ゆき女さぎえという者は、いつ頃から当家へ移って参ったのか、それからの事情を細かに話してもらいたいものだが、どうじゃ」

「存じているだけの事は、何なりと申し上げまする」

「む」

と、塔十郎は、ふところから覚え帖と矢立やたてを取り出して何やら誌しるしはじめた。

女は、お薦という名からして、それしやの上りらしく、世事馴れていることばづかいで、問わぬ先までをしゃべり出した。

「たしかこの夏の初め頃かと存じます。はい、こちら様が移って来ましたのは。——そのうちに大蔵流京笛御指南という看板をかけたので、ははあ、女の笛師かと知ったようなわけで、隣り交際もいたしませんから、間に、女主人のお雪様と、口を交わしたこともございませぬ。それでも、塀隣りのことなので、ちよいちよいとご様子を見たり聞いたりしておりましたが、暮しは至つて裕福らしく、男気はなく、玉枝さんという若い小間使と二人きりで、お弟子衆の来るたびに、よく笛の音が洩れて参りました」

「玉枝？」

と、東儀与力は思わず横から口を出した。

「では玉枝と申すのは、雪女の小間使をしていた女だの」

「はい、なかなか別嬪さんでございました」

塔十郎は隙かさずに、

「して、その小間使は、いつ頃から見えぬのか」

「ちようど十五日の夕方、その玉枝さんが、風呂敷つつみを抱えて宅の前を通りましたの

で、オヤどちらへ？ と声をかけますと、急に田舎の身寄りに不幸ができて、一月ほど宿下がりをして帰るところと、挨拶をして行きました」

疑惑は、誰の胸にも起つた。同じように玉枝という小間使を疑つた。——十五日といえ、女主人のお雪が殺された名月の晩である。それにゆうべ、ここを訪れた例の覆面の侍も、玉枝玉枝と二度ほど呼んだ。

塔十郎は、隣家のお薦つたのことばを細かに覚え帖へ筆記していたが、ふと、その筆の先で庭前の筵むしろを指して、

「では、その男の顔を見たことがあるかと、訊ねた。」

「時雨」秘ひめ文ぶみ

「まあ！ その人も、殺されたのでございますか」

波越八弥が、死骸にかぶせてある筵の端を少し剥めくつて見せると、お薦は、肩をすぼめて顫ふるえた。

そして、十五夜の晩以来、お雪の家の中に隠されていた疵きずぐち口のないこの町ちやうにんてい人体の男の死体は、本ほん石町こくちやうで金座きんざ用達ようたしをしている両りやう替がえの佐渡屋さどやわへい和平、俗に佐渡平という商人にちがいないと申し立てた。

「どうして、お前は、それを知っているのか」

と、塔十郎は筆をうごかしながら訊ねる。

「主あるじの勤め先と、ちやうど近い所に店がございしますので。それに、この佐渡屋の旦那様が、どのお弟子さんよりも、いちばん足繁こぢらく此家へ通つておりましたから、自然顔を見かけることも多うございました」

「では、この佐渡平も、雪女の所へ笛を習いに来ていた弟子の一名なのだな」

「左様でございます。佐渡平さんが来ると、いつも夜遅くまで笛の音がして、時には、笛と三味線を合奏あわせて、睦むつまじくお酒でも飲んでいるかと思われることも度々ございました」

「む」と、塔十郎はうなずいて、

（さては、お雪はこの佐渡平に囲われている女かも知れぬ）と、呟いた。

だが、不思議なのは佐渡平の死骸で、一カ所の突き疵きずも、切り傷もない。また、毒を嘔の

んだような斑点や絞殺された痕も見えないのである。

お蔭を隣家へ返してから、塔十郎はおもむろに東儀与力に向つて、

「どうです。これでほぼ見当がついたでござろう」

と、言つた。

東儀は首をひねつて、

「さ？ ……」

と、考えこんだ。

「事件は簡単です。殺害の原因はありふれた男女の痴情にすぎぬ。つまり佐渡屋和平と

女笛師のお雪とは、よほど前からの仲で、何かの事情から此家へ妾宅を移して来たものであろう。ところが、女にはほかに男がある」

「なるほど」

「それが覆面の侍です」

「あつ………そうですか」

「その男女が密会している所を、佐渡平に見つけられたので、覆面の男が、柔術の手で打ち殺したものと思う」

「しかし、その覆面の男が、何で好きなお雪を、ああまで酷く斬り殺して、その上、鎧櫃びつに入れて唾男に運び出させたのであろうか」

「男の無残な行爲を見て、女が嫌気をさして逃げることに同意をしなかったか、或いは、殺された夜に佐渡平が巨額な金子きんすを持っていたので、女よりは金と、急に男の気が變つて、飽くまで秘密をまもり遂げるために、お雪までを、斬り殺したものかも知れぬ」

「ところが、そのお雪の人差指が斬り取られてあるが、それはまたどういう意味でしょうか」

「狡智な下手人は、よくそんな用もないことをして、わざと詮議者の眼を惑わそうとたくむものだ。何の意味もないことでしよう」

打てば響くがごとく、塔十郎の答えは明晰めいせいであつた。だが、彼の言を信じれば、痴情でないと言つた江漢老人の鑑定は根本から覆くつがえつてくる。

ただ江漢老人の説と一致する点は、唾男は偽片輪ではなく真の唾聾にちがいないということと、覆面黒衣くろいの奇怪な侍が、この罪惡の裏にひそむ重大な人物であるという点だけであつた。

「その覆面の男が捕まる日も遠くはありますまい。これ、この通り曙光は見えておる」

と、塔十郎は前の笛掛のところへ戻って、二本の京笛をつかんで来て東儀与力に示した。
 「ごらんなさい、この笛の銘を」

一本には、「野分のわけ」と切銘きりめいがあつて、下に小さく佐渡平と誌してある。

「あ、これは、殺された佐渡平の持ち笛ですな」

「そうです。あれにある笛は、みなお雪の所へ習いに来た弟子たちの笛でしょう。が、それはとにかく、この方を早く一見して下さい」

もう一本のものには、「時雨しぐれ」という銘があつて、そのわきに、虫のような細字で「郁いく」
 という一字が彫ほつてあつた。

「郁？」

と、口のうちに呟つぶきながら、東儀与力は不審そうに、

「これは一体、何者ですか」

「すなわち、佐渡平を殺し、お雪を殺害した下手人、かの覆面の男の名です」

「えっ、どうしてそれが分りますか」

「吹いてごらんなさい、その笛を」

「鳴りません」

「鳴らぬはずです。叩いてみれば分りましょう」

妙なことを言うと思いながら、軽く、てのひら掌でたたいてみると、笛の中から細く巻いた一枚の紙片かみきれが出て来た。

羅門塔十郎は、最前、調べるうちにすばやく一読していたので今さら驚きもしなかつたが、東儀与力をはじめ、波越も加山も、ひら披かれたその文字へ思わず眼をみは瞠つた。

それにはこう書いてあつた。

かねての事、こよいを最後に、御談合参らせたく、このつごう九刻頃、そつと忍び行き候まま庭裏の木戸へお心たのみ置候

余事すべて、お逢いの上にて

八月十五日

郁次郎

お雪の君へ

「どうぞです」

「ウーム成程」

「しかも男からその手紙を出した日は、お雪の殺害された十五夜と同日です。女は、男が

何か最後の相談に来るといので、男の大事にしている『時雨』というその笛の中へ、手紙を巻きこんでおいたに違いない。たえず旦那という者の眼を怖れる囲い女には、ありがちな行いです」

「ご炯眼のほど驚き入りました。下手人はこの笛の持主、郁次郎という者に相違ござるまい」

「姿や顔容は、拙者よりはかえってそちらの方がおくわしいはずじゃ。では、今日はほかに急ぎの私用もござれば、これにて失礼いたします」

と、羅門塔十郎は、切り際よく別れを告げて、さっさと、草履を突っかけて、外へ出た。「あつ、羅門氏」

と、東儀与力にあわてて、門の外まで追いかけて来て、

「——しばらく」

「何ですか」

「いろいろご明断を授けられて、暗夜に曙光を見たように存じます」

「いやいや、まだこんな事では、ご参考にもなるまいが、いずれ拙者も心がけて、吉左右をつかみ次第に、ご通知いたしましょう」

「ところで、このままお別れいたしては、何となく心残り、ご迷惑でなければ、奉行所までご同道下すつて、お雪の死骸についておつた証拠品やら書類などをご一見下さるまいか」

「さあ……実はこれから、少し私用を帯びて、八官町はつかんちやうまで立ち寄つた上でなければ体が空あきませぬが」

「八官町ならば、どうせ自分にも戻り道、おさしつかえなくば、同行してもよろしいけれど」

「では、ご一緒に参りましょう」

「そう願えれば、何よりの好都合で」

と、東儀与力は忙せわしげに後へ戻つて、加山耀藏ようぞうには、ここの後始末をいいつけ、波越八弥には、本石町ほんごくちやうの佐渡平の店へ行つて、彼の家うちを出た日の前後の事情を調べてくるようにいいつけて、

「や。お待遠でござつた」

と、すぐに引つ返して来た。

りゆうざんこう
龍山公の懺悔ざんげ

血の異臭につつまれた犯罪の家を出て、明るい秋の陽の下に歩み出ると、常に、闇の魔ものを相手に暮し馴れている東儀三郎兵衛も、さすがに腰が伸びて、ああ、と深く息を吐きたいほど朗らかな気もちに返った。

ふたりは、肩をならべて、我善坊がぜんぼうの窪くぼから市兵衛町いちべえちようへ出て、だらだらと靈南坂を降りて来た。

「お立寄りになる先は、八官町といわれたが、誰か、ご友人のお住居でもござりますかかな」

「いや、ちと、調べたいことがあつて、初めて参る屋敷です」

「ではやはり、何かのご詮議せんぎなので」

「と申しても、公のことではなく、もう七、八年来取りかかっておる個人的な探索なのです。大坂奉行所に勤めて、公禄を頂戴いたしている間は、そういう、私人的な依頼に応じて、自分の猟奇心を満たすような仕事にはあまり没頭されませんでした。今では禄を辞して、こういう自由な身になっておる某それがし、これからは、大いにやろうと考えておる」

「それは結構なことじゃ。まったく捕物の探究ということも、ほんとは、お上の禄に縛られていては思うように働かせぬ。して、其許そこもとが七、八年の間もかかっておるその面白

「そんな探索とは、一体、どんな仕事でござりますな」

「丹波亀山の龍山公をご存じかのか？」

「亀山の龍山公？ ……お、あの、まつだいらすおうのかみどの松平周防守殿のご隠居ではござらぬか」

「そうです」

「その龍山公がどうしたのですな」

「実は、拙者が一代の事業として探している探索というのは、その亀山のご隠居龍山公から密かひそにご依頼をうけていることなのです」

「ほ。それでは、大名から秘密に頼まれている仕事なのですな」

「ま、そういったわけです」

「どんな内容か、お差さしつか支えなければ、話して下さいさらぬか。また場合に依つては、吾々のようなものでも、一臂いっぴのお力になる折がないとは限りませぬ」

東儀与力は、自分より若い羅門塔十郎らもんとうじゅうろうが、そんな自由な境遇にあつて、大名の信望までかち得ている身分を羨うらやましいものに思った。まつたく、裕福な大名から秘密な詮議せんぎを依頼されて、それに成功すれば、極りきつたお上の年扶持ねんぶちを捨てても一代安楽に暮されたものであつた。

で、そういう仕事は、尠すくなくも、東儀与力などには羨望せんぼうものである。あわよくば、話に乗って、幾分の一の報酬でも約したいと考えた。

塔十郎は、彼のさもしい眼には気づかぬように、鷹揚おうように、隔意かくいのない容子ようすで、

「いや、差支えがあるどころか、それはぜひ聞いておいて戴きたいと思う。そして、何かの時には、貴公たちのお力添えも仰ぎたいし……」

「どうか、ご遠慮なくおつしやつて戴きたい。こんどの難事件で、其許そのもとのご出馬を願ったからには、いわば、相身あいみだが互いと申すもの……」

「では、その辺で一服いたそうか」

塔十郎は葛たばこい入れを取り出して、見晴らしのよい坂の途中に、切株を見つけて腰をかけた。

……………

彼の打明けた話によると、亀山六万石の城主松平龍山公はもう齡七十よわいに近い老体であつて、とうから、京都の洛外らくがい、四明ヶ岳しめいだけの山荘に風月を友として隠居しておられる。

ところが、龍山公には、世継よつぎがない。

複雑な家庭の事情もあつたり藩の内争もあつたりしたが、とにかく現在では、家老の大お

村郷左衛門むむらじょうざえもんの一子大村主水おんどを仮に藩侯の準養子として、幕府に十年の猶予をねがい、ほんとの世継を決定することになっている。

しかし、その期間も、はや八、九年過ぎて、余すところは、一年ばかりしかない。——その期間が終れば龍山公は、いやでも、藩地を幕府に返して大名の籍をぬけるか、でなければ家老の子の大村主水をそのままほんとの養子に迎えて世継に立てるほかはないのである。——が、こういう場合にはどこにでも起るお家騒動の例にもれず、藩論は家老派の大村組と、飽くまで、龍山公の血すじを世継とするを主張する正統派との二つにわかれて、足かけ十年ちかく紛争している。

——というのは——この世に龍山公の血すじがまったくないのではないという事実が、ある時、老公の口から、藩論の席で、洩らされたからであった。

老公は、懺悔ざんげされた。その昔まだ部屋住へやずみの壮年ごろ、江戸表に在府中、人知れず向島の小梅に囲っておいた愛妾があつたということ。そして、その愛妾にはひとりの男子が生れ、やがてその男子は素姓をつつんで小普請組こふしんぐみの石川某なにかしにもらわれて行つたが、その後、ひとかどの武士となつて後、何かのまちがいで同役と争いを起し、四人の遺子をのこして切腹して果てたということ。

むろん、家名は没取である。

離散した一家、杳ようとして、あとの消息はわからない。

龍山公も、時には、思い出すこともあったが、いつとはなく、血縁のうすいものと、忘れ果てていたのである。

正統派の家臣たちは、それこそ正しい龍山公のお孫である。といつて俄に小普請組の石川某の遺子たちを探しはじめた。お孫であればまだみんな、若い、稚おさない、お方たちには相違ない。その四人のうちの一人を見つけてお迎えしてこそ、初めて、お家は万代ばんだいである、亀山六万石は初めて明るい甦こうせい生をするのだといつていい！ こう正統派の家臣たちは主張してやまなかつた。

妖女ようじよか落胤らくいんか

そこで、羅門塔十郎らもんとうじゆうろうのところへ、ある時、非公式の使者が訪れた。

(龍山公のご落胤であるその四名のお孫たちを、ぜひとも、探し出してもらいたい)と、いう依頼であつたことはもちろんである。

頼みては大名である。事件は重大である。その報酬の額がいかにも莫大であるかも知像がつく。

「ウーム、成程……」

と、東儀与力は、羨ましそうに聞き終つて、羅門塔十郎が、役祿を辞して、悠々と東都に遊び暮しながら、しかも、ぜいたくな服装をしているのは、そんな金の出所があるからだろうとうなずいた。

「そのご依頼をうけてから、もう八、九年にもなるのでござるか」

「大坂奉行所の方で、なかなかお暇いとまをくれぬので、思わず年月を過しましたが、もう猶予もあと一年ばかり、これからは、励はげみをいれてかかる覚悟です」

「して、きようこれからお訪ねになる八官町というのは」

「さ、それです」

と、塔十郎は草埃くさぼこりを払つて、腰を上げながら、坂を下りはじめた。

「さるところから聞きこんだのですが、小普請の石川某から貰われた娘が、そこに住んでおるといふことなので、ちよつと、小あたりに訪ねてみようという所存なのです」

「ほ、すると、龍山公のお孫でござるな」

「まだ、真ほんとう実か、嘘かは、充分に探ってみた上でなければわからぬが……」

「しかし耳よりなことじゃ。そして、その娘と申すのは、今、八官町のどこにおるのでござるか」

「あの辺は、多く、旗本町ですな」

「左様。大して、家格の大きなお旗本はおらぬが、だいたい御直参ごじきさんの多く住んでいるところなので」

「そのうちの一軒です」

「するとやはり、武家屋敷なので？」

「いかにも」

「何という者の屋敷でござりますな」

「江戸城の書院番頭富武五百之進しよいんばんがしらとみたけいおのしんという人物です」

「えッ、あの、富武五百之進」

「そこに、花世という一人娘はおりませんか」

「お、おりまする。……が、あの花世が……ふウむ……これはどうも、ふしぎ千万だ」

「ご承知ですか、その花世を」

「知っているどころではござらぬ」

と、東儀与力は意外な愕おどろきに衝うたれながら、花世について、自分が知っているかぎりの事実を塔十郎に話し出した。

塔十郎も意外だったらしい。

あれは貰い娘である、龍山公の落おとし胤だねであるらしい、ということよそを他から聞きこんで、これから探りに行こうというその娘が、江戸流の捕物名人塙江漢老人の一子塙郁次郎と許いなずけ嫁の間からであるというのは奇縁である。

いや、そればかりではない。

東儀与力にいわせると、その花世の行動には、こんどの女笛師のお雪が殺された事件以来、いろいろな奇怪なことが多いというのである。

唾おしおとこ男を捕まえて、奉行所の拷問ごうもんぐら倉で吟味をしている時、その石倉の窓から覗いた女の顔は、彼女に、そっくりであった。

また、つい二、三日前の晩も、江漢老人の計りごとで、その唾おしおとこ男を牢から放してやると、どこからともなく頭巾すがたの女が出て、唾おしおとこに近づこうとした。そして、東儀与力が追いつめて、さる呉服屋の中に見出して捕まえてみると、それは、富武五百之進の娘の

花世であつた。

まさか、江漢老人のご子息の許嫁いいなずけであり、また書院番頭のご息女が——と自分の疑惑を無理に制して、その晩は、八官町のやしきの門まで、送り届けてやったともいうのである。

「ははあ……そういう女性ですか」

と、羅門塔十郎は、すこし失望のいろを泛うかべて、聞き歩みに現うつな足を運びながら、腕こまぬを拱こまぬいた。

「お、ここの角屋敷かどでござる。……いつのまにかもう八官町で」

「成程、この家ですな」

「左様。——てまえは、ご用事のすむまで、外にお待ち申しておりますよ」

「いやいや、貴公と花世とはご面識があるとのことですから、かえって、ご一緒にはいつて貰った方が好都合です」

「では」

と、東儀三郎兵衛も、塔十郎のあとにつづいて、何がな、気構えを緊しめつけられながら、つかつかと門内へはいった。

庭垣にわがきも、式台も、至つて質素な玄関である。ふたりは静かにそこに立つて、
 「たのむ」
 と、奥へ言つた。

恐怖きょうふと驚愕きやうがく

静かに、ふすまのすべなる音。

小間使である。手をついて、

「あの、どちらさままでござりましょうか」

「花世どのは、ご在宅かの」

と、東儀与力が代つて、軽く、ふたりの姓名を告げる。

「お嬢様はただ今、よそにお出ましで、お留守でござりますが」

「ははあ、それではまた、白魚橋しらおぼしの水天宮へご日参ではござらぬか」

「ま。よくござんじで……」

「いつぞやも、その途中でお目にかかりました。では、ご主人のいおのしんどの五百之進殿は」

「その旦那様は、ちと前から、お知行所の下総しもとうぎの方へお旅立ちで、まだお帰りがござりませぬ」

「やれやれ」

と、塔十郎の顔をふり顧かえつて、眼で、何か語らいながら、

「ではお留守中をぶしつけながら、花世殿のお帰りまで、玄関脇のお部屋でも拝借して、お待ちうけしたいと思うが、どうであろう」

「さ、私には計らいかねますが……」

「用人はおらぬのか」

「至ぶつて、無人ぶじんなおやしきでございますから」

「案あじることはない。お目にかかればすぐわかることじや」

と、草履をぬいで、

「羅門らもん氏、そうしようではないか」

と、上がってしまった。

若い小間使は困こまった容よう子すであつたが、東儀が誰であるか、どんな役目の者かは、知つていたので、恐こわ々ごわ、奥の客間に通して、茶を出しておいた。

と——二人がことばもなく、寂然じやくねんと、坐り合つて、花世の帰るのを待っていると、二間ほど隔てた奥の室へやで、人の咳せきばらいが聞えた。

「? ……」

二人は、無言の裡うちに、眼を見あわせた。

無人ぶにんだといひ、主人も知行所へ旅立ちをして不在だといったのに、今の声は、たしかに男の咳せきばらいである。

同じような疑問を抱きながら、しばらく、羅門も東儀も耳みみを敬そばでていると、やがて、この部屋の襖ふすまがあいた。そして、すすすと、迂すべるような蹙あし音が廊下おとづたいに近づいてきたかと思うと、隣の部屋をのぞいて、

「花世どの、花世どの……」

と、呼んだ。

つづいて、独り語ひとごとが洩もれた。

「おや、お部屋にはおらぬのか。……ははあ、花を挿いけておられるな、では、客間か、花世どの」

と、こんどは、二人の控えている客間の境を二尺ほどすうつと開あけた。

「やつ？」

東儀三郎兵衛は、倒れるばかりに驚いて、思わず大きな声を発してしまった。

開けた方の者も、吃驚びっくりしたのであろう、はッと、顔いろを変えて、

「お！ これはご来客、失礼を！」

と、ピシャリツと、閉め切るがはやいか、跫音あわただしく、たたたと奥の方へ隠れこんでしまった。

羅門塔十郎は、呆あツ氣けにとられた顔つきで、

「東儀殿、どうなすった」

「ウーム、意外だ。いよいよ分らない」

「一体、今そこへ顔を出した若い武士は、あれは何者ですか」

「羅門氏にはまだご承知あるまいが、拙せつ者しゃは、しばらく見なくとも忘れはせぬ。あの若者こそ、先刻お話しした、塙はなわ江漢わくじやう先生のご子息じゃ」

「えつ、では今のが、塙はなわ郁次郎いくじやうですか」

「たしかに郁次郎だ。——だが解げせぬのは、その郁次郎は、長崎遊学から帰府の途中にあるはずで、まだ父の江漢先生の許もとにも帰ったという話も聞かぬ。然るに、いつのまにかこ

の屋敷の奥に隠れこんでおるといふのは、どういふわけであろうか」

「今の一瞬、彼がさつといろを変えた眼まなざしといい、あの妙な拳動、自分にも何とも不審うっに映つたが……」

と、羅門塔十郎は、その活眼から燃えるするどい洞察力のあらんかぎりをおこめていゝうに、腕を拱くんで、じいっと、奥の方を見つめながら呟いた。

同時に、東儀与力の脳裡には、つい先程、「時雨しぐれの笛」の中から出た手紙の署名——あの郁次郎という文字を、焙あぶり出しのように思いうかべた。

「え、お客様がお待ち遊ばしておいでになるって？ ……どちらのお部屋に？」
そこへ、障子の外に、帰つて来た花世の声が、明るくひびいた。

おと
落し 印籠

明るい微笑ほほえみに、いっばいな愛嬌をたたえて、花世は、客の待つ室へやの障子しょうじをしずかに開けた。

「これは東儀様でござりましたか、いつぞやは飛んだお間違いをかけた上に、わざわざ送

つて戴いたりなどして、まだお礼も申しあげず……」

「いやいや、その折は、拙者こそ大きに失礼いたしました。時にこれにおけるは、其許もご存知であろう、噂のたかい、上方の羅門塔十郎殿で」

「ま。……ではこのお方が、あの有名な」

「お初にお目にかかります」

と、塔十郎は不躰にならない程度に、花世の顔を正視しながら、初対面の挨拶を交わして、静かに、品よく、四方山の座談に移る

——まず彼女の父の消息をたずね、江漢老人との旧交ぶりを語り、床の間に見える八雲箏ごうから、琴の話、挿花いけばなの批評、東都の感想、江戸と上方との流行の差などほとんど尽くるところがない。その話がまた、いちいち該博がいぱくで、蘊蓄うんちくがあつて、そして銜てらわず媚こびずである。惚々ほればれと人をして聞き入らしめる魅力がある。

(さすがに知名な士、羅門様ではある)

と花世も、さもさも感じ入ったように、彼の巧みな座談にひきこまれて、初対面から打ち溶けた風であった。——東儀与力はまた、二人の話が合つてゆくので、羅門の社交的な才ひそにも密かに敬服していたが、わるくするとこんな動機に二人の間に恋愛でも生れはしま

いか、と余けいな心配を持つてみたりした。

「おお、つい話しこんで、思わず長座をいたしたが、時に……」

と、塔十郎はやがて思い出したように、

「貴女は松平周防守まつだいらすおうのかみのご隠居——亀山かめやまの龍山公りゅうざんこうをご存知ありませぬか」

と、さりげなく、本題を訊ねだした。

急に、話題が変わったので、花世はすこし不審な顔をしながら、ぱつちりと眼を向けて、

「いいえ、ちつとも……」

「ではお父上の五百之進殿から、何かその龍山公について、話されたことでも」

「それもございませぬ」

「ははあ。では……不躰ぶしつけなことばかり伺いますが、貴女の母上は、ご生存ですか」

「母は幼い時に亡くなって、父の手一つで育てられたと聞いておりまする」

「して、五百之進殿は、ご実父ですか、ご養父でございませぬか」

花世は、すこし憤むつとしたように、

「はい、血をわけた、ほんとの父でござりまする」

と、語尾まで、はつきりと言った。

その間に東儀与力は、郁次郎の隠れこんだ奥の方ばかり気にしているの、花世に氣どられてはまずいと思つたらしく、また雑話に紛ら^{まぎ}して、いずれ五百之進殿のいる時にと再訪を告げて席を立つた。

花世は、玄関まで送つて出ながら、

「父も四、五日うちには、ご用先から戻るでござりましょう」と言つた。

「あつ……」

塔十郎は何と思つてした事か、式台を降りて、草履^{ぞうり}を穿^はくまでの間に、右手の拇^{おやゆび}指^{ゆび}で、腰の印籠^{いんろう}をわざと袴^{はかま}の間から落した。それは東儀与力でさえ氣づかないほど自然に落したのである。

花世はすぐに拾い上げて何気なく、

「もし、ご印籠が落ちました」

と、手をさし伸べた。

ちよつと、自分の腰を探つてみて、

「才、これはどうも、憚^{はばか}りさまです」

と、彼は、初めて氣づいたように礼を言いながら受け取つたが、その極めて短い咄^{とっさ}嗟^さに、

羅門一流の鋭い眼まなざしは、印籠を渡す彼女の手を、いや、その五本の指を——ちらツと眸の中に調べこんでしまった。

かめはちにんぎよう
亀 八人形

富武家の門を辞してから、二人はまた、八重洲河岸やえすがしを歩きながら首を傾かしげていた。

「いかがですか、貴公のお眼に映った花世なによしという女性せう性は」

と、東儀がまず意見を訊きいた。

「賢く、優しとやか婉かに、そしてなかなか教養もあるらしい」

と、羅門は答えた。

「父娘仲おやこなかのよいことは世間の定評じやが、しかし、その奥の奥、裏の裏には、何か？ ……

…あると思われるが」

「それは、疑つてみれば多分に疑える点はある。第一、まだ長崎表から帰府してないはずの塙はなわい郁く次じろ郎ろうを屋敷の奥かくまに匿かくまっているなどという事実は、たしかに、あの父娘おやこの秘密を証拠だてておるものだ」

「ひとつ!」

と、東儀はぴりつと眉を昂^あげて立ち止まった――

「五百之進の不在こそかえって倅^とせ、今夜にでも、ふいに捕手^{とりて}を向けて、奥に潜^{もぐ}りこんでいる郁次郎を、召捕^めつてみるといたそうか」

「いや、それは早い」

「しかし、時雨^{しぐれのふえ}笛から出た立派な証拠もあるではござらぬか――

「他人の偽筆といわれればそれまででしょう。もう少し証拠がためをする必要がある。――殊にほかならぬ塙江漢先生のご子息、もし間違いだった場合には、拙者は元より、幾十年來功勞のあるお方に対して、奉行所としても申し開きが立ちますまい」

「なるほど……」

と、東儀与力はほとんど昏迷そのもののように鬱^{ふさ}ぎこんで、

「あの醇^{じゆんぼく}朴^{ぼく}な老先生の風貌を思い、そのご子息郁次郎が下手人の覆面だと考えて来ると、公私両面に種^{いろ}々な私恩や情実も絡まって参るわけだな。これやどうも、迂闊^{うかつ}に手出しをすることもならなくなつたわい」

と、足さえも重く、撓^{はかじ}らなくなつてしまった。

羅門塔十郎も同じように吐息をついて、

「この事件は、局外からちよつと観ると、至つて簡単なように察しられるが、さて、手を着けて一步はいつて見ると、古沼へ足を踏み入れるようで底の知れない秘密がありそうだ。所詮しよせんこの塔十郎の如き不才の者の及ぶところではないし、また、最も疑わしい人間が江漢先生の子息となると、私情としても、手を下すには忍びぬことだ。……頼まれ甲斐もないようだが、願わくば、拙者もこの辺で手を引きたいものです」

と、匙さじを投げてしまった。

東儀は驚いて、継すがらんばかりに、

「今、貴公に手を引かれては当惑至極じや。そんな事を仰せられずに、何とか一つ、打開策はござるまいか」

「拙者に一つの案がないではないが……」

「それは？」

「さ、それも上方流の詮議せんぎ法ぽうですからな。世上にはすぐに、羅門がやったな、という事が知れる」

「知れてはお差さしつか支かえになるのでござるか」

「大先輩たる江漢先生のお耳にはいれば、決して、お快くは思われますまい」

「何、そんなご斟酌しんしやくがいりましようや。ま、そのご名案をお聞かせ下さい」

「では、申してみるが、鷺江ゆき女の死体はまだ奉行所に保存してありますしよな」

「十五夜の晩以来、だいぶ日数は経っておりますが、証拠がためのつくまではと、工夫を凝こらして、死体蔵したいくらにとつてあります」

「日本橋の薬研堀やげんぼりに、平賀鳩溪ひらがきゆうけいが長崎から招いた岡本亀八おかもとかめはちと申す人形師の住ん

でおるのをご存じか」

「あ。あの蠟細工ろうさいいくの亀八で」

「そうです。その亀八に雪女の死体を見せて、同一の死人形を亀八独特の蠟細工にて作らせ、折からちようど平賀鳩溪が神田のお火除地ひよけちに於いて博物会をひらく催しがありますから、その会場の一隅しゆっちんに出陳しゆちんして、これを広く世間の人々に見せるのです」

「ははあ。では奉行所内の極秘な物を、世上へ公開いたすことになるが」

「さ。そこが江戸流と上方流の相違なのです。拙者の流儀で行くならばむしろそれが世間の評判になるのを欲する。そして、博物会の会場に目明しまよぎを紛れ込ませ、当日蠟人形の前に立ち寄る見物の噂うわさや囁ささやきに注意させるのです」

「成程」

「評判が高くなれば、鷺江お雪の門人たちも、それとなく見に来るであろうし、第一彼女を殺害した下手人が気にかかつて、見にこないではおられぬと思う。これは、上方では幾度か試みているが、いつも奇功を奏している事です」

東儀は一も二もなく同意をして、すぐその奇計にとりかかる決意を洩らしたが、羅門はまた考え直して、それをやるにしても、一応は江漢先生の意見を求めるのが順当でもあり、また礼儀であろうと言い加えた。

智に富むばかりでなく、礼にも厚い彼の床しさに、東儀はいよいよ敬服して、

「では早速、手前は鶉坂へご相談に参り、帰り道には薬研堀の亀八を訪ねて来るといたしますから、羅門氏には、また、明日でもここへご足労を願われまいか」

奉行所へ立ち寄って、与力部屋のぬるい茶を喫むとすぐに、彼はこう告げて、忙しげに出て行った。

鶉坂の塙老人は、東儀与力の顔を見ると、相変わらず、平和に恵まれた柔和な相をくずして、

「おう東儀か、どうじやなその後は。……なに少しも探査が捗らんと申すか。それもよか

ろう、貴公たちには難事件にぶつかれる程よい修業じゃよ。……わしか？ ははは、わしは無為無病、いつもこの通り頑健じゃ。そのうちに、郁次郎も長崎表から帰るのでな。子息せがれの帰るまでに、なるべく養生所の準備もしておいてやりたいし、帰ればすぐに、花世との婚儀じゃ。イヤ、これでなかなか忙せわしいんじやよ」

と、頗すこぶるな機嫌である。

世に「親馬鹿」という俗言があるが、老先生ほどな人物も、子に甘い余り、やはり盲愛の例に洩れないで郁次郎に騙だまされているをご存じないわい、と東儀は心の裡うちで、おかしくもあり気の毒にもなつて、それには触れずに、搔かいつまんで用件の意見だけを求めると、江漢老人はしばらく考えていたが、

「ははあ、それは上方流の羅門の献策とみえる。あの方法も、幾度も繰り返しては効がないが、江戸では珍しいから或いは意外な拾い物があるかも知れん」

と、可もなし不可もなしという口吻くちぶり。

東儀は早速、その帰り足で、亀八の家を訪ね、万事手筈をきめて、いよいよそれから数日の後の博物会に「亀八作、蠟細工死人形ろうさいいくしにんぎょう」と題して出陳することになった。

それが、名月の夜に殺された女笛師鷺江さぎえお雪の死体を模型したものだという噂がぱつと

ひろまったので、今年の博物会では第一の呼び物となつて、昌平橋際の火除地にできた小屋がけの会場は毎日割れ返るような人出である。

この博物会というのは、本草学者の田村藍水や鳩平賀源内などが、長崎の蘭人から伝え聞いた方法で、協力して明和以来すでに十何回を重ねている催しだった。

後年の博覧会は、本邦では、平賀鳩溪のこの催しが濫觴となつたものである。

「やあ、あれか、評判の美女の蠟人形は」

「凄いな、生きているようだ」

「ばかをいえ、鷺江お雪の死体を写すと書いてあるじゃねえか。死人形が生きています、下手いことにならあ」

「だが、あの血の色の生々しさツたらねえな。触ると、指につきそうだ」

「オヤ、指といえ、左の手の人差指が一本切り取られてあるぜ」

「ほんとか。殺した上に、指を一本切つたんだ。ひどい真似をしやがる。奉行所ものろまじゃねえか、なぜ早く下手人を捕えて、逆磔にしてしまわねえんだろう」

「叱ッ、叱ッ……。そこらに、八丁堀の手先がいるぜ」

会期の七日間、毎日の人気はその死人形に蒐つて、そこばかりは朝から夕刻まで黒山の

ような人だった。

と——明日はもうこの催しも終ろうという六日目の夕刻に迫ってからであった。人混みの中に揉まれて、船載の物産や、諸国の織物、工芸品、会主鳩溪の出品になる珍しい火浣布とか、エレキテルの機械とかをよいほどに見流してきた、黒羽織黒小袖という目立たない服装をした一人の武士が、深編笠のつばに片手をかけながら、いつのまにか、死人形の飾つてある青竹の手欄の前にぴたと足を止めて、

「オオ……」

と、何か強い感動に衝たれている様子だった。

「……………」

編笠はかろく顫えていた。彼は、いつまでもそこを去ろうとはせず、釘付けになったように、じつと立ち竦んでいた。——と思うまに、ほろり、ほろり、とその笠の裡から涙のような光がこぼれた。

まちっばめ
町の燕

絞りの半手拭をチャンチキかぶりにした鳶とびのような男と、江戸見物のお上りのぼさん然とした男とが、人混みに押されながら、湯呑場の隅で接待茶を飲んでいた。

と、絶えず、会場の中に、眼を配っていた一方の男が、ふいに袖を引いて、

「おつ波越、上役が招いているぜ」

「そうか」

と、あわてて接待場へ茶碗を返して、

「どこに？」

「例の蠟人形ろうにんぎようの飾つてある場所の横に」

「お、手を上げているな。さては何かあの前に、変つた事があると見える」

鳶とびの者に変装した加山耀藏ようぞうと、江戸見物の男に窺やっした波越八弥の二同心は、群集の中を潜くぐつて、出陳場の囲いの蔭に手合図をしている東儀与力の側へ近づいて行つた。

東儀は、人と人との間から、じつと、昂奮に燃える眼を据えていたが、

「加山か、おう波越も、あれにおける編笠の侍のどこかに見覚えはないか、どうだと、密ひそかに指を向けた。

「さあ？ ……」

と、二人が考えていると、

「顔は見えぬが、肩とか、身丈みのたけとか、どこかに記憶があるだろう。毎日こうして張込んでいても、一目でピンと勘に來ないようでは、まだ貴公たちもお若いぞ」

「畏れいりました。……成程、そういわれてみるとどうやら」

「思い出したか。いつぞやの晩、麻布あさぶのお雪の空家へ吾々が張込んでいた時に、玉枝玉枝と、二度ほど呼びながら這入はいつて來たあの覆面だ。また貴公たちは、十五夜の晩、増上寺の境内でも見かけておるはずなのに……」

「ウム、似ていますー!」

「最前から四半刻しはんときも、あれに立つて慄然りつぜんとしたまま、動き得ないように疎すくんでいる様子からして何とも不審な挙動だ」

「いかにも、ただの見物人ではありませぬな」

「万が一にも、大丈夫とは思うが、万一、腰こしの刀ものでも引き抜くと、この混雑の中で多数あまたな怪我人を出すから、充分に、気をつけい」

「承知しました」

二人は目くばせを交わして、さつと、見物人の中へ姿を隠した。

東儀はその位置を離れずに、疑問の編笠の人物と、二人の部下がそれへ近づいてゆく間隔とを、三角線に見つめながら、てあぶら 掌脂を握って捕縄ほじょうの飛ぶのを待っていたが、加山も波越も、人波の中に屈み腰になつたまま、いつまで経つても、侍の背後うしろへ迫ってゆく様子が見えない。

「ちいッ、愚図め。何を怯ひるんでおるのだろう」

と、じりじりした東儀は、堪らなくなつて、そつと、加山のうしろから、肩を突いて言つた。

「なぜ早く側へ行つて、彼奴きやつの右手を捕らんのだ」

「……………」

加山は黙つてかぶりを振つた。

舌打ちをしながら、東儀はまた、波越の袖を引いて、

「今だぞ」

と、強さく囁ささやいた。

「駄目です」

と、田舎者に変装している波越は、投げるように、肚の息を、ふツと吐いた。

「なぜっ？」

と、東儀の声は、低いが、鋭く咎めた。

「あの侍のわきには、先刻から、妙にぴったりとついている町人がいて、それが邪魔になつて、何としても手出しができません」

なるほど、そう言われて、東儀も初めて気がついた。藍弁慶あいべんけいの素袷すあわせに算盤縞そろばんじまの三尺帯をきりつと横締めにした小粋こいきな男である。それが絶えず鋭い眼配りを撒いているので、ちようど編笠の侍を庇かばっているような風に見える。どうしても、その町人が邪魔でならぬい。

しかたがないので、しばらく隙を計っていると、やがて人混みの間に、編笠がくるつと横に向いた。

「才、出て行くぞ」

東儀があわてて注意するまでもなく、忠実なふたりの同心は、手具脛てぐすねを引いて、彼の後を左右から尾つけて行つた。藍弁慶を着た町人のすがたは、やはり、影の形に添うように、それへ絡からんで博物会の外までも付いている。

「ははあ、いよいよ側にいる町人は、彼奴きやつの用心棒にちがいないぞ」

加山と波越は、目で語りながら、火除地の道を木蔭から木蔭へ縫っていた。江戸の火除地には、梧桐あおぎりがたくさん植え付けてあつて、俗に、桐畠ともいうくらい樹が多かった。そのうちに筋違御門すじかいごもんの前まで来た。そこは三ツ又みつまたの交叉路こうさろでまた人通りが混んでいる。編笠の侍は、目の前を突ツ切る四ツ手駕をやり過ごして、ついと、燕のように、向う側へ駈け出した。

「あつ！」

と、加山耀蔵は、思わず上うずツた声を上げて、波越の姿をふり顧かえつた。波越は、隠していた十手を手裡しゅりにつかんで、隼はやぶさのように、肩を落して、走り出している。

ほんの眼まばたきをする瞬間だった。藍弁慶あいべんけいの町人と編笠のふたりが、辻の中ほどで何かに蹠よつめいた。——と思うまに、ぱつと、二人は左右に駈け別れているのだった。

しかも、波越の眼に映うつつたのは、その咄嗟に、町人のすばやい手が侍の懐ふところから何物かを受け取っていたことである。

(さ！ どツちを追おうか？)

ふたりの足は、刹那にちよつと譲り合つたが、波越が一散に深編笠を追まくい捲まくつて行つたので、加山耀蔵は、いきなり横ツ跳びに逃げ出した、藍弁慶の町人を、遮二無二、息もつ

かずに、追い詰めて行つた。

横丁から横丁へと、町人の脚は、鹿のように迅かつた。けれど、何度ふり顧つても、すぐうしろに加山耀蔵の姿が迫つていたので、すツかり呼吸を疲らしてしまつたらしい。

「——旦那。くたびれるだけ損だ。あつきりと、お繩を頂戴いたしやしよう」

と、立ちどまつて、紅く上氣した顔に、につこりと笑靨を泛かめて、神妙に、二本の腕をうしろへ廻した。

かわせ
為替と恋文

「ウム、男らしい！」

と、加山耀蔵は跳びかかつて、すぐに、熟練した縄さばきで、ぴったりと、縛り上げた。
「歩け」

「真つ昼間です。旦那あ、あつしも神妙にしたんですから、なるべく、人通りのねえ所を歩いておくんせえ。——こんな姿は、可愛い女にや、見せたくねえ」

耀蔵は、附近の自身番へ、縄付を抛り込むように預けて、すぐに前の四つ辻まで駈

け戻った。そして、そこらの大通りを中心に縦横に駈け廻って、僚友波越八弥きつそうの吉左右きつそうさがし求めた。

と、その波越は、神田川の堤の上に、唇を噛んで、無念そうに川かわづら面を睨んでいた。

「オイ、波越、どうした」

駈け寄って、肩を叩くと、

「加山か。……残念だ！」

「逃がしたのか」

「これを見てくれ」

と、波越は腕につかんでいる捕とり縄なわを、わなわなと見せて、口惜しそうに、叩きつけた。

男泣きに泣くように、顔の筋をふるわした。

「ここまで追い詰めたから、しめたツと思つて、分銅を投げつけると、編笠の首に絡からみついた。で、もうこツちのものだと、力まかせに絞り込むと、そのとたんに、これだ！ 見てください！ いきなり脇差を抜いて捕縄を切ったんだ。あつ、と今度は、十手で打ぶつかつてゆくとうだろう、川の中に待つていた小舟へ飛び降りて、矢のように、大川へ出てしまつたじゃないか」

「残念なことをした」

「一度ならず、二度三度だ。おれはもう同心が嫌になった。おれには、捕縄を持つような業は適さないとみえる」

「まあ、そう落胆するな。……また上役の東儀氏が、ぶつぶつ苦いことをいうかも知れないが、その代りには、おれがもう一人の怪しい町人を捕まえたから、いささか埋め合せがつくというものだ」

「才、彼奴を召捕てくれたか。何か、大事な品を、編笠の侍から受け取ったから、それは、時にとつていい獲物だ。それなのにこの俺は、何というへまをしたんだろう」

「おい僻むな。俺の功は、貴様の功だ。お互いにこの事件には、発端から偶然にも二人がいつしよにぶツかつて、しかも、九死一生の目にまで共に遭っているのだ。これからも、そんな隔てを捨てて、お互に、励まし合おうじゃないか」

「加山、よく言ってくれた。おれはともすると、意志の脆い性質の弱点が出ていけない。これからも、鞭を打ってくれい」

「おれこそ、欠点の多い人間だ。頼む」

二人は、敗地に立つたびに、友情を強めた。感激の手を握り交わして、難路の踏破を誓

つた。

「さ、すぐに彼奴を調べてみよう」

「無論だ」

と、自身番へ戻つて、錆ついた捕物道具が並べてある狭い部屋へ、預けておいた藍弁慶の男をひき据えた。

「おい！ 顔を上げろ」

「ハイ……」

と、男は素直に顔を上げた。

「貴様は連れのあの侍と、どういう縁故のある人間だな。まず、それから申せ」

「連れ？」

と、すこし変な顔をして、

「旦那、あつしに、連れなんざありませんぜ」

「偽りを申すな。あの博物会の中から一緒に出た侍は、貴様の連れに相違あるまい」

「うふッ」

と、彼は吹き出しかけたが、二人の怖ろしい眼に出会つて、ぐっと、その笑いを嚙みこ

ろしながら、

「冗談じゃございません、あれや、あつしが朝から目につけて来た鴨かもなんです。……へへへへへへ、旦那方だつて、よくご存じのくせに、お人が悪うございますぜ」

「鴨？ ……して一体貴様何者なのか？」

「こうなつちや、何もかも、神妙に申し上げます。あつしや、何を隠しましょう、中国筋からこの江戸表まで、あの侍の懐ふところを狙つて付いて来た、道中稼かせぎの掏すり兎で、別府の新七というもんです」

「じゃ掏すり兎か」

「へい、これでも、中国筋では、少しは知られているチボでございます。花の江戸へ出て、お縄を戴いたなあ、かえつて、本望でございます」

二人は、啞然として、顔を見あわせてしまった。二の句がつけなかった。

最初は、その自白も疑つてみたが、彼の掏すり兎であることは、いくらでも証拠だてられた。また、筋違御門すじかいごもんで編笠の侍から掏り盗つたという紙入れまで、そこへ、吐いて見せた。「貴公たち、また、最前の怪物を逃がしたそうではないか」

そこへ、東儀与力が、不きげんな色を眉みまげに漲らしてはいつて来た。それに尾ついて――

「何と言つても、きようは場所が悪かつた。まあ、そう咎めてもしかたがないでしょう」と、取做とりなして言つた声は、羅門塔らもん十郎であつた。

そして二人は、狭い、薄暗い、自身番小屋の隅に腰をかけた。

ちらと、二同心の仮吟味かりぎんみをしている様子へ横目をくれて、

「肝腎なシテを逃がして、そんなワキ師を捕えてみたところで大したことはあるまいが」と、冷笑した。

「面目次第もございませぬ」

と、加山は、俯向うつむいている波越なみこに代つて、

「しかし、意外な獲物がございましたからご一見下さいまし」

と、別府の新七が自白したとばと共に、彼の掬すりとツた紙入れを羅門と東儀の間に差し出した。

「やつ、これは、莫迦ばかにはならぬ」

と、手に取り上げた羅門は、中をひらいてすぐに言つた。

「東儀氏とうぎ、ごらんさない、失策どころか、これこそ二人の苦節を哀れんだ、神の賜うた天祐てんゆうです。——この紙入れは塙はなわ郁次郎いくじろうの所持品だ」

「えつ、ど、どうしてそれが分りますな」

「ここに一札がはいっておる。これは、郁次郎が長崎表から江戸へ送り金をした為替札です。即ち本石町の両替屋佐渡平の扱いで、この金札持参の者へ、五十両相渡すべきものなりと書いてあります」

「ウーム成程」

「まだある」

と、次の一札をひろげて、

「これは手紙ですが、見らるとおり女文字、しかも、宛名は郁様へ、雪女よりとしてあるのを何と見らるるか」

「オオ！」

と、東儀与力は、それをつかむと飛び上がらんばかりに驚いて、

「ここ、これは、鷺江お雪が生前に、男の郁次郎へ送った恋文ではござらぬか。もう彼が、覆面の怪武士ということは、一点の疑いをはさむ余地がない。——こうして、女笛師の鷺江と密通しておりながら、一方には、何食わぬ顔をして、花世とも恋をし遂げようという図太い企みが、ようやく歴然として参った。最前の深編笠は、たしかに塙郁次郎！ もう

事件は解決したも同様だ！一刻も、猶予は相成らん、目をつぶって、私情を捨てることだ」

と、意気込んだ。

然り、事件は一步すすんだ。

自身番の番太郎に手伝わせて、掏兎すりの別府新七を、奉行所の揚屋あがりやへ差送った後、東儀与力は、もはや暗黒の迷宮から曙光をつかんだような気持で、さらに、次の電撃的な飛躍の手順を立てた。

一 今夜のうちに、両替屋の佐渡平の店を訪れて、為替札かわせふだの実否を調べておくこと

一 同時に、主人の佐渡屋和平は、鷺江お雪の笛の門人であり、かつ彼女の殺害された十五夜の同日、麻布あさぶの家で死体となっていた町人に相違なければ、この件も、同時に、

再吟味をとること

一 夜半よなかには、加山、波越の両名にて、ふたたび博物会の蠟人形の囲い場を見張ること

一 明朝、寝込みに、或いは都合によつて夕刻、すべての証拠がため整い次第に、東儀与力自身、奉行直筆しきひつの差紙さしがみをふところにして、富武五百之進いおのしんの屋敷に赴き、埜郁

次郎を御用拉致らちすること

なお細かい手配りや注意については、羅門塔十郎が剃刀で断つように、きびきびと、抜け目なく、頭脳あたまのいい指図をした。

生きてる佐渡平

「ゆるせ」

軒こんのれんの紺暖簾おろが卸されてから間もない宵のうち。

佐渡平の店は、大戸をおろして、店のひとみ障子の潜くぐりが二枚だけ、黄いろい灯ひを往来に映していた。

東儀与力はずつとはいった。

「内儀はおるか」

「どなた様でござりましょうか」

——と店の者。

「八丁堀の者じゃ。東儀三郎兵衛」

「あ、お見それいたしました。……まず、どうぞこちらへ」

と、帳場のわきへ、座蒲団ざぶとんをすすめる。

「内儀に会つて、ちと、密談したいことがあつて罷り越したのじゃ。取次いでくれい」

「それはどうも、わざわざ、恐れ入りますが、実はお内儀様は、昨日きのう、ご親類の老人を連れて、相州の塔とうの沢さわへ、入湯にお出ましになりました……しばらくはその」

東儀は眉をひそめた。主人の佐渡平が非業ひじょうな死を遂げてからまだ間もないのに、その妻が入湯に行くなどは、不貞ふちぢとも不埒ふちぢとも、言いようのない悪妻だと憤った。

その顔いろを、畏おそる畏る仰いで、店の者は、

「何か、ご用の筋がございますならば、奥に番頭もおりますゆえ、すぐにこれへ」

「待て待て」

「へい」

「公用じや、殊に、密談を要すること、番頭などに洩らすわけにはならん。内儀に飛脚を打つて、立ち帰り次第に、奉行所に出頭させい。世間憚はばからぬ不貞な行状、きびしく叱りおくぞ」

用の足らぬ腹立ちも交まぎつて、苦々しげに立ち上がると、奥と帳場の境をかくしている数寄屋暖簾のれんを分けて、小肥りな、四十がらみの男が、あわただしく、それへ出て、細ほそ縞しま

の羽織をさばいて彼の前へ、ぺったりと、両手をついた。

「しばらく、お待ち下さいませ」

「誰だ……其方は」

「当家の主、佐渡屋和平でござります」

「な、なんだと！」

東儀は愕然とした余り、思わず足を退いて、

「佐渡平？ ……あの、そちが、死んだ佐渡平だと申すのか」

「鷺江お雪の家で殺されていた町人は、あれは、私の弟、忠三郎でござります」

「それをば何で、先頃、部下の者が当家へ調べに参った時には、そちの内儀を初め家族一同が、悲嘆の涙にくれ、なお、其方が死んだものと申し立てたか」

「まったくの思い違いでござりました。その間違いの原因は、実に十五夜の当日、高輪の月見茶屋から友達と外れて、そのまま、大山へ詣り、箱根熱海と遊び廻って立ち帰りますと、死んだ主人が戻ったというわけで、私の方こそ、呆っ気に取られましたような次第で。……だんだん様子を訊ねてみますと、土蔵二階に居候をしている弟の忠三郎めが、その前から戻りませぬ」

「ふム、成程」

「この男は、以前は、肥前の唐津、堺、長崎などにも出店を持ち、相応にやっていた木綿問屋でござりますが、どうした心の狂いか、酒を飲みはじめ、店もたたみ、妻子もすて、江戸表へ来るなり、私共の土蔵の二階に、為すこともなく遊び暮しておりました」

「では、お雪の家に取り捨てられてあつた死骸は、その忠三郎の方じゃな」

「兄弟のことゆえ、人様がよく間違えるほど似ておりますので、こんな事になつたのではないかと存じまする」

「それならそうと、なぜすぐに、届け出んのじゃ」

「私が帰つたのも、つい昨日で、帰つてみれば、今申し上げたような大騒動、女房は急に病の枕を上げる、親類は来る、こんどは忠三郎が見えないといったような取込みようで、つい、お届けを怠りましたが、明日は、自身で出頭いたすつもりで、今も今とて、お越しとは存じながら、奥に、謹慎しておりましたのでござります」

と、改めて、奥へ招いて、酒肴を出した。

東儀はそれへ手もつけないで、すぐに、為替の調べにかかった。その方の話は、店のことだけに簡単に分明した。

けれど同様な組くみがわ替せは、同一人から同じ長崎表から、二枚送られていることがその晩の帳簿で知れた。そして、一枚の方が金額が多く、その額面三百両の金は、つい昨日のこ
と、若いお屋敷風の頭巾づきんの女が受け取りにきて、封金で三ツ、受取って行つたというのであつた。

若いお屋敷風の女と聞くと、東儀は、習性のように、拷問ごうもん倉くらの窓からのぞいたあの白い顔と、花世の名を思い出すのだった。

佐渡平の店へ金を取りに来た妙齡の女についても、店の者たちにつぶただきにただ糺すと、やはり、その二つを出ない輪廓なのである。いや、気のせいか、それも花世らしいのである。

「何か、これという、たしかな特徴がその女になかったか」

と、訊ねると、若い手代が、隅から答えた。

「私の目に、はつきり残っていることがございます」

「ウム、申してみい」

「雪のように、白い、襟えりあしの奥に、お金をかぞえる時、ちらと、かなり大きな黒ほくろ子があつたように覚えております」

「襟あしの奥に」

「へい、俯向かなければ見えません」

「ほかには」

「さあ？」と、店の者たちは、羞恥はにかみ笑いを見合して——「何しろ、余りご縹きりよう織ようがよいので、それにばかり、気を奪とられておりましたんで……へい、正直、左様なわけで、ついどうも……」

と、揃そろって、頭を搔かいた。

とも なぐ
友を撲なぐる

昼は人いきれと熱ねつ鬧とうの埃ほこりに割れ返りそうな博物会の巨大な小屋も、夜は、物ものの怪けでも出そうに真まつ暗あんだった。丸太組のたかい天井を蔽おほっている暗あん灰かい色しよくの布ぬのが、象の皺しわのよような浪なみを立てて、はたはたと深夜の空にうごいている。昼の見物人が捨て散らした紙屑しせんが、洞どう然ぜんたる無人の会場に、生きもののように、ひらひらと、飛とんでいる。

淋しみしい、夜番の灯が、ぼちツと、隅の方に二つばかり……。

それも、何かの、眼まなこみたいに見える。

「なあ、波越。なんだってこんな真夜半、蠟人形の張番をさせるのだろう。羅門と塔十郎も時々、奇功に逸つて、分らない指図をするぜ」

「いや、あの頭腦のいい先輩のことだから、何か、狙いどころがあるんだろう」

「しかし、窮命きゆうめいされているようだな。……オヤオヤ、夜番に貰った火種も消えてしまつた」

「寒いなあ、そこに蓆むしろがあるから、それでもかぶつていよう。やがて、夜が明けるだろう」と、霜除けをかぶつた寒牡丹かんぼたんのように、ぶるぶると、齒の根を噛んでいるのは、今夜の見張をいいつけられた加山、波越の二同心だつた。

しばらくすると、こんどは波越の方から――

「だがなあ加山、おれはまた、しみじみと奉行動めがいやになつて来だした」

「また、そんな弱音を吐くのか」

「と、言われちゃ、少し心外だが、考えてもみる、若年からいろいろお世話になつている恩師の江漢先生のご子息が、いくら大悪党だつて、貴様、イザとなつて、縛れるか」

「それは俺も、自分が鎗さびやりで挟えくられるよりも辛く考えているのだが、捕縄ほじょう十手は飽くまで正大公明でなければならぬ。いわば、神の裁罰に代つて人間がお預りしているものだ。

私情とらに囚とらわれてはなるまいと覚悟とらをしている」

「そんな講釈は、おれだつて知つてゐるが、いくら法ほう繩じょうをつかむ職業しごくでも、やはり人間だ、泣くなといわれても、泣かずにいられるか、貴様あなたあ」

「おられまい、恐おそらくおれまい！ 殊ととに、老先生の胸中を思うと」

「それ見ろ、貴様だつて、血はあるだろうが」

「しかし、やはり、裁きは裁きだ。おれたちは、天に代る、征せい悪あくの使徒だ。貴様も、小さな私情とらに負けてはならんぜ」

「おれは苦しい。何という、いやな職業しごくを拵えらんだのだろう」

「そう考えるから辛いのだ、弱いのだ、天の使徒！ 征悪せいあくの使徒！ そう思うんだな」

ぎよつと、二人は何かの物音ものねに、本能的ほんねつてきに立ち上がった。——と、すぐにその気配きはいが、大きな音響おんきやうになつて、二人の耳みみを衝つつた。

「やつ、蠟人形ろうにんがたの囲かこい場ばだ」

「竹たけの柵さくを破やぶつた音ねだぞ」

物陰ものかげから躍はなり出して、そこを透すかして見ると、ああ何たる怪あやだらう！ 小豆あずき縮ちぢ緬めんの頭あたま

中に深く顔をかくした白い眼元まなこが、じつと、壇壇の上に屈かみ込んで、二人の影かげを見つめてい

る。そして、彼女の腕かひなには、そこに陳ならべてあつた亀八作の蠟細工の死人形が、今しも、横ざまに、抱え込まれているではないか。

「待てッ！」

と、耀蔵は思わず呶鳴うなつてしまった。

ぐわらぐわらと凄すこまじい物音が、飾り壇の下へ種さまさま々な物を落した。 鎧よろい櫃びつ、血みどろ

な片腕、白いぶらぶらな脛はぎ、簪かんざし、立て札――

「曲者くせものめ！」

耀蔵は、跳とびかかつて、女の帯際おびぎわをつかんだらしい。キラリツと、短い刃が、空くうにきらめいた。耀蔵の手が絡からんだ。がしかし、彼の手に倒されたのは、人形の胴中だった。すばらしい敏びん捷しやうに生れついているような彼女の姿は、サツと、うしろの幕を懐劍で裂いて、消えこむように、囲いの裏へ飛び下りた。

「波越、逃がすな！」

と、友へ応じながら、加山はつづいて追ツた。追いかけるながら見た彼女の胸には、たしかに、鷺江さぎえお雪の蠟細工の首が大事そうに抱えられていた。

しかも、その迅さは、風のようなだった。加山が、二、三度も、丸太の根につまずいたの

に、彼女は女らしい細心さと敏捷な速度で、外の、桐島の間、かくれ込んでしまった。先へ廻った波越八弥は、ふいに、彼女の前面へ出て奇襲した。それには、彼女もあわてたらしく、あッ、と軽い声をあげて戻りかけたところを、波越は、腕をのぼして、むずと、頭巾をつかんだ。

有明けの空のような、灰^ほ白^{のしろ}い、脅^{おび}えた女の顔が、斜めに頭巾から剥^めくり出されたが、そのとたんに、波越八弥は、ほとんど、喪^{そう}心^{しん}するような驚きをあらわして、

「やつ！ 貴女は」

と、叫んだ。

同時に、手を離れた。——引き合っていた頭巾の手を。

放たれた小鳥のように、彼女の姿が、真ッ暗な風のなかへ、ばたばたと消えてゆくとすぐに、そこへ、息を喘^せいて来た加山耀蔵は、憤然と、友の腕くびを引っ掴んで、

「波越ッ、に、にがしたな貴様はッ」

「ウーム、逃がした」

「故意だ！ たしかに故意だ」

と、彼の不甲斐なさを怒るが如く、つかんだ手を捻^ねじ上げて、

「な、なんで、逃がしたかッ……。こらっ、波越！ き、きさまは」

「ま、待て」

「ええ、癪しやくにさわる、腹が立つ。待てもくそもあるものかッ。残念だ、残念だ」

「俺を……俺を打ってくれ」

「貴様を打って何になるんだ！ ……ええ、ものの道理の分らんやつじゃ！ 弱い男め！

意気地なしめ！」

と、泣きながら友を打った。

「すまない、加山、ゆるしてくれ。……おれの不覚だった」

波越は情の人だった。加山はどつちかといえれば理性家だった、天職の意志のつよい好こうと捕手りてだった。反そむいた性格であつて、二人の友情は肉親も及ばないほど濃密なのである。

互いに、激した感情を衝き上げられて、加山は、無意識に友をぶん撲なぐりつつ組み合つてそこへ泣き倒れてしまった。

路傍の草の色に、ぱつと、明るい光線が射したので、二人は、驚いて跳び別れた。桐畠の小道を、静かに歩んで来た人の提ちようちん灯の明りだった。それは、与力の東儀三郎兵衛である。

じつと——穢きたないものを見るように、ひれ伏している波越八弥を見下ろして、東儀のことは、皮肉なくらい、静かだった。

「波越。——暇ひまを遣つかわすぞ。お役儀を剥はいで遣わす。どこへでも去れ！ さだめし、満足だろう」

「えつ、波越に、お暇いとまを」

と、吃びつくり驚して、加山がすがりついてゆく眼を、東儀のむずかしい顔が、避けるように、無言で、横にうごいた。

彼のうしろには、彼の硬こわばった峻しゅんげん 巖いんよりも、もっと冷々として理智的な、羅門塔らもんた十郎の眼が蛍いろに光っていた。

宵よいの丁字ちやうじ

近国の知行所ちぎやうしよへ主あるじが立つてしばらく留守中の富武家とみたけけには、その夕方も、まだ、五百いお之進のしんのすがたは見えなかった。

で、夜ははやくから、屋敷の数ある戸を閉め切つて、灯ひも、微かすかだった。

そう風があるわけでもないのに、庭まわりの樹木が、時折、梢こずえまでうごいた。白い宵の星が、裏河岸の火の見櫓やぐらから、寂しんとした留守の空気をのぞいていた。

「おや？ ……」

奥の部屋へ今、行あんどん燈を運んで行った花世は、ふと耳を澄ましながら、灰ほのぐら暗い隅の机に向つてゐる若い侍へ、眸ひとみを向けた。

「何か、裏の方で、人の蹙あしおと音がしたようではございませぬか」

「気のせいでしょう」

と、若い侍は、疲れた眼を、書物の上から離して、

「お父上からは、まだ、飛脚が参りませぬかの」

「才才、夕方の用にまぎれて忘れておりました。あなたのご依頼の用もすみ、ほかの公用も片づいたから、もはや、間もなく帰る、郁次郎いくじろうどのに、何事も、心配せぬように、とくれぐれも書いてござりました」

「お礼の申しようもござりませぬ」

「そんな、他人行儀あんどんなことを……」

灯にかこつけて、行燈あんどんと共に、郁次郎のそばへ摺すり寄って、

「どんな苦しみをしても忌ませぬ。ただ、末かけて、お忘れくださいますな」

「お父上にも、そなたにも、婚儀の前に、こんなご苦労をかけながら、何で、薄情でおられましようか。ただ、郁次郎がきようまでの行状を、貴女が疑ってさえ下さらねば……」

「私は、信じております。この信念をうごかしたら、私は、女ではございませぬ」

「そういう心を娶つて、自分のものにする郁次郎は恵まれた人間です」

「お見捨てくださいませな。ほんとの、父ひとり、娘ひとりの、私です……」

恐々と、すぎる手を、郁次郎は自分の手へ掻き取った。彼女のいじらしい恋は、爪のさきまで、桃いろに燃えていた。熱い、火のような手だった。

「ね、ようございますか、郁次郎さま」

ふるえている。……甘えている。

郁次郎は甘い感激に閉じていた眼を、ふっと、熱い息といっしょにひらいた。そして、何の気もなく、自分の手にある、花世の爪の先に眼を落したのである。

「あ、これを見ては、嫌です」

何か、慌てぎみな羞恥が、花世の頬を走った。ついと、左の手を引ッ込めて、袖の下に隠してしまった。

「はははは」

と、郁次郎は笑った。彼女の他愛たあいなさを、他愛なく笑ったのである。

「ホホホホ」

と、花世も笑った。

油の滲しみた燈心が、ぽつと、部屋の中を明るくした。春雨のような光線が、ふたりの静かな姿へ、幸福なかがやきを注そそいだ。

と、そのの、火燈口かとうぐちの小襖こぶすまを、外からかろく叩く者があつた。

「塙はなわうじ氏、塙氏」

ぎよつとして、男女ふたりは、跳び離れた。

「誰ですツ？」

「誰でもありません」

すつと、開あいた所に、東儀与力のすがたがいつばいな巨おおきさに見えた。

「やつ、其そのもと許もとは」

と、郁次郎が、そばの刀に手をのぼすまに、東儀は駈きけこんで、その利腕ききうでを、ぐいと捻じ上げた。

「な、なんとなさる？」

「多言たげんは要しますまい。手前の態度をもつて、武士らしく、お覚悟あつては如何ですな」

「無断で室へやへ踏みこむのみか、いきなり縄をかけて、武士らしくとは、何たる暴言。この郁次郎には解げせませぬ、理由を仰おつしやい」

「ともあれ、南町奉行所までご同道願おうではござらぬか。こう穏当に申すのも、江漢老先生のご子息と思えばこそじや。見苦しく振舞われては、父上のお顔に、泥の上塗りでごごろうぞ」

「父の顔に泥を塗る！ これや、いよいよ聞き捨てにならん」

と、郁次郎は色をなして、真四角に、膝を正した。

「逃げも、隠れもいたさん、どういうわけで、拙者をお召捕りに相成るか、それを承ろう！ またそれが、武士に縄をかける作法ではないか」

「ウム、それまでにいうならば、花世どのをここにおいて申すが、差さ支しえつかないか」

「無論！」

と、強く言い放つたが、ちらと彼女の白い顔を見た郁次郎の眼まなざしは、何ものかに脅えていた。

「では訊ねるが、貴公、鷺江お雪という女笛師と、よほど深い間がらでござろうな」
 「知らぬ！ 存じませぬ！」

きつぱりと言つて、横を向いた。

「卑怯じや」

と、東儀は嘲笑つて、きのうの恋文と、笛の中から出た例の紙片とを出して見せた。郁次郎の顔は、見る間に、血の氣を失つた。——が、彼以上の驚きと悲しみとは、むしろ花世の方に強かつたかも知れなかつた。今も、たつた今、心の全部をあげて、信じていると言つたばかりのその人に、自分以外の女があろうとは、誰が、思つても見たらうか。突然、花世は双つの袖を手に拯つて、わつと、そこへ泣き伏してしまつた。郁次郎の蒼ざめた唇は、口いっばいに血を含んでいるかのように、固く閉じ切つたまま、けいれんしていた。

東儀は、勝ち誇つたように、

「神妙になさるならば、ほかならぬ老先生のご子息、途中の縄目だけはゆるして進ぜる。さ、お立ちなさい」

脆くも郁次郎は、両刀をすてて、力なく、蹠々と立ち上がった。——花世は、爛れた

眼を、あげて、その姿にまた泣いた。情けない、丸腰になった、男の姿を――。

「お屋敷の前後、途中、辻々、手配りは充分ですぞ。見苦しい事はなさるだけ野暮じや、よろしいかの」

こういつて、東儀は、郁次郎の反撥のない腕を、自分の逞しい腕たくまの下にぐいと抱え込んだ。
だ。

――引ツ立てて、廊下へ出る。一枚の戸が外はずれていた。

そこから、庭先を見ると、植込の間には、いつのまにか、多勢の捕手がなだれこんでいた。そして一組は、提灯をかざして、築山つきやまの裏の新しい土の色を見つけて、そこを、掘り返している様子だった。

「ああ！ ……」

と、花世の絶望的な声がうしろで聞えた。

振り願つて、郁次郎が、何かことばをかけようとするのを、東儀は、腕を締めつけて、すこし大股に、玄関まで引ツ立ててしまった。そこには、土まみれになった四、五名の捕手が、

「探り当てました、これでしょう、昨夜の紛失物は」

と、てがら顔に、築山の裏から掘り出したという、蠟人形の首をかぎして待っていた。郁次郎は、慄然りつぜんとして、顔を反そむけた。

「さ、お歩きなさい」

彼は、幾たびとなく、背中を突かれた。しかし、足の関節が外れたように、歩みが乱れていた。恐怖と煩悶に、目のいろまでうつろであった。

後にしてゆく家には、花世の低く泣く声が洩れて、いつまでも、彼の耳にこびりついた。彼は、ともすると、仰向けに倒れそうになつては、東儀の腕に支え止められた。

「東儀殿、武士の情けです。しばらく、ま、まっつけてください……」

京橋河岸まで、四、五丁歩むと、郁次郎は、渴かわいた声で、こう哀願した。何たる、悲惨な、哀れむべき眸ひとみだろう。

「まだ疲れる程は、歩いておらぬが」

「いや……少々、お話があるのです」

「話なら奉行所で承ろう」

「いや、秘密に」

「何じゃ」

「……後生です、情けです、恩に着ます、逃がして下さい拙者を」

と、郁次郎は四辺あたりを見廻しながら、東儀与力の袂たもとへ、何か、ずしり、と重い物を落した。

「や、これは、金ではござらぬか」

「そうです、それを寸志の礼としてさし上げますゆえ、拙者を」

「だまんなさい！」

と、東儀は一喝いっかつして、

「才才、しかもこの金には、佐渡平さびへいの刻印こくいんが打つてある。あの両替屋りようがえやから、為替かわせとして受け取った金であろうが」

「そうです」

「悪党にも似合わぬ見下げ果てた未練者だ。東儀三郎兵衛は不肖ふしょうながら、罪人のけがれた金を受けて富もうとは思わぬ。但し、これもよい証拠にはなるから奉行所まで預つておく」

と、そのまま、懐中ふところに収めた。

隙を見て、郁次郎は、ぱつと、彼の手から腕を抜いた。おのれツという声といっしょに、夕闇の底から、どぼウん！ と真つ白な水煙が上がつた。

濡れねずみになつて、河の中に立つた東儀与力は、無念そうに陸を見上げて、息いっぱい、呼子笛を吹いた。——身ぶるいをしながら、急を陸に告げた。

郁次郎の影は、白魚橋の中ほどを、いッさんに駈けていた。

ひとなき
人無き駕

もがけば腕くほど、彼の脚は、河の底泥土へ食い込んで、胸——肩の辺まで、黒い河水にズブズブと浸つてしまふばかりだった。

「残念だ。——あれ、郁次郎めが、橋を越えて逃げて行く。追えッ、追えッ、誰か、あれを追え」

と、叫んでは呼子笛を吹き、もがいてはまた、河の中で、笛の壊れるほど吹き鳴らした。「東儀殿じゃないか」

と、陸の上の夕闇で、ひたつと、駈けて来た跫音が止まった。

「お！ 羅門先生」

東儀は、自分の力で、河から上がろうと努めたが、上がれなかった。

「それっ」

陸おかから風を切ツて来た捕縄の端が、ぴゅつと水面を打って、白い筋を描いた。

「や、忝かたじけない」

と、東儀与力の真つ黒に濡れた姿が、木像蟹がにのように、岸へ這い上がった。

「あれに、井戸がある」

と、羅門塔十郎らもんとうじゅうろうは、彼を掴つまんで来て、頭から釣瓶つるべの水を浴びせかけた。そこへ、部

下たちの提灯が、遅ればせに、集つてくると、彼はかえすがえすの失策に、何か、持ち前の呶号を発したくなつた。

「うろたえ者め、ここに用はない。郁次郎を追えッ、郁次郎を」

「えっ」

部下たちは、初めて知つたように、

「——彼奴きやつ！ 逃げたのか」

「たつた今だ、ふいを狙つて、此方このほうを河へ突き落とすと、白魚橋を越えて、北河岸へ疾走した。すぐに行け」

白魚橋の藍あおい空を、乱れた提灯ちようちんの影が点々と駆け出して行った。——むろん東儀が

河の中からそこに認めた郁次郎は、とうに夕闇の深くへその姿を晦くらましていた。

そこへ、同心の加山耀蔵が、自身番から一ひとかき襲ねの小袖を抱えて飛んで来た。

「与力。お着更えを持参いたしました」

「加山じゃないか」

「は」

「何をしておつたのだ、何を」

と、東儀は誰の顔を見ても八ツ当りである。

「——貴公、わしが河へ突き落されたのを知っていたなら、なぜ、衣類を取りに行くよりも、郁次郎めを先に追いかけなかったのだ」

「はっ……」

と、加山は暗涙をのんでうな垂れた。

東儀は、あわただしく、体や髪しずくの雫を拭いて、衣服を着更えながら、

「郁次郎めが老先生の子息であるという点から、さては、十手が鈍つたのであろう」

「……決して、そんなわけではございませぬ。拙者は富武家の裏門を見張っておれと申し付かっておりましたので、忠実にそこを固めているうちに、組下の者から様子を聞いて、

驚いて駈けつけて来ましたが、もうその時は遅かったのです」

「いかん！ どうもいかん」

と、東儀は、すべての喰い違いがみな部下の怠慢からでも起つたように、首を振って、
「いつぞや退たいやく役させた波越といい、また貴公といい、みな江漢老先生とは師弟の誼よしみがあるから、いざとなると、公私の境に惑乱して、十手の公明正大を誤つていかん」

「いや、それは無理もないことです」

と、羅門はそばから取とり做なすように、

「拙者にしても、きょうが日までは、いくら証しやう扱がに証しやう扱がが重なっても、まさか、女笛師を殺害した下手人が、老先生のご子息であるとは、思いながらも、よもやに引かれて、惑まどつていたくらいなもの。――まして当代の人格者はなわ塙はなわ老先生の指導しきじきを直じき々じきにうけた門人ならば、なおさら、そう考えるのが当りまえでしょう。加山殿の苦くちゆう衷ゆうもお察さつしする」

羅門のさばきは、いつも奥おく床ゆかしかつた。得手勝手な東儀与力とは、その実力はもちろ
ん、人格においても、雲うんでい泥でいの差である。

加山はひそかに、こういう立派な人物を上役に戴いて働いたなら、どんなに、働きがいがあるだろうと思つた。

が——東儀のこじれた気もちはまだ納おさまらない。

「加山ッ」

「は」

「は、じゃあない。何をぼんやりとしているのだ。もう組下の者さえ先に手配に廻っておるではないか。早く善後策を講じて、郁次郎めを引っ捕えて来い」

「はっ」

「郁次郎を召捕らぬうちは、断じて、奉行所に帰って来るな」

「……ご免」

と、悲痛に、無情な上役へ向って、低く会釈をすると、加山は、冷たい十手と捕縄をつかみ直して、何処いずこと、あてもない夕闇の街へ、いっさんに、駈け出して行つた。

その、うしろ姿を見送つて、東儀はすぐに、

「この上は、花世の方を」

と、羅門を眼で促した。

「そうだ、郁次郎が逃げたと知ると、あの鳥も、逃げるかも知れぬ」

二人は、踵きびすをめぐらすと、再び、富武家の門前へ、急いで、引っ返して来た。

見ると、一挺ちちようの駕かがそこに横着けになっている。二人はハツとしながら、

「もしや、花世はなよが？」

と、疑うたがつて、すぐに、駕かのタレを芻はねのけてみると、中は空ツぽだった。提灯ていとうの裏側に、
下総しもとう白井しらくい宿宿問屋しゆくしゆくどんやと、小さく書いてあるが、その駕かかきは、どこへ行つたか、

門前かどまへには見当らない。

「おや、これは下総しもとうから、ぶつ通しで来た駕からしいが」

「主人しゆじんの五百之進いほひのしんが帰つたものと見える」

「じゃ、花世はなよもまだ奥おくにいるだろう。——羅門らもん氏うぢ、こんどこそは、逃にげがさぬように、ご助力りきをたのむ」

「心得こころえた」

二人は、ばらばらと、邸内てい内へ駈かけこんだ。

破滅はめつ

たった今、大勢おほしの捕手とらが踏みあらしした屋敷やしきの中は、まだ、土足あしの痕あとも、拭ふかれていなか

った。

「——郁次郎殿は？ 郁次郎殿は？」

その中へ旅から戻つてきた五百いおのしん之進であつた。屋内の有様に、さつと顔いろを変えて、そう叫びながら、奥へ、駈け込んで来た。

が、そこには、もう郁次郎の姿はなかつた。

寂しい夕暮を守る一つの灯の下に、彼のはいつて来たのも知らずに、畳に顔を沈めて、泣き伏している花世の傷いたましい姿だけがあつた。

「これ！ 花世」

「あつ……」

と、びつくりして、

「お父様」——と縫すがりついた。

「何としたのだこの有様は。郁次郎殿は、いかがいたした？」

「お……お父様……」

「泣いていては分らぬ。郁次郎殿は？」

「たつた今、南町奉行所の東儀様や、大勢の捕手が雪崩なだれこんで、無態むたいにひ、ひツ立てて」

「なに」

と、五百之進は、よろよると、倒れそうになった体を、柱に支えて、

「では、当家に隠れていることが、早くも、奉行所の知るところとなつて、引つ立てられて行つたと申すか」

「は……はい。なんとお継りしても、東儀様には、役目とあつて、仮借かしやくをしては下さいませぬ」

「ウーム、しまった。一足遅かった。せめてわしがいたならば、むぎむぎと、郁次郎殿を渡すではなかつたのに。……娘！ この上はぜひもない、そちも早く、屋敷を遁のがれて、何処へでも行つて、郁次郎殿と添い遂とげい！」

「でも、お父様を独り残しては……」

「な、なにを、猶予しておるか、そんな場合ではない。飽くまで、良人おっとに侍かくのが女の道じゃ。郁次郎どのを助け出して、時節の来るまで、どこにでも、身を隠せ。……ただ、あ、ただ……老先生に対しては何と申し上げてよいやらお詫わびのことばもない」

「私も、それを思うと、この胸が、張り裂けるようでござります」

「よいわ！ 今日まで、老先生を偽いつわっていた罪は、五百之進が改めてお詫わびの道をとるで

あろう。……この上に、そちの身までが捕われてはならん、早く行け。はやくこの屋敷を出て、郁次郎殿を救い出す工夫をするがよい」

「は……はい……」

「そして、時節を待て。よいか！ 強くなれよ！ 添い遂げろよ！ それが、この父へ対しても、老先生へ対しても、ただ一つのそちの婦道であるぞ」

五百之進は、そう言つて、あわただしく、自分の居間へはいつて、手文庫の中から、路銀や、印籠や、何かの書類や、餞別せんべつの物をそろえていた。

と！

「あれツ、お父様ーツ」

と、花世の救いをよぶ声が、悲しく、奥の間に劈つんせいて聞えた。

「あつ」

と、五百之進が仰天して戻つてみると、彼が去つた瞬間に、入れ代りに、そこへ踏み込んだ羅門塔十郎と東儀三郎兵衛が、両方から、彼女の腕かひなを抱きこんで、いやおうなく、庭先へ引き下ろそうとするとところだった。

「わつ、まツ、待てツ」

と、五百之進は、われを忘れて、東儀と羅門の袂をつかんだ。その顔いろは、武士でなければ大声で泣きたいように、引ツ吊られていた。

ふたりは冷然と、鳥肌とりはだにそそけ立った五百之進の顔を振り顧かえつて、

「おうご主人には、いつの間にお帰りか。ご息女の一身について、少々不審のかどがあるに依つて、奉行所までお供を仕る」

「いや、お待ち下さい」

「待てというのは」

「何の理由をもつて、花世を、お召捕なさるのか、それを、承りたい」

「その儀ならば、追ツつけ、貴殿も奉行所までご足労を願う場合があるうから、その時に、お糺ただし下さい。きようは町奉行の権限をもつて、ご息女をお連れ申すだけのことだ」

「それだけの理由では、娘を渡すことは相ならん」

「公命たてに楯たてを突き召さるか」

「拙者も、柳りゅうえい 営えいの御書院番、富武五百之進です！ 武士でござる！ 娘が不浄役人に

繩打たれて、屋敷から拉致らっちされたとあつては、どの顔を下げて、公儀のご奉公がなりましようや」

「その辺もお察しはするが、何もかも、不運とおあきらめなさるよりしかたがあるまい。郁次郎の身にも、花世どのにも、怪けしからぬ証拠は山のごとくある。——よほど手加減いたしていたが、もはや、きようとなつては、退のツ引きならぬところですよ」

と、羅門は、こんな場合にも、多少は五百之進に同情を持つらしく、そのことばも物柔らかであつた。

東儀は、ぐずぐずしていてまた機を逸しては、と焦いらだ立つように、

「不服があるならば、奉行所へ、奉行所へ」

と、叫んで、

「さつ、お歩きなさいッ」

と、花世の背をとんと突いた。

深い窠あなへでも墜ち込むように、彼女のすがたが、闇を泳いだ。——とたんに、辺りに居残っていた四、五人の捕手が、ばらばらと寄つて、その取り乱れた美しさを、無残に引ッ掴んで、

「御用！」

と、唳鳴り浴びせた。

「それっ」

と、東儀と羅門とは、すぐその一ひと塊かたまりの人影を急せぎ立たてたが、同時に、うしろで、異様な物音がしたので、はッとして振りかえつて見ると、

「ウウーム……」

と、五百之進が前伏せに苦悶くもんして仆たおれていた。

闇やみ・闇やみ・また闇やみ

「ヤ、ヤッ、これは！」

「ご、ご両所。……」

と、五百之進は、血みどろな片手を上げて、ふたりの影を、拝むように振りうごかした。自殺やつたな！ 直覚に、そう見た二人は、意外そうな眼いろを見合せた。五百之進は、脇差の切ツ尖をふかく左の腹部に突き立てて苦悶していた。その紫いろの痙攣けいれんを、前歯で、じつと噛みしめていた。

「お、おねがいでごさる」

「自害とは、短気な。五百之進殿！　しつかりなさい！」

「……おねがいをごさる、ご両所。……む、娘を」

「えっ」

「見のがしてやって下さい。これには、深い仔細しさいがあること。そ、その……仔細しさいを言えぬあの娘じゃ、弱い、この父親じゃ。時節が来れば何事もわかる。羅門氏ろうもん、東儀殿、武士の情けです。見のがしてやって下さい」

「ウーム」

と、東儀もさすがに、死をもつて、子の破滅はめつを救おうとする親心の前には、太い息をついて、腕うでを拱こんでしまった。

羅門は、さも同情に堪たえぬように、

「ああ、ご無理もない」

と、横を向いて、暗涙を拭った。

そして、低い声で、

「東儀殿、見のがしてやったらどうだ」

と、囁ささやいた。

そう言われると、東儀は、捕縄役人の冷厳な本心が、かえってピクリと醒めて、「いや！ 断じて相成らん。——切腹してまで、子を助けたいというのは、なおさら花世に深い秘密のある証拠ともうけとれる」

さすがの羅門も、呆れたように、

「貴公は怖ろしい法の権化だ」

と、呟いた。

「いかにも、十手をとる以上は、飽くまで私情を殺さねばならぬ。花世の罪科が明白になれば、五百之進殿も、当然、切腹の運命は遅かれ早かれ来るものに決まっておる。——見のがすなどとは、もつてのほかだ」

五百之進は、俯つ伏せていた顔を、がぼと上げた。もうその顔は、青い死相に変つていた。逆手さかてにつかんでいる脇差のつばが、がたがたと顫わなないて、板縁いたえんに鳴った。

「で、では、これほど、お縄すがり申しても」

「くどい」

と、東儀は心づよく言い放つて、

「罪がなければ、ご息女の身も、無事に帰されるであろうし、犯した科とががあれば、いかに、

非常なご手段をもつて哀願されても、むだな事だ。それが、法の公明正大と申すものじゃ」

「ちえッ。……情けを知らぬ武士め！」

「なんだ！」

と、東儀は、憎々しげに睨み返して、

「法の前には、何ものもないわ！」

「ええ、しまった。——娘ッ」

脾腹ひばらから抜いた血の刃やいばが、無念そうに持ち直された。よろよろと立つと、それを杖にして、庭先へ転げ落ちた。

「——娘ッ。——花世」

「おおっ……」

捕方とりかたの手を振り払って、花世は、狂女のように、父の方へ、しがみついて来た。と、

五百之進は、その手へ、ふいに、血みどろな脇差を渡して、

「斬りやぶつて逃げる！ 父も、助勢してつかわす」

と、つよく言い含めた。

「あっ」

羅門塔十郎は、身を退くや否、うしろへ廻つて、抜き打ちに、五百之進の肩から背にかけて斜はすかに斬り下げた。——同時に、狼狽した東儀与力も、花世の方へ、十手をつかんで、飛びかかったが、びゅつ、と刃の先から飛んだ血が顔へかかつて、思わず怯ひるんだ途端に——

「逃げたッ」

と、不意を衝かれた捕手たちの慌てた声が、ばらばらと彼方へみだれた。

「外へ出すな」

と、東儀は呶鳴つた。

羅門は、死骸を見すてて、堀へいぎわ際の方へ駆けた。東儀もむろん追ひ捲くした。——だが咄とつさ嗟に、女性の嫻なよやかさをかなぐり捨てた花世は、翼をひろげた雉子きしのように迅はやかった。裾すそをひるがえして、泉水を跳んだ、追いつがる捕手たちを、片手なぐりに斬つて払いながら、築山を越え、樹の枝にすがり、そして堀の外へ跳び降りてしまった。

呼子よびこ笛のつんざきき！

疾風はやてのような登音！

辻に、橋の袂たもとに、河べりの樹蔭に、彼女の走るところに人影がみだれた。彼女の手にあ

る脇差は、いつのまにか柄だけになっていた。目釘が折れて刀身はどこかに落してしまつたのであろう。しかし、彼女はそれにも気がつかずに、柄だけの刀を握って、ひた走りに逃げて行つた。

闇、闇、また闇。——行く手は暗い、彼女の運命のように暗い。

はやくも襲われた呪いの暴風に、愛人との隠れ巢、父との愛の家、そしてその一人の父の非業な最期すら見捨てて、どこへ、どこまで、おわれて行く彼女であろうか。

渡り鳥

まだ東風が肌寒い。翌年の二月初旬である。

今し方まで、宿 端れの撞木橋の上で、金毘羅詣りの男と、気のはやい三度飛脚が、

つまらぬ間違いから喧嘩を起して、往來の旅人が、足をとめて、真つ黒にたかツていた。

宿役人が来る——見物の旅の者が追ひ払われる——。やがて、馭馬問屋にも、名物の石

餅屋にも、灯火がついた。

「あら、ちよつと、美しい姿だこと」

「お武家さま——」

「編笠のご浪人さん」

「泊つていらつしやいな」

この東海道——わけて戸塚の宿には、飯盛女めしもりがたくさんいた。灯がともると、街道の安旅籠はたごの軒たもとばに、白い蝙蝠こうもり蝠むしみたいな白粉おしろいの女たちが出て、旅の者を悩ました。

「これ、離せ」

おぼろ笠をかぶつた浪人だった。どこか窶やつれた線の細い影だった。しかし、たえず鋭い眼光りと、気配りともっていた。その若い浪人が宿の白蝙蝠こうもりたちに捕まつて、当惑していた。

「放さんか、放せ」

「でも、どうせお泊りでございましょう」

「いや拙者は、この戸塚の宿に知り人の家がある。それを尋ねているのだ」

「うまいことを」

「通せ」

「いいえ」

争い合っていると、町の万屋よろずやから、何か買物をして出て来た五十近い田舎者いなかものの女が、

「あれ、若様ではございませぬか」

「おう、乳母ばあやか」

「まあ、どうして！……」

と、老婆は駈け寄つて、淫みだらな白蝙蝠しろこうもりたちを睨みつけて、

「おまえらは、何をさらすんじや。このお方はわしが若いころに、乳母うばに上がつていたお屋敷の若様で、塙はなわいくじろうと郁次郎様と仰つしやるお人じや。めつそうもない飯盛女めしもりたちじや」

と、自分の子でも庇かばうように、

「さ、郁次郎様、貧しい家でございますが、どうぞお寄り下さいまし」

「乳母ばあや、あまり人の前で、郁次郎郁次郎と、わしの本名を言ってくれるな」

「おや、なぜでござりまする？」

「すこし仔細があつて、身を隠している体だから」

「長崎へご勉強においでになつたというお話ですが」

「その長崎の修業中に……」

と、何か言いかけたが、急にそわそわと、

「乳母ばあや、とにかく家へはいつて」

と、急ぎ足に歩き出した。

乳母うばのお杉は、昔、自分の手で育てた郁次郎が、何かふかい秘密をもって、身を隠す地を頼つて来たと聞いて、深い理由わけもたださずに、ただ盲愛にちかい気持で、

「よろしゅうございます。お杉が、きつとお匿かくまいたしまする」

と、ひきうけた。

だが、お杉の亭主は、宿場人足のあぶれ者だった。呑ンベの繁はなつと云つて、戸塚でも鼻はなつ抓まみの男である。

で、昨日きのう。

お杉は一挺の駕を雇つて来た。

「宅うちでは、不安心でございますから、私の縁者の者が、ここに神官をしておりますゆえ、これを持って、ひとまずそこへ」

と、文字は拙つたないが、真心のこもった一通の手紙を添えて、行く先も、繁には内緒にして、先の隠れ家へ立たせた。

「やい、お杉、いつぞやの居候は、どうしたんだ」

五、六日見えなかつた呑ンベの繁が、帰つて来ると、果たして、こう呶鳴りだした。

「居候つて、誰のことを言うんだえ」

「あの、郁次郎つていう、色の生なまつ白しろいやつよ」

「勿体ないことをお言いでない。あの方は、私にとつては、昔のご主人様だよ」

「何でもいいが、おれに黙つて、何処へ行つたのだ」

「急用がおできになつて、江戸表へ、お帰りになつたのさ」

「嘘をつけ」

と、繁は、あざ笑つて、

「てめえ、あの若蔵の嘘つぱちを真にうけて、何か、小細工をしていやがるな」

「何で私が、お前に隠して、そんなことを」

「やかましい！ おれの耳は、地獄耳だぞ。この間、野郎の泊つた時、夜の更けるまで、

おれが酔いつぶれていると思やがつて、ひそひそしやべつていたなあ何の話だ。よし、夫

婦の仲で、そんな水くせえ真似をするなら、おれにも、量りょうけん見けんがある」

ふいと、飛び出して行つたが、そんな行状は、珍しくもない亭主なので、お杉は、悲し

い顔をしながらも、抛ほつておいた。

繁は、ますぎけ 柘酒を飲みあるいて、宿場のかごかき 駕舁だまりへよろけて来た。

「こう、この中に、安はいねえか、安は」

「安は、ここにいら。よく眼をあいて見ろ」

「うむ、なるほど」

「何が成程だ。相かわらず、いつも、呑んでくれていやがるな」

「よけいなお世話だ、やい、安」

「なんだ」

「てめえ、うちのやつに頼まれて、今朝、何処へ駕をやったんだ。あの、色の生なまツ白しろい武ぶ士しを乗せてよ」

「知らねえ」

「ふざけるな、相棒の兼に、聞いて来たんだ」

「あいつ、もう、しゃべったのか」

「ふてえ奴だ。ぬかさなけれや、てめえと、一騎打だ。さ、首を洗って、外へ出ろ」

「いいじゃねえか、何も、兼に話を聞いているなら」

「いや、てめえの方が、詳しい話を知っているはずだ。去年の十月頃に、問屋といやのお役人か

ら、宿^{しゆくぶ}触^ぶれの出ているお尋ね者を知っているか」

「塙郁次郎とかいう、江戸で、女笛師を殺した下手人だろう」

「そうよ」

「それがどうしたんだ」

「けツ、頓馬^{とんま}なやつツていうものは、しかたのねえもんだ。てめえの肩に乗せて、五里も十里も、歩いていながら、気がつかねえのか」

そう言われて、安も、はツと何か思い当ったふうだった。しかし、そのために、彼に打明ける気にはよけいになれなかった。自分の口から密訴すれば、その報酬も自分のものだ。

「やい、ぬかせ」

「知らねえツていうのに、くどい奴だ」

「どうしても、言わねえな」

「あ、おら、義理がてえから」

「何を言やがる」

繁のふり上げた拳が、ぐわんと、安の横^{よこ}鬢^{びん}にひびいた。

「野郎」

安のこぶしは、繁の鼻を突いた。

「やったな」

「やったとも」

駕屋だまりの羽目板には何本もの、艶つやの出た昇かき棒が、立てかけてあつた。それを持つと、繁は、九紋龍のように、躍り出して、

「さ、出てこい」

「おツ、へどをつくな」

安も、その一本をふりかぶつて、魯智深ろちしんみたいに、往来へとび出した。

と、たまりの軒先に、最前から一挺の駕がおいてあつた。駕のうしろに、江の島土産みやげの貝細工や漬物樽つけものたるが下げてあるから、この宿で、一息いれて、仲継ぎの人足が来るのを待ち合せているらしい。——その駕の中で、声が出た。

「兩人とも待て。——立ち騒いで鎮しずまらぬと、ふたりともに、成敗せいばいいたすぞ」
 罌つばの鳴る音。

ぱらりと、駕のタレが、刎はね上がった。

羅門塔十郎その人であつた。

鮑あわび売うり

「来い」

塔十郎は、どぎもを抜かれた繁と安へ、こう顎あごを引いて、

「——来い、仲直りをしてとらせる」

と、先へ雪踏せったを鳴らして、歩き出した。

「どうしよう兄弟」

「成敗するって言ったぜ」

ふたりは、醒さめた顔を見あわせた。

ぶきみな、雪踏の音に、引きずられるように、ついて行った。

「おや？」

と、見ている間に、羅門は、小料理屋の暖簾のれんぐち口を割って、

「ゆるせ」

と、はいつてしまった。

すぐ、女が出て来て、外でまごまごしている二人を連れこんだ。

「飲むがいい。喧嘩よりは、酒の方が、うまかろう」

塔十郎は、鷹揚おうようにいつて、充分に飲ませた上、ぼつぼつ、本題にはいりだした。

「お尋ね者の郁次郎が、この辺に、徘徊はいかいしておったということだが、人違いではあるまいな」

「へい、たしかに、宿触しゆくぶれの人相書ともびつたりでございます」

繁は、しゃべりだしたが、自分の家に一晚泊つたということは、関かかり合あいを惧おそれて、い
わなかった。

「行く先は、こいつが、よく存じております、へい」

と、安の顔を指さした。

羅門は、黙つて、小判を一枚ずつ、二人のまえへ投げた。

「こりゃ、お上かみで下かみさる密訴みつその褒美ほうびよりは少し多いが、取っておくがいい。——で、安と
やら、その駕は、何処へやつたか」

「江の島の、江之島神社でございます」

安も、小判の前には、すぐ泥を吐いてしまった。

二人を帰すと、羅門は、その晩、江戸へ帰る予定を更かえて、急に、手紙を書いて江戸表へ早飛脚はやを立たせ、べつに、宿をとつて、翌日、江の島へ引つ返した。

彼は、非常に旅行好きだと常に人に話しているとおり、暇があると、旅へ出かける癖があつた。尤も、上方から下つて来た目的が、龍山公の血統ちすじさがしの件もあるが、表面は、東都遊学というのであるから、誰も、怪しむ者はない。

史蹟に、名所に、旅行癖はそうした人にはありがちである。ことに、彼は江の島の海色がまたなく好ましいといつて、相州附近からあの島へは、度々、旅をしている。

ちようど、春先。湘南しやうなんは、梅もはやい。

遊心をそそられた彼は、この四、五日まえから、鎌倉江の島めぐりをして、ちようど、戸塚まで帰つて来たところだつた。——江戸の方で、関かかり合あひになつた今度の事件も、下手人が、江漢老先生の息子という点から、奉行もやり難にくいところが多く、おまけに、すべでの秘密をのみこんでいたらしい富武五百之進は自刃じくしてしまふし、かんじんな花世と郁次郎は逃走してしまつたので、ここ三月ばかり、事件は、一頓挫とんざのかたちになつてしまつている。

「旅もしてみるものだな」

と、羅門の頬には、意外な拾いものに欣ぶ笑みが、波紋のように時々泛いた。その翌日、七里ヶ浜をいそいで、江の島への渡舟に乗った彼が、島へ上がるとすぐだった。

「旦那」

と、呼ぶ者がある。

ふり返った羅門はすぐに、

「鮑か。鮑はいらん。帰りに買ってやる」

と、すたすた歩きだした。

「羅門先生」

「や？」

「私です」

と、鮑売りの漁師は、かぶっていた磯くさい手拭をとって、むじやむじやな髯の中
で笑った。——郁次郎を捕えぬうちは奉行所へ帰ってくるな、と酷い上役の東儀からいわれた同心の加山耀蔵だった。

さすが炯眼な羅門も、彼の巧みな変装にはいッぱい食って、思わず、恥じたいろをし

た。

「おう、加山か」

「羅門先生には、きのう、江戸表の方へ街道をお急ぎとお見うけいたしました。どうして、お戻りなされたので」

「貴公こそ、どうしてここへ来ているのだ」

「はい、拙者は、あれ以来、奉行所へ戻らずに、遂に、郁次郎の足跡を見つけて以来、彼の影を離れたことはありません」

「では、郁次郎がこの島へ来ていることを、貴公はもう知っているのか」

「そのために、早速、こんな姿に化けているわけです」

「ご熱心だな」

と、言ったが、羅門には、ちよつと、自分の功をさらわれたような不快さが、軽く走つた。

「この島へはいったのは、郁次郎も、自分で自分の墓穴を掘ったようなものだ。江戸表へは、早飛脚はやとげを打って、すべての手配をたのんでおいたから、三日のうちには、東儀殿も人数を連れて乗りこんで来るでしょう」

「あ、もうそんなに」

「羅門の手を下す以上には、電でん瞬しゆんの間です。ご安心なさい」

そう言つて、少し誇らしく、

「だが、その手配の来るまで、何より不安なのは、この渡し口です。貴公は、その身なりがちようどよいから、昼夜、ここの海辺を離れず、見張つていてもらいたい」

「承知いたしました」

そういつて、羅門は、島の中腹にある町中の旅籠はたごへはいった。彼の好きな相模さがみの海色は、裏二階の窓から一望に見え、目ざす郁次郎の潜ひそんでいる江之島神社の青銅せいどうの葺いらかは、表二階から木立のあいだに見えた。

おはぐろづめ
鉄漿爪

「ああ父にすまない。あの老いたる父は、鶉うずら坂ざかに養生所を建て、自分が、こんな身みでいるとも知らずに、長崎から今帰るか、今帰るか、待っていることだろう」

机もたに凭たれて、郁次郎はもがいていた。そこは、江之島神社の社家の離れである。

「花世は、どうしているだろう」

苦悶は、すべてを苦悶にする。

——波の音、木の葉の風。

彼にはすべてが、恐怖と、苦悩の音響だった。罪の人にありがちな、神経質な顔に、おそろしく、若い明るさを傷つける立て皺たてしわが、眉のあいだに、針のように立っている。

りん……鈴の音ねだった。……りん、りん、と錆さびた古鈴これいのひびきが、彼の離れのすぐうしろで聞えた。

江の島見物の旅人たちが、なにがしかの賽さい銭せんを神楽料かぐらりょうとして献あげるたびに、この社家しゃにいる一人の若い巫女みこが、白の綸子りんずの小袖こそでに緋ひの袴はかまをつけて、舞楽殿ぶがくでんで湯立舞ゆだてまいの一節を舞うのであった。——その鈴が時々ひびいてくる。

気を紛まぎらそうとするように、郁次郎うきじらうは、机つくえの前を立った。そして、ぶらぶらと、拝殿はいでんへつづく橋廊下はしりょうげへかかりながら、見るともなく、庭を見ている……。

光琳こうりんが屏風びょうぶにでも写しそうな、かたちのよい、一株の老梅らうばいがあった。

「あら、咲きましたこと」

誰か、話しかけたのである。

ぼんやりしていた郁次郎は、うしろに、人が立ったことすら知らなかった。振り顧つてみて、何か、薫り木かおぎのような香におわしさが、その老梅のものではなく、自分のうしろに立っている巫女みこの直美なおみであることを知った。

「あ……」

「ホ、ホ、ホ」

直美は笑った。

いつも化粧をしているせいか、表情のある仮面めんのように美しい。

「……何を驚いたのでございますか」

「べつに」

と、郁次郎も、淋しく笑った。

「ご退屈でございましょう」

「なに、書物に親しんでおりますから」

「お江戸だそうでございますね」

「江戸です」

「私も……」

と、言いかけたが、巫女みこの直美は、急に、悲しそうに、
 「七歳ななつの時に、覚えたきりです」

「そんな幼少からこの江の島に？」

「え、巫女に貰われてまいりました」

「孤児みなしごかの」

「舞を舞っている間にも、それを思うと……」

涙が目にいつぱいだった。

「直美、直美——」

拝殿の方で、禰宜ねぎの呼ぶ声があった。

彼女が、顔いろを改めると、涙がぱらぱらと落ちた。

「はあい」

と、返辞をしてまた、

「お客様、晩に、江戸のお話をうかがいに行ってもようござりまするか」

「え。おいでなさい」

「じゃ、きつと、参りまする」

また呼ばれたので、彼女は、あわてて走りかけたが、胸に挟んでいた檜扇ひおうぎが落ちたので、戻って、拾いかけた。

「あつ」

と、何を見て驚いたのか、郁次郎は、発作症でも起きたように、いきなり、彼女のその左の手をつかんだ。

「……いけません、人が見ます」

直美なつみは、耳まで紅くなつた。彼女がひそかに抱いていた恋心は、それを、自分の都合のよいように勘ちがいしていた。

が——郁次郎の眸ひとみは、それに、燃えているのではなかつた。恋ではなかつた。

彼女の左手の中指である！

なんと、奇異な暗合だろう。郁次郎は顫わななきながら彼女の中指の爪を見つめた。その爪は、烏くちばしの嘴くちばしのように、黒い艶をもっている。

「おお……花世と、同じ爪だ」

「おはぐろ爪」

と、直美は手を引っこめた。

そして、

「晩にね」

と、媚こびた眼をのこして、緋と白との、鮮あざらかな艶えん姿を、拝殿の蔭へ、消してしまった。

物思う人

「巫女みこが死んでいる！」

江の島の山の雑木林には、まだ、海霧が乳色にからんでいた。朝はやく、峠を越えて、裏磯へ出る鮑あわび捕りが、こう騒ぎ出したのだった。

江之島神社から四、五丁奥の林の中である。

巫女の直美は、一太刀で、むざんに殺されていた。みんな、その美貌を惜しかった。

島役人が来て、検死帳へ書き上げた一カ条には、死骸、証拠品などのほかに、直美の左手の中指が斬りとられてあることが特記された。

指を切られて殺された女。

それと同じ事件は、去年、江戸にもあった。

女笛師の鷺江雪女の死骸も、左手の指が切られていた。

いや、あの時の雪女は、同じ左の手でも、切られた指は、人さし指だった。こんどは、中指だ。

指切りの悪魔。ふしぎな殺人だ。下手人は誰だろう？ 何の目的で殺したのだろう。

島の者はむろん、旅の者まで集つて、山の林には、凄惨な、ものものしさが騒いでいた。そのうちに、神社の掃除男や、社家の人々が、色をかえて、駆けて来た。

その人々のことばを綜合すると、きのう灯ともし頃、

(直美どの、海を見に行かぬか)

と、若い侍が、誘いに来て彼女を連れ出した。居あわせた者が、

(誰か)

と、訊くと、直美は少し恥かしそうに、

(離室のお武家さま)と、答えてうれしそうに出て行った。

で、深く注意もしなかったが、外に待っていた男は、編笠をかぶり、背丈もすがたも、

離室に逗留している若い武家とちがいがいなかった。殊に、その紋までが、同じ、丸の一

羽雁であつた、という。

「よしッ、他言するな」

島役人は、その書上帳かきあげちようをつかんだまま、いっさんに島の山から降りて行つた。そして、海辺の渡し口に立つている鮑売りの加山耀藏あわび しょうぞうに何かささやくと、嬉色きしよくをみなぎらして、すぐにまた、羅門塔十郎の宿所へ引つ返して行つた。

同じ宿には、ゆうべ江戸から着いた、東儀与力をはじめ、屈強な部下が七、八名、姿をかえて泊つていた。

「もう、猶予はならん」

断乎として、羅門のくちびるから、決断の一句がつよく走つた。

「すぐにだ！」

各 《めいめい》、そのままの姿で、ばらばらと別れて江之島神社の裏をとり巻いた。

——見ると、今起きたらしい郁次郎は、裏崖の下の清水をためてある石井戸のふちに立つて、物思わしげに、釣瓶つるべを持っている。

しきりと、何か、考えごとをしている顔つきだった。——或いは、それから四、五町奥の山林の声を、微かすかに、耳にとめたのかも知れぬ。

やがて、水を汲み上げて、顔を洗い出した。血でも落すように、神経質に、手を、幾度

も幾度も洗っていた。

たたたたつと、犬のように迅い男の影が、附近の木蔭から走り出したと思うと、

「郁次郎ッ。御用だ」

と、うしろから締めた。

ぱつと、白い水が、五尺も高く上がった。

腰を落して、捕手を投げつけながら、手にかけていた釣瓶の水を、ぎつと空へ撒いたの

であった。——だが、低く、地を飛んで来た捕縄の分銅は、もう彼の右足へぐるぐるつと

蛇のように粘って絡みついた。

「——郁次郎殿、郁次郎殿。もう遁れる途はありません。貴公のためにも、お父上の老

先生のご名譽の上にも、神妙に、法の捌きをうけた方が得策であろうと存ずる。卑怯なま

ねはなされまいぞ、其許も、江戸の名捕手塙大先輩ともいわれる人物のご子息ではな

いか」

凜として、厳かなことばが、郁次郎の動作を、ぴたつと抑えた。

木立の蔭から、そう言つて近づいてくる、羅門塔十郎と、そして東儀与力のすがたを見

ると、郁次郎の顔いろは、もう生ける屍のように青白くなってしまった。

春風の女

人も知る山城国の四明ヶ岳にある含月莊がんげつそうは、前の黄門松平龍山公の隠居所であつて、そのこの怖ろしく高い物見櫓ものみやぐらか塔のような楼上に、夕雲の纏まつわる頃、一点の灯火あかりがポチとつくと、京都の方からそれを望む者も、琵琶湖びわこに舟を泛うかべて夜網りょうしにかかる漁師たちも、ひとしく、

「あ。黄門様の窓に灯火が点ついた」

と、寂しい夜になつたのを知るのであつた。

それがまた、この九年間、少しも時刻を違たがえずに、暮六くれツに点ついて明六あけツに消えるので、里人たちには時刻を知る便宜にもなつていた。しかし誰もその高い楼上に九年間も、まったく風月を友としている黄門龍山公のすがたを見かけた者はないということであつた。彼等はただ、亀山六万石の豊かな人領を顧みずに、その雲中に独り住んでいる黄門様を遠く想像して、

「ご不幸な殿様だ」

「お世継がひとりもないので、自分もこの世に何の希望のぞみもなくなっておしまいなすつたんだらう」

「それにしても、九年もあの上に住んでおいでになるとは、根気のいいことだ」

「何しろ、よほど変り者の殿様とみえる」

と、密かに噂するくらいな知識しか持たなかった。

すると。

春も二月の末頃、その四明しめいヶ岳だけふもとの麓ふもとに近い湖畔の宿場に、三度笠をかぶって小風呂敷を

腕うでくび頸くびに結びつけた商人あきんどていの男が、ふらりと坂本の茶店をさし覗いて、

「姐ねえさん、少し休ませて貰もらうぜ」

と、葭よしず簣かきの蔭かげに腰を下ろした。

「いらつしやいませ。叡えい山さんへご参詣まゐりでございますか」

「叡山えいざんへ？ あ、成程、ここは叡山の登り口だね」

「はい、中ちゆう堂どうからお薬師様の道順を書いてあるお山案内もございませう。横川よかわ巡めぐり

をなさいますならば、白木の杖や草鞋わらじ、お弁当のお支度しどもいたします」

「なに、あつしは叡山へ参詣に來た者じやないのさ。この通り、忙せわしなく諸国を駈かけ歩あい

ている木綿屋の注文取りで、名所を踏みながら名所知らずで、ちツとも閑ひまのねえ旅商人たびあきんどだよ」

「おや、お急ぎでございますか」

「これから北国へ廻らなければやならないが、せめて、掛金かけでもよく集るように、麓から拜んでおこう」

「ホホホホ。それはどうも」

「姐さん、もう一つ」

「お茶でございますか」

「菊ヶ浜から休みなしに急いで来たので、すっかり喉が渇いちまった。……したが旅もだいぶ楽になったね」

「ほんとに、春めいて参りました」

「ところで姐さんねえ、矢走やばせの渡船場とせんばから四明ヶ岳の方にはいるには、この街道一筋だろうね」

「はい裏道はございません。大津を越えて、京都へはいればべつでございませうが」

「それじゃ途方もねえ遠廻りだ。……妙に、いろんな事を訊くようだが、今朝から今までの間に、年のころはたち二十歳はたちぐらいな、背のすらりとした美しい女いが、やっぱり旅支度で、ここ

を通つたのを見かけなかつたかい」

「ひとり旅のお若い方でございますか」

「色が白くつて、柳腰。無造作に手拭で髪を包んでいるが、都者というのは一目でわかる」

「さあ？ そんなお方は、お見かけしないと申しましたが」

「はアてね」

と、旅商人の男はひたりと、頬へ手をやって、

「そんなはずはねえんだが」

と、しきりと、湖畔の街道筋へ眼を送っていた。

と、一挺いっちょようの駕が、彼の眼を揺すツて通つた。

唐崎や浮御堂の景色へ、駕屋は、指をさしながら何か大きな声でしゃべつて行つた。湖水の案内をしているらしい。で、そつちへ向つている駕のタレは捲まくり上げてあつたが、茶店の方の側からは、誰が乗っているのか、中は見えない。

「——おい姐さん、少ないが、ここへ置いたぜ」

「オヤ、もうお立ちでございますか」

旅商人たびあきんどの男は、小風呂敷の中に包んでいた紺合羽こんがっぱを、ひらつと、燕つばくろみたいに引つか

けると、前かぶりに笠を抑えて、

「あれだ！ 駕の上に、女笠と女草履」

呟いたと思うと、もう駕の速度と同じぐらいに急ぎ出していた。

道中にはいかものが沢山いる。旅を廻る木綿屋の註文取りにしては眼をつける者が少し商売違いである。——と思つてよく見ると、その旅商人、実は、江戸表の南の同心、かの博物会の蠟人形に変事のあつた晩に、当然、捕まえ得る花世を捕まえ損ねて、組頭の東儀与力の勘気にふれ、即座に役名を剥がれて江戸をおわれた波越八弥であつた。

では——尾けられてゐる駕の女性は誰だろうか。

しかもその八弥が、江戸の品川口から東海道を経て、遙々とここまで尾けて来た以上は、誰かよほどな大物にちがいはない。殊に女の方も、途中からそれを勘づいて、泊りの間も油断なく、隙さえあれば彼をまこうとして互に智と策とを暗黙に闘わせつつ、遂にここまで来たのだつた。

女が、矢走の渡船場で、道を訊ねたのを知つた八弥は、一船あとから上陸するとすぐに、同じ渡船小屋へ行つて、今行つた女が何を訊いて行つたのかを抜目なく糺してみた。

「四明ヶ岳の含月荘へ行くのだが、ほかに裏街道がねえかと訊かれましたで、山はかえつ

て遠廻りになるから、この北国街道をよい加減な所まで駕で行かつしやいと教えてやったのでがす」

小屋の老爺は、ありのままに、そう答えた。

(よし！)

と、八弥はすぐに足を向け直したが、その寸間に、もう先に見えた女はどこにも姿が見えないのであった。さては、飛んだなど、叡山の下坂本まで、急いで来てみたが、一向そんな女が通つた様子もないとの事に、茶店にはいつて、一息やすめてみると、何のこつた、やがて、名に負う八景の風光を流し目にして、新駕あらかごの中に揺られつつ、湖岸を打たせて来た一挺こそ、先へ行つたはずのそれではないか。

抱だいた小こ筥ぼこ

「あつ、また一杯食つた」

八弥は口癖のように、叫んだ。

永い道中、女の小智に翻ほんろう弄されて蹴けつます躓ますくごとに、彼は、そのみじめな狼狼の舌打ち

を重ねて来た。

だが、今日はもう必ず女の全部を突き窮めずにはおかない。八弥には、信念があつた。自信があつた。

四明ヶ岳へ——四明ヶ岳へ。

やがて女は、あの駕を、どこかで降りるにきまつている。——すべてはそれからのことだ。

しかし、その含月荘といえは、前黄門龍山公の隠遁地ではないか。

今、自分が遙か江戸からここまで尾けて来た怪女性が、いったい、何の用事があつてあの山荘を訪ねるのだろうか？

これが分らない。

それと八弥には、もう一ツ、その女が江戸表から姿を隠した花世か、或いは、彼女と似ているが実は全くの別人なのか、どうしても明確に判断しきれなかつた。

花世か？ 別人か？ という一個不思議な女性は、女笛師殺しの捕物にかかつて以来、幾たびとなく、事件の表裏に登場して、東儀与力をはじめ、南の捕手たちを翻弄した美魔であつた、陽炎であつた。

今——それは小半町ほど先の並木を、駕を打たせて、急いで行くのだ。

「ああ！ きょうだ」

彼は、尾け慕つてゆく間も、いつになく、大きく胸が躍った。

花世か？ 別人か？

また、彼女が含月莊へもたらす用向きが何であるか。

その二つの疑問が解とかるならば、女笛師殺しの用意ぶかい犯行と目的が、どういう巧妙な機構と伏線おほとに蔽おほわれて行なわれたものか、急転的にせんめい闡明せんめいされて来るかも知れない。

やる！ 俺はやる！ 命がけでやる。

たとえ、不幸にして彼女が、自分の願わざる花世であっても、再び私情とらに囚とらわれまい。

別れた友、同役の友人加山耀ようぞう藏ぞうよ！ 見ていてくれ。

おれは今、大きな功名の機会にぶつかっている。きつと、そいつを掴む。——上役の勘かん気にふれて、役名を剥はがれても、俺は俺として、前の不名誉をそそぎ、東儀与力を見返してやるくらいな働きをするつもりだから、見ていてくれ。

若い八弥の心は、情熱燃えるような血のなかで、そう遠くへ、叫んでいた。

「おやつ。降りたぞ」

突然、八弥は並木の蔭へ跳んだ。——そして傘を伏せたように、すぽっと、合羽の裾をひろげて屈まりながら、鋭い眼を、彼方に向け直した。

いつのまにか、道は湖岸を離れて山蔭の道にはいつている。

駕は、道祖神の石の前に止っていた。

「ご苦労でしたね。……少ないけれど」

女は、駕屋の卑しい眼に背を向けて、淋しそうな風もなく、ひとりで深い山ふところへ向って歩み出した。風のない山蔭は、二月の草萌えが匂って、寒くなかった。

「おそろしく気前のいい女だな。だまって、二朱金と来た。近頃の客にや、珍しい」

「ふふん……」

と、駕屋は、掌の金の色と、女のうしろ姿を見くらべながら、

「あんなのなら、ただで乗せてやつてもいいと思つたのによ」

「さ、戻ろうぜ、金が木の葉に化けるといけねえや」

「こう山の中で見直すと、何だかよけいに美しいな」

「これ！ 駕屋」

「へい」

二人は、吃驚びつくりしたように振り向いた。

「——な、なんでえ、てめえはさつき坂本で休んでいた旅商人たびあきんどじゃねえか。待みてえな声を出しやあがつて、恟ぎよツとするじゃねえか」

「ははは、どうも相済みません」

と、八弥は煙管きせるを唾くわえながら屈かがみ腰ごしに、

「おそれいりますが、お火を一つ」

「おまけにご拝借ごばいせときやがったぜ。凶々きんげんしいやつだ」

借りた燧ひうちいし打石うちいしで、すぱつと吸すいつけて、

「今のお女中は、含月くわげつ荘しやうへ行いつたんでございましょう」

「よく知っているな」

「へい、てまえも、御番士ごばんしがた方かたにお出入ごしゆりいりをしておりますんで。——だが駕屋かやさん、あれや

山のお屋敷やまのおくじゃ見たことのない女おんなですぜ」

「江戸表の上屋敷じやうじやうのうから使つかいに来たという話わだから、多分たぶん、あつちの者ものだろう」

「それにしても、女一人の使者しやというのはおかしいじゃございせんか。どういう用事ようじで来たんでしょう」

「なあ、相棒、なんだか小さな筥はじを持っていたようじゃねえか」

「む、香筥こうぼこのような……。そいつばかりを、ひどく大事そうに抱かかえていたよ」

駕屋に別れると、八弥は足を早めて、遅れた距離を取り返した。街道とちがって、こういう山道では、先に自分の姿を気づかせないということは至難だった。

しかし、それより前から女はちゃんと知り抜いているらしかった。そして何の恐怖にも襲われずにあたりまえな歩調で登りを辿たどっている。ただ、駕屋のことばに依って初めて知ったのは、その手に抱えている帛紗ふくさづつみの四寸ばかりの小筥こぼこである。

（はてな、何か、よほど大事な物らしいが、道中ではあんな小筥を持っていなかった。……ははあ、してみると帯の背に隠していたのを、きようはいよいよ目的の含月荘へ着くので、手に持ちかえて参るんだな）

八弥は、そう判断した。

しかし、気にかかる。小筥の中に何を入れてあるのだろう。路銀？ 手紙？ いやどうもそんな程度のものじゃない。

（そうだ、これや一つ、含月荘へはいらぬうちに、あれを奪って、同時に、花世殿か別人か、それも同時に確かめてしまうのが何よりだ）

八弥は、そう肚をきめた。

彼はさらに足を早めて、女の後ろ姿へ迫った。半町の距離は、二十間になり、十間になり、もう四、五間の近くにまで追い着いた。

「今！」

と、八弥の胸は昂^{たか}く衝^うつた。

とんと、膝を落すとともに、彼の手裡^{しゅり}には白い十手が隠れた。——が、途端に、女も感^{かん}覚的にくるりつと振り向いて、

「——見えませんか」

と、白い片方の手を真ツすぐに伸ばした。

「あつ」

と、八弥は思わず、地へ、首を竦^{すく}めた。女の手には、十手よりも遙かに短い短銃がつかまれていた。その白い拳の蔭からじつと見すえている眼は、少し笑いをさえ含んで擲^{やゆてき}的に光っていた。

八弥は、一步も動き得なかつた。跳びつくには、間があり過ぎるし、身を起せば、同時に弾^{たま}が来るにちがいない。その全神経をつかっても足りない気構えのなかで、

(花世か？ 別人か？)

と彼の思判しはんは騒さわぎみだれた。

やりの
槍やりの
一ひと群むれ

かなり近い距離だ。そこで、瞬間に見た判断では、やはり実によく似ているという以外、
一歩も出なかつた。花世とも言いきれないし、別人とも思いきれない。

「——見えませんか」

女が、もう一度そう言つたら、その声こそ、花世か花世でないかを明確にするかも知れないと待ち構えたけれど、女は、それつきり、無言であつた。

八弥は、畸形きけいな爬虫類はちゅうるいのように、肘ひじ、膝、肩までを地に摺すりつけたまま、眼だけを相手の筒つつぐち口に向けて、ジリジリと前へ迫り出した。

しかし、彼が一尺にじり出すと、女も、一歩後へ退のいた。彼が横へ身を曲げると、短銃の筒もそれについてうごいた。

が、八弥のそうした準備は、一気に女へ迫るためではなかつた。四、五尺先にある樹木

の楯を得たかったのである。彼は、ふいに躍り立つと、その樹の幹を楯として、

「花世ッ、神妙にせい！」

澄んだ沼のような謎へ向つて、初めて、大きな試みの石を投げつけてみた。

女の表情は、花を打つけられたほど動いて見えなかった。いや、ひとつはまたその大切な瞬間が、ズドウン！と彼女の指から突然に発した轟音のために、濛もツと、硝煙に包まれてしまったのでもあった。

弾たまは、八弥の耳を掠かすった。

「しめた」

と、彼は、走り出した女を追いかけながら意気が昂あがった。怖ろしい武器の消失を待つていたのだ。女は無益な荷を捨てるように八弥へ短銃を抛ほうりつけた。

からりと、その時、地上に物の転がったような音がした。女の左の手から弾み落ちた帛ふ紗くさつつみの小篋こばこが、八弥の足元から四、五間先の地上に踊った。

「おうっ」

彼は、全身をもって掴つかみとるように、それへ向つて跳びついた。

スツと、女の白い腕も、恐ろしい速度でそれへ伸びた。

双ふたつの手！

それがほとんど同時に、小筥の帛紗をつかもうとした刹那に、一本の槍の穂が、横あいから風をふくんで、キラリと八弥の眼を遮さえぎったと思うと、うしろの崖へ、ぶすりつと突きとおった。

「あつ、投げ槍」

咄嗟のまに、地上の小筥はもうなかった。それを胸に抱いて、ひた走りに跳んだ女の姿を見つつも、八弥は再び樹を楯にして、居い辣すくまなければ危険だった。

その意外な敵は、もう彼の踏んでいる地上を遠くもなく、榛はんの木の疎林を縫って、ばらばらとこつちへ駈けて来る。もう含月荘に近いから、或いは、その番士かも知れない。いかにも、山詰やまつめの武士らしい膝たつつけ行げ袴ばかまばきの影が十人ばかり、各短たん槍そうを引ひツ提さげて、獸群を放したように草ぼこりを立つて来た。

×

×

×

峰ひだの巖ななつには、白い仔猫がかたまつて首を入れてるように、動かない雲があつた。七刻を過ぎているが、空はまだ浅黄いろに明るかつた。

「お願いの者でござります」

小笥を抱えた女は、あれから程なく、少し息を喘ぎながら、含月荘の黒い門の前に立っていた。

門といつても、巨大な自然木を組んだ風流門である。塀といつても、古代の山城のように木柵もくさくを結いめぐらしてあるのである。しかし広さは何万坪あるか、山そのものの林石をありのままにとり容れてあるのだからほとんど見当がつかない。

ただ、一際ひときわ高い中腹の林の上に、前さき黄門公こうもんこうのいる櫓やぐらのように高い建物が聳そびえているのが門の外からも仰がれる。

その内側から、革袴かわばかまをつけた侍が、いかめしい声で、

「何者じゃ」

と、というのが響いた。

女は、ことばを嚙かんで待つていたように、

「はい、江戸表から参った玉枝でござりまする。お国家老 大村郷左衛門おおむらごうざえもん様か、ご子息の主水様もんどにお取次をねがいまする」

「おう、その玉枝殿ならご家老から伺つておる」

と、すぐに小門の方をギイと開けて、

「さ、おはいんなさい。只今この下で、短銃の音がしたが、あれは其女そなたではないか」

「江戸を立つ時、よほど巧みに来たつもりでございましたが、品川しながわぐち口から一人の男に尾つけられて、ほんとに、難なんじゆう渋じゆういたしました」

「多分、そんなこともあるうかと、ご家老のお計らいで、途中に侍たちを置かれたが」
「それで助かったのでござります。して、大村様は」

「お待ちかねだ。こつちへ」

彼女をさしまねいて、侍は、そこからまだ三、四町もある中門くぐを潜くぐって、更に楓かえ林ばやしの奥に破風やぶかぜの見える深い玄関くわんへはいつて行つた。

廻廊かいりやうから廻廊かいりやうへ。その奥の一室。

「才玉枝か。遠路をよう参つてくれた。女の一人旅、疲れたであろう。まあ、風呂にでもつかつて、休息したがよい」

国家老大村郷左衛門である。五十以上であろうが骨格も太く、皮膚も若い。小鬢こびんにすこし霜しもの見えるくらいで、六万石の国家老といえるだけの風貌は充分に出来ている。

女は、もう埃ほこりっぽい手拭てぬぐいも、旅たび上衣うわぎも脱いで、明らさまにほほ笑んでいた。これは正しく花世ではない。富武いおのしん五百いおのしん之進のしんの娘の花世とはまったくべつな女性だった。

雲中うんちゆうの大おお殿との

「はい、体より、気疲れもしましたが、何よりも先に、大事な用事をすませてしまひませぬと、心の方が休まりませぬ」

玉枝とよばれたこの女は、その美貌や肉つきでは、ほとんどあの花世と変りがないほど瓜うりふた二つであるが、ただ口をきくと、その語音ごいんはまるで花世とは違っている。花世のあの優雅しとやかな女らしさとは相違して、どこか猛たけだけ々しく、気持も非常に強いらしい。しかもこの女特有な頭脳あたまのよい明敏さもまた、そのキビキビした言葉つきによく出ている。

「そうか」

と、郷左衛門うなすは頷いて、

「では早速だが、持参の品を一見いたそうか」

「はい、これをお渡しせぬうちは、肩の重荷おが下りませぬから」

と、玉枝は、携たすえて来た帛紗ふくさづつみを膝に乘せて、その結び目を解きかけた。

と、唐突ふすまに襖ふすまが開いて、

「父上」

何か、どきツとしたように、玉枝も郷左衛門も同時にふり向いた。

「えい、吃驚びっくりいたすわ。誰かと思えば、主水もんどではないか」

贅沢な絹物と大小に飾られた若い侍であった。父に叱りつけられて、顔を紅あかめたまま、
「お宥ゆるし下さい。でもただ今、楼上の大殿から父上を呼べというお伝えがございました
で」

「殿がお召しになっておるのか」

と、郷左衛門は苦い顔をつくつて、

「——じゃあしかたがあるまい。あの四層楼の梯子はしごを上がり降りいたすのはやりきれぬが、
ちよつと先に行つて参ろう。これこれ、主水」

「はい」

「その間に、玉枝を寛くつろがしてつかわせ」

と、席を立ちながら、今度はその玉枝に向つて、

「また殿様の愚痴を聞き飽いて来ねばならぬが、その小筥の品は、立ち帰つて来てからゆ
つくり見ることにいたそう。その間でも、うかつな場所へは置かぬように」

言い残して、橋のように永い廻廊を、白足袋しろたびで踏んで行つた。

奥から奥へと、その廊下づたいに進むと、やがて突当りの欄間らんまに、「花園かえん猥入不だり可べから」と白字彫はくじぼりの木額けがきがかかっている。またその下の柱には小さな櫓うの板に、

——錠口じようぐち番ばんの許可なくして入りたる者は死罪。

と、誌しるしてある。

扉ともまた、それから先に、国家の大罪人でも入れてあるように嚴重だ。——がしかし、

「開けい」

郷左衛門が一声呼ぶと、左右の部屋から、屈強な侍が、ばらつと出て、すぐそこを開けて両方に膝まずいた。

「変りはないか」

「は。べつに」

鷹揚おうように頷いて、ついと、闇の中にはいった。

土蔵の中みたいである。隅に、上から落ちて来る光線が月のように見える。そこに鉄の梯子はしごがかかっていた。

老公のいる含月荘の高楼たかどのは、この四層めの一室だった。三つの鉄の梯子を登って、国

家老の大村郷左衛門は、やがて、いちばん上の一室へ畏る畏る伺候した。

「へへッ」

と、次部屋の襖ふすまぎわに手をついた途端から、彼はもう地上の人間とは別者みたいに變つていた。

「——大殿、大殿。お召しの郷左衛門めにござりますが、お襖を開けても苦しゅうござりませぬか」

「郷左か」

と、温雅な老声が聞えた。

「はいれ」

そーつと、音もなく襖を開けて、郷左衛門は、ペたりと、遥かに退がったまま、

「いつもながら、麗うるわしいご機嫌を拝しまして、郷左、何よりもうれしく存じ上げまする」

「人間も、天空におると、健すこやかになるの」

老公は膝にあまるくらいな美事な白髯はくぜんを、童児のような美しい掌でまさぐっておられた。

一切の国政をみな家臣にまかせて、光風霽こうふうせいげつ月を友とし、九年の間も、この高たか楼どのか

ら降りないせいとか、老公の耳朶じだまなじり、眦ひとみには、童顔のうちに一種の仙味がある。

が——ただ眸ひとみには、何か一つ、言うに言えないような憂いが底を流れていた。

「時に、郷左」

「はっ」

「今年もはや二月になるのう」

「御意にござりまする」

「数えておるか」

「胸にこたえておりまする」

「幕府のご猶予は秋までだぞよ。この秋までに、世継を届け出いでねば、わしの家名は、幕府へご返上せねばならん。永劫えいごうに、わしの血統ちすじというものは、この地上に絶えるのだ」

「郷左も、その儀ばかりを、実に心痛いたしております。ひとたび、思いをそこにいたす時は、夜の眼もろくに眠られませぬ」

「まったくか！」

「何で、私が」

「いつもいつも、汝は左様申してはおるが」

と、老公は幅のひろい声量に少し怒りをふくんで、

「待てど暮せど、いまだに、身の落胤らくいんの行方について、さらに手懸りがつかぬのはどうしたものじゃ」

「いや」

と、郷左衛門はあわてて、恐懼きょうくそのものとなった手を振りながら、

「大殿が左様にお思い遊ばすのは、ご無理ではございませぬが、それに係っておる者は、誰も彼も、寝食を忘れ、身を粉にくだいてご落胤のお四名様を、探し歩いております。決して、一日たりと、それを忘れている臣下はございませぬ」

「わしの血をうけている四人の孫、それは正しい側室の血統ちゆうじゆでないために、いずれも民間に流離しておるであろうが、一国の主あるじの力をもって、数年間も探し求めて、いやいまだに一人もわからぬという法はない」

「おことば、重々もつとご尤もでござりますが、ほかならぬお世襲よつぎの問題、幕府や他藩へ対しても、公おやけにはできません」

「あたりまえじゃ」

「が故ゆえに、ずいぶん手配は尽しておりますが、ご勢力をもって、大がかりにお探しはで

きぬのであります。何とぞ、この郷左をお信じあつて、もうしばらくの間、おまかせ下さいませ。はい！ お四名様のうち、きつとお一人やお二人は、郷左が命にかけてもご期限までに探し出して、お心を安め奉ります」

彼が、声にまごころをこめ、眼に涙をうかめて、こうまでに言うのと、時折、齒がゆくなられるらしい老公もだんだん顔いろを和やわらげて、やがては、臣下にせよ、信じてこそ国家老の重職においてある彼へ向つて言い過ぎたことばを、悔ゆる色さえあらわして来るのだつた。

「郷左、何分にもたのむぞ」

老公は、そう繰り返して、峰の夕雲に眼を移した。孤こ寂じやくにうるんだいとも淋しげな眸であつた。いつか、四山の峰の巒ひだは、ふかい暗紫色を彫ほりこんで、水の見えない琵琶湖の方に、厚ぼつたい雲が下がっていた。

西側の窓の方からは、遙かに、京都の町の灯がチラチラ見える。郷左は、畳に貼はりついた蜘蛛くものように、いつまでも、顔を伏せていた。そのまに、蘭らん之助のすけ、杉太郎と呼ぶ愛くるしい小姓が二人して、机のそばの金行燈かなあんどんへ灯ともを点した。

ギリギリギリと何処かで時計が鳴る。

「郷左、退がれ」

老公は立った。蘭之助、杉太郎の二人に手燭を持たせて、静かに、次の間の書庫へ書を取りにはいられた。

この子この父

「稀々たまたまのお召しというやつがないと、ここにいても、随分わるくはないが、あれが、苦に手がじやて」

湯から上がって、軽い着流しで寛くつろいだ郷左衛門は、仮面めんを摺すりかえたように変つて、あたかも、この含月がんげつ荘あるしの主のように、傲然ごうぜんとつぶやいていた。

山の屋敷にしては、贅沢な膳部が、燭なまめきの媚に見まもられていた。側には、彼の子のすこし出来の悪い主水もんどが、時々、玉枝の顔ばかり見ながら、銀の銚ちようし子をとって、父の酌しやくをしていた。

「亀山のご城内とちがつて、こちらの方には、美しい女中達がおりませぬから、それでお父上は氣づまりなのでございましょう」

と主水は、主水らしい戯れたわむを父に言った。

「たわけた事を申せ。おまえなどは、父が誰のためにこういう苦心をしておるか、知らんのじやろう」

「それは不肖ですが、分っております」

「分つておつたら、冗談にも、左様なことは申さぬものだぞ」

「けれど、私が立身すれば、父上も同時にもつとお好きな事ができるわけですから」

「老後には、それくらいな埋め合せがなくてはやりきれん。……お、忘れていたが、玉枝、そちをこの山まで尾つけて来た男は、あれから侍たちが捕まえたか、それとも、斬つて捨てたかどうか。復命はなかつたかどうかじや」

「最前その事を、表の侍から、申して参りました」

「お、そうか」

「けれど惜しいことに、逃がしてしまったそうでござります」

「それはまずいな」と、郷左はすこし眉をひそめて、

「わざわざ江戸表から害虫を連れて来て、山へ、追つ放したようなものだ」

「いいえ、たいした者ではございません。まだ青くさい同心の端はしくれでござります」

「同心ならばなおいけまい」

「いくら江戸の同心であろうと、十手を持つて、お大名の奥へ立ち入ることはできませんから」

「む。大きに」

と、郷左は、自分へ頷いて、

「ところで、最前の品は」

「側に持つておりまする」

「酒の肴さかなに、検あらためようかの」

「よろしゅうございましょう」

「主水、おまえは、退がれ」

「なぜですか、父上」

と、主水は露骨に不平のいろを示した。

「見てもつまらぬ物じや。あっちへ行けと申すに」

「よいじやございませぬか。つまらぬ物ならば、見ても差支えないわけでしょう」

「そちが見ても、益にはならぬから立てと言うんじや。わからん奴め」

「まあ、それまでに仰つしやるならば、お見せした方がよいではございませぬか。他人とは違いますからね」

玉枝は、父子喧嘩を取做すようにそう言つて、帛紗ふくさから出した小笛こばこを、卓の端にのせた。古代蒔絵こだいまきえの溶けそうな笛である。

「何ですか」

と、主水は無遠慮に顔をつき出した。

玉枝は笑いながら、

「当ててごらん遊ばせ」

「香こう笛ばこ」

「いいえ」

「琴の爪入れ」

「あれはもつと小さな物でございますよ」

「では、筧こうがいばこ笛ばこじゃ」

「あたりました」

「何だ、つまらぬ」

「中は？」

「中身は違うのか」

「まさか江戸表から、櫛くしや笄かんざしなどを入れた物を、護つては参りませぬ」

「わからぬ。開けてみい」

玉枝は、指をかけて、蓋を開いた。

「おや、中はただの白木の箱じやないか」

返辞を与えぬ代りに、玉枝は、さらに次の木箱の蓋を取り除のけた。主水の顔は、見るまに、まっ蒼蒼になつて、

「？……」

ごくくと、生唾なまつばを嚙のんだまま、その妙な、小さな物体に、驚きの目を奪とられてしまった。

指ゆびを蒐あつめる家老かろう

やがて……

「父上」

「む」

郷左衛門も、余り、気味がよくはないように、小筥こばこの中へじつと眼を落していた。

「こ、これやあ、父上、女の人さし指じやございませんか」

「そうだ」

「斬ると、こんなに、爪の色が、鉄漿おはぐろを塗ったように、真ツ黒になるのですか」

「そりや、日数ひかずが経ち、血の色が失せれば黒くもなろう」

「だって、こんなに黒いのは」

「何でもいい、そちの関かかわることではないから、気が済んだら次へ立て」

「でも、不思議だなあ」

「何が不思議？」

「父上は近頃、妙な物を蒐あつめることを道楽になさいますな」

「蒐める？」

「昨日も、相州の江の島から、江之島神社のお神札箱ふだばこにはいった物が飛脚で着いたのでございましょう。するとすぐに父上は、その日のうちに、京都の為替問屋かわせどんやから、千両という大金を、何処かへお送りなすった様子。これや怪けしからん、神社のお札一枚に、千両も払

うわけはないがと、そつと、お留守に開けてみると、中は人を馬鹿にした木屑がいつぱい、なお変になってよく見ると、ちようどこの小筥と同じくらいな密封した箱の中に、やはりこれと同じ女の指が入れてあるではありませんか」

「……………」

郷左衛門は、わが子の饒舌じょうぜつを、黙つて、睨にらみつけていた。

「だが、これと違つて、昨日の指は、斬ツたばかりのように生々しかった。それに、これは人さし指だが、あの方は、たしか中指で」

「主水もんど」

「だめですよ父上、そんな難しい顔をしたつて」

「貴様は、見たのか」

「はい、ちよつと、失礼いたしました」

「どうもしかたのない奴だ。しかし、見た者がおまえだからよかつた」

その、ほつと吐ついた溜息のあいだに、玉枝のことがキビキビとはいつた。

「えつ、また後の指が着いたんですつて。——このあんばいでは思いのほか、早くすべてが片づくかも知れませぬ」

「どうか一日もはやく、そうしたいものだ」

「私も江戸表の方が気がかりですから、一刻もはやく、帰るといたします。では、私の持つて来た分の金子は、どうぞ後から為替でおねがいたします」

「よろしい、金子の方は、相違なく送るであろう」

主水は物好きに、父の隠しておいた文庫の中の小篭を、もう一つ出して、蓋を取ってそこへ並べた。

二本の女の指！

生々しい中指と、血の干乾びた人さし指。

「あと、もう二本でございますね」

玉枝は、小判を見ているような眼で、呟いた。

「ウーム、もう二本。……はやく並べて見ぬうちは、心が安まらん」

「揃いましたら、お約束のように」

「ム。四本目の最後の指には、倍額の二千両与えよう」

三人の眼が、ひたつと、そこに打つかった時、玉枝は、ふいに蛇のような襟頸を伸ばして、

「ふツ……」

と、側の行燈あんどんを吹き消した。

「あつ、何をする」

と、郷左衛門の声が、闇の中で空虚くうきよにひびいた。しかし、すぐにはつとして立ち上がった。

いつのまにか、襖の境が、一寸ほど隙すいて、外の星明りが針金のように透すいている。その蔭から、どかどかツと、廊下へ向つて、誰か逃げた。

「——あつ、見られました。聞かれました。ご、ご家老様ツ。あれを、逃がしては大変です！ 早く、早くツ」

その登音へ、玉枝の声が、甲走かんぼしツた。

どんな敵と真向きになつても擲揄やゆ的に笑つていられる彼女が、常の不敵さを取りみだして、そうまでに、絶叫したのだった。

あざみどくぜつ
薊の毒舌

黄門公のお眼覚めとみえる。

高^{たか}楼^{かどの}の窓に灯^ひが消えた。白い朝雲が、峰にも、谷にも、含^{かん}月^{げつ}荘^{そう}の屋根にもゆるぎ出した。

——四明ヶ岳は夜が明けたのである。

「江戸表までは長い道だ。——では玉枝、ずいぶん気をつけて行くがよいぞ」

「玉枝どの、お名残惜しいが、それではここで……」

小禽^{ことり}の声。雨のような朝の光線。

人の姿は霞んでいる。

国家老の大村郷左衛門と主水^{もんど}の父子^{おやこ}であった。そして、まだ朝まだきの裏門から送り出されて出たのは、昨日、この山荘に着いたばかりの女客——女の密使——人間の指を入れた小筥^{こぼこ}を持ってここを訪れた怪美人玉枝であった。

玉枝は、昨日と同じ旅装いに、杖、菅笠^{すげがさ}を片手にして、

「お別れいたします。それでは、郷左衛門様にも、主水様にも、ご機嫌よう……」

「ム。次の吉報を待っておるぞ」

「はい、きつとまたすぐに、指を入れた小筥をお送りすることになるでしょう」

ニツと意味ありげな笑靨えくぼをつくつて、そのまま、二人に別れて歩み出した。

道が、山陰に曲がる時、玉枝は、もういちど含月荘の方をふり顧かえつて見たが、大村父子の姿はもう見えなかつた。

「……そうだ、同じ道を歩いて戻るのは智慧がない。きようは、この四明ヶ岳から峰づたいに、大文字山だいもんじやまの裏を通つて、三井寺から大津へ抜けて見ましょう」

ひとり語ひとりごとに、こう呟つぶやいて、山の空を見上げた。

つうツと、色羽いろはネの矢のように、小鳥の尾が、碧い空から谷間へ掠かすツて行く――

陽かげろう炎えんが立つ。

旅は、朗らかであつた。

西――一乗寺より白河を経て京都へ。東――叡山えいざん道みちを越えて大津東海道口に至る。

所々にある道標みちしるべの石をたよりに、彼女は、中山なかやま越ごえの峰にかかつた。

「オオ！ 佳いいい見晴みはらしだこと」

だいぶ登のぼつて来たので、冠かぶり手拭てぬぐいの下のおくれ毛けが、花の露つゆほど、微かすかな汗あせを含んでいた。

ほつと、深い息を吸い入れながら、彼女は、風に向つて、眼を細めた。――その眼は、

何かを笑っているように。

すると！

うしろのかんぼく灌木の葉がガサツと動いた。——ぎよツとして、振り顧った玉枝の眼は、そこから躍り出した男を見るや否、

「あつ！ いけないツ」

と、叫んだ。

ほとんど、倒れんばかりな驚き方だった。

ぼーんと、男の影へ向つて、菅笠と杖とを投げつけるが早いか、狼狽して、ざざざツと、道もない崖へ逃げ下りた。——いや！ 転げ落ちたと言つた方がいくらいに。

その上から、びゅツと、からすへび烏蛇のような、黒いほじょう捕縄が躍つて行つた。

「玉枝ツ——御用だ！」

男は、波越八弥であつた。

「あツ」

玉枝の体は、崖の中腹に転がつていた。獵師りようしのように、跳びかかつて行つた八弥は、よろこ欣ばしさの余り凱歌をあげて、

「ぎまを見ろツ。よくも昨日は、存分に拙者を愚弄したな！」

と、玉枝の背ぼねを踏みつけて、仮借なく、彼女の両手を後ろへ廻して縛り上げた。

「さ！ 歩けツ」

と、八弥は、昂奮した語気で、縄尻を絞った。——玉枝は、不貞腐れ気味に、

「ちツ、やかましいじやないか」

と、口惜しそうな流し眼を向け返して、

「猫が鼠を捕つたように、余り騒ぐのは大人気ないでござんしよう。ご自分様の足ですか

らね、気が向けば、歩けと言われなくなつたつて、歩くのさ」

「滅らず口をたたくな。もう貴様の悪運も尽きたのだぞ」

「ヘン……よくお分りでございますこと」

「大津口まで出れば、問屋場からすぐに軍鶏籠に乘せてやる。さ、歩け歩け」

「山の中だからちようどよかつたよ。町中でこうされちや堪らない。……ねえ八弥さん」

「何だ」

「私もずいぶん多くの手先や同心にも尾けられたけれど、お前みたいなの、執ツこい、根気のいい人間は、見たことがないねえ。恐れ入つたよ」

「さすがの妖婦も、天命を知つたと見えるな。いつの世にでも、悪運の永く続いた例はないのだ。獄門になったら、次の世には、善人に生れ代つて来い」

「ご親切さま……」

と、玉枝はうすら笑いを泛かべながら、白い糸切歯で、唇を噛んで――

「けれど、私は死んだつて、悪事は止められない性分なのさ。悪事を働くくらい、面白いことはないからネ」

「毒婦だな、貴様は。――その美しい容貌きりようを持って生れながら何という情けない心だろう。薊あざみの花だ。茨ばらの花だ」

「何とでも仰つしやいましてサ」

八弥はこの女に、何らの同情も湧かなかつた。それだけに、気が楽である。びしびしと引き摺り上げて、崖の中腹から元の道へ登つた。

――そして、縄尻をつかんで、叡山道の峰を辿りながら、ぼつぼつと訊ね出した。

「玉枝」

「……………」

「オイ玉枝」

「うるさい人だね。私に何か訊くことがあるならば、その辺で、水でも飲ませて、少し休ませてくれないければ駄目だよ。息が喘れて、返辞なんか、できやしない」

「そうか、じゃ少し休ませてやる。そこへ腰をかける。——その代りに拙者の問に答えるのだ」

「オヤ、もうお白洲かい」

「貴様は、江戸表から小筥を持って来たな。そしてそれを、含月荘の大村郷左衛門の手へ届けたな」

「そんな事は、お前さんの方が、とうにご存じじゃないか」

「あの中には、人間の指がはいっていた」

「それも昨夜、私達が密談をしているところを、お前さんが忍び込んで、次の間からすっかり聞いて逃げたじゃないか」

「あの人間の指は、誰の指だな？」

「……………」

答える代りに、玉枝は、噤んだ唇でうすく笑った。

「おいッ」

「なんですか」

「誰の指だと訊いているんだ。言え」

「もう見当がついてるじゃありませんか」

「よし。それではべつな事を訊くが、あの亀山公の国家老大村父子おやこと其方とは、いったい、
 どのような縁故があるのか」

「……………」

「また、あの奇怪な家老は、なんの為に、莫大な金を費つかつて、其方たちを手先に、女の指
 を蒐あつめているのか」

「……………」

「これッ、なぜ言わんか」

「……………」

「言わぬな。よしッ」

八弥が、捕縄の端を鞭むちのように振り上げた時である。——玉枝の小ばしッこい眸が、何
 ものかへ向つてキラリと動いた。

その眼まなざしに釣りこまれて、八弥は、ひよいと後ろを見たが、途端に、

「あつツ！」

と、五体を捻ねじツて、仰向けに反そつた。

しいんと、氷の棒で打たれたような痛烈な感じが、眉間みけんから背骨の髓ずいを走りぬけた。と
 思うと、八弥は、ただ草の根を掴むばかりで、自分で自分の体をどうすることも出来なくなっていた。

ひとやきがま
 人焼竈

「わははは。一撃ひとしうちだ」

倒れた八弥の上へ、檜かしの六角棒を抛ほうり捨てて、ひとりの逞しい侍が、こう大声で笑った。
 「オイ、みんな出て来い！」

手をあげると、四方の笹むらや、木蔭や、岩の蔭から――

「何だ、もう済んだのか」

「少し呆ツ気ないぞ」

含月荘の武士どもであった。山いでたちに、革かわ襷だすきを締めこんだのが、十四、五人ば

かり、わらわらと飛び出してそこに集った。

不意に、八弥を昏倒させた侍は、

「この通りだ」

と、得意げに地上を指さして、

「ご家老は？」

と、見廻した。

「先に、主水様とご一緒に、如意ヶ岳にょい たけの作兵衛の小屋へ行つて、お待ちうけになっているはずだ」

「そうか。じゃすぐに其奴そいつを引ッ担かついで行け」

「心得た」

首を持つ、足を担かつぐ、腰を支える。

八弥の体は、人間の波の上に浮き上がった。彼は、宙に足を振つて、何か叫んだが、すぐに、昏々こんこんと仮死してしまつた。

「——それッ、急げ」

と、真つ黒に、そのまま走り出そうとすると、玉枝の笑い声が後ろでひびいた。

「もし、私を忘れちゃ酷いでしょう」

「あ、玉枝どのを」

「そうだ、縄を解いてやれ」

彼女は、麻痺れた両つの腕を空へ伸ばした。

「上手くいったね。——同心なんていう者は、俐巧そうで、案外馬鹿なものさ。ゆうべ、

こつちの密談を偷み聞きして、とうとう捕まえ損ねたから、きょうは、わざと私が囷にな

つて、この叡山道の奥まで釣りこんだとは知らないで、人のことを、悪運が尽きたの、

何だのと、いい気になって講釈を言うから、肚の虫が可笑しがって困りましたよ」

「でも、少しは酷い眼に会ったでしようが」

「何、これで胸が清々しました。——けれど、どうしてこの同心を、すぐこの場で殺さず

に、作兵衛小屋とかへ持って行くのですか」

「そこが、ご家老一流の、細心なところなので」

「じゃ、死骸の始末をするためにですか」

「左様。死骸をこの辺に埋めておいて、万一、強雨の後などに、土中から洗い出されると、

ここは叡山道で人通りもあることゆえ、世上へ洩れる惧れがある」

「なるほどネ」

「江戸の上役人が、含月荘の領内で、殺されていたと分ったひには、こいつ、大破綻になりますからな。——そこで、如意ヶ岳にいといの作兵衛小屋へ持つて行って、炭焼竈すみやきがまの中で焼いてしまおうというお考えなので」

「それなら、衣類も大小も、みんな灰になってしまふから、世間に分るはずはない」

郷左衛門の細智さいちに感服しながら、玉枝も、一同の後に尾ついて、そこから細い山道づたいに、谷一つあひた彼方の如意ヶ岳へはいつて行った。

山の主ぬしといわれる炭焼の作兵衛はそこに住んでいた。

作兵衛はもう六十近い老人だが、腰も曲がらず病というものを知らない。櫓薪ならまきで組んだようなほったて小屋に住んで、三つの竈かまで焼く炭は、すべて含月荘の台所へ納まることになっている。

そこへ、今し方、ぶらりとはいつて来たのは、大村郷左衛門と主水もんどの父子おやこで、

「作兵衛。——作兵衛はおるか」

と、小屋を覗いて、声をかけた。

「おう、これやご家老の息子様だの。また、鳥撃ちかね」

と、竈場かまばの前から真つ黒な顔をして、のそのそと立って来た作兵衛は、
 「あつ、これやぶつたまげた、ご家老様まで一緒にござったね。こんな山小屋へ、何しに
 来たんだね」

「作兵衛、お前に少し頼みたいことがあつて、それでわざわざ父上まで一緒にお越しな
 されたのだ。これは少ないが、手土産てみやげの代りだ、取つておけ」

「ほ。……おらに、この金をくれるのかね」

「見たことがあるか、それは、小判というものだ」

作兵衛は、膠にべもない顔をして、

「こんな物は要らねえだよ」

「なぜ」

「おらには、もつと欲しいものがあるだがなあ……」

「何なりと望んでみるがいい」

「去年の夏ごろだ、おらの伴せがれの唾野郎が、大津まで買物に行ったきり山へ帰けえつて来ねえで
 がす。何しろ、あの伴めは、唾で聾ろうで、ぼんやり者。もしや、河にでも墜はまつたのじゃねえ
 か、人に斬られたのじゃあるまいかと、そればかりが苦に病まれて、この頃は、仕事にも

張合いが出ない。——何もいらねえでがすから、どうか、倅の唾野郎が、一日も早く山へ帰けえつて来るように、探しておくんなさい」

主水は、父の郷左衛門と眼を見合せて、ちよつと苦笑を洩らしたが、無智な者を欺だますよ
うに、軽つぽく頷いて、

「よしよし、案じることはない、唾の岩松は、今にきつとお前の手に返してやる」

「えつ、返してやる？　じやおめえ様方が、隠したのじゃねえのかい」

「ば、ばかなことを申せ。あんな、薄野呂うすのろな唾聾を隠したって何になるか」

「それやそうだ……」と、作兵衛はがっかりした顔で、

「ところで、おめえ方の頼みというのは、何だね」

「きようは竈かまに火を入れる日か」

「あ。今、三番竈に火を入れる支度をしているところだ」

「それや好都合だった。ほかじやないが、そちの炭焼竈がまで、人間の体を一箇ひとつ、こんがりと
焼いて貰いたいのだが……」

きようえんじく
狂炎地獄

「えつ、人間を焼いてくれつて」

純朴そのものに出來上がっている作兵衛老爺おやじは、眼をまろくして驚いた。

「嫌か」

主水もんどは、彼を睨みつけて、刀の柄つかに手を乗せながら、

「嫌と申すか」

「い、いえ、嫌とは、言わねえでがすよ」

「そうだろう、常々のご恩顧を忘れて、嫌だなどと言えばただはおかん」

郷左衛門は、小屋の横から谷道を見下ろして、

「主水もんど、やって来たぞ」

「おお成程、引つ担いで参りましたな」

「作兵衛、火入れを用意しておけ」

そこへ、南の同心波越八弥を肩にのせた大勢の武士たちが、そろそろと登つて来た。

玉枝は、郷左衛門父子おやこの姿を見ると、ニツコリと駈け寄つて、

「ご家老様、首尾よく、ゆうべの曲者くせものを、罨わなにかけて参りました」

と、言った。

郷左衛門は、武士たちへ頤あごをしやくツて、

「すぐに、裏の竈場かまばへ運んで行け」

「はっ」

と、山いでたちの武士の群は、八弥を引つ担いだまま小屋の裏へ廻つて、

「老爺おやじ、どの竈へ抛り込むのだ」

と、訊ねた。

そこには、真つ黒に煤いぶつた三つの炭焼竈が、毛むしをむしられた巨獣あのような粗あらい肌はだをして、火口ひぐちを並べていた。

作兵衛は、気のない顔をして、

「きよう火入れをするのは、三番竈だよ」

「こつちの端か」

「へい」

「どれ……」

と、一人の武士が火口から中を覗き込んで、

「ム、いかにも、櫛の炭材がいつぱい詰め込んであるわ」

「それでは、すぐに抛り込め」

「よいしょ！」

と、肩から下ろした八弥の体は、たちまち、真つ黒な竈の胎内へ、薪を押し込むように、無理無態に、詰め込まれてしまった。

ほんと、土蓋をして、粘土の目塗りをした上に、僅かな火口だけを開けておいた。

郷左衛門は、玉枝や主水と並んで、一同のうしろでその様子を眺めていたが、まず、これではよかつたというように頷いて――

「作兵衛、すぐに火を入れい」

と命じた。

「まだちツとべい、早うがすよ」

「火入れにも時刻があるのか」

「へい。未の刻ひつじこくに火入れをして、暁方あけがたの六刻むつに、竈開かまあけをすることに、何十年もの間極まきつているんです。小屋のめえに砂時計があるだから、それを見ておくんなさい」

「未の刻か。では、もう半刻はんときほどだな」

「その間に、茶でも入れますべえ」

作兵衛は小屋の中から藁わら筵むしろを出して、見晴らしの佳いい場所に、それを敷いた。

「これや絶景だ、酒が欲しいな」

と、主水は口をすべにらしたが、父の顔いろをおそえ懼れるように、

「いや渋茶でもいい。おい、一同、ここへ参つて休息せい。ご苦労だったな」

玉枝はうしろを向いて、乱れた髪をす梳いたり、腰紐を締め直したりしていたが、やがて、
容かたちを改めて、

「それではご家老様、これで安心いたしましたから、こんどはほんとうに出立いたします」
と、挨拶をし直した。

郷左衛門はふり向いて、

「まあもう少し休んで参つてはどうだ。ついでのことに、竈へ火がはいるのを見届けてから出立するがいい」

「そうですね、人間の蒸焼きを見るのは初めてですから、それじゃ、見物してから立ちましようか」

「そうせい。……これこれ、誰かその砂時計を睨んでおれ。——まだか」

「もう暫時せんじでございます」

そして、時が経つ——

耳を澄ますと、四山の樹々には、さまざまな小禽ことりの群むれが万華まんげの春に歌っている。空は深し碧ひに拭ぬぐわれて、虹色の陽が熔とろけそうに燦かがやいていた。誰か、この平和な春の陽の下から、程なく、人間を焼く惨さんぎやく虐やくな煙が立ち昇ると思う者があるだろうか。

やがて——

「ご家老、ちょうど末ひつしの刻こくです」

と、砂時計のそばに立っていた武士がさげんだ。

「む！」

と、郷左衛門はつよく頷いて、

「作兵衛はいかがでした」

「竈かまの前につぐなन्दでおります」

「そうか」

と、再びぞろぞろと裏へ来て見ると、炭焼の作兵衛は、その跽音にも気づかず、三番竈の目塗りをしきりに弄いじっている様子なので、

「こらっ、何をする？」

一人の武士が呶鳴りつけると、作兵衛は、びっくりしたように振り向いて、

「何をするかつて、見たら分るだろう。目塗りを繕つくろっているのでねえか」

と、不平そうに、反抗した。

「目塗りは最前に充分いたした筈ではないか」

「中のやつが暴れくさったで、この通り、破われが来てしまったのじゃ」

「げッ、それでは、息を吹ふッ甦かえしたのか」

「そうらしいぞ。竈かまの肌へ、耳をつけて見さッしゃい、中で、呻うめいているだから」

「ウーム……何かそんな物音がするようだ」

「どれ、どれ」

好奇心な眼をした武士たちは、代る代るに、竈の肌や火口へ耳を寄せ合った。

なるほど、作兵衛のいう通り、中では烈しい物音が暴れている。異様な呻うめき声こゑが洩れる。

「さ、退どいた退いた。愚図愚図しておると、この竈を壊されてしまうわい」

と、作兵衛は、忌いま々ましそうに、手を振って、侍たちを、退けた。

郷左衛門は、叱咤しったした。

「老爺おやし！ 早くせい！ 火を入れるツ」

「合点でがす」

枯枝の先に檻ぼろを付けて、どつぷりと油を浸ひたし、それを、火口から幾つも抛りこんで、ぱつと、燐木つげきの焰ほのおを投げこんだ。

ぱちツ、ぱちツ、ぱちツ……とたちまち焰は竈の胎内を真つ赤にした。

一同は、生唾なまつばをのむ。

さすがに、幾ら悪人でも、余りいい気持はしないのであろう、郷左衛門も顔を硬直させて、じつと、鋭い眼をすえていた。

ごうツと、竈は巨大な焰の心臓を膨ふくらませて、火口から強く風を吸いこんだ。

見るまに、粘土質の竈肌かまはだは、赤土のように熱し出して、武士たちは、煙に咽むせた。

「わあ、堪らん」

「臭い！ 人間臭い」

作兵衛も、面おもてをそむけた。

何たで堪たまろう！ 波越八弥は、今や狂炎の真ツただ中におかれた一本の薪と等しく燃えているのであろう。

その爪も、その髪の毛も。

聞える！ 聞える！ ああ聞える！

異様な苦鳴が竈の中から劈いて聞えた。

——人間最大の断末苦である。生きながら心臓を焼かるる者の狂炎乱舞だ。

「わははは。わははは」

と、主水は突然、手をたたいて笑いながら、父の袖を引っ張った。

「父上、父上、屈んでごらんなさい。見えます、見えます、竈の中で、江戸の同心めが、

のた打っている有様が！」

胸さきに、生唾を痞えさせていた武士たちも、その凶に乗って、いちどきに、わツと

凱歌をあげて引揚げた。

ああ、若き名捕手、情熱的な南の同心、波越八弥もかくて遂に死んだか。折角、臥

薪嘗胆して、含月荘の怪殿に入りこみ、女の指を蒐める奇怪な国家老のあることを見

届け、さらに、怪女性玉枝の仮面までを剥ぎかけて、さしもの難事件に一縷の光明を見た

と欣んだのも束の間であった。

それを、江戸に報じる違もなく、空しく、狂炎の鬼となつたとすれば、彼の胸のうちは、

そもどんなだつたらうか。

彼の捕術の恩師、江漢老先生。

彼の刎頸の友たる同じ南の同心加山耀藏。

その人々は、その夜、どんな夢も見なかったであらうか。夢、夢、せめて夢にでも通え

！

彼の無念極まるこの最期を、彼の味方に告げるものは、夢よりほかには頼みがない。

鈴慕の曲

江戸の笛師殺し、江の島の巫女殺し、指切りの殺人魔と目されて、遂に、江之島神社の境内で召捕られた埴次郎は、何故か、すぐに江戸表へは護送されなかった。

島役所の納屋蔵は、さしずめ、彼の仮吟味所となつた。埴次郎は毎日毎夜、東儀与力と羅門塔十郎のふたりが交代になつての調べに、拷問され続けていたのである。

四日——五日——七日と——

相手は、交代して休息するが、埴次郎は少しも寝かされなかった。夢、うつつである…

…そして割竹の苛責、折れ弓の拷問。

皮肉はやぶれ、精神はもうろうとなつてしまった。

「しめた！ 自首したぞ」

明け方から根気よく、納屋蔵に籠つて責めていた東儀与力は、口書を引つ掴んで、羅門のいる役室へ飛び出して来た。

「なに、自首したと」

と、羅門も緊張して乗り出した。

「ム。ずいぶん強情な奴だが、とうとう笛師のお雪を殺害したのも、巫女殺しも、自分の所業だからはやく死罪にしてくれと泥を吐きおつた」

「それは貴公の大手柄だった。——して、何の恨みでそんなに人命を害めたのか」

「何しろ、怖ろしく疲労しておるので、一遍に細かいことまでは訊きとれないが、他人の頼みをうけて殺したと申しておる」

「金のためかな？」

「そうらしい。何でも、江戸表の方の調べと総合してみると、花世の父、富武五百之進には非常な借財があるらしい」

「ほう、それは初耳ですな」

「彼は御書院番頭ばんがしらを勤めておったが、その部下のうちで、ある者が、公金を費い込んだことがあった。その時に、部下の者を助命したために、非常な工面をしてその公金を償つたのが、いまだに残っていると申すことじゃ」

「ははあ、それで婚儀の費用にも窮し、また、養生所の創業にも金が必要なので、江漢老人だけには内密で、富武五百之進、花世、郁次郎の三人で、悪意を起したものとみえますな。なにしろ、一日ごとに事件の迷雾が晴れて、こんな欣ばしいことではない」

「昨日、お奉行の榊原主計頭さかきばらかずえのかみ様からもご来状があつて、このたびのご尽力には、心から感謝している文面でござつた。もう何事も尊公そんこうにおまかせすると、信じきつておられるようじゃ」

「いや、かほどの功を、左様に誇称こしょうされては面目がありません。郁次郎から自白の口くちが書をとつた上は、すぐに、江戸表へさし立てましょう」

「やつかいな下吟味がすんで、なんだか、肩の重荷が半分以上も下りた気がいたす。それではすぐに、用意を申しつけましょう」

その準備は早かつた。

いつでもというように、部下の者は、七日も前から待ち構えていたので。

わずかな間に、げつそりと衰えた塙郁次郎は、やがて、軍鶏籠とうまるかごの人となった。警固は、二十人余りの捕手とりて。

羅門塔十郎と東儀与力が先頭に立った。加山耀蔵ようぞうは駕わきに付く。そして、江の島の渡舟わたしから腰越街道の方へ渡つてゆくと、もう海辺も路みち傍はたも人で埋まって、

「指切りの郁次郎だ」

「江の島の巫女みこ殺しだ」

と、たいへんな騒ぎである。

中には、

「憎い奴だ」

と、軍鶏籠を目がけて、石を抛りつける者がある。唾つばを吐いて、罵ののる者がある。

「ばか者ツ」

と、そんな時、加山耀蔵は思わず腹の底から呶鳴りつけた。——恩師の息子を縛からげて警固すくしてゆく彼の心には、人知れぬ悩みがあった。道中も、快おう々おうとして勝すぐれない顔いろ。

その晩は、保土ヶ谷泊り。

神奈川の陣屋に着く予定だったが、ちょうど、国元へ帰る備前岡山侯が滞泊たいはくしているので、わざと、囚人めしゆうど駕かこを避けて、一つ手前の保土ヶ谷に泊ったのである。

保土ヶ谷には、本陣めいた大きな旅籠はたごはなかった。青砥屋あおとやという商人宿の泊り客を残らず他へ移して、

「今夜は、ほかの合あいきやく客は一切まかりならんぞ」

と、いう言い渡しで、総勢二十四、五名、そろそろと、草鞋わらじを解いた。

軍鶏籠としまるかごは、籠のまま、炬部屋ろべやの次の煤すすけた板敷の隅へ担かぎ上げられた。無論、郁次郎は食い物も寝るのもそのまま、闕しきい際ぎわには、寝ずの番が三名、夜どおし眼を光らしている。

宵のうち、宿場の通りを、細い尺八の音が、流れて行った。

籠の中に、瀕死の病人のように、昏々うめと呻うめいていた郁次郎は、その音を聞くと、針で神経を突かれたように顔を上げたが、すぐにまた、ぐったりと首を垂れて、

「人違いか……」

と、眩くらいた。

更ふける。——深々とその夜は更けて行く。

たった一つ、消し残された行燈あんどんの燈芯皿とうしんざらにも丁字ちようじが霞かすんで、軒のばの夜露よるうが、雨だれのように淋しく夜を刻んでいる。

屋の棟も三寸下がる——という時刻である。

郁次郎の軍鶏籠ぐんけいろうの置かれてあるすぐうしろの窓の外で、何者か、しめやかに歌口をしめして、尺八を吹く者があるではないか。

鈴慕れいぼの曲きよく。夫つまを恋めしかう女鹿めしかの想れんいを憐れん々と竹枝ちくしのほそい孔あなから聞くような鈴慕れいぼの哀譜あひこであつた。

「あつ、花世！……」

ギシリツと、軍鶏籠ぐんけいろうが少しようごいた。

郁次郎は、くわツと、血走つた眼をして駕の穴から外を見廻した。三人の男は、寝ずの番の名にそむいて、ぐつたり柱はしらに倚よりかかつて居眠いねむっている。

「ああ、花世だ。……あの鈴慕れいぼの曲きよくの節廻ふしまわしは、たしかに、花世に違ちがいない。小さい時から、あれは、尺八が好きだった。五百之進殿いほひのしんも好きだった。そして、いつのまにか、二人して、習うともなく吹き覚えたのが、あの鈴慕れいぼの曲きよく一つ……」

彼はもがいた。

体の自由は利かないので、眼ばかりがいららとうごく。いらいらと、眼が悶える。

「花世だ……ええ会いたい！ ……ひと目でいい！ たった、ひと目でも」

——その時、裏口から、そつと抜け出して行つた者がある。それも、懊々として眠らずにいた南の同心加山躍蔵であつた。

脱走同心

「はてな？ この深夜に」

耀蔵は、寝衣を解かなかつた。

不思議な尺八の音に、磬音を偷んで、そつと表の方へ廻つて見ると、閉め切つてある

窓の外に、尺八を持つて、じつと、俯向いている細腰の——白い人影。

かしらには天蓋、身には、袈裟掛絡。

「オヤ、虚無僧だな」

四、五間ほど離れた天水桶の蔭に、耀蔵は、じつと屈み込んだまま、様子を見ていた。

とも知らずに、虚無僧は、やがて尺八を袋に納めて、しばらく、屋内の空気に耳を澄ま

していたが、

「もし……」

と、軽く、爪の先で、その戸をたたいてみる。

「……………」

静かである。——丑満うしみつの星明り。

屋内からは微かな人の寝息が洩れるばかりだった。すると突然、虚無僧は、天蓋の顔に両手を当てて、さめざめと、泣き出した。

（ふしぎだ、いよいよおかしな奴だ、死罪になる囚めしゆうど人へ曲を手向たむけている奇特な虚無僧かと思つたが、あの様子では、何か郁次郎に縁の深い人間に違いない）

彼は、まさかその虚無僧が、花世の化身けしんとは夢にも気づかない。——先の視線すきの隙を狙つては、じりじりと、十手を密ひそめて、這はい進んでいた。

虚無僧は、涙をふいて、何かはツと気をとりに直したように、四辺あたりを見廻した。そして、窓の雨戸へ懐劍さきの尖を差し入れた。

すつ、すつ、と短い刃やいばの先に木屑きくずが白く舞った。見ているまに、手を入れて、錠を外すぐらいな隙があいた。

耀蔵は、思わず、あつと口走った。——振り向いた天蓋は、そこに、彼の姿を見て、ほとんど、滅^{めっしんてき}心的な悲しい表情を投げた。

「ああ、もう少しだったのに！」

こう、口惜^{くや}しげに叫ぶがはいか、風のように、走り出したのである。

「待てッ、曲者^{くせもの}」

四、五丁跳んでゆくと、青木川の岸に出た。耀蔵は、追いつくや否、虚無僧のうしろから組みついて、

「御用ッ」

と、叫んだが、何か怖ろしいものにも触^{さわ}ったように、手を竦^{すく}めて、

「やつ、あなたは」

と、相手の天蓋の人を見直した。

「——頼みます！ 見遁^{みのが}して」

「その声は、花世どのだな」

「情けじゃ」

跳び退^のきながら、天蓋の人影は、彼に向つて、白い双^{ふた}つの手を合せた。

そして、青木川の土橋を、白鷺しろさぎのように、ばらばらと渡って行くのを見送りながら、「ウーム……」

と、耀蔵は空しく見送っていたのである。

だが！

彼はふと、いつか同僚の波越八弥に言ったことばを思い泛うかべた。

法ほうじょう 繩じょう は公明に！ 十手は正大に！ およそ社会の清浄と幸福のために、征悪の兵士となつて働く捕手は、いかなる場合にも、いかなる相手にも、それが悪である以上は、断じて、仮借かしゃくをしてはならない。私情にとらわれてはならない！

——と声を大にして、友を叱つたあの言葉を。

「おお、逃がしてはならぬ」

耀蔵は、吾れと吾が心を叱咤して、すぐに、花世を追いかけて行つたが、もう、彼女の行方は分らなかつた。

灰白い光が、行く手にひろがつていた。それは神奈川宿じゆくの海だった。

「おう、夜が明けた」

彼は、花世が逃げてほつとした心と、その心を非とする慚愧ざんきとに責められながら、街道

の松の根に腰を下ろした。

もう、ぼつぼつ旅人が通る。

どうせの事に、軍鶏籠とうまるかごがここまで来るのを待ち合せていようと、そのまま、明け放れてゆく海うなづら面を眺めていると、彼方あなたの並木から、朝の春風爽やかに、馬の鈴が鳴って来る。

煙草の火——耀蔵はさつきから、火のない煙管きせるを持っていた。それが、近づいて来るのを待ちかまえて、

「馬子まご」

と、呼びとめた。

馬の背には、早立ちの女客が乗っていた。

「——火を貸してくれぬか」

「おやすいことで」

だが耀蔵の眼は、その途端に、あらぬ方へ奪とられていた。馬の背にある旅の女が、ちらと、冠かぶり手拭てぬぐいの下から涼しい眼で彼を見下ろしたせつなに、

「あつ」

と、煙管を足もとへ落した。

「おのれ！ 花世ッ」

女も、はッと何かに搏たれたように、

「何をするのさ」

掴みかかった耀蔵の手を、菅笠すげがさで振り払って、ぱつと、馬を躍らした。

不意を食らって、手綱を離れた馬子まごを尻目にかけてながら、女は、元の東海道の方へ、まっしぐらに引り返して行く。

「花世！ 花世！ たしかにゆうべの花世に違いない。——だが、ゆうべは虚無僧、今朝は女の旅姿、それに、声も少しちがっていたが」

馬蹄のほこりを浴びながら、韋駄天いだてんと追ってゆく加山耀蔵。

彼もまた、波越八弥と同じような疑問にぶつかった。——二人の花世？ ゆうべの花世？ 今朝の花世？

それとも、すべてが同一人なのかと。

必死になって、十町あまり追いかけた。しかし、先は馬、こっちは徒歩かちである。殊に女の手綱があざやかなので遂に見失ってしまった。

「加山！」

どんと、肩を支えられて、

「あつ」

「どこへ参るのだ」

「これは、羅門らもんうじ氏でしたか」

息を喘あえぎながら見廻すと、ゆうべの宿、青砥屋あおとやを立つて来た東儀与力以下の人々と軍とうま鶏籠るかいとが、列をつくつて、眼の前をふさいでいた。

「ただ今、この道筋を、若い女が、馬に乗つて逃げたはずですが」

「ウ、見かけたが、それがどうしたのですか」

「怪しい女です。花世かも知れません。五、六名ほど手をお貸し下さるなら、すぐに追いついて、引つ捕えて参ります」

「待て待て」

と、羅門は逸はやり立つて立っている彼の袖をつかんで、

「貴公は、何か手功てがらあせ焦りをしているな」

「ど、どうしてですか」

「上うわずツておる。まあ落着き給え。——拙者もたしかに今の女を見かけたが、花世とまる

で別人だ。なあ、東儀殿」

「まるで違ッておる」

そう言われると、加山耀蔵も、人違いな気がして来るのだった。もし今の女が花世と別人であるとすれば、これは、こんどの事件の上に、由々しい問題でなければならぬ。

きょうまで、事件の裏を縫って、陽炎かげろうのように幾たびとなく姿を見せている女は、して見ると、花世ともいえるし、また花世ではなかったということにもなる。

(はてな……こいつは?)

と、耀蔵は、考え直した。

黙々と、警固の行列について歩いてゆく間に、彼は、埴郁次郎の軍鶏籠とうまるかごを見つめて、この時初めて、怖ろしい大難関にぶつかったのであった。

(これや変だ)

という気もちが、何か、微妙なものの暗示のように、胸をかすめたのである。そして、心しずかに、眼をふさいで数里の街道を歩いて来るうちに、

(そうだ! これは一つ)

と、密かに、ある決心を固めて、不意に、列を脱して、八ツ山口から単独に、何処かへ、

ふいと姿を晦ましてしまった。

父愛の鞭

「ああ、物憂い春だ……。わしはこの頃すこしどうかしとる」

鶉坂の江漢先生は、愛繩堂の縁に、ぼんやり腰をおろしていた。自分で呟いているとおりに、ほんとに、少しどうかしている顔いろであった。

「……どうしたぞ、何処におるぞ！ 郁次郎は。……なぜ親にそう心配をかけるのじゃ、秋から指を繰って、こうして毎日、長崎から帰るのを待ちわびている親心がわからんのかなあ」

雲に嘆く老人の白髯には、蕭々と、春も、秋めいた風がうごく。

「——途中で怪我でもしたのではないか。それとも、学友どもに誘われて、京か大坂にでも、浮かれておるのではないか。それにしても、手紙ぐらいはよこしてもいいではないか。わしもこの頃は気が弱くなった」

しみじみとした述懐である。だが、孤独な老人には、それを聞いてくれる人も側には誰

もない。

「——妙なことには、近頃はまた、この鶉坂へ、さつぱり人も訪れて来ぬ。富武親娘もどうしたのか、音沙汰なしじや。……といつて、この門から世間へ出かけるのも何となく物憂いでのう。……郁次郎！ 郁次郎！ わしは、お前さえはやく戻ってくれば幸福なんじやよ。そして、はやく花世と婚儀を挙げてふたりの姿をならべてみたい。それが、わしの今持つているたつた一つの望みなんじや」

愁然しゆうぜんとして、老先生の頬に、寂しい影がさした。子供に返つて、おいおいと、泣きたいような沈黙であつた。

すると、珍しく、この養生所の裏山の方で人の躡音あしおとがした。昨年来、まったく訪客の絶えたこの鶉坂には、よしやそれが、花盗人でも珍しい躡音だつた。

老先生は、耳ざとく、

「誰じや——」

と、愛繩堂から立ち上がった。

ばたばたばたつと、犬のように迅く走り寄つて、老先生の足元に、ペタリと額ぬかずいた人間があつた。

「おやつ、おい……お前は加山耀蔵じゃないか」

「老、老先生ツ……。お久しゅうござりました」

「なんじゃ、泣いとるのか貴様は。……ああ止してくれ、それでのうても、わしは泣きたくつてならないところだ」

「ご胸中のほど、深く、ご推察いたします。波越もてまえも、事件と同時に、一刻もはやく、お慰めに推参いたさねばならなかつたのでござりますが、いかに、師弟のあいだなればとて、老先生のご子息を、縄目にかける役目に立って、おめおめと、顔を拝すことも心苦しく……」

「これ。これ。……な、なんだつて、ちよつと待て」

「今日までご不音ぶいんの罪、どうぞ、おゆるし下さいまし、この、この通りでござりまする。どうぞ、憎い奴と、お叱り下さいませう」

「おい待てというのに。……何じやと、今聞けば、わしの倅せがれをどうしたと？」

「郁次郎様のあのお始末、こうして、老先生のお顔を見ると、涙ばかりが……涙ばかりが先に立って、この胸が、張り裂けるようにござります」

「はて、分らんぞ。倅の始末とは」

「あ、あの……」

「何のこツた。はつきり申せ」

「指切りの郁次郎と、世上の評判も、もうお耳には入っていることと存じますが」

「こ、これツ加山、指切りの郁次郎とは、それや一体、なんのこツちや」

「ではまだ、何事も、老先生にはご存じないので」

「この鶉坂から一步も出ぬわしじや。なにか、郁次郎の身に變事があつたのか」

「あつたのかどころではござりませぬ。女笛師のお雪を殺したのも、江の島の巫女殺しも、みな、郁次郎殿の所業しわざと睨まれ、ご本人もまた、それに相違ないと自白をなされて、昨日、

江戸表へ差し立てと同時に、南町奉行所の仮牢へ入じゅうろう牢らうなされました」

「げッ」

老先生は、喉のどを破るほど絶叫して、

「ほ、ほんとか？ それほ」

と、驚愕にふるえて、倒れそうになった。

耀蔵は、その顔いろが、死者のように蒼ざめたのを見て、

「老先生、お危のうござります。どうぞ、お気をたしかにして下さい。お気を、お気を」

「ウウム、だ、だい丈夫だ加山」

「先生ッ」

加山は、老師のふところへ、涙の顔を埋めこんで、わなわなと肩をふるわせた。

「加山、加山」

「は、はい」

「今のことばは、ほんとう真実か」

加山は、老先生の心臓が、あばら肋骨のやぶれるほどふく膨れているのを感じた。怒濤のように吠えている血潮の音を聞いた。

「なんで偽りを申しましょう。思えば、今日まで拙者を初めすべての人々は、ただ、老先生のこのお悲しみが見たくないために、えせ似而非同情の心で、お訪ねもせず、お耳にも入れずに、過ぎて来たのでござります」

「では、俵は、もうとうに、江戸表へ帰っていたのか」

「はい、昨年の名月の晩——あの女笛師の死骸が見出されたその晩には、もうこの江戸表に潜伏しておられたのでござります」

「待て待てッ」

と、老先生は激越な声で、

「そちまでが、伴の郁次郎を下手人というのか」

「四面の事情、すべての証拠、一として、郁次郎殿を明るくするものはござりませぬ」

「ええ、馬鹿を言えツ、馬鹿を言えツ。わしの子だぞ！ 塙江漢はなわの生んだ子だぞ」

「ご尤もです！ 誰あろう当代の名与力、塙老先生のご子息とは、私ごとき者まで、胆にこたえて、悶もだえてはおりましたが、すべての推移は、郁次郎殿を極悪人ごくあくにんに決めてしまいました。……で、そのご最期まで見るには忍びないので、とうとう、無断就役むだんしゅうやくちゆう 中から脱走して、すべてのご報告だけに参りました」

「遅いッ、遅いッ、その真心があるならば、なぜもう少し早く聞かせてくれなかったのだ。して富武五百之進殿は、この大變事をご存知なのか」

「このの発覚と同時に、自刃して、割腹なされました」

「えっ、割腹した」

「のみならず、ご息女の花世どのも、今では、きびしい追捕ついぶに追われて、お屋敷にもおりませぬ」

「ああ知らなかった！」

老先生は、地だんだを踏んで――

「それでは、いくら待てど暮せど、来ないはずだ、音沙汰のないはずだ。――ええこうしてはおられぬ。加山！ 案内をせい」

「ど、どちらへですか」

「わしの伴のいる所じゃ！ 南町奉行所の仮牢じゃ。わしが参つて、奉行のかずえのかみ主計頭、与力の東儀三郎兵衛、それに羅門塔十郎の三名をならべて説破せつぱいたすから、其方そのほうも立ち合え」

「手前は、無断脱走いたしたので、奉行所には参れません」

「かまわんツ」

と、老先生の声はいよいよ激しかった。耳は、炎のように赤く、唇は壮者のように燃えていた。

「かまわん！ 罪もない人の子を、極悪人と誤るような上役に従ついておることはない。わしの蔭に添つて付いて来い」

「しかし、或いはもう今頃は、郁次郎殿をひき出して、刑けいとう刀の鑄さびとしてしまったかも分りませぬ」

「そんなはずはない！ そんな理屈はない」

「でも、吟味はすべて、江の島の方で済まし、自白の口書まで取った上に護送したのでございませうから」

「その遣り口からして言語道断。たとえ、俵の自白があろうとも、あれは、わしが血をわけた子だ！ あれの五体に盛つてある血は、父たるこの江漢が誰よりもよく知っているのだ！ さ、一刻も、こうしてはおられん、加山、町へ出て、馬をさがせ」

ひらりつと、愛繩堂の中へ駈けこんだ老先生は、若者のごとく、袴の股立をからげ、鞭を啜えて、そこから走りだした。

わが子よ！ 待て！

父は今行くぞ。——側へ、行ツてやるぞ。

おまえの血は父の血だ。わしはおまえに兇悪な血を頒けたとは信じない。

もし！ わしがおまえにそんな悪の血を生みつけたとすれば、この父も、獄門の根に坐つて、わが子の罪に殉じて舌を嚙む。それが、社会へ対して、当然なるわしの申し訳だ。

だが、おまえはわしの子だ！ わしは、わしを信じる如くおまえの正義を信じるよ！

待て！ 父は今行くぞ。

胸に叫び、心に誓って、鶉坂うずらざかをいッさんに、狂者のごとく駈けて出た江漢老先生。加山耀蔵が、車町の問屋場といやばから曳き出した裸馬の背へ、ひらりつとどび乗るがはやいか、

「——郁次郎よ、郁次郎よ」

と、わが子の名を呼びつづけながら、夕雲の赤い巷ちまたへ向けて、雄々しくも涙ぐましい、父性愛の鞭をつよく、高く、振り上げて行つた——。

ぶぎようしよだいげきろん
奉行所大激論

ひらりと、老先生は馬の背から跳び下りた。馬は鼻腔をひらいて、肌には汗をかいていた。手綱を、奉行所の駒止めに繋ぐとすぐに、老先生は、つかつかと門にかかつて、

「——鶉坂の塙江漢はなわ、火急、奉行に面談があつて罷り越した。門番、門番！ ここをたのむ」

と、息を喘せいて、激しく叩いた。

今しがた門限の六刻むつが鳴つて、役所の中には、疲れた暮色が沈みかけていた。嵐がぶつかつて来たようなその物音に、革袴かわばかまの番士は、びっくりしたように飛び出して、

「どなたでござるか」

と、訊き返した。

「埜江漢じゃ。はやくたのむ」

「えっ、鶉坂の先生ですか」

「そうだ、早くせい、一刻を争うのじゃ」

「しばらく」

と、言い捨てて、番士は、あわてて奥へ駆けこんで行った。

ちようど、役宅の一間ひとまでは、奉行の榊原主計頭さかきぼらかずえのかみ、与力の東儀三郎兵衛、そして、

羅門塔十郎の三名が、額ひたいをよせて、何事か擬議ぎようぎしているところだった。

門衛の知らせを聞いて、

「なに、江漢老人が来たと？」

意外そうに、顔を見あわせて、どうしたものであろうというように、三名は、ちよつと、当惑に曇つた眼をして、黙りこんだ。

「さては、郁次郎が召捕られたと聞いて、最後の別れを告げに来たものと見えまする」

と、東儀与力はそう言つて――

「お奉行、会わせては事面倒ですぞ。ていよく、追ひ払った方が、上策ではござるまいか」
「いや」

と、冠かぶりを振ったのは、羅門塔十郎であった。

「江漢先生といえは、ほかならぬ人物です。隠退はしても、この南町奉行所にとっては、過去の功労者、そうはなりません。武士の情けとしても、この際は、是非、会わせてやるのが当然でしょう」

「いかにも、言われるとおりだ。番士、老人をおもてしよ表書院へ通しておけ」

主計頭かづえのかみはそう言つて、なお、何か打合せをすました上、ふたりを連れて、書院へ出た。

江漢老人は、肩の骨を尖とがらせて、そこに坐つていた。顔は、石の如く硬こわばつて、眼は、爛々と燃え上がつている。

その、ただならぬ気色けしきに、三人は、はつとした。

「老人、珍しいのう」

主計頭が言うと、江漢は、その真つ四角に坐つた膝を、きつと、向け直して、
「火急、談じ申したいことがあつて」

と、厳しく、改まつた。

その眼！ その語気！ 既に火のようである。

「ほ、談じたいことは」

「俣郁次郎の儀について」

「では、この度のことはもうお聞き及びであるな」

「承った」

と、息を嚙む。

「なんとも、お察しする。悪事をする子ほど可愛いとは、俗にもいうことば、さだめし、ご愁心であろう。しかし、もう今日と相成つては、如何とも、いたし難い。お諦めが肝要であろう」

老人の面は、見るまに、朱を注いだ。その灼きつくような眸は、憤ろしい涙にうるんでいる。

「あいや、奉行のおことばではあるが、俣郁次郎は、決して、左様な極悪人ではない。子を見ること、親に如かずじや。この親たる江漢が断じて言う、断じて言う！ 郁次郎を罪人というお眼識は違っている」

「親子の情愛、そう思われるのは無理もないが、すでに、動かし難い幾多の証拠が蒐

まっている」

「証拠？ その、証拠とは？」

「いちいち、ここで述べ立てるよりは、これを一見した方が早かろう」

主計頭が、調書をそれへさし出すと、老人は、顫わななく手に取り上げて、それを、最初の第一項から、血走ツた眼で読み始めた。

読み終ると、老人は憮然としながら、白い顎あごの髯ひげをいらいらと指に捲いて考え込んだ。

「どうじゃ、老人」

「ウウム……」

「それで、確しかと、得心がついたであろうが」

「いや！」

と、烈しい眼を上げると、老人は、さつと、白髯はくぜんを横に振って、

「まだ分らん！ まだ分らん！」

「なぜ？」

と、主計頭がだいぶ激した。

「この調書のうちに、しばしば認したためてある、覆面の浪人とは、何者のことか」

「それが即ち、おてまえの息子、郁次郎のことじゃ」

「事実、その覆面を剥いで見られた場合がござるか」

主計頭はグツと詰った。

「また！」

と、老人は調書を叩いて、

「女笛師の死骸、江の島の巫女みこの死体、そのいずれも、左の手の指が切り取られてあるようじゃが、この下手人が、何のために、死骸の指を切りとるのか、その調べが一向についておらん。奉行はそのことについて、何ぞ、明白ぎんみに吟味をお遂げなされたか」

「さ……それは」

「まだある！」

老人は、敵の陣へ迫る猛将のように、膝をひらいた。

「この事件の発した当夜、即ち、十五夜の晩以来、各 方が、いわゆる郁次郎の化身けしんと目されておる覆面の男と、例の唾男とは、明らかに、連絡のあることに相成っておるが、その唾男と、郁次郎とを、対決させておられたかどうじゃ」

「あ……」

と、主計頭も、自分の手ぬかりに、思わず弱い音を洩らした。

「どうじゃ、奉行殿」

と、老人の舌鋒ぜつぽうは、銘刀のように鋭かった。

「さ……実は、その点もまだ……」

「はて、怪しからん！ 左様な点も充分に確かめずに、ただ、罪悪を作るため、ただ、下手人を作るための調書が、何の役に相立あいたとうか。かようなものは、反古ほご同然」

と、調書を抛り投げて、

「これを見ても、郁次郎の冤罪えんざいなることは明白じゃ。あれはわしの子だ！ 塙江漢の子だ！ そんな極悪人であろうはずがない！」

と、俯仰ふきよう天地に恥じないように、大きな声で、呶鳴った。

すると、老人の態度を、じつと、冷智な眼でながめていた羅門が、

「老先生」

——と、少し、膝をすすめた。

「なんじゃ！」

「では、お上の調書はすべて信じられぬ、作り物であると、仰せられますか」

「おまえ何じや？」

「はっ」

と、羅門は、老人の威圧に押されて、

「お忘れでござりまするか、以前、どこかで、お目にかかっておりますが」

「ウム」

と、老人は思い出したように、

「^{かみがた}上方の羅門——殿だったな」

「そうです」

「これや、しばらくじやった」

「いつも、お健やかで」

と、^{いんぎん}慇懃に、会釈をし直すと、

「長命のわづらいじや」

と、老人は^{さんたん}嗟嘆した。

上方の名捕手羅門塔十郎と、江戸の大先輩^{はなわ}塙江漢とは、ここに初めて、この事件を介したの初対面を交わしたのであった。両雄の眼光、双方の立場、自然と、穏やかでないもの

がある。

父情ふじょうやみの闇

「羅門」

と、老人はすぐに開き直って、

「——今、わしが言ったことばに、何ぞ、異論があるようじやが……」

「いかにも、大いにござります」

「何、大いにあると」

「さればです！」

と、羅門も容かたちを正して、真つすぐに、胸を張った。

「調書について、三つのご反説、いちいちご尤もにはござりますが、まず第一に、覆面の男が郁次郎なりや否やのお疑いは、ご無用にござります。何となれば、それは、自分をはじめ、同心の加山、波越らも、しばしば目撃しておるところで」

「待たれい。——覆面なれば、顔容かおかたちもよく分らぬはず。殊に、それはすべて夜陰ではない

か」

「のみならずです！」

「ウム」

と、老人はあらい息を抑えて、羅門を見つめた。

「先頃、平賀源内の博物会があった折、老先生のお知恵を拝借して、女笛師お雪の蠟人形を出陳しゅっちんいたしましたところが、その前に佇たたずんで、人知れず涙を拭いていた浪人がございました」

「それが、郁次郎であつたと申すか」

「いかにも」

「それがどうして、覆面の男であるという証拠になるか」

「一時の痴情で、お雪を、殺害せつがいしたものの、後になって、悔いの涙を流したものと推察いたします。唾男の申し立てもその通りです」

「さて、浅慮せんりよ千万な。いかに、彼がうつけ者でも、自分で殺害した女の死人形を見て、何で、涙を流そうか。犯罪人の心理とは、決して、そうしたものではない」

「然るに、天運の尽くるところか、その折、郁次郎の懐中物を狙っていた掏兎すりがあつたの

です。捕えてみると、別府べつぷの新七という道中稼すぎ、掏すった紙入れには、郁次郎が長崎表から江戸へ送金した為替札かわせふだと、また、女笛師のお雪と、取り交わした恋文などが、中に秘かくされてあつたではござりませぬか」

「えつ、あの、殺された女笛師と、郁次郎との恋文があつたと」

「何か、よほど、複雑な仲だつたとみえまする」

「ウーム……そうか」

と、老先生の唇かすが微かにふるえた。

「して、掏児すりの新七は」

「入牢じゆうろうさせてあります」

「この儀は、江漢が、後になつて、闡明せんめいいたそう。しばらく、宿題としておいてもらいたい」

「次に、第二のご質疑——。なぜ、下手人が死者の指を切取るか、その目的が、吟味の上うへに明白でないという仰せですが、これは、犯人が捜査の目を晦くらます奸手段かんにすぎません。

——と、お奉行も認められて、深く糺たださぬまでのことです」

「見解の相違じゃ、くどく申せば水掛論、ぜひもない」

「第三のおことば、唾男と郁次郎を、なぜ対決させぬかという点は、近頃、ちとご難題かと存じます。何となれば、一方は、唾で聾、文字も読めぬまったくの明盲、何をもって、白洲の対決がなりましようか、よろしく、ご賢察をねがいます」

羅門の弁舌は水のながれるように爽やかだった。さすがの江漢老人も、なるほど、この男は頭がいいと、心の裡で舌を巻かずにはいられなかった。

が、老先生は、その時初めて、うすい苦笑にがわらいを唇にながして、

「なるほど、唾で聾、しかも無筆では、どうにも吟味のいたしようがあるまい。これはわしも失念であった。——だが、最前おてまえは、郁次郎が覆面の男と同一人であるということ、自身の推量のみならず、唾男の申し立てもそうであったと言われたな」

「あ……」

と、羅門の眉間みけんに針が立った。

「貴公、どうして、その唾男にものを言わせたのか」

「い、いや、あれは失言です。——失言でした」

「お間違いか」

「ことばの弾みはず、お聞き流しをねがいたい」

「してみると、どっちにしても、ちよいちよい吟味の手落ちがある。今宵、江漢が押して推参いたしたのは、敢えて、わが子可愛いのみではない。私情のみではござらん」

と、つよく言つて、主計頭かすえのかみの方へ、

「司法の明鏡に、曇りがあつては、ご聖代の汚辱じゃ。万一、わが子が真まことの罪人ならば、六十年の生涯を、司法の庁に生きてきたこの江漢は、わが子と共に、舌を噛んで、同じ獄ごく土くどに死ぬべしじゃ。頭こっぺを、わが子の獄門台にぶち割つて、不徳の罪を、天下の親に、謝さねばならんのじゃ。お奉行！ お奉行！ 一目、郁次郎に会わせてくれんか。父たるこの江漢が、自ら、彼を打つて、最後の吟味をいたしてみたい……」

「おお、それはよかろう」

と、主計頭も、老先生の真心にうごかされたように、

「東儀とうぎ、牢あいかぎの合鍵あいかぎを持つて、先に」

と、眼くばせをした。そして、老先生を従つれて立ち上がった。

郁次郎は奉行所内の遙か奥に隔やぶらうつてゐる藪やぶ牢らうにはいつていた。そこにある嚴重ひとむな一棟ねは、明和めいわの大獄以来使つたことのない番外牢であつた。

そこには、明和の大獄の折に、屍かばねを積んだ国士たちの血のにおいが、いまもまだ陰々と

漂ただよっているかのような闇があつた。四辺あたりは、樹木につつまれている。時々、高い梢の上で、ほう、ほう、と梟ふくろの啼く声がある……。

真つ暗な床の上に、乾ほし鰈がれいのように、俯ぶツ伏ぶしていた郁次郎は、悪夢からさめたように、ふと、頭だけをもたげた。

「？ ……」

青白い顔、尖とがつた頬骨、そして、やや狂に見える眸ひとみのうごき。

ああ。この変り果てた姿を、老先生が一目見たらどんなだろうか。

「……………」

がくりと、彼はまた、頭こしうべを垂れた。

深々と、井戸の底にでも墜ちてゆくような眠りが、疲れた神経をすぐに昏睡させた。と
 いてもそれはほんとの眠りではない。

「おや？」

彼はまた、窪んだ眼を、剃かみそり刀のように、キラキラさせて、

「…………誰だ、誰だ」

と、枯木みたいな体を這わせて、牢格子すがに縋すがつた。

すると――

外の星明りに、ふわりと、白い顔がうごいた。忍びやかに、樹蔭をぬけ出して、自分の方へ近づいて来るのである。

「あつ……花世！」

彼が、思わずそう叫ぶと、近づいて来た女の影は、かえって、驚いたように飛び退さがって――

「あつ、違ちがった」

と、木立の暗がりへ走りこんでしまった。

「花世、花世」

郁次郎は狂わしげに、その、腕を、肩を、牢格子へぶつけて、もがいた。肩の肉がやぶれて、獄衣に、血がにじみ出すのも知らずに、及びもない力を、獄壁へぶつけた。

「ええ、どうして逃げるんだ。――人違いじゃない、おれは、郁次郎だ。おれを、救いに来てくれたのではないのか」

彼は、冷たい床ゆかの上へ、仰向けに倒れて、輾てん転ともがき廻まわった。――保土ヶ谷しゅくの宿しゆくで聞えた尺八の鈴慕れいぼの譜ふが耳みみのなかに甦よみがえってくる。

ああ、それもこれも、気のせいかも知れない。会いたい会いたいと思う一念が幻を描くのかも知れない。

もう、有明けの燈芯とうしんざら皿ざらほども、精気のない彼の肉体は、すぐに、綿のようにつかれてしまった。なんの気力さえないように、ぐったりと、動かなくなつた。

ただ、涙だけが、その青い頬を止めどなく流れていた。

がちやりと、錠じょうを外はずす音がした。

同時に、黄いろい提ちようちん灯ちんの明りが、牢格子の間からさして、

「老先生、こちらでございます」

と、先に、案内をして来た羅門塔十郎の声が出た。奉行の主計頭かすえのかみ、東儀与力の影も、そこに映さした。

「おう」

老先生は、開かれた牢内へ、よろぼいながら駆けこんで、

「郁次郎！ 郁次郎！」

と、呼び立てた。

「——郁次郎はどこにおる」

「えっ」

むっくりと、起き上がった我が子！ 我が子の影。

「おう！」

と、老先生は、とびつくように近づいて、ひしと彼の腕を、握りしめた。

「これ！ せがれ 倅！」

「あつ？」

「倅」

「……………」

「倅……………」

郁次郎は、思いがけない父の姿を見て、白痴みたいに、ただ茫然とした。夢ではないかと、疑った。梟ふくろのような眼を見ひらいたまま、ぼうと、しばらくは、言うべき言葉を忘れていたのだった。

老先生は、握りしめた我が子の手をつよく揺りうごかして、

「わしじゃ！ 父じゃ」

「おう……………おう……………」

「来たぞ、おまえの父は来たぞ」

老先生は、滂沱ぼうたとあふれ出る涙を抑えて、

「もういい、もういい！ おまえの冤罪むじつは、きつと、この父が雪そそいでやる。気をしつかりせい、心をつよく持て」

「ち、父上……」

郁次郎は、いきなり抱きついて、わつと、泣いてしまった。生れながらの幼い者のように、声をあげて、オイオイと泣いた。老先生もまた泣きながら抱きしめた。

首斬くびきり手桶ておけ

羅門塔十郎らもんとうじゆうろうは、胸が迫つて、見ていられないように、懐紙かいしを出して、涙なみだを拭ぬぐいながら、

「——失礼いたします」

と、老先生のそばへ、提灯をおいて、牢の外へ、しばらく避けていた。

何という痛ましい邂逅かいこうだろう。奉行も、東儀も、さすがに、父子おやこの情熱に涙をゆたぶ

られて、羅門と同じように、貰い泣きを隠していた。

老先生は、はっと、気がついたように、睫毛まつげの露を払って、

「これ、郁次郎。そちはなぜ、長崎表から帰って来たら、すぐに、この父の許もとへ来なかつたのじゃ。それが第一に、こんどの災禍わざわいを招く因もとになつたのだ……」

「お年を召されている父上に、大きなお嘆きをかけました。ふ、不孝の罪！ ……どうか許して下さいまし」

「何ごとも災難だ。わしは、おまえ一人の愛によって生きている。長崎へ勉強にやったのもその為だ。養生所ようじょうしょを建てたのもそのためだ。そして、おまえの花嫁になる人と、首をのばして、待つていたのだよ！」

「あ、ありがとうございます。父上、郁次郎の不孝の罪、重ね重ねおゆるし下さいませ。その酬むくいは、やがて、獄門の上に乗って、世の不孝者の見せしめとなりまする」

「な、なにをいうか。おまえを見殺しにするくらいなら、父は、こんな苦勞はせぬ。わしはおまえの潔白を知っている。おまえは決して、大それた、悪事などは働たごきはしまい」

「ああ、もう、もう、取り返しがつきませぬ……」

「それを、おまえはまた、なんで心にもない自白をしたのだ。女笛師や巫女みこを殺したのは、

自分の所為しよゐに相違ないなどと、なぜ、そんな飛んでもない偽にせ自白を申し立てたのじゃ。…あれは皆、おまえのしたことではあるまい。な！ 郁次郎

「父上ツ……」

「む。……言え。明らかに、その冤罪むじつなることをここで言ってくれ」

「駄目です！ やつぱり、私が殺したに相違ないんです」

「な、なんだと！」

老先生は、脳心を、打ちのめされたように蹠よろめいて、

「これッ、そちは、狂気いたしたか。長崎で立派に医術の修業を習得して、江戸には、新築の養生所や、やさしい花嫁や、この父や、人間のあらゆる幸福が待っておるのに、それを捨てて、益もない、悪事に走るはずはない。何かの誤解だろう、さ、この誤解を解け、ほんとのことを言ってくれ」

「父上、もう、おたずね下さいまするな。不孝の子を、獄門へ、送って下さい」

「馬鹿ツ、馬鹿。貴様はどうしてそんなばか者になったのだ。今、ほんとの事を言わなければ、後になって、いくら父の名を呼んでも及ばないぞ」

「もう……覚悟をいたしております」

「ええ、親の心子知らず、わしは気が狂いそうだ。まったく、自分の所為だと申すのか」
 「すべて、羅門殿と東儀殿へ、申し上げたとおりでございます」

「あ、あ……」

と、老先生は、頭をかかえて、よろよると、獄壁へ倒れかかった。絶望的な大きな息が、その肋骨に波を打った。

「おからだに触るとよろしくない。老先生、ご子息も、ああ言つて、固く覚悟をしているものを、この上、おことばが過ぎるのは、かえつて、最期を苦しませるようなものではござらぬか」

東儀与力にそう言われて、老先生も、悲しげにうなずいた。

「取りみだして、面目ない。……がこの上には、親として、もう一つ、最後の手段を講じてみたい。それは例の唾男と、郁次郎の紙入れを掏った別府の新七という掏児をここへ呼んで、対決させてみたいと思うのじゃ。何と、ゆるして下さらんか」

「でも、唾男は、あの不具者でござるが」

「江漢が多年の経験による一つの吟味法をもって、きつと、唾にも口を開かせてみせる」
 「では、あれは、偽唾なので」

「いや、偽唾ではあるまいが、その本体を、調べ上げて見せるといふのじゃ。兩名をすぐここにへお曳ひき下さい」

かすえのかみ
主計頭は、それをも許した。

だが——二人を曳き出すべく、彼方あなたの棟割牢むねわりろうの方へ走って行った東儀与力は、すぐに、顔いろを変えてそこへ戻って来るなり、

「お奉行！　また奇怪なことが持ち上がりましたぞ」
と、呶鳴った。

「何事じゃ。奇怪なとは」

「破牢いたしました」

「だ、だれが？」

「唾すりも、掏すり見も」

「や！」

と、そばにいた羅門は、袋の水が洩れたように驚いて、

「して、いつの間に」

「たった今らしい。——拙者がゆくまで、見廻りの六尺さえ、まだ気づかずにおったくら

いだ」

「ちえツ、ぬかった」

——と、羅門が地だんだをふんで走り出そうとすると、

「あいや、待たツしやい」

と、老先生も牢の外へ出て、彼を、こう呼び止めた。

「——今、駈け出しても、及びますまい。二人の破牢には、外部から、誰か、手を貸した
ものがある」

「どうして、そのご推察がつかますか」

「掏兎と唾とが、同じ時刻に、牢を破つたというのが何よりの証拠、外部の者でなくて、
誰か、その連絡をとろうか」

「ウム、成程」

「のみならず、ここにわしは、新しい大疑問を見出した。信念をつかんだ。下手人は飽く
まで郁次郎でないことを信じる。八幡^{まんしょうらん}照覧、下手人はほかにある！」

「老先生、この期^ごになって、まだそんなおことばは、ちと、ご過信がすぎましよう」

「過信とはなんだ。——よく思念を澄ましてみるのがいい。郁次郎が真^{まこと}の悪人どもの謀主な

らば、唾や掏兎すりなどという小さな手先を破牢させるまえに、まっ先に、謀主たる彼をここから救い出す工夫をするのがあたりまえではないか。それをせぬのは、悪人どもと郁次郎とは、まったく、深い縁のない証拠だ」

「証拠証拠と仰せられるが、すでに、あの通り、本人が自白しているのが、何よりの証拠ではありますまいか」

「では、羅門——」

と、老先生は、一步迫つて、

「其そのもと許も、やはり、東儀と同じく、あくまで伴郁次郎せがれを、罪人と断定なさるおひとりじやな」

「いかにも！」

と、羅門はつよく言い切つた。

「情に於いては忍びぬものがありますが、是非もないことです。明らかに申します。笛師殺し、巫女みこ殺しの謀主は、塙郁次郎に相違ないと断言する」

「ウーム、面白い」

老先生は、締めつけられて腸はらわたの底から、肩をゆすつて、無理に笑つた。

「面白い。——貴公とわしとは、江戸流と上方流との、見解の相違じや。これから、幾日の間と、日限を切つて、その間に、どつちがはやく悪人どもを一縛ひとからげにするか、命を賭して、競ツてもよい」

そう言つて、壮者わかもののように、眼をかがやかせる老先生を、これも、愛子いとしごを救いたい一念に、常の落着いた隠者の態度をとりみだしておられるのか——と羅門は気の毒そうに眺めて、

「折角ですが、老先生。もはや事件はあまりに片づいております。もう、そんな時刻ときはありません」

「なに、時刻ときがないとは」

「されば、今夜ももうだいぶ更けました。実をいうと、郁次郎の生命いのちも、この、星の光が滅めつするまでです。——夜明けと共に、この藪牢やぶらうの前で、断罪になることになっています。すでに、御老中のご印可が、きようの午ひるすぎには下りていたのですが、武士の情けに、一晩だけ延ばしてあるわけなので……」

「えっ！　じゃあ何というか、あの、もう御老中たちの、印可まで、下りているのか」

「ごらんなさーい」

羅門は指さした。

「——あの樹蔭には、あしたの朝の荒むしろ、水みず桶おけ、柄ひしやく杓くわ、血穴を掘るくわの道具まで、運んで来てあるのです」

「罪だ！ 罪だ！ 何のうらみがあつて、それを、一晚、牢内から見せておくのだ」

「先生——老先生——お気をたしかにしてください。気を、落着けてください」
「離せッ、わしは、こうしてはおられない」

羅門の支える手を、突き飛ばすように払つて、彼は、ふらふらと走りだした。

「星よ。星よ」

老先生の白い髻ひげに、深夜の風が、冷ひえ々ひえとながれた。わが子を奪う冥途よみの扉とから洩れて来るような風である。

「——明けるな、明けるな、朝になるな。星よ、もういちど、わしが郁次郎の所へ帰つて来るまで、その光を失つてくれるな」

蹠そつろ跟ととして、彼の影は、奉行所の外へ歩き出していた。月があれば、その細い影は、骨ばかりにも見えたであろう。

「どうする？ どうする？」

老先生は、よろよろと地を踏みながら、突然、自分の頭を、コツコツと、拳でたたき始めた。

「だが、夜明けまで。——時刻ときはない。——何をなにする間まもない。ああ、いかなる鬼神でも、その間に、どうして、真の下手人が捕えられよう」

ぼろぼろと、涙が飛ぶ。

拳が、頭をたたく。——足が大地を蹴る。

どう見ても、狂者である。あわれや、塙江漢も、とうとう、気が狂ったのではないかと思われた。

くる
狂う 老先生

「あつ、老先生だ」

と、加山耀蔵ようぞうは、あわてて、塙へいぎわ際の闇から、立ち上がった。

老先生の懸合かけあいの結果を案じつつ、宵からの長時間を、奉行所の門外にかがみ込んで、じつと、待ちぬいていた耀蔵であった。

——と今。

力のない、人影が、その門を、ふらふらと、出て来たと思うと、自分には声もかけず、魂のぬけ殻みたいに、蹠蹠そうろうとして、歩み去って行くので、彼は、オヤ？ と怪訝いぶかりながら闇を透すかして、

「——老先生、老先生。どうなさいました」

と、手をあげて、駈け出したのであった。

だが、塙江漢はなわは、忘れていた。

一緒に伴ともなって来た彼のこと。いや、すべての現実も。いやいや、自分の身をすらも。

彼の魂に今あるものは、きよしの夜明けと同時に、無残な刑刀の錆さびとなる運命にある一子郁次郎のことばかりだった。鬼となつても、我が子を、冤罪むじつの獄舎ごくやから助け出さなければならぬという、燃えるが如き父性愛以外に、何もものもなかった。

「ああ、朝までに、朝までに」

彼は、狂わしく、拳こぶしを振って行く。

「郁次郎、郁次郎」

と、遠心的な、叫びを投げたり、うるんだ眼をして、訴えるように、星を見たり……。

そして、その足すらも、大地につかぬように、暗い河岸を、かわぎし 的もなくひよろひよると、あて 彷徨い出した。

「もしツ、老先生」

追いおすが 絶すが った耀蔵に、その片袖をつかまれて、江漢は初めて、余りにも取りみだした自分の態度に、はつとして、われに返った。耀蔵の顔を、じつと、異様に光る眸ひとみ の中にいれた。

「おうつ、加山か」

「如何いかに なさいました、奉行所でのお話の結果は。——もしや、ご気分でもどうかかなされたのではありませぬか」

「わしの、顔色は、そんなにも悪いか」

「真つ蒼です。恐い、仮面めん のようです」

「ああ……ああ……」

と、江漢は、さめざめと泣くように、そう言われた自分の顔を両手で掩おお って——「面目ない！ わしは恥かしい！ 法ほうじょう 繩じょう を司る公人として三十年、江戸与力の先輩といわれ、めでたく、公職を完まっ ちして、去年の秋、名月の夜には、その隠退祝いかねて、世間の人々から、捕縄供養までして貰った身であるのに、その塙江漢が、今宵こよひ という今宵ばかりは、

闇夜の鳥も同様、眼も見えねば、心も見えぬ。——ああ耀蔵、この闇は、わしに智力のない闇か、子ゆえの、煩惱ほんのうの闇か。……手を取ってくれ、手を引いてくれ、わしの足もとは、真つ暗だ。わしは迷う！ わしは迷う！

「もしツ。しつかりなすつて下さい」

耀蔵は、彼の手をかたくつかんだ。老人の指先は、死人のように冷たかった。

その冷たさが、耀蔵の熱い手にはつと感じられた。——もしや？ ああもしや、老先生は発狂したのではあるまいかと、彼は、声がわなないた。

「どうなすつたんです！ 郁次郎殿は、どういうことになりましたか」

「郁次郎？」

「私とても、案じられて堪りません。老先生の申し分が届いて、ご子息の黒こくびやく白やくが立てばよいがと、祈っておりますが、はつきりと、談判のご様子を承らぬうちは、胸さわぎがしずまりませぬ」

「ウーム、そ、それだよ」

と、老人は、あらい息を吐いて、

「わしは、敗北したよ。見事に、羅門塔十郎のために、言い負かされてしまったんじゃ」

「えっ、では、老先生の明智と熱とをもって、ご子息の冤罪^{むじつ}を主張なされても、やはり、郁次郎殿は、罪人ときまったのでございませうか」

「形のうえでは、わしが言い敗れた^{やぶ}。真^{まこと}の罪人の出ぬうちは、倅の罪は拭われぬ。たれが仕組んだ仕事か、悪人ながら、よくもああまで巧みに、人に罪を着せたものじゃ」

「して、老先生には、獄中の郁次郎殿と、ご対面はなさらなかったのでもございませうか」
「会った……」

老人は、ほろりとして言う。

「会って来たよ。——見違えるばかりに窺^{やっ}れた倅の姿を、あの藪^{やぶ}牢^{ろう}の中で見たとたん、わしはいっぺんに、十年も年を老^とった気がした」

「その節、ご子息には、何と仰せられましたか」

「倅も倅だ、逆上しておる、あいつは、幼少の時から、気が小さい、それに、柔順だ。——だから、もう運命に負けきつて、笛師殺しも、巫女^{みこ}殺しも、みな自分が犯したことに相違ないと、言うておる」

「えっ、それでは何ですか、あの、お父上たるあなたに向って、郁次郎殿は、そう言うておりますか」

「いくら、わしが励ましても、彼はもう、死ばかりを望んでいる。……親の心子知らずにもほどがある。父は子の冤罪えんざいを救おうとしているのに、子は、根もない自白をして、死にたがっているんじゃないや。ば、ばかなやつじゃ……ばかなやつじゃ……」

と、老先生は、やり場のない愛熱と、やり場のない憤ろいきどおしさとを、暗涙のなかに光らした。

「……そうですか」

耀蔵も、それを聞いて、がつくりと首をうなだれた。父たる人が、面責めんせきしてさえ、当の本人が、犯罪を自白しているという以上は、もう、奉行所の吟味を疑う方が間違っている。事件は、これ以上、明白たることを必要とはしないのである。

——だのに、老先生は、本人の自白まで否認して、飽くまで、ほかに犯人があるような口吻くちぶりだ。かほどな人物でも、やはり、肉親の愛にからまると、こうまで煩惱ぼんのうになるものか。それとも、心のうちでは、郁次郎の犯行を認めてはいても、面目なさに、どこまでつじつまの合わない我説がせつを言いとおしているのかも知れない。

耀蔵は、老先生が、たまらなくあわれになった。何か一言ひとこと、今の苦しげな彼を慰めることはないかと、頭のなかでもだえたが、かほどな大不幸に対して、その気持によする気

持を言いあらわす適当なことばはあり得なかつた。

「……ご心中、お察しいたしまする」

わずかに、そう言うのと、

「加山！ 朝までだ」

と、老先生は、突拍子とつぴょうしもない声で、だしぬけにさげんだ。

「——夜が白むと同時に、郁次郎は、藪牢のまえで刑刀の錆さびになるんじや。朝までだ、朝までだ」

「ああ、それまでの、お命でござりまするか」

「死なしてたまるか。わしは、殺さん」

「——と、仰つしやつても」

「まだ時刻ときはある。夜明けまでは、間がある」

「でも、今鳴つたのは、もう石こくちよう町の九ツ（十二時）です。老先生、ちようど、きょうとあしたの境、今が、真夜なかでございます」

「……ああ、そうか」

老人は、熱した頭を、時間の觀念にさまされたように、力なく、声を落した。

「いくら、わしが、捕物の名人でも、半夜のうちに、この難事件は片づかん。……だが、
加山」

「は……」

「およそ……」

と、彼の態度は、俄に、ぴたりと落着いた。ふいに、耀蔵は、厳肅な気に衝たれて、その顔を仰いだが、老先生の眸は、眼の隅に片寄つて、あらぬ方を、じつと見ているようだった。

「おや？」

と、耀蔵も、思わず、その方へ首を曲げかけたが、老人は、それを、あわてて遮るよう
に、

「加山、聞いておるか」

と、腕くびを、つかんで、振った。

「は。聞いております」

「いつも、鶉坂の講義の席で、いうたとおりに。いかなる難事件にぶつかろうが、
捕吏たるものは、事件に吞まれて、自分を失つてはならん。自ら、だめと、匙をなげたら、

おしまいだ。最後の一瞬まで、斃たおれる土俵つばぎわまで、全能全力で、活路をさがす。——それが同心の精神だ。与力の魂だ。いわんや、江漢は、その子たるものの命を、救うか否かのどたん場じゃ。わしはやる！ 最後までやる！」

耀蔵の眼の睫毛まつげは、涙をささえきれなかった。ああお気の毒なことである。やはり、老先生はすこし気がおかしい。そのいうことがどうも妙だ。ふいに、捕物学の講義をはじめたり、前には、嘆息に暮れていたと思うと、こんどは、敢かん然ぜんと、最後までやるという。

第一、やるとは、何をやるという意味なのか？

耀蔵には、それすら、疑われた。

と思うと——老人はまた、急に、ことばの調子まで悲しげに、

「やる！ やる！ 四、五年前の江漢ならば、きつとやる！ だが、わしは、愛繩堂あいじようどうの捕縄とりなわ供養くようの時に、もう生涯、十手はとらんと、誓ってしまった。世を捨て、十手を捨てた人間。……それに、あまりに、時間がない。名人でも鬼神でも、夜の明け方までに、何で、真まことの犯人を捕えることができるものか。わしは、平常、後輩の者に教えた自説じせつに対しても面目まへないが、諦あきらめた。同時に、これが、わしの生涯の終結じゃ。……加山、わしは死ぬ。なんの面目まへあつて、のめのめと、生きていられるものか。おまえも、共に死んでく

れい。意気地のない、老先輩を師と仰いだのが、身の不運と申うて、共に、死んでくれい。……よ。加山」

耀蔵は、考えてもいなかつたことをふいに言い出されて、はつと、恥しい怯みに衝たれたが、枯木のよこぼくうな老人の腕は、彼の帯ぎわをずるとつかんで、河岸の柳の樹の下に、共倒れに、よろめいて行つた。

「加山！ 死んでくれい……」

老先生は、もう、右の手に、短い前差まえざしを抜いていた。

わなよ
毘に寄る美獣

人間の心理は複雑だ。死ぬまぎわまで、複雑だ。

老先生が、はやくから言いたかつたのは、その死だったのである。だが、死を決行するまえにも、彼は、父として、わが子を、真の犯人であるとは言いたくないのであろう。

耀蔵は、そう察した。

同時に、彼も、死を考えた。

自分も、無断で、公役の途中から脱走してしまった体だ。のめのめと、今さら、奉行所へは帰れない。

また、この不幸な老先輩の死を見ずてるのも忍びないが、生きていよとは、なおさらすすめ難い。当然、老先生は死ぬべき人である。

(殉じよう。師の大不幸に殉じるのも、ふかい因縁だ、運命だ)

彼は逃げなかった。

江漢の手は、もう、耀蔵の胸元をつかんで、右手の刃を、向けていた。

じいっと、眼をふさいで、耀蔵の心支度を待っていた。耀蔵も、黙然と、刃をぬいて、師の襟もとをつかんだ。

「……死んでくれるか」

「お供をいたします……」

「おう」

江漢は、にいつと、笑った。——白髯を払って、喉を示しながら、

「刺せ」

と、言った。

「ごいつしよに」

「む」

と、江漢の刃は、耀蔵の喉のそばを、ひやりと、とおりぬけた。はつと、思う途端に、真つ正直に突いて行つた耀蔵の刃の切ツ尖きさきは、江漢老人の喉ぶえに、ぐざつと、突きとおつたかと思つた。

だが——老人は、その切ツ尖を、ついと、交わしてしまつたのである。そして驚く耀蔵の耳へ口をよせながら、ううーむ……と作り声をあげて、彼のからだに絡からみながら、諸もろだ倒おれに、俯うぶツ伏ぶして首を垂れた。

「ううむツ……うーむ……」

と、ふた声、三声。

そして、その影が、さも、苦しげに、しばらくの間、けいれんしていた。

すると、やや間まを措おいてから、四辺あたりの深夜の空気が、どことなく、うごいた。そうかと
言つて、べつに、何の物音もしたわけではない。

ただ、五、六間先の、柳の樹の蔭から、白い女の手が、路向うの軒先へ向つて、しきりと、手招きをしているのが、ちらと、見えた。

と——その天水桶の見える軒下から、ひとりの、男のすがたが、のっそりと、歩いて来た。暗やみから牛を曳き出したという形容は、この男のためにできていと言つてもいい。肩の肉の厚い、顔のまろい、足の太い、ずんぐりとした田舎漢だ。

同時に、柳の蔭から、それにあわせて、忍び足で、そろり、そろり、と前へすすみだした女は、夜目にも鮮らかな、美人だった。顔は、頭巾につつんでいるが、螢のような眸が、その蔭から、怖ろしい微細な注意力をもつて、刺しちがえて倒れているふたりの影を見まもっている。

死を粧つて、大地の下から、そつと、薄目でそれを見ていた加山耀蔵は、思わず、あつと、声を出しそうになつた。

花世だ。いや、花世とそつくりな女。——いつぞや、郁次郎を江の島から護送して来る途中、捕まえ損ねた怪美人だ。

しかし、それよりも、もつと彼を驚かしたのは、路向うから、怪美人の手招きにつれて、のそのそと、側へ寄つて来た田舎漢だ。——それは、奉行所の牢内にいるはずのあの唾聲ではあるまいか。

われを忘れて、彼が、ぴくツと、起ち上がろうとすると、同じように、死んだまねをし

ている老先生の手が、胸の下で、ぐいと、抑えた。

（ああさすがは老先生だ。捕物にかけては、まったく神だ。どうして、この二人が、あとから尾ついて来るのを知って、巧うまうま々と誘おびき寄せたのだらうか）

と、耀蔵は、ときめく胸の中で、今さら、塙江漢はなわの六感のするどさと、その鬼謀に、舌をまいていた。

怪美人の玉枝は、まさか、さつきからの老先生の狂態が、自分をひきずる操あやつりの糸だつたとは夢にも気がつかない。——彼女は、今夜、彼女たちが奉じる悪の一党の首領が、その黒幕から指令するところがあつたので、奉行所内に忍びこんで、唾男と、掏すり兎の新七とを、外部から、牢の合鍵をもつて、やすやすと、破獄させて来たのであつた。牢をまちがえて、郁次郎の藪やぶらう牢に近づいて、その姿が、花世に生き写しなために、あわれな、明日あすは斬られる獄人の彼の眼に、恋人の幻覚をえがかせた罪なわざも、まったく、この玉枝だつたのである。

「……ホ、ホ、ホ、ホ。来てごらん」

玉枝は、一間ばかり側まで、近づいて来て、唾男の臆病を嘲あざけるように眼で招いた。唾男も、やっと、安心したように、ぬすみ足で、彼女のそばへ寄ってきた。

玉枝は、地上を、指さした。唾嚙は、うなずいて、首をふりながら、下品に、クククク、と家鴨あひるが喉を鳴らすように、笑った。

「——かあいそうに、この老いぼれさんは、若い同心を道づれにして、とうとう、死んじまったんだよ。……だが、こつちにとれば、これで、大安心というものさ。ねえ、唾」

「……………」

唾嚙は、きよとんとして、彼女を見つめた。

「そんなに、人の顔をお見でないよ。おまえに、うつかり口をきくと、いつまで顔を見ているから困ってしまう。……と言ったところで、これも、分りやしないけれど」

と、苦笑しながら、河岸かしすじを振り顧かえつて——

「だが……どうしたんだろう、新七は。もうお首領かしらを連れて来そうなものだが」

と、つぶやいた。

とたんに、息をひそめて、死骸そのものように、地上に俯ツ伏していた老先生は、いきなり、猿臂えんびをのぼして、怪美人玉枝の袖をグイとつかまえた。同時に耀蔵も、唾男の片足をつかんで、ぱつと、身を起しながら、

「捕とった！」

と、拯すくいあげた。

「あつ！ ……」

と、ふたりは、雷らいに衝たれたように、絶叫した。狼狽と驚きに、色を失つてよろめいたが、玉枝は、咄嗟の手に、短やいばい刃を閃めかせて、彼につかまれた袂たもとの根を、ふつりと断きつて、逃げ出した。

「おのれッ。女めぎつね狐！」

手には、断られた片袖を。そして、夜風のなかに、腮あごの白髯はくぜんをふたつに割つて、奮然と、追いかけた老先生。

逃がしてなろうか？

顔、すがた、頭巾まで、花世に瓜うりふたつなこの怪女性こそ、あらゆる謎を解く魔術師の銀かぎの鍵だ。

今も、女は、首領かしらということばを呟つぶやいたが、そも、彼等のいう悪の一味の首領とは何者であろうか。その黒幕の首領が、ここへ見えないうちに、女を召捕つてしまわなければ、機は、ふたたび、遠く去るであろう。

老先生は必死だ。

この女さえ捕縛ほぼくすれば、急転直下な事件の解決は望み得ないまでも、ともかく、夜明けと共に、刑場の露となる愛子郁次郎の一命だけは、しばらく、先へのばすことに、有力な生証拠とすることができると！

駈けた！ 老軀ろうくをわすれて、彼は駈けた。

——だが、若い女の、柔軟性に富んだ跳躍とは、比較にならない。玉枝は、柳の樹から柳の樹を縫つて、美しい水禽みずどりのように、河に添つて、すばやく、走りつづけた。

二間——一間——三、四尺——

伸ばした腕の指さきが、魔女の、白い襟えりもとへ、触れんばかりに、幾たびも近づいては、巧みに、さつと、交わされてしまった。気は、逸はやつても、もう幾年か、職を捨てて隠退していた塙江漢、老いと若さの相違である、やむを得ない精力のちがいが、駈ければ駈けるほど、必然、出てくる。

(ちえツ、捕縄とりなわがあれば)

と、江漢は、齒がみをした。

(なぜ自分は、捕縄を捨てたろう)

とも悔いるのだった。三十年來、肌身を離れたことのない捕縄も、公職を退ひくと同時に、

生涯、二度と手にとるまいと誓つて、愛繩堂に祠まつつてある四百余体の悪像と共に、今は、塵ちりの中に古びてある。

「えいッ」

老先生は、突然、小石をひろつて、投げつけた。礫つぶては、彼女の鬢びんにあたった。

ひイツと、声をながして、鬢へ、手をやりながら、彼女の影が、よろめいたと思うと、老先生は、

「あつ、しまった」

と、さけんで、一足跳びに、踵かかとを蹴った。

どぼうん！……と真つ白な飛沫しづきが、駈け寄つた老先生の足もとから顔、胸むないたへ、びツしよりとかかった。

彼女のすがたは、瞬間に、消えてしまった。暗い水面には、いちめん、白い泡つぶが、わき立っていた。

「いかん！ これや、いかん」

老先生は、水面を見つめて、ひどく、いらいらした顔いろで、

「女狐め！ 逃げる気で飛びこんだならばよいが、のがれぬところと見限りみきをつけて、身

を投げたのだとすると、一大事だわえ」

と、呟いた。

彼の狼狽は、その点にあった。折角、召捕つても、それが死骸で揚がったのでは、郁次郎を救う有力な反証を白白させることができない。

老先生は、せわしい眼で、うしろを見まわした。

「御つり舟師、舟辰」

と、文字だけがかすかに読めて、灯の消えている軒行燈のきあんどんが、ふと、眼にとまった。

どん、どん、どん——

その戸を、あわただしく叩いて、

「これ！ これ！ 釣舟屋。ここを開けい、火急だ。火急だ」

——家のなかで、答えがあつたと思うと、老先生は、突然、その腮あぎとの白髯さかを逆しまに上げて、

「うつつ」

と、虚空こくうをつかんだ。

「な、な、なに者ツ？ ……」

よろよると、彼は、うしろ倒れになりながら、自分の喉を締めつけた強い拇^{おや}指^{ゆび}の主を、吊り上がった眸^{ひとみ}で、肩越しに睨んだ。

「……………」

うしろから、ふいに、老先生の喉を締めた男は、息をのんだまま、口をきかなかつた。そして、断^{だん}末^{まつ}苦^くにガタガタと骨をふるわしている江漢の四肢の爪から、だんだんに、その生命力が滅消してゆくのを、楽しむように、抱えていた。

「うーむ……………」

と、老先生は、ひらいた鼻腔から、最後のうめきをもらして、だらりと、敵の肩へ、仰向けに、首を寝かした。

だが、一心はおそろしい。よほど、無念だったに、ちがいない。

老先生の脈は止まったが、眼は、くわつと開^あいて、敵の顔へ、すわっていた。

ああ、彼は、生と死との、瞬間に、その相手の顔を、眸^{まゆ}に映^{うつ}したろうか？

それこそ、悪人の首領だった。去年、十五夜の晩以来、黒幕にひそんで、巧みに、部下をあやつるほかは、きょうまで、数えるほどしか、事件の表面に、すがたを現わさない、覆面の男だ。

だが——老先生の眸はもう死魚のようにどんよりとしていた。瞼まぶたの皮が、死のせつなの一念で、みひらいているだけのものであった。

黒い覆面は、にやりと、笑った。

そして、とどめの拇おやゆび指を、蝮まむしの首のように、ふかく、頸動脈けいどうみやくへ突つ込もうとした

時に、老先生のからだは、がつくりと、泥人形が折れたように、彼の手からすべり抜けた。「どなたですえ？」

——とたんに、眼の前の、釣舟屋の戸があいた。

白しらむ朝窓あさまど

夜魔よま！ 夜魔よま！

それは、蝙蝠こうもりに似ている。

するどい眼をもつて、覆面をして、黒衣くろごしに身をつつんで、そして、二本の塗鞆ぬりざやを長やかに、うしろへ、刎はね上げて飛ぶ。

ふいに、舟辰ふなたちが戸を開けたので、彼は、あつと声を発して、老先生のからだを、戸口

に抛りすてるや否、さつと、隠れた。

はや
早い！

蝙蝠こうもりの変化へんげみたいのに、身がかるい。

——一方では、同心の加山耀蔵と、あの唾男が、河岸ぶちの砂利場で、組くンず、解ほれつ、争まっていた。

唾あなどの侮あなどりがたい力量は、波越八弥と彼とが、二人がかりでも、さんざんに、三本さんほん錐ぎりで傷つけられた覚えがある。だが今夜の耀蔵は、そら死にをしている間に、充分な、準備と覚悟があつた。反対に、唾は、ふいを食らつて、だいぶ面食らっている。

鍛きたえぬかれた小具こぐそく足術じゆつの秘力は、機先を制して、のっけから唾を圧倒した。隙間を与えない鉄拳と張手はりての攻撃は、唾の、頭、頬げた、向うずね、所きらわずにいたためつけた。砂利山のうえで、ふたりは取つ組んだ。ずぶずぶと、足もとがくずれるので、すぐに、同体にころがつたと思うと、耀蔵は、すばやく、十手を口に、捕縄を解きかけた。

唾は、縄に、しがみついた。

その手を、十手で、二つ三つなぐりつけると、さすが、強頑な唾も、手を離して、逃げかけた。

「こいつめ、どこへ行く」

うしろから、こんがらかった捕縄を、そのまま、浴びせかけて、首にひっかけて、引き倒した。

唾は、二本の足を、宙に上げて、ぶっ倒れた。——得たり、と耀蔵はその胸いたへのしかかった。唾は、足業あしわざをして、二、三度、彼を蹴とばした。

三度めに、今度は、耀蔵の方が、仰向けに倒れた。ひとりと思っていた敵は、いつのまにか、二人になつていた。——いや、たちまち、三人にふえて来た。

があんと、何か頑丈な得物えもので、脳心を打ちこまれたように、耀蔵は、気が遠くなった。ごろごろと、耳の鼓膜こまくが鳴つたと思うと、彼は、それきり、意識を失つてしまった。

「あ。お頭領かしら……」

唾に加勢をしていた掬摸すりの新七は、そのまま加勢に駈けつけて来た覆面の男を見て、そう言った。

「はやく、片づけろ、そいつを」

「河へでも、蹴込んでおきやあいいでしよう」

「奉行所の近くだ。すこし、まずいな……」

「では、どうしますか」

「そこらの、小舟を攫さらって、運んじまえ」

「え、どこへ？」

「品川沖へでも持つて行って、沈みをかけてしまえば一番いい。……それに、てめえたちだって、破獄したばかりの体だから、しばらくの間、海風にでも吹かれて、ほとぼりを、さましていろ」

「なるほど、一挙両得というわけで」

「おい」

と、唾へも、顎あごを向けて、手まねで、耀蔵のからだを縛れと命じた。そのまに、新七は、舟を見つけて、先に乗る。——耀蔵のからだも、まるい物体のように縛くりつけられて、その中に、運びこまれた。

「何か、物を落してゆくなよ。血は、こぼれていやしめえな。……おう、いけねえ、こんな所に、十手が落ちていやがる。こんな物も、後のちのあしにならねえように、気をくばって、一緒に、沈めてしまえよ」

「じゃ、お首頭かしら、そのうちに」

「む」

と、覆面は、うなずきながら、出てゆく舟を見送っていたが、また、岸を追いかけて、

「忘れていた。——おうい」

「なんですか」

河のなかで、新七が答えた。

覆面は、橋を渡つて、その中ほどの欄干から、下をのぞいて、舟が、潜りぬけて来るところへ、低声で言った——

「四、五町先へ行つたら、櫓をゆるめて、玉枝を、拾い上げてやってくれ。あいつ、蟹みてえに、石垣の穴でも見つけて、寒がつているにちげえねえ」

——重くるしい寂寞。夜靄の丑満。

櫓韻は、ぎい、ぎい、とやがて遠く河下へ消えて行つた。

「や。もう七刻だ」

覆面は、ふと、耳をすました。

鐘の音が消えた空に、五位鷺が、つばさを搏つた。——深夜の感じは、刻々、明け方ぢかい空気に変ってくる。

「かわいそうに……」

彼は、反りの橋の欄干に、頬づえをのせて、つぶやいた。そこから、奉行所の建物や森が、黒く見えた。

「郁次郎の命も、あと、たった一刻だ。ここから、お念仏でも、唱えてやろうか」

だが、彼の顔に現されたのは、哀傷の表情ではなく、深悪な苦笑だった。

「どれ、俺も、明けねえうちに……」

すたすたと、彼は、歩き出した。と——橋のたもと。

鷺のように、ひとりの、うす鼠色の宗服を着た虚無僧が、柳の下に佇んでいた。

じいっと、水のながれを見つめていた。

ぎくとしたように、覆面は、足をとめた。

さっと、速い歩足が、その後ろをかすめたので、虚無僧は、くるりと、天蓋をふり向

けて、

「おや？」

と、見送った。

「気のせいかしら？ ……」

つぶやきながら、歩き出して、そしてまた、

「よく似ていらつしやる。だが、奉行所の獄中において遊ばす郁次郎様が、外をあるいて
いるはずはない」

と、自分の迷いへ、打ち消すように、言った。

虚無僧は、花世であつた。

彼女の足は、いつとはなく、奉行所の方へ、人なき夜をさえ忍びやかに、運ばれて行つた。恋人のいる獄舎ひとやの塀の外を、夢遊病者のように、めぐって歩いた。郁次郎が、ここに護送される途中から、影の形に添うように、隙をうかがっている彼女ではあつたが、救出すべ術はおろか、近づくことすらむずかしい。

だが、花世はまだ、恋人の命が、あと一刻いっとき（二時間）の明け方に、終るものとは思つていなかった。——せめて、自分が、夜ごと夜ごとに、この外にまで訪れていることだけでも、恋人の胸に、知らしたいと思うのだった。

もし、怪しまれたらとも、思うのであつたが、彼女は、どうしても、会えぬ恋人の胸に、自分の訪れを知らしたかつた。心と心とだけでも、会わせてやりたかつた。

裏は、森がふかい。塀ごしに、獄舎ごくやの塀がのぞまれる。——花世は、そこに立つて、尺

八を吹き出した。

この曲を聞けば、恋人は、必ず自分と知るであろう、あの、鈴慕れいぼの曲を。

彼女のたましいは、尺八をとおつて、七孔から空へ翔かけだした。そして、自由に、思うままに、獄舎の、牢格子のなかにさえ、やすやすとはいって、昏々こんこんと、疲れつかれふしている恋人の肩にすがつて、その、寝顔をのぞいて、

(郁いくさま、郁いくさま。……郁次郎さま)

と、すすり泣くのであった。

甘えている。

嘆なげいている。

そして、眼をさました郁次郎の心と、彼女のたましいとは、手を取り合つて、夜もすがら、語り尽きないのであった。抱擁してやまないものであった。

彼女は、何もかも忘れていた。今の辛酸しんさんも、かくまで呪のろわれた恋の不幸さも、忘れていた。——現実げんじつに恋人と会っているような陶酔とうすいのなかに尺八を吹き耽ふけっていた。

聞くや、とどくや。

獄中の郁次郎は、果たして、その音を、聞いたろうか。——ともあれ彼の生命いのちは、あと、

一刻に足らないものとなった。獄卒たちの長屋に飼われている鶏が、無残、まだ暗いのに、たかい声で、ひと声啼いた。

× × ×

「わつ、ひでえ悪戯いたずらをしやがる！ みんな、起きて来い。やい！ 眼をさませよ！」
舟辰は、土間に、腰をついて、呶鳴った。

「どうしたんです、親方」

同居している船頭たちが三、四人、とび起きて、眼をこすりながら、出て来た。

「どうもこうもあるもんか、寝耳ねみみに水みずだ。誰だか知らねえが、おそろしい勢いで、戸を叩くもんだから、びつくりして、戸をあけると、そのとたんに、人間の死骸を、人の足もとへ抛ほうりつけて、逃げてしまやあがった。——縁起えんぎでもねえ、いまましい畜生だ」

「おや、老としより人ひとじゃありませんか」

「これが、美い女おんなならば、まだ、我慢のしようもあるけれどよ」

「いくら美しい女だって、死人じや話にならねえ。しかも、お武家のようにですぜ」

「どこのご隠居だろう。知らねえか」

「見たような人ですネ……」

と、ひとりが行燈あんどんを向けかえて、

「あつ、これや大変だ。親方」

「どうした」

「その人は、今じやお役退やくびきをしたそうですが、元は、捕物の神様だといわれたくらいな名めい与力よりきですぜ。あの、あの……ええと……何と言ったツけなあ、ちよつと、思い出せねえが」

「えつ、じゃ、鶉うずら坂さかの先生か」

「あつ、そうだ、その塙はなわ江漢こうかん様なんで。——いつか、八丁堀の旦那方と一座して、中な川尻かがわじりへ、投網とあみのお供をして行つたことがあるから、たしかに、覚えています」

「そいつあ、大事おおごとだ。ど、どうしよう」

「どうしようたつて、死んでいちや、まあお上がんなさいと言うわけにもいかねえや」

「やい、やい、下らねえ軽かる口ぐちをたたいていない。はやくしろ、はやく」

「何をはやくするんで」

「何とかしろつてんだ」

「困つたなあ、そういう親方からして、まごまごしているんだもの。自身じしん番ばんへ持つて行

くんですか」

「そうじゃねえ、脈を見ろっていうんだ。そして、助かるものなら、はやく、お手当をして上げなけれや」

「脈はありませんぜ」

「ばか、そんな所に、脈があるか。はやく、槇まぎちよう町の外科の先生を呼んで来い」

ひとりが、飛び出す。

ひとりが、台所から、柄杓ひしゃくで、水を持って来る。その柄杓の水が、枕もとにこぼれて、
 嬰兒あかこが泣き出す。寝ぼうな女房が、やつと、眼をさまして、これも、寝みだれ姿で、狼狽する。

舟辰の家では、家内じゅうの騒ぎになった。そのうちに、起されて来た外科医が、あたふたと、訪れたが、その外科先生も、寝巻に刀を差していた。

——喉の骨が挫くじけたように痛んだ。

しかし、その苦痛によって、塙江漢は、医者が帰るとまもなく、はつと、意識をひらいた。

「ああ、こころは」

気が甦よみがえると、すぐに、老先生は、ぱつと、蒲団ふとんを刎はねて、立ち上がったが、窓の白い明りに、ぐらぐらとしたように、

「ちえッ、しまった！」

と、腰をついてしまった。

彼は、舟辰の二階に上げられて、静かに、寝かされていたのだった。だが！　だが！　ああ何としよう！　夜は明けてしまった。

窓は明るい。静かに、朝のいろを映うつしている。

「ウーム」

と、老先生は、ふとんの上に、どっかり、坐った。ふたつの腕をつよく拱くんで、暴風のように荒れ燥さわぐ胸を、締めつけた。

じつと、天井をにらむ。眼をふさぐ。

喉には、紫いろの痣あざが見えた。だが、そんな苦痛は、もう彼にはまったく無感覚であった。

「才才。いまこの家の前の川すじを触れて行った船頭の声は、明けの六刻むつまでに、大川筋の川番所へ、交代役人をのせて行く見廻り船だ。——してみると、まだ奉行所の牢開あけま

では、わずかな間がある」

どんな名案があるのか、老先生は、決してゆうべのように、きようそう狂躁して、取り乱してはいなかった。

やがて、むつくりと、立ち上がると、二階の窓障子を、開けひろげた。——白みかけたばかりの夜明けの風が、今や、刑場の筵むしろにのつて、刃やいばの露に散ろうとするわが子のそばから吹いて来るように、冷々ひえびえと、老先生の顔を衝うつた。

百ひやく日にちの鐘かね

幕閣ぼくかくのうちでも、奏者衆そうしやしゆうといえは、若年寄わかどしよりの次席である。小笠原左近将監おがさわらさこんしやうげん

は、その奏者衆たるうえに、寺社奉行じしやぶぎようの重職をかねていた。

上屋敷は、八重洲河岸やえすがしの川ぞいにある。禄ろくは四万石、そして、彼はまだ若かつた。時勢の新人で、俊才で、未来の老中をもつて、囁しよくもく目めされていた。

この人の習慣として、毎朝、起きぬけに百射百振しやしんをことかかなかつた。百射とは、まだきに起きて、弓を百本射る。百振とは、大剣を払つて、居合いあいの素振りを試みることである。

——そして、陽を拝し、登城の支度にかかるのが例であつた。

——今朝も、まとは的場に出て、うねめ采女というこしやう小姓を相手に、ヒュツ、ヒュツとしきりに矢うなりを切つてしていると、

「あつ、誰だ？」

と、突然、びつくりしたようにそのうねめ采女が、松の幹を見あげた。

ぷつんと、一本の矢が立つたのである。

それは、主人の左近将監が放した矢とは違っているし、また、左近将監が、まとはず的を外して、そんな所へ射るはずもない。たしかに、裏の門を越えて、塀のなかへ飛びこんで来た流れ矢にちがひなかつた。

「たれの仕業か。ふつち不埒な奴」

と、采女が、駈けだそうとすると、

「待て待て。それはやふみ矢文のようだ。これへ持て」

と、左近将監が、あなた彼方で、声をかけた。

「え、矢文？」

手をのばして、抜き取つてみると、なるほど、つまはしろ妻羽白のやばね矢羽の下に、ほそい、書状ら

しいものが、結びつけてあった。

「殿。なにか、訴文そぶんのようにござりますが」

「ははあ、さては、寛永寺の訴訟に關係のあるものが、何か、言い分を、矢文に托してこの屋敷に射込んだものとみえる。——然るべき手続きもふまずに、左様なものを取り上げでは、この後の悪例となる。よし、よし。そのまま、射返してやるから、矢を、これへ持て」

と、築山のうえに登って、そこから、手に取るように見える数寄屋川の向うの河岸かしへ手をかざした。

「はてな？ ……それらしい人間も見あたらぬが、采女、そちの眼では、どうじゃ」

「わかりました。 ……あれにあります」

「どこに」

「川向うの民家の屋根に、ひとりの老人が立って、じつと、こつちを見ております」

「見えん。どこに？」

「もすこし、私の方に寄ってごらんなされませ。あの河岸添いの釣舟屋の屋根に、ひとりの老人が立っておるではございませぬか」

「あつ。これは妙だ！」

と、左近将監は、采女の指さきへ視線を向けるとすぐに、びっくりして、こうさけんだ。

「あれは、江戸の大捕手おほとりてといわれた名与力、今では、鶉坂に隠退したはずの塙江漢にちがいない」

「や、や、殿。ごらんなきい。お屋敷の方へ向いて、拜んでおります」

「ふしぎなこともあるものだ。よもや、江漢老人、気が狂ったわけでもあるまいに、当屋敷へ矢文を射込んで、拜んでいるとは心得ぬことだ。……才何はともあれ」

と、左近将監が、にわかになそれを開いて一読してみると、まさしく、塙江漢の手蹟しゅせきである。彼が、今朝の目前に迫っている郁次郎の命を救いたい一心に、一代の熱と愛と涙とをもつて、舟辰の家の二階で、咄嗟に、書き綴った願文であつた。

「采女、馬を曳け」

「はっ」

采女うねめは、その、唐突さに、うろたえた。

しかも、主人の左近将監さこんしようげんの眼には、涙がいつぱいに溜っていた。彼は、読み下したその書状を、袂たもとに、まるめこむが早いから、采女が、急いで曳き出して来た駒にとび乗って、

通用門から、まつしぐらに、駈け出した。

——町にはまだ、朝霧があつた。

またたくうちに、彼の駒は、三宅坂の松平信明の屋敷を訪れたが、折悪しく、信明はその前夜、代々木の別業へ移つて静養中ということなので、すぐ引返して、そこからほど近い麴町の方へ馬を飛ばした。

「御老中は、お目ざめでござるか。奏者番、小笠原左近将監です。早朝なれば、お寝衣のままにても苦しゅうござりませぬ。それほどに、一刻を争うのです」

次席老中 太田備中守は、幸いに、もう書院に出て、朝の苦茗をすすっていた。
おおたびつちゆうのかみ
 面談は、五分間と、かからなかつた。

備中守から、一通の書付をとると、左近将監は、ふたたび悍馬に鞭を打つて、真一文字に、南町奉行所の正面のまえまで走つて来た。

ヒラリと、降りて、馬繫ぎの柵へ、駒の手綱を結いつけていると、物蔭から、ばらばらと駈け寄つて、彼の足もとに、ぴたりと、両手をついた老人があつた。

「おうつ、塙ではないか」

「へへへ」

と、老先生は、地上に額をすりつけてしまった。滂沱^{ぼうた}としてあふれ出る涙に、胸が迫つて、すぐに、顔も上げ得なかつた。

「老人、久しぶりじやのう。——そちが在役中には、何かと、寺社奉行の方にも助力を得たが、隠退したと聞いて、左近将監もかけながら惜しんでおつたぞ。その後、健在か」

「無^む為^いに、余生を過しておりまする」

「最前の矢文の願意は、左近将監、たしかに承知いたした。安心せい」

その一声に、老人は、張りつめていた気が弛^{ゆる}んだように、ぽろぽろと、大地に、涙をこぼして、

「あ、ありがとうございます」

と、肩で、咽^{むせ}んだ。

「事情は、書状に依つて、篤^{とく}と承知いたしたが、郁次郎の冤罪^{むじつ}なることは、たしかであるうな」

「もし、それに相違ある時は、郁次郎のみか、父たるこの江漢も、老腹^{おいばら}を搔きさばいて、天下に罪を謝す覚悟。——ただ、その冤罪^{むじつ}を訴え出る道と、時刻の猶予もなきために、お役違いとは存じながら、直訴^{じきそ}の矢文、その大罪は、何とぞおゆるしのほどを願わしゅう存

じまする」

「よし、よし」

と、左近将監は、かろく頷いて、

「したが、老人、ひどく寡やっれたのう」

「一夜のうちに、白骨になるほど心労いたしました」

「そうあろう。誰しも、わが子の愛に変わりはない。いわんや、一代の名与力、塙江漢の子が、極悪人として断罪にされては、末代までの恥辱、いや、天下の人心に及ぼすところも尠すくなくはない。——おお、こうしている間に、郁次郎が刑に処されては相成るまい。老人、これを携たずえて、はやく、町奉行の榭さ原主計はらかずえ殿に、願いの旨を、申し入れるがいい」と、一通の書付かきつけを手わたした。

「あ。これは？」

と、老先生の手は、指は、つよい感激にふるえを刻んでいる。

「御老中太田備中守様のお書付。時刻がないゆえ、何かの手続きは後にゆずるとして、とりあえず、郁次郎の処刑に対して、百日のご猶予をおゆるしあつたのじゃ」

「えっ！ あ、あの、百日」

——鐘が鳴った。朝の六刻である。

郁次郎の刑される明けの鐘は、郁次郎の生命に一縷の光明を投げた黎明の鐘となった。
「オオ！」

と、老先生は、狂喜の手に、老中太田備中守の書付をつかんで、奉行所の門内へ走りこんだ。

挑戦ちようせん

「——鳴った。六刻の鐘だ」

藪牢やぶろうの外で、声がした。

そこに、箆むしろや、水桶や、さまざまな死刑の具をならべて待っていた刑吏けいりたちは、ふり顧かえつて、いちどに、わかれながら、

「ご大儀に存じまする」

と、頭かしらを下げた。

「各にも」

と、軽く、会釈を返しながら、その中へ、ずっと通つて来たのは、羅門塔十郎と、東儀与力とうぎだった。

東儀はすぐに、頤あごを上げて、

「罪人を曳き出せ」

と、命じた。

そして、羅門と肩を並べながら、刑場の一方にある椎しいの木の下に、床几しょうぎをおかせて、腰をおろした。

獄卒たちは、牢の鍵をあけて、躍りこむようになかへはいった。——そして、糸のように痩せ衰えた郁次郎を引き立てて、死の筵むしろうにすわらせた。

「太刀取り！」

「はっ」

「すぐに斬れ」

羅門のこう言ったことばの下に、刑吏は白鞆しらさやの大刀を抜いて、桶の水を、刃渡りへ、さらさらとながした。

ヒュツと、一振り、水を切つて、刑吏は郁次郎のうしろへ廻った。東儀与力は、かたく

肘^{ひじ}を張つて、口をむすび、羅門はじつと、深い眸を澄まして、唾^{つば}をのんだ。

尊いかな、一秒の時間。

江漢老先生が駈けつけたのは、実に、その一瞬の時であつた。それと見るより老先生は、両手をふりあげて、

「待てッ」

と、呶鳴りながら駈けて来た。

「こらッ」

わらわらと、その後から、奉行所の番士たちが追いかけて来るのを、老先生は阿修羅^{あしゅら}のように振りとばして、

「刑吏！ その太刀を下ろすことはならんぞッ、待てッ」

と、叫びつづけて、郁次郎のそばに、両手をひろげて立ちはだかつた。

「やっ、老先生」

と、東儀は、床几から飛び上がるほど驚いて――

「な、なんで、大事な執刀の邪魔を召さるか。狂気されたかッ。役儀の遂行^{さまた}を邪^{よこしま}げるに於いては、何人^{なんびと}とて、用捨はいたさぬぞ」

と、こめかみに、青すじを立てて言った。

「だまれ、東儀！」

老先生は、嚴然と、

「——狂気したかとは何たる放言だ。老いたりといえど塙江漢、まだ、氣狂うほどの耄碌はせぬ」

「ではなんで、郁次郎の愛に溺れて、刑の執行を邪けなすか」

「いや、邪げるのではない。止めるのだ」

「止める？」

と、鸚鵡がえしに、東儀はあきれたような眼を瞞つて、

「いかに老先生でも、法の命ずる下に刑罰する罪人を、お止めなさる権利はない。近ごろ、血迷われたとみえる」

と、嘲嗤つた。

老先生は、きつと向き直つて、老中太田備中守の執行猶予書を、羅門と東儀の眼のまえに向けて、開いて見せた。

「見られたか、ご両所。郁次郎の刑を、百日のあいだ延期いたすということは、この江漢

のことばではない。老中のご命令でござるぞ」

「あつ？」

と、ふたりは、それへ、疑惑の眼を研ぐように、顔を近づけて、

「これは、不審だ。すでに、老中ご一統の裁可に依つて、郁次郎の断罪をお認めあつたものを、ふたたび、延期せよとは心得ぬお沙汰じゃ」

「——ではこのお書付を偽筆といわるるか」

「よしや、直筆じきひつなるにもせよ、一老中のご意見で、法をうごかすなどという例はない。もつてのほかなせんじょう僭上じょうというものであろう」

言い争つているところへ、役宅の方から、あわてて、それへ駈けて来たのは、奉行のさ榊かきばら原主計ちかすえであつた。また、奏者衆の小笠原左近将監であつた。

「ひかえろ」

奉行の声に、

「はっ」

と、東儀と羅門は、それへ、片膝を折つて、指を地についた。

左近将監は、おごそ厳かに、

「今日、処刑するはずの塙郁次郎、吟味不充分のかどあるによって、証拠がためとして、百日の延期を命じる」

と、ことば短く言い渡して、

「追つて、くわしくは、上様うえさまのご印可をいただいて、後刻おおよけ、公の書状をもって当所へお達しするであろう」

そう言つて、すぐに、ひき揚げてしまった。

「意外なことになった」

と、東儀は、羅門と顔を見合せて、不平そうにつぶやいたが、羅門は、

「いや、ご念のいったことです」

と、皮肉な笑いかたをした。

そして、老先生の方へ、ちらと、その眼まなざしを投げ捨てながら、

「とにかく、これでご子息の命は、百日のあいだ生き延びたわけ。吾々の眼が違っているか、ご老人の眼が、子の可愛さに眩くらんでいたか、百日目の朝、ふたたび、ここで、お目にかかる場合には、決定するでしょう。……せいぜい、それまでの間に、冤罪むじつの反証をお挙げなさるがよからう」

と、いつにもなく羅門は、やや挑戦的だ。

「もちろん！」

と、老先生は胸を張って――

「天に誓って、反証を挙げて見せる。郁次郎にあらぬ、真の犯人を引ッ捕えてみせる」

軒昂けんこうとして、羅門に、いや、天に向って言った。

「ご健闘を祈っておこう」

と、羅門は、さり気なく答えたが、クルリと振り向いて、

「お奉行」

と、一歩すすんだ。

「――かく御老中から急なお沙汰が出たのは、必ひつじょう定、塙老人の熱心な策動によるところと心得ます。しかし、それは少しも、郁次郎が冤罪むじつという反証にはなりません。吾々は初信どおり、飽くまで、彼を真の下手人として、これから百日間に、東儀殿と力をあわせて、いつそう、証拠固めに全力をあげるつもりですぞ」

「もとより、そうなくては、羅門塔十郎ともある名捕手の一いちぶん分が相立つまい。また、老先生の立場としても、お上かみより、かくご猶予のある以上は、ただ、言い分や議論に止まら

ず、ぜひとも何^{なんびと}人が、女笛師お雪を殺したか、巫女^{みこ}殺しの下手人なるか、その真犯人をつきとめて、百日の日限までに奉行所へお示しをねがいたい。——かりに一日遅れても、万一、その期日までに、真犯人の出ぬ時は、奉行所は、奉行所が今日までの推定によつて、郁次郎を処刑いたすことに、何らの仮^{かしゃく}借を持つものではないから、その場合には、お恨みなきように断つておく」

「よろしい——」

と、老先生は、大きく、白髯^{はくぜん}をしごいて、

「これで、わしはわしの信念に向つてすすむこと以外に、なんにも言うことはない。郁次郎は、それまで、獄舎^{ごくしゃ}に預けておく」

「はははは」

と、東儀は、強^しいて笑つて、

「だが老先生、万一、その百日めになつても、他に犯人が出ぬ時には……」

どうする？ ——というように、眼で詰問した。

老先生は、ふと、傷^{いた}ましいわが子の姿に目を落しながら、

「各^{てかず}のお手数は待たぬ。郁次郎めが刑刀の錆^{さび}となる時刻に、わしも、どこかで老腹^{おいばら}を

搔ツ切つて相果てておろう。……だが、そんなことはない！ 断じて、この世は、まだそれほど暗黒じやあない……」

と、語尾の二一言を、昂くさげんだ。それは、郁次郎に向つて、百日の別れを告げるこ
とばでもあり、また、その間の忍苦に耐えよと励ますようにもひびいた。

——こうして、郁次郎は、ふたたび牢獄の中へ、戻された。
さて。

ここに事件の解決までに、百日の期間はできたが、老先生には、そもどんな策戦がある
か。やがて、一刻の間も惜しむように、飄然として、どこかへ立ち去つた。

鱧の腕

明けがたには、ひと盛り鱧が釣れる。すこし陽が出てからは、鱧釣り舟が、笹の葉を撒
いたように、釣竿をならべて、糸をあげていた。

品川の海は、いい風ぎだった。——それに、五月の初旬、季節もいい。遊び半分の太公
望が出かけるには絶好である。鎌倉船は、初鰹をつんで朝から何艘も日本橋の河岸

へはいった。

「こいつあ大アテ違いだ。海は人目のねえものと思つていたが、陸おかよりは、人間が出てい
やがる」

小舟の櫓ろをあやつりながら、艦ともへふり顧かえつて、こう言つたのは、別府の新七だった。

艦には、唾聾とまが、生れてはじめて海を見たように、ぽかんと口を開あいて、めずらしそう
に見まわしていた。無論、彼の耳には、新七の声が聞えるはずもない。

「ほんとに……。捨て場がないね」

こう答えたのは、苦とまを敷ふいて、舷ふなべりに、身をもたせていた怪美人の玉枝であった。

「しかたがねえから、グツと沖へ出て、沈め込むとしましょう。だが、船番所の見廻り舟
にでもぶつかると面倒ですから、気をくばつておくんなさい」

「大丈夫だよ。わたしが、こんな顔をしていれば、舟遊ふなゆき山さんとしか見えやしまい」

「女の乗つているところが安心だが、その唾聾とまが、キョロついているのが困りものだ」

「なあに、これだつて、人が見れば、山出しの下男だろうと思うから心配はない。それよ
りも、うでに縊よりをかけて、沖へ漕こいでおくれ」

「おツと、そのことだ」

新七は、わき目もふらずに、漕ぎ出した。——玉枝の坐っている舟底のまえに何やら、筵むしろをかぶせたものが隠してあった。その筵が、海風にめくれるたびに、紫いろをした人間の足の先がちらと見えた。

玉枝は、それを気にして、めくれるたびに、すぐに、筵をかぶせた。そして、

「おや、まだ息があるんじゃないか。いつそ、あいくち首で、一突きにしてから沈みかけたらどうだえ」

と、言つた。

「飛んでもねえこつた」

と、新七はあわてて、首を振りながら、

「こんな所で、人間の血ちあぶら脂をながしたら、すぐにあしがついてしまう。そのまま、おも錘りをかけて、沖の深くへ抛り込んでしまうのがいちばんだ」

「なるほどネ」

と、玉枝は、筵いろに光る紅唇べにのあいだから、細かい歯を見せて、遠心的に、

「やっぱり、あの人は、要心ぶかい……」

と、つぶやいた。

「もう、ここらでよかろうじやねエか」

ぐっしよりと、汗をかいて、新七は、疲れた腕から櫓ろを離した。左に遠く見えるのは、江戸川尻を抱いた浦安、行徳ぎょうとくあたりの浜辺である。

「さ、おまえも、手伝わなくっちゃいけないよ」

玉枝は、唾男の膝をつついた。

「……………」

唾は、眼をさました猛獣のように、筵むしろの上に眼を落とすと、もっそりと、身を起して、無造作ぞうさくに、筵をめくツた。

足も、手も、胴も、ギリギリ巻きに縛られた一箇の人間が、その下に、仰向けになつて伸びていた。いうまでもなく、それは、まだ夜の明けぬ暁闇の数寄屋河岸で、悪人たちが首領とよぶ覆面の侍と、ここにいる新七や唾男などのために、無残な敗北を遂げてしまった江漢老先生の片腕の同心加山耀藏ようざうであつた。

「ひ、ひ……………」

と、唾男は、妙な声を洩らして、耀藏の顔を指さした。無念をのんで昏倒した時の肩が、ふかい針を立ったまま、仮死状態の青ぐろい皮膚にとつついていた。

「はやくしろ」

と、新七は、頤あごを拯すくつて、唾つばといっしよに、石を詰めた綱ぶくろを、彼の縄目に幾つも結ゆいつけた。

「それ、いいか……」

手と、脚とを持ち合つて、舷ふなべりから、青い波底へ沈めかけようとした時である。とんと、舟げたの角かどで、背ぼねを打たれたとみえて、耀蔵は、偶然にも、呼吸いきをふき甦かえした。

とたんに、双ふたつの眼を、くわツと開いて、舟のなかの三名を睨みつけたので、

「わっ……」

と、吃驚びっくりしたため、唾つばも新七も、同時に、あわてて、手を離した。

どぼツ——と、白い飛沫しぶきが低く立った。無数の泡が、いちめんにもくもくと、音を立て、舷ふなべりにはじけて消える。——玉枝は、舟げたにもたれながら、石の重みに沈んでゆく耀蔵の体を美しい魚の影でも見るようにのぞきこんでいたが、突然、

「おやつ？ ……」

と、さけんで、顔いろを変えた。

ふしぎ！

耀蔵のからだだが、およそ、四尋^{よひろ}ほども沈んで行つたと思うと、まっ蒼な海藻^{うみぐさ}のなかから、ぬつと、人間の腕がのびた。そして、いきなり耀蔵の帯をつかんだと思うと、鱧^{ふか}のように、さつと、横へ攫^{さら}つてしまった。

血^ちまみれ舟^{ぶね}

「あつ、いけない！」

玉枝は、飛びあがつて、

「たいへんだ。わたしたちは、いつのまにか、誰かに、尾^つけられていたにちがいない。はやく舟を、引つ返しておしまい！」

と、手を振つた。

新七も、何かは知らないが、うろうろして、櫓^ろをつかんだ。同時に、唾男は、ひと声、ヘンな絶叫を発しながら、ザブーンと、身を躍らして、海のなかへ、飛び込んでしまった。「ちえツ、しまった」

——新七は、唇を噛んだ。

——見ると、彼方の洲すの先から、矢やよりもはやく近づいて来る一艘そゆうがある。

まさしく、どこからか尾つけて来て、自分たちの行動を、見ていたものと思われる。舟のうえには、屈強なふたりの船頭と、ひとりの町人が乗って、櫓も折れるほど、ギツギと漕いで来た。

「ええ、だめだよ！ 新七ツ、舟が廻まわつてばかりいるじゃないか」

玉枝は、やつきとなつて、自分も、棹さおをつかんでついてみたが、その届くような、浅瀬ではなかつた。

掬す摸りは本職らしいが、もとより、舟にかけては素人しろうとに違ちがいない別府の新七。いそげば急ぐほど、櫓りゅうがはずれる、舟がまわる。

そのまに、見事な舟脚で、サツと、水を切つて来た一方の小舟は、いきなり、対あいてぶね手舟の胴なかへ、その舳みよしをぶつけるがはいか、

「ぎまをみやがれ」

「いくら逃げ足の迅はやいてめえ達でも、水のうえじや、どうしようもあるめえ」

三人いちどに、身を躍はらして、玉枝の舟へ、とび込んで来た。

「何をしやがる」

新七は、ヒ首あいくちを走らせて、ひとりの船頭へ突いてかかった。

ヒ首は、飛魚とびうおのように、空くうを泳いだ。

ひとりが、そのうしろを搔すくつて、彼の喉のどを締めると、ひとりがすぐに、足をつかむ。

「ちツ、くそうツ」

盲目的な閃光せんこうが、やたらに、前の空を斬った。ぎりぎりど、齒ぎしりを鳴らして、足と喉の束縛を、ふり解ほどこうとして躡もがくのだった。

「親方、面倒だ」

「殺やつちまおうか」

ふたりが言うど、見すましていた町人は、脇差を抜いて、新七の脾腹ひばらへ刺しとおした。なんの苦もなく、鋭利な刀の尖さきが、七、八寸ほど、人間の胴へはいった。

「ううツ……。うーむツ……」

真つ赤な、血あぶらの漲みなぎった海のうえに、小舟は、大きく揺れ返った。

——玉枝は、その揺れうごく舳へさきから、身を躍らしかけていたが、咄嗟に、それを見つけた町人の腕にひき戻されて、仰向けに、転がった。

「この女狐めぎつねめ！」

町人は、足蹴にかけて、

「だいなな汝を逃がしてたまるものか」

と、自分の舟へ、ひき込んで、捻じ伏せた。

「痛いッ、手をゆるめておくれよ」

「何を言やがる、痛えのは、あたりめえだ。……おい、はやく来い」

「親方、どうします、こいつの死骸は」

「魚の餌にしてしまえ」

「合点。——水葬式」

と、新七の死骸を抛りこんで、

「舟は？」

「舟もそのまま突っ放してしまえ」

「もう一匹、ヘンな男が、まっ先に海のなかへ逃げこんだが、どうしやがったか、浮いて来ねえ」

「ム、下男みてえな男か。雑魚だろう」

「じゃ、ぶんながしますぜ、この舟は」

と、自分たちの舟へ返って、突き離れた。

と、主ぬしのない血まみれなその小舟が潮しほに乗って流されてゆくそばに、ぽかりと、西瓜すいかのような物が浮いた。ふたつの人間の頭である。ひとりには、一人の体を、横にかかえて、水のなかから手をあげながら、

「——やあい。何してヤンでい」

と、潮を吹いて呶鳴った。

「あ。千吉だ」

「待てやアい」

あわてて、漕ぎよせてゆくと、千吉とよばれた若者は、

「はやく綱ほろを抛ほうれ、綱ほろを。いやに、落着いていやがる」

「船頭のくせに、弱音をふくな。こつちだつて、大仕事があつたんだ」

「いくら、稼しょうばい業がいが稼業しょうばいでも、そう永く、水の底にやつづかねえ。それに、生き物をかかえているんだ」

「おう、どうしたものは」

「ものは、首尾よく、このとおり……」

「ご苦労、ご苦労」

と、舟のなかへ助けあげて、千吉のかかえて来た加山耀蔵の縄をすぐ解いた。

海へ沈みかけられる時に、すでに、呼吸もかすかだだったので、水はほとんど飲んでいなかった。用意の薬をふくませたり、濡れた衣服をかえたりしている間に、舟は、帆を張って追い風をうけていた。

玉枝は、度胸をすえてしまった。

ふてくされた、凄艶な頬を、海風に、鬢の毛が馴染っている。

帆ばしらの下に、立て膝をして、もう逃げられないと覚悟をきめた眼に、誰のとも知れない、かます菘入れを見出すと、それを、指さきで寄せて、すぱりと、のどかな顔をして燻らしはじめた。

加山耀蔵の手当をしていた船頭たちは、菘のにおいがするので、彼女を、ふり顧つた。

「親方、あきれてものが言えねえじやありませんか。ごらんなせえ、人の、菘を吸ってやがる」

指さすと、彼女は、不敵な、そしてまた、ひどく蠱惑な、あの笑顔を、海月のように、頬に、チラつかせて、

「オヤ、おまえさんの？」

「勝手にしやがれ」

「しみつたれたことをお言いでないよ、苺の一ぶくや二ぶく、いいじゃないか」

「あれだ……」

と、あきれ顔に、

「親方、世の中にや、こんな不敵な女もあるもんでしょうか」

「どうせ、ひとすじ縄で行く女じゃあるめえ。逃げられねえように、要心している」

「はばかり様。おまえ達みたいなの、町人根性ならしらぬこと、こうと度胸をすえた以上は、見ぎたなく、じたばたするような玉枝さんとは違うんだからね、安心おしよ」

「……親方、似ていますね、まったく」

「誰に」

「はちかんちようとみたけ
八官町の富武様のお嬢様と」

「ム、うずらざか 坂の老先生も似ているとおっしゃったが、まったく、瓜ふたつだ。……だが、

形は似ていても、心ときたひにや、雪と炭だ」

玉枝は、横を向いて、うす笑いをうかべながら、

「じゃ、おまえたちは、鶉坂の老いぼれに頼まれて、私たちの仕事の邪魔をしたんだね」
 「それがどうした」

「おぼえておいでということさ！」

「けッ。この期ごになつても、まだあんな憎まれ口をたたいていやがる。——親方、また海へでも飛びこむと、探すだけでも手数ですから、ふん縛つてしまひましょう」

若い船頭たちから、親方とよばれている町人は、数寄屋河岸の釣舟師、舟ふなたつ辰たつだった。

明け方、老先生から事情をうちあけられて、焦しょう眉びの一策をさすげられると、俠氣に富んだ舟辰は、一も二もなくひきうけて、若い者三名と共に迅はや舟ふねをとばし、品川沖の鱧きすずの群ねにまぎれこんでいたのである。

老先生の機智は、矢文の方も、これも、二つながら成功した。加山耀蔵のからだから解いた縄は、そのまま、玉枝を縛るものに使えた。舟辰と、若い船頭三人に捻ねじ伏せられては、彼女も、どうすることもできない。観念まなこの眼をふさいで、自由になつていた。

すると、そのなかの千吉が、棘とげにでも触れたように、
 「オヤツ？」

と、手を引っこめた。

「なんだ？ 千吉」

「親方、ふしぎなこともあるもんですね」

「どうして」

「この女、左の手を見ておくんさい。——鳥爪からすづめだ、あつしの妹のお半と同じだ。お半の小指の爪も、お鉄漿はくろを染めたようにまつ黒なんで、奇妙な生れつきだと思っていたら、この女にも、同じ爪がある」

「ウム……なるほど」

「妹も、こんな毒婦にならなけりやいいが」

「あの娘はやさしいから、なれと言つても、こんな不敵者になるはずはねえ。今は、家うちかい」

「いえ、……お恥しいわけですが、ちよつと、事情わけがあつて、この春から柳こねえばしのお紺姐ねえさんの家に、仕込みに預けてありますんで」

「へエ、じゃ、雛妓おしやくにしたのかい。……それやかえつていいだろう、今のうちから、柳こねえばしの水で洗い上げれば、さだめし、江戸前の芸者衆になるだろうよ」

話が、思わぬほうに外それている間に、どんと、船の舳へさきが、何かにぶつかった。

中洲の女おんなぼし橋はしである。——舟は、大きな橋はし杭くいを摺すつて、橋の腹を上に見た。

悪智あくちの尺度しゃくど

「あ、いけねえ。その女を、むき出しにして置いちや、陸おかからも、橋の上からも、人目について、怪しまれる」

舟辰は、気がついて、帆を下ろした。

ほかの三名は、あわてて、玉枝のからだを俯向けに倒して、その手足を、板子へ縛りつけた。そして、上から、帆をかぶせてしまった。

間もなく、舟は、数寄屋河岸へついた。病人の客でも連れ戻ったように装よそおつて、すぐに、耀蔵だけを、店へ、かつぎ上げた。

「おう、帰って来たか」

土間のもの音を聞くと、待ちかねていたように、二階の梯子口はしごぐちから、老先生の白い髯ひげがのぞきおろした。

「あ、鶉うずらぎ坂さかの」

「シツ」

と、老先生は手を振って、

「首尾は」

「ただ今参ります」

一同で、耀蔵を、そつと、二階へたすけ上げて、隅へ寝せつけたうえで、

「老先生、ごらんとおりでございます。四、五日、静かに、養生ようじょうをしていたら癒なおり
ましようから、ご安心なさいまし」

「大儀、大儀」

老先生は、ななめならず欣よろこんで、

「して、悪人どもは」

「ひとり、海へ逃げこまれてしまいました」

「小人数だ、やむを得まい。それは誰だ」

「下男みたいな野郎」

「ははあ、唾つよ嚔つよだな。——して、もうひとりの、掏摸すすりの新七は」

「あいつはうまく行きました」

「召捕ったか」

「いえ、殺^{ばら}してしまつたんで」

「なに、殺した」

「死骸はそのまま突き流してしまいました。今ごろは、鱧^{ふか}の腹ン中で、あぐらをくんでいるかもしれません」

「それは惜しいことをしたなあ。……アア残念なことをした」

「どうしてですか」

「生かして引ッ吊して来れば、泥を吐かせる手段もある。後日になつても、唯一の生き証人となつたものを」

「あ、成程。……ですが、その生き証人には、女の方を、ふん縛つて、連れて参りましたから、これでどうか、埋めあわせをつけて下さいまし」

「えっ」

と、老先生の耳は、若者のように、ぽつと紅^{あか}くなつて、

「ゆうべ、わしが捕り逃がしたあの妖婦を、おまえ達の手で、捕えて来たと申すか」

「どうです、老先生、こいつあ、褒^ほめていただく値打^{ねうち}があるのでございましょう」

「ある！ ある！ イヤでかしたぞ舟辰。事件の解決いたしたうえは、きつと、充分に褒美をとらせる」

「なに、あつしは、そんなものを目あてに、した仕事ではありません」

「失言じゃ、ゆるせ。おまえの俠気はよくわかっておる。——して、女は、どこへ連れて来た」

「近所の眼がうるそうございますから、舟底に縛りつけて、帆をかぶせておきました」

「ヤ、ヤ！ それやいかん！ それやいかん」

老先生は、愕然がくぜんとして立ち上がった。

舟辰は、怪訝けげんな顔をして、

「なぜいけねえんですか」

「あの女には、たえず、覆面しゆりようの首領しゆりようの眼がついているはずだ。一刻たりと、見張を抜いたのは大きな手ぬかり。或いはもう遅いかも知れんぞ」

まさか——と舟辰は多寡たかをくくつていたが、老先生があまりにくやむので、あわてて、草履ぞうりを突ツかけて、河岸の栈橋さんばしへ駈け出してみた。

舟は、そのまま、繋いであつた。

帆布も、そのままかぶせてあつた。

——だが、それを剥くツて見たとたん、舟辰は、あつとといったきり、開いた口がふさがらなかつた。

玉枝のすがたは、魔術師の籠にはいつた鳩のように、きれいに、消されてしまつていた。

「ど、どうしたんだろう」

「すこしも、不思議はない」

老先生は、がっしりと、腕を拱んで、鼻腔からふとい息を吐いた。

「……惜しいことをした」

「なんとも、相済みません」

「あやまることはない。わしがはやく、気をつければよかつたんじゃ」

「オイ、そこにいる若えの」

舟辰は、忌々しそうに、近くの河岸に繫つている船頭へたずねてみた。

「——今、この船の中から、若い女を連れ出した奴があるんだが、誰か、そいつを、見かけた者はねえかい」

「女？」

と、附近の舟の者たちは、顔を見あわせて、

「——知らねえなあ。ただ、いつも見かけねえウ口舟（物売り舟）がそこへ寄って、何か、していたように思ったが、そのうちに、いなくなってしまうなあ」

「それだ」

と、老先生は、きつぱりと諦めて、

「——もう追うのは愚だ。それよりは、何か手懸りになるような物でも落ちていないか」

「おや？ ……老先生」

舟辰が、しやがみ込んで眼を瞠みはつたので、老先生も、腰をかがめて、視線を寄せた。

一枚の紙かみきれ片が、小舟の横に、貼はりつけてあつた。見ると、それは、老先生の眼ですら違う点を見出せないほどそっくりな字だ。わが子郁次郎の手しゅせき蹟あとにそっくりな筆癖ひらなのである。

父上よ。——

父上はなぜにかくまでわが子を苦しめ給たまうや。

わが子の愛を思おほし給たまわば、益なき妄もうどう動どうをやめ給え。年寄の冷ひや水みず、夢、妄動をやめたまえ。

子たる余は、老父と闘うにしのびずといえども、老父、なお余を苦しめたまわば、余の悪霊はその時ごとに獄内をしのび抜けて、泣きつつも、闘わざるべからず。泣きつつも、闘わざるべからず。

不孝の子

覆面の首領

老先生の眸は、いちどは、ぎよツとしたように竦んだけれど、すぐに、明朗に澄み返つて、

「あはははは。まず、彼奴の悪智も、この程度ならば、底はおよそ測られる。——たわけた小細工」

と、はがし取って、細かに裂き破ったそれを、掌にまるめて、ぽんと、川へ投げ捨てた。

白紫陽花

夜半よなかでも、眼を開あいて、じいっと、天井を見つめていることがある――

「ああ、お苦しいことだろうなあ」

そうして老先生の胸のうちを察すると、舟辰の二階に、枕をならべている耀蔵も、熱いものが、眼じりにながれて、思わず、夜具の襟で、顔を掩おほってしまった。

たちまちである。――あれから二十日はつかの日はすぎた。奉行所で誓った百日の期間は、確かに、あと八十日に詰つまつて来たわけである。

鶺うずらざか坂すまいの住居にも戻らず、用達ようたしにも出ず、毎日、黙々と、何事かを調べ、何事かを考えている老先生だった。たまたま、手拭をぶら下げて、町の風呂に出かける時には、俠あ気に富んでいる舟辰が、主人を守る番犬のように、必ず一緒についていた。

その老先生が、めずらしく、

「加山、ちよつと出かけて来るよ」

と、気軽に、壁の編笠あみがさをはずして言ったので、加山耀蔵は、眼を瞠みはった。

「え、お出かけですか」

「む。日和ひよりもよいしな……」

「どちらへ」

「あてもないが、戸外そとでも歩いたら、またよい智慧も出ようというものだ」

梯子段を下りかけると、茶菓子の盆と土瓶を持って、上がって来た舟辰が、

「あ。老先生、今、お茶を入れて参りましたが」

「出先じゃ。帰ってから馳走になろう」

「では、手前がお供をいたしましょう」

「きようは、よい」

「よかありません」

「よいと申すに」

「いいえ、独りじや物騒です。あつしでいけねえなら、加山さんを連れておいでなさい」

「耀蔵はまだ、体の回復が充分でない。きようは、独りで行くよ。心配せんでもいい」

「そんなことを言ったって、心配しずにはいられません。老先生は平気のようだが、家の女房や若い者まで、どんなに、案じているかわかりません。——恐ろしい悪党の仲間が、

夜となく昼となく老先生のお命を狙っているんだ。この頃は、野良犬みたいに、家の裏口から覗いたり、夜半よなかに、真つ黒な人間が、物干しに屈みこんでいることも、幾度だか知れ
ませんぜ」

「それやあしかたがないよ。わしの方から、挑戦したんじや。昔の塙隼人に返つて十手をつかみ、あくまで闘うという宣言をしたからには、悪党どもも自衛上、わしを殺そうとするのは当りまえじや。そんな脅しに慄えあがつておつては、一日も、征悪の戦には立てん。……そんなどころの沙汰か。今に、もつと！ もつと！ 恐ろしい暴風が朝にも夜にも、わしの体にぶつかつてくるじやろうよ。だが、江漢は仆れはせん。決して仆れはせん。悪人ばらを勦滅して、人間の生きる地上に、明るい裁きの陽を見るまでは、わしは、血を吐いても、屈しはせん。——まあ見ておれ、百日のうちじや。いや、もうあと八十日か。日の経つのは早いなあ。何しろ、今日はちよつと思ひ立ったことがあるから行つて来る」と、笠をかぶつて、戸外へ出た。

年は老つても、気もちは壯んである。それだけに、なかなか、人のいうことも肯かない。もう四、五日で六月にはいる氣候だ。町はすっかり夏めいている。

——老先生は、何処へ行く？

「わかもの壯者のような速い足で、彼はまもなく、しろがねだい白金台から目黒の行人坂を歩いていた。
たいうんいん「泰雲院——。ははあ、ここだな、俗に、あじさいでら紫陽花寺ともいう寺は」

門内にはいると、なるほど、境内にも、墓地にも、紫陽花の樹が多い。
せんびょうしつ腺病質な

藍いろの花が、月の朝みたいに咲いている。

老先生は、裏の墓地へはいった。

まだ新しい一基の墓の前に寄ると、老先生は、襟を正して、額ぬかずいた。

「さても、お変りなされたお姿ではある。何と、お慰さめ申そうやら、何と、お詫びをいたそうやら、江漢の胸はただただいっばいで、張り裂けるようじゃ……。五百之進殿いおのしん！定めし貴殿の霊はご無念であろう。現世げんせに、心残りなことでござろう。したが、世に、永らえて生き老いることも、辛うござる」

老先生は、そう言つて、大地に手をついた。はらはらと、落涙した。

さながら、生ける人にでも、言うように。

冷たい——黙せる石——。それは、花世の父、富武とみたけい五百之進おのしんの墓標であつた。

「郁次郎の身に秘密があつたばかりに、ご息女の花世のものには、意外な苦勞をかけ、貴殿には累るいを及ぼして、あたら自害をさせてしまった。——ああ！ わしは、何という迂濶うかつも者ものだ！ 伴せがれの秘密を、未然に、処置してやらないばかりか、伴が、江戸表へ歸つて、貴殿の温かい手に匿かくまわれていることも、貴殿が、そのために、腹を切つて、果てたことも、当時は、夢にも知らずにおツた。面目ない！ ここに会わせる顔もない。五百之進殿、勘

弁してください」

大地は、老人の、さんさんたる涙を吸った。

僧院の人のすさびであろうか、どこかで、ほそぼそと、尺八の音がながれた。

だが、老先生には、その音も耳に入らなかつた。強い、自責の念に、肩をふるわして、燃えるような眼をあげて、

「わしは今日、誓いに来た！ 五百之進どの、わしはここで誓う！」

無言の石に——無言の友に——こう、訴えるのだった。

「ご息女の花世どのの身は、身にかえても、この塙江漢がおひきうけ申す。同時に、郁次郎との許嫁いいなすけの約束も、もちろん、変ることはない。時は遅れたれど、郁次郎が青天白日の身となり次第に。——オオそうだ、その吉日は百日目、今日からかぞえて八十日目の夜をもつて、きつと、華燭かしよくの典てんをあげることにいたそう。悪人勦滅そうめつのその日を黄道こうどう吉日きちちちとして、冤罪むじつの獄舎ひしやから出た花智と、悲嘆のどん底から救われた花嫁とを、この江漢が、一命にかけても、必ず、めでとう手を握らせてお見せする。——それが、貴殿への、何よりのお詫びだ。何よりの供養であろうと思う」

と、思わず、嗚咽おえつを嚙のんで、しばらく瞑目めいもくしてから——

「もしまた、不幸にも、百日の期間のうちに、その成らざる時は、ここへ来て、老腹を搔ツ切り、江漢も、泉下せんかに参つて謝罪をする」

と、自分の吐くことばに疲れるほど、老先生は、真摯しんしであつた。言い終つて、かすかに、肩で息をついていた。

——すると、何者か、墓石の蔭で、わつと、泣き伏した声がした。

「や? ……」

眼を睜みはると、白紫陽花しろあじさいの戦慄おののくような女の姿が、ちらと、その蔭に見えた。

ふた
二つの問

「あつ! 花世じゃないか」

叫ぶや否、老先生は、跳びつくように、虚無僧すがたの彼女のそばへ。

そして、痛いほど、手をつかんだ。

「五百之進どのの引合せか。どうしてこんな所におつたぞ。これ花世! 花世!」

「おお、お舅父様とうさま」

「なに、お舅父様と？ ……ああお前はもう、わしをお舅父様と呼ぶほど親身な気でいてくれるのか。それでは今、ここで五百之進どのに誓ったわしのことばも、そなたは、残らず聞いていたな」

「……思わず泣いてしまいました。ご恩は死んでも忘れません」

「何を言うのだ。親子の間で。……それよりも、そなたは、どうして、ここへ来たのか。まさか、亡き五百之進殿の墓守をしていたわけではあるまいが」

「はい、実は、この紫陽花寺は、富武家も、檀家の一家でござります」

「ム。この縁故は分つておる」

「で。方丈様へお廻りして、ずっと、あれ以来、身を匿っていたいておりましたのです」

「アア。それではいくら尋ねても、行方が知れんわけだ。何の罪も、後ろ暗いところもないのに、御身はなんで、身を隠してなどおるのか。なぜ早く、鶉坂のわしの所へは、尋ねて来てくれんのじゃ」

「参りたいのは山々でしたが、その前に、郁次郎様から、これだけは、父にいうてくれるなど、固く、口止めをなされていたこともありますし……」

「前代未聞ぜんだいまいもんの曲者くせものだ。そもそも、こんどの間違いは、郁次郎がわしに包んでいるその秘密一つから起つておるに相違ない」

「それに、私の身には、絶えず怖ろしい人間がつき纏まとつておりますので、昼間も、油断を
して歩かせぬ」

「そうか、悪魔は、そなたまでを、狙狙っているか」

「今も、方丈様が、尺八を聞かせて欲しいと仰おつしやるので、うつつに、吹いておりますと、覆面をした妙な男が、庫裡くらりの横をうろついていたというので、そつと、墓地の中へ、
抜け出してきたのでございます」

「覆面の男？」

「寺男のいうには、若い、浪人ふうの男だそうです」

「それが、悪魔の首領だ」

「えっ、悪人のかしらですか」

「しかし、案じることはない。おそらく、彼は、この江漢のあとを尾おけて来たに違いない」
女である。花世は、そう訊くと、さすがに、唇のいろを、雨に褪あせた紫陽花あじさいのように、
失った。

「……どうしましょう。寺には、年老としとった方丈様と、小坊主ばかりで、力の強い寺男は、風邪をひいて、臥ふせているし……」

「案じるな。老いたりといえど、塙江漢、対手あいてが、あらわに姿を見せて参れば、方円流二丈の捕繩とりなわは、この袂たもとから走つて飛ぶ——。まさか、悪魔の首領も、そんな愚か者ではあるまい。ただ、油断をして、彼に乗じられぬよう、隙を見せぬことが第一じゃ」

「はい……私も、お舅父とうさま様のおそばにこうしていれば、何となく、気が強うござります」
 「ム。大船に乗った気で、安心してゐるがよい」

と、老先生は、可憐な、未来のわが子の嫁を、愛いとしそうに、見まもつて、

「時に、花世」

「はい」

「そなたは、わしに、渡さなければならん物を持つている。ここで会ったのはいい折だ。わしにくれい」

「ええ、何でしょう？」

花世は、首をかしげた。

老先生は、微笑して、

「鍵かぎじゃよ」

「え、鍵。……どこの鍵でございますか」

「鍵といつても、ことばの鍵だ。たった、一言ひとことか、二言で済むことだ。おまえはわしに、それを渡す義務があるう」

「はい」

「では、訊くが……」

「何なりと、お訊き下さいませ」

「郁次郎は、長崎表に遊学中、何か、若気の過ちで、わしに言えぬ秘密を抱いて江戸へ帰つて来たのではないか。……それを、五百之進殿とそなただけには、打ち明けたものと考えるが、どうだな」

花世の顔は、紙のように白くなった。ほつれ毛が、顫おののいた。

「い、いいえ……」

「それ、それ、それがいけない。郁次郎を、未来の良人おとこと思つて、庇かばつてくれるのは、うれしい人情だが、早い話が、わしに苦勞をかけまいとして、すべてを、秘密にしていたために、こんな大事が湧き上がったのじゃ。間違いはそこからだ。禍根は、毛ほどな食い違

いから起る。こうなつた以上、何事も、包み隠しは、厳禁じゃ。話してくれい。渡してくれい。——鍵を。ことばを」

詰問^{なじ}るようでも、老先生のことばの底には、よい舅^{しゅうと}父らしい、優しさ、温かさが、あふれている。

花世は、その優しいことばに、かえつて、激しい感情を揺^いたぶられたように、わつと、老先生の膝に泣きすがつた。

「す！ すみません！ ……お舅^{とう}父様！ もう何もかも申しあげてしまいます。ですから、今、心を取りみだれて、何からお話してよいやら分りませぬ。あとで、心静かに、書き認^{したた}めてお手元までさし出します」

「ム。それでよい。それで結構だよ。……ところで、ついでのことじゃ。もう一つ、わしの問いに答えてくれるか」

「はい、どんなことでも、もう決して包み隠しはいたしません」

「おう、よい嫁じゃ」

と、老先生は、眼の中へでも入れてしまいたいような愛撫^{ひとみ}を眸^{ひとみ}の奥にたたえながら、彼女の左の手首をかくろく取り上げて、

「ほかではないが、そなたのこの爪だ。薬指の真つ黒なこの爪の色だ……。これはいつた
い、生れつきか、それとも、幼い時に怪我でもしてこうなったのか。婦女子の爪つまへに紅をさ
したのはいくらも見かけるが、こんな鳥の嘴くちばしみたいな黒い爪は見たことがない。何ぞ仔細
があるのであろう、それを、話してもらいたい」

「……………」

花世は、羞恥しゆうちにわななきながら、じつと、その手を、そのままにしていた。白い頸うなじを、
折れた百合みために、垂れていた。

老先生には、彼女の心臓の音が、ありありと聞えた。

「……………どうじゃな、花世」

「……………」

「もし、これも、口で言いにくければ、前の問題といっしょに、書いて見せてくれてもよ
いが」

「こればかりは、死んだ実父ちちの五百之進も、胸を痛めていたことでござりますが、遅から
ず、一度はお打ち明けせねばならぬこと。あとで、詳しく書いておきます」

「これで、だんだんに、夜明けが近づいてくるような気がする」

「私の、こんな、恥しい爪の事などが、何か、事件のお役に立つのでございますか」

「立つどころか、秘密を開く鍵になる。その代りに、気をつけぬと、その爪のために、一命を縮めることもあろう」

「まあ？ ……」

と花世は、不思議そうに、自分の薬指を握ってみた。生みつけられた宿命の指を、改めて、見つめるのだった。

「たしか、その黒い爪を持つ女が、そなたのほかにも、この世に、幾人かおるのではないか」

と、老先生は、眩くように言った。

「はい、私を入れて、四人はいるはずでございます」

「ウム、とにかく早速、今訊ねた二つの問の答えを、書いてくれんか」

「では、ちよつと、お待ち下さいませ」

と、花世は、立ち上がって、少し丘になっているその墓地から、寺の方丈の方へ向って、小走りに、駈け降りて行った。

と——その後ろ姿を見送っていた老先生の眼のさきを、きらりと、星のような、白い光

が、横切つて行つた。

「あつ、小柄こづかだ！」

老先生は、絶叫した。

とたんに、その鋭利な手裡劍しゅりけんの飛んで行つた墓地の下で、キヤツと、人間の最期を告げる異様な絶鳴が、静寂しじまを破つた。

躍おどる捕縄とりなわ

ざらざら……と、老先生の足もとへ、崖の赭土あかつちがくずれて来た。

はつと、うしろを振り顧ると、紫陽花あじさいの繁茂しげつている崖の中腹に、黒い、覆面の魔物が、肩先を見せて、逃げかけた。

おお！ 悪魔の首領。

「待てっ」

老先生は、叫んだ。

紫陽花あじさいの花の中から、悪魔の眼は、ちらと、こつちを睨んだが、笑い捨てるように、か

すかな表情をうごかしたと思うと、また一本！ 老先生の眉間みけんをめがけて、小柄こづかを投げるや否、ざざざッと、崖の上へ、走り上がった。

「おのれ！」

と、塙江漢はなわ。

その一喝いっかつこそ、塙隼人はやとの壮年時代から、鍛えぬかれたところである。「悪の仲間」をして戦慄せしめた、威力と正義の宣言である。

だツと、走り寄って、崖の下へ——。

同時に、

「ええいッ」

と、投げ上げた二丈の捕縄とりなわは、崖の上へ這い上がりかけた曲者の首すじへ絡からみついた。旋回した分銅ぶんどうは、彼の首から、胴なかを、蛇のように巻いた。

が——曲者は慌あわてない。

太刀を抜きざまに、捕縄ほしよつを斬り払った。そして、犬の如く跳躍して、附近の森のなかへ、姿を消してしまった。

いちどは、なおもと、追い足を飛ばしかけたが、老先生は花世の方が、気がかりでなら

なかつた。

——キヤツと、耳を劈いたあの絶叫、あの人間の断末の知らせ。

「しまった！」

老先生は、地だんだを踏んだ。——今。彼女の一命に、もしものことでもある場合には、永遠の闇に、この事件の心臓は活動を停止してしまうほかないのである。

「——ちえツ、先手を打たれた」

と、老先生が、慌てたのも、決して無理ではないのである。事件の鍵とする「二つの問」は、まだ、花世の口から語られてないのであるから。

しかし、僥倖ぎょうこうにも、彼女は助かつた。彼女はもう寺の一室へは行って、一心に、

「二つの問」の答えを書き綴つづっていたのである。

そのかわりに、墓地の下の日蔭で、手づかみで、めんつうの残飯ざんぱんを食べていた一人の女乞食は、その背に、一本の小柄を突きとおされて、血を吐いて、死んでいた。

「やツ、親方。人が死んでる！」

「また死人か」

「女乞食だ」

「おや、たった今、殺されたばかりのようじゃねえか」

「山門をはいってくる時に、ギャツと、いやな声が聞えたと思ったら……これだ」

「でも、老先生でなくってよかつた」

と、舟辰ふなたつは、ほっとしたように、胸をなでおろした。連れているのは、店の若い者――

――船頭の千吉だった。

うしろから、蹻音がした。

不安な焦燥しょうそうをもった老先生の姿である。

「おう、辰じゃないか、何しに来た」

そう言いながらも、死骸をのぞいて、ほっと安心したように、

「あ。花世じゃなかったか……」

と、呟いた。

舟辰は、すぐに、

「老先生、たいへんです。すぐに、来ておくんない」

と、手を引つ張つた。

「どいへ」

「深川まで」

「深川へ。……まあ落着いて話せ。どうしたんじや」

「ゆうべ、この千吉の妹のやつが、殺されたんです。いつぞやお話し申し上げた、柳橋から雛妓おしやくに出ていたお半はんという美しい娘こです」

「なに、お半が殺された!」

と、老先生は、さながら、自分の子でも失ったように愕然がくぜんとして――

「あれほどわしが、固く、注意しておいたのに」

「……へい、どうも、何とも面目のねえことで」

と、お半の兄の千吉は、取り返しのつかない悲嘆と悔いに、顔を曇らせながら、

「あつしの妹のお半のことについて、先日、くわしく身の上ばなしを申し上げたところ、ことに依ると、お前の妹は、人に殺される懼おそれがあるから、気をつけいと、老先生が仰っしゃって下さいました。……それを、あつしや、実は肚はらン中で、嗤わらっていたんです。ところが、どうでしょう、あれからまだ半月と、経たねえうちに、この災禍わざわいだ」

と、拳こぶしで、眼をこすツて、

「妹のやつが可哀そうで……。あつしや、死骸を一目見たとたん、意地にも我慢にも、

泣かずにやいられませんでした。元はといえば、老先生のご注意を、うわの空で聞いていた罰はつですが、もうこの上は、しかたがありません。どうか、お力をもつて、妹の敵かたぎをとつてやって下さいまし」

「よし、すぐに、行ってやろう」

麻あさの葉は扱し帯ぎ

「有難うございます」

と、舟辰と共に、そう言つて、

「実は、老先生の出先も心配になるので、店の者を、後から尾つけさしておいたので、此寺ここと分りましたから、すぐに、駕を持つて参りました」

「あ、そうか、深川の何処どこだな。その、兇行のあつた場所は」

「櫓やぐら下したの河岸ツぶちです。——ゆうべ柳橋の五明庵ごめいあんというお茶屋から、妹を招よんだ侍があつたそうです」

「む」

「上品な、どこかの、若殿様でもあるような美しい男で、お忍び遊びという寸法らしく、黒縮緬ろちりめんの頭巾ずきんをかぶったまま、酒をのんでいたというんです」

「……ははあ……」

老先生の眼が、くるりと、うごいた。

「で？ ……それから」

「あっさりど、遊んでから、屋根船を雇って、妹を連れて行きましたが、五明庵でも、抱かかえ主のお紺さんも、安心して手放したほど、その客は、金ぎれもよし、人品もよかつたんだそうで」

「そいつが食わせものだ」

と、老先生は、千吉のことばを切つて、

「——分つた。あとは現場に当ってみよう」

「では、すぐにお供を」

「イヤ、ちつと待つておくれ」

と、老先生は方丈ほうじょうの窓から、寺の室へ、

「花世、花世」

と、低い声で、呼んだ。

「はい」

と、花世の顔が、すぐに、その窓に見えた。

「また一事件もちあがった。わしはすぐに、行かねばならん。最前さいぜん、頼んだものは、まだ書けぬか」

「書いておきました」

「才オ、これか」

と、窓の間から受け取って、

「舟辰」

「へい」

「千吉にも、申しつけることがある。今日より、向う八十日間のあいだ、この花世どのの一身を、おまえ達ふたりに預けるぞ。命がけで、間違いのないように、守ってくれい」

「……………」

二人は、返辞を忘れていた。

「どうじゃ」

「……………」

「嫌か」

「……不思議だあ」

と、呻くうめように、二人が、同時に言った。

「なにが」

と、老先生は、彼等の顔つきが、変なのに気がついた。

「なにが、そんなに、不審なのか」

「でも、そのお嬢様は、いっぞや品川沖でふん捕まえて、また、悪党どもに奪とり返された、あの玉杖つていう、凄うい女と、瓜うり二つじやございせんか」

「似ているというのか」

「誰たが見たって、別人とは思いませんぜ」

「いや、あれはまったく、べつな女だ。そのからくりも、化けの皮も、やがて近いうちに、江漢あはが曝あいてみせる。——とにかくこの婦人の一命は、何ものより大切なのだ。どこか、無事な所へ移して、おまえ達で保護をしてくれい。そこに、心配があつては、この江漢も、思うさまに、働たくき難い」

「よろしゅうございます」

と、舟辰は、もちまへの俠気を出して、ひきうけた。

「きつと、あつしが、お嬢様をお守り申しておりますから、老先生には、そんなご心配なく、どうか存分に、腕をふるっておくんなさいまし」

「よし、それでわしも、晴々と、征悪の戦に立てる。今日から百日の期限の日まで、そちの家へ、顔を見せぬかも知れぬ。だが、江漢は仆れても仆れても、必ず起つ！ 必ずどこかに生きている！ では、花世の身を頼んだぞ、くれぐれも」

山門の外には、駕が待つていた。

老先生の体は、宙を飛ぶように、揺られていた。——その駕の中で、彼は、花世が細々と書いた「二つの問」の答えを、繰り返して、読み終った後。

「むー！」

と、大きく、独りで頷いた。

眼をふさいで、腕を拱む。

彼の胸には、紛雑した事件が、もつれ糸を整理するように、順々に、解けて行つた。切れたところは結び、解けないところは、切り離して考えてみた。

が——どうしても、腑に落ちない点が一つあった。疑問の鳥爪からすづめの女は、花世のことばによると、この世に、四人あると言ったけれど、江漢が指を折つてみると、どうしても五人になる——

第一には、殺された、女笛師の雪女である。

第二には、江之島神社の巫女みこである。

第三には、つい最近、舟辰の口からふと聞き出した船頭の千吉の妹で——柳橋の雛妓おしやくのお半。

——それと、花世。

これだけならば話は合うが、先日、舟辰と千吉が目撃したところによると、花世と生写しの怪美人玉枝という女にも、同じような黒い爪があると聞いた。すると——どうしても、五人になる。四人に、一人余る。

「はて？ ……」

と、老先生は、もういちど、花世の「二つの答」を、読みなおして、考えこんだ。

どんと、駕はすが弾んだ。

同時に、ぎしつと、地上に感じた。

「——旦那、櫓下やぐらしたの現場です」

と、駕屋が、タレを刎はねた。老先生の眼には、すぐ、無数な人間の足あしもと許もとが映った。無数な足の向うには、川の水が見えた。

喧騒けんそうが耳を衝うつ。弥次馬が、追われる。

そして、足の数が減ると、砂利場の地上に、麻の葉絞しばりの扱帯しごきで首を縊しめ殺されている十五か、六ごろの、痛々しい、雛妓おしやくの死骸しがいが、うごかない酷むごさと、冷たい美しさを持つて、老先生の眸まゆのなかへ、反射的に、飛びこんで来た。

「これは、塙先生はなわではございませぬか」

駕の外で、いんぎんにこう言った人物がある。

老先生は、すぐ、その誰人たれびとであるかを、声で知って、

「やあ、羅門氏らもんうじか。——お役目とはいえ、お早いことだと、駕から立った。

こぼこ おんな
小箱の女

「——拙者も、今、駈けつけたばかりです」

羅門塔十郎は、検死役人の手帳をのぞきこみながら、

「また、同じ策おなに、してやられました」

と、かろく、舌打ちを鳴らした。

「同じ策とは」

「ごらん下さい」

と、老先生を、眼で誘つて、お半の死骸のそばへ近づいた。——附近を追われた弥次馬

たちは、遠くから、

(塙うすらぎ先生だ。鶉坂かの先生だ)

と、囁ささやき合つていた。

羅門は、腰をかがめて、友禅たもとの袂もとの下に隠されてあるお半の左の手を示して、

「また……小指が斬り取られています」

「なるほど」

老先生は、予期していたことのように、

「これで三人めじゃ」

「そうです。……例に依つて、犯蹟はんせきには、何の証拠も残っておりません」

「殺やる方も、だんだん熟練して来るとみえる」

「大きに」

と、羅門も、苦笑して、

「手口は、まったく、同じです」

「むろん、巫女殺みこし、笛師殺ふえししと、同一人であろう。——しかし、これを見ても分るのは、前の犯罪は、郁次郎の所為しよゐでないということだ。現在、奉行所の獄中に囚とらわれている郁次郎が、雛妓おしやくのお半を、何しに、殺害せつがいするいわれがあらう」

「まあ、表面は、そうも見えます……」

羅門は、相変らず、冷静な笑えみをもつて、老先生のことばを聞き流していた。

「ちよつと、素人しらうと考えで申すと、いかにも、獄中ごくちゆうにいる郁次郎が、世間へ出て、人を殺すはずはないと思われるが、事實は、たいへんに違います。……あの奉行所の牢獄などは、やり方一つで、いくらも、外部との連絡がとれる。また、金次第では、身分の軽い獄吏などを買取する方法もある。その辺も今調べ中です。ことに、老先生に対して、百日のご猶ゆ予よをいたした後は、郁次郎の身も、非常に、寛大にしてありますから、手段に依つては、

一夜ぐらい、外部へも出られないことはないのです」

「相変らず、貴公も、自信がつよいな」

「いや、自信のつよ過ぎるのは、老先生でしょう」

「いまだに、郁次郎を犯人と見ているなど、奇抜じゃ」

「不肖ですが、羅門塔十郎は、まだこうと睨んだ事件を、一度も、外はずしたことはありません」

「まあ、やってくれ」

「やります！ どこまでも、かみがたりゆう上方流で。——老先生の江戸流のお手なみも、よそなが

ら、拝見いたしています」

「は、は、は。あぶない」

と、老先生は彼の語気を軽く避けて——

「また、議論になるのは、お互に、よそう。何事も実行だ。今日は、検死の立会いだけをすればよいんじや。……どれ」

と、老先生は、独りで、犯行の手口、時刻、地理、そのほかを、ずっと、胸にたたみこんで、一足先に、現場から退いた。

そして、相川橋あいかわばしの袂たもとまで来ると――

「老先生」と、追いかけて来るものがある。

「や。加山か。お前も来ておったのか」

「弥次馬のなかに隠れていましたが、奉行所の旧友たちが多勢来ておるので、つい、顔を出さずに、見ておりました」

「よい所で会った。おまえは、これからすぐに、本石町の為替屋かわせ、佐渡屋和平の店へ飛んで行つてくれんか」

「承知しました。そして？」

「そして、こう……」

と、老先生は、彼の耳に口をよせて、何事かを、低声こゝろえで、さずけた。

「よいか」

「分りました」

「こんどが、恐らく、事件の峠だろう。ひとつ、働いてくれい」

「死身しにみになつて、やってみます」

「すべて、わしの言つた手順どおりにな」

「心得ました」

まだどこか、体の傷手が、癒え切っていないような彼ではあったが、もうその影は、夕闇の往来へ、紛れこんでいた。

その晩――

本石町の佐渡屋の店へ入って行った彼は、夜が更けても、そこから帰った様子になかった。翌日も、出て来なかった。彼が奥へはいる時に脱いだ草履は、店の者の手に紙包みにされて、下駄箱に隠されてあった。

そうして、櫓下のお半殺しが、江戸の町に喧伝されて、まだ噂も消えない四日目の黄昏れ頃である。

「こんばんは……」

と、やさしい女の声で、灯がついたばかりの店の蔀障子が開いた。

「誰かいないんですか」

女は、土間にはいつて、帳場を見まわした。

帳場には、生憎と、誰もいない。

ただ、暖簾をたたんで、店の地袋へ、仕舞いこんでいた小僧が、金行燈の明りに、振

り願^{かえ}つて、

「あ……」

と、何かに、恟^{ぎよ}つとしたように、女を見た。

「誰も、店の衆は、いないのですか」

「へい、おります」

その声までが、妙に、ふるえていた。

「呼んでくださいな、分る人を。——この小さな荷物を一つ、京都へ送って貰いたいんですか」

と、女は、胸にかかえている小さな小箱を示して言った。

「——へ。ただ今」

お掛けください、という世辞も忘れて、小僧は、奥へとびこんで行った。と、すぐに、如才のない、中年の番頭が、

「どうも、お待たせいたしました。……さ、お敷き下さいませ。オイ、幸
どん、まだ、お茶が出ておりませんよ」

手をたたいて、奥と客とへ、等分にしゃべりながら、座ぶとんをすすめる、茶を出す、

世辞を撒く。

誰がふんでも、一人前の、商人あきんどかたぎ気質である。——だが、それは巧妙に変装した老先生股肱ここうの同心、加山耀藏ようぞうだった。

「ええと……お嬢様」

耀藏は、もみ手をしながら、畏るおそ畏るのぞき上げて、

「ただ今、承りますと、何ぞ、お荷物をお送りになるとか、為替のご用だとか、伺いましたか」

「はい、いつもの所へ」

と、女は、頑丈な二重箱を打ちつけた上に、渋紙と、麻繩をかけた小荷物を、そこへ出した。

「……送って戴きたいんですが」

「へい、畏かしこまりました。ええと、いつもの所と申しますと？」

「毎度、あちらから、金子を為替で送ってもらう……」

「あ、そうそう、つい、お見それいたしました、只今、台帳を調べますが、先様のご姓名は、なんと仰つしやいましたでしょうか」

「やましろのくに
山城国、四明ヶ岳」

「あ、山城で。……では台帳がちがいました」

と、幾冊もあるうちから、一冊とつて、ぱらぱらと、風を起^たてる間に、女は、

「前^{さきのこうもん}黄門、松平龍山公のご隠居所、含^{がんげつそう}月荘のご家老、大村郷左衛門^{おおむらごうざえもん}様へお送りい

たすのです。粗相のないように、扱^あつてください」

と、誇らしく、ひと息に言った。

そのとおりを、送り状に、さらさらと書いて、

「これでございますな」

と、耀蔵は、女のまえの、小箱へ手をのぼしかけた。

「あ、お待ち！」

と、女の眼は、急に、不安にみちて、彼の手を抑えた。

彼^{かのじよ}女^すらの巢

「待^{まち}っておくれ。大事な、大事な、この小箱の中の品物……」

と、女は、自分の腕でも切つて渡すように、その小箱を、愛惜あいせきの手で抑おさえたまま、
「粗略そろに扱あわれては困るのです。——よいかえ」

と、幾度も念を押した。

うまうまと、為替屋かわせや佐渡平の店に、手代に化けすましている加山耀蔵は、

「へい、それはもう」

と、軽くうけて、

「——大丈夫でございます。当家の暖簾のれんをご信用くださいまし」

と、言つた。

が——女はまだ、疑い深く、

「では、私の見ている前で、二重箱にして、荷造りして貰もらいませうか」

「お易やすいこととございます。——これよ、誰かここへ来て、荷箱を造つておくれ」

耀蔵が手をたたくと、ほかの者が、彼女の見ている前で、外箱を造り、二重に入れて、

桐油紙とうゆづつみに縄をかけた。

それへ——

やましろのくに
山城国 四明ヶ岳含月莊御内おんうち、大村郷左衛門様

こう書いた送り状をベタリと糊で貼った。

「これで宜しゅうございませうか。これよりはもう嚴重にいたしようがありませんが」
「結構です」

と、女は初めて、安心したように頷いて、受取書と為替料とを引き換えに出て行つた。

女の姿が、店の外へ消えるとすぐ、

「しめた」

と、耀蔵は、それを掴んで、先刻から店土蔵の蔭に、首尾いかにと、息をころして覗いていた主人の佐渡平の前へ、駈けて来た。

「これだ！ 佐渡平」

「ほう、その小箱で」

「うまく奪つてやった。もうしめたものだ。この中には、櫓下で殺された柳橋のお半の小指がはいっているのだ」

「どうしてそれが、前から、お分りでしたか」

「老先生のご明察、おれにも分らぬ。あの玉枝が、小指のはいった小箱を持って、この店

へ、荷為替を頼みに来るということを、ちゃんと、見抜いて俺を差向けられたんだから、まるで、神のようだ」

「あなた様の仰つしやる老先生というのは、鶉坂うずらざかの塙はなわ様のことで？ ——あの白い髭ひげを胸に垂れた品格のよいご老人のことで」

「そうだ」

「そのお方ならば、数日前に、店へお越しになつて、殺された手前の弟忠三郎と、女笛師のお雪との関係や、また、金かね為替がわせや荷為替などの台帳を、事細かに取調べて、お帰りになつたことがございます」

「ほう、それでは老先生には、いつのまにか、玉枝がこの店から金や荷の送り受けをして、いたことを調べ上げていたのか。——オオ、ついしやべりこんでしまつたが、俺は、こうしてはおられない。佐渡平、ではやがて近いうちに、貴様の弟忠三郎の仇かたきもとつてやるぞ」
 たちまち、前垂れをはずし、縞しまの着物をかなぐり捨てると、そこにあつた、ぼんてん帯ちゆうげんはつぴ、真鍮しんちゆうこじりをうしろに差し込んで、

「一走り、行つて来る」

と、小箱をふところに、裏口から飛び出した。

表通りへ、駈け出しながら、ほおかぶ頬冠かぶりをする。

かねての手筈とみえて、町角の辻には、店の者が立っていた。

黙つて、右を指す。

その先の辻へ行くと、やはり佐渡平の店の者が立っていた。こんどは、左を指している。すると、たった今、店から出て行つたばかりの怪美人玉枝の姿が、つい、半町ばかり先を小急ぎに戻つて行く姿が見えた。

「見ろ、今夜こそは」

ちゆうげん仲間あひだに早変りした耀蔵は、軒下を小走りに尾つけて行きながら、心の裡うちで叫んだ。

「——きつと、巢を、突き止めてやるぞ！ 彼奴きやつらの巢うしろを！」と。

だが、賢い、すばやい、彼女の六感は、たちまち背後うしろの不安な空気を感じたらしかった。数寄屋橋たもとの袂たもとまで来ると、

「駕屋さん——」

と、白い手をあげた。

「あつ」

と、耀蔵があわてる間に、彼女をのせた町駕たかは、山の手の方へ向つて、もう風のように

駈けていた。

「駕屋、駕屋」

と、耀蔵もすぐに、手を振ったけれど、風態の悪い仲間ちゅうげんの呼び声に、おうつと、すぐに応じて来る駕屋はない。

「面倒だ」

耀蔵は、駈け出した。

足と足である。向うは駕籠、こっちは空身からみである。

宙を飛んで、後を尾つけて行つた。

——と先の駕は、外濠そとぼりに添い、増上寺の山内に隠れ、白金台を一気に駈けて、やがて、目黒の行人坂ぎやうにんざかの途中、紫陽花寺あじさいでらの門前で止まったと思うと、女の影は、駕を脱けて、ひらりつと、山門の中へ隠れ込んでしまった。

やましろたんさく
山城探索

「さては、悪人どもの巢は、この寺内か」

と、耀蔵もつづいて、山門を潜った。

庫裡くりの窓に、明りが映さしている。彼は、その下へ忍び寄った。

途端である。

「この野郎っ」

ばらばらツと、左右から躍り出した若者が、有無うむを言わず、彼を組み伏せて、

「親方！ 怪しい奴を捕まえたツ。はやく提灯ちようちんを貸してくれ」

と、呶鳴った。

「なに、怪しい奴？」

すぐに、一人の男が提灯を持って来て、彼の顔へかざした。

「やつ？ 加山さんじゃありませんか。野郎ども、慌あわてるな。これや耀蔵様だ」

「えっ」

と、一同も驚いたが、耀蔵もびつくりした。

「才才、お前は舟辰ふなたつじゃないか。どうしたんだ、こんな所へ」

「あつしは、老先生に、花世様の守護をいいつけられて、此寺ここに見張をしているんですが、

旦那こそ、どうしたんです」

「俺は今、怪美人の玉枝を此寺まで追いつめて参つたんだ」

「だって、誰も、この寺へはいつて来た者はありませんぜ」

「イヤ、たしかに今、駕から降りて、この寺内へ駆け込んだ筈だ」

「筈だと言つても、ねえものはしかたがない……」

「その窓に、ちらと見えた女の影は？」

その声を聞くと、方丈ほうじょうの窓を、さらりと開けて――

「加山耀蔵様ではありませんか。まことに、しばらくでございましたと、麗うるわしい女の声でした。」

はつとして振り仰ぐと、富武五百之進の娘の花世である。あの怪美人の玉枝と、瓜うり二つの花世である。

またしても耀蔵は、妙な疑惑ごうごに囚とらわれて、茫然としてしまったが、舟辰や、他の若者たちの話を聞くと、花世は、昨日も今日も、一步も寺から出たことはない。ああやって、方丈の窓の下で、机よに倚よつたままだというのである。

すると、玉枝は？

耀蔵は狼狽ろうたいした。

「女狐め！ また一杯食わせたか」

いいながら、山門の方へ、駈け戻ろうとした。

すると——江漢老人の声だった。

「加山。もう駄目じやよ」

「あつ、老先生、いつの間に」

「玉枝は、山門の側の、楠くすの木蔭こかげに隠れていて、お前がまつしぐらに境内に駈けこむと、

風のように、自分のほんとの躰ねぐらへ、飛んで帰ってしまったんじや」

「や、や。そんな次第でございましたか」

「だが、慌あわてるには及ばん。どうしたかと、只今、佐渡平の店へ寄つてみたところ、云しかじ々と聞いて、まずよしと、その足でこの寺における花世の安否を見舞に來たのじや。花世

も、今宵かぎり、ほかへ移すことになっておるのでな」

「残念です。どうも、不覚をいたしました」

「なに、よいわ」

と、老先生は、決して部下の罪を深く咎めたことがない。

「それよりは、例の小箱は」

「首尾よく、奪り上げました」

「うム、上出来上出来」

と、受け取って、舟辰の若い者、千吉へ、

「これと、同じような荷を、すぐに、もう一つ作ってくれ」

「へい」

と、千吉は振ってみて、

「老先生、何がはいっているんですか」

「殺されたお前の妹——お半の指がはいっておる」

「えっ、妹の指が」

「だが、今開けてはならん」

「へ、へい……」

と、千吉の手は、怪しくふるえていた。

すぐ同じような小箱を造り、油あぶらがみ紙かみをかけ、縄で括かぢけて、佐渡平の店から持って来た

印しるしつきの送り状へ、同じ宛名を書いて貼はりつけた。

「加山」

——老先生は、彼に、その、偽箱にせばこの方を授けて、沈痛に、

「では、かねてお前に詳しく言いふくめてある通り、これを持って、山城国やましらのくにの含月荘へ」

「はっ」

「急いで行つてくれ」

「心得ましてござります」

「そちの吉報が、一期いちごの浮沈ふちんだ。——まことに、今日はもう六月二日。百日の期間までには、後七十三日と相成つた。一日とてゆるがせにはならん、道中も、急いで頼むぞ」

「必ず、一刻もはやく、吉報をつかんで立ち帰りまする」

「オオ、早く発たて」

「ではご一同、ご免を」

「あつ、待て加山」

「はっ」

「その仲間態ちゆうげんていではいかん。早飛脚はやびきやくの支度を」

「それは、途中で、脱ぬぎ代えます」

「ウム、そうか。まだある、路銀が不足じやろう、それから、わしのこの印籠には、種々ろ々と薬がはいっておる。体を大事に」

と、老先生の温か味。

押しただいて、

「では、ご機嫌よく。——しばらくのお別れを」

と、加山耀蔵は、その夜、その場から、目黒行人坂を振出しに、大山街道から東海道へ。——そしてやがて、白雲つつむ秘密の松平家、山城の国四明ヶ岳の含月荘へと、急ぎに急いで行つたのであつた。

岩壁の暦いわかべ こよみ

彼がとつた道筋は、この前、玉枝が自身で、秘密の小篁こばこを抱えて、含月荘を訪れたあの坂本道と、変らなかつた。

途中で、姿はすっかり、飛脚屋に変装して、例の小箱を、棒の端に括り付け、手拭てぬぐいを巻いて、肩に担いでいる。

色の褪せた紺の脚絆、陽に焦けた、皮膚は黒いし、髪は埃にまみれている。誰が、どう見ても、飛脚屋である。江戸の同心と観破られツこはない。

ただ、まずいのは、足に、草鞋摺れの水腫ができて、それが痛むことだった。何しろ、こつちへ来る前は、病臥の床に横たわって、寝癖のついていた足なので、たちまち傷めてしまったのが、道中十六日の間によけいにひどくなっていた。

そのために、着く日も、予定よりは、四、五日遅れてしまった。出立の際、老先生に言われた言葉を思い出して、彼は、一日の日も、一刻の時間も、黄金を費うように惜しんで歩いた。

やっと辿り着いた四明ヶ岳——その中腹にある山荘の黒門の前に、彼が立ったのは、ちようど六月の十七日。

「飛脚でございます。江戸表から参りました急飛脚の者で——」
門内へ向って、呶鳴ると、

「飛脚か」

と、門番ではない、厳めしい山侍が、柵の間から覗いた。

「へい、荷為替です」

「書状ではないのか」

「送り状に、ご直手じきしゅとございます。宛名のお方に、じかにお渡し致して、ご印判はんを頂戴いたします」

「誰だ。宛名人は」

「大村郷左衛門様とござります」

「ご家老か。——品物は」

「三寸角ばかりの小箱で」

「問屋とんやは」

「為替かわせもと元は江戸 本石町ほんごくちよう 佐渡屋和平さどやわへい」

「待つておれ」

山侍は引っこんだ。

しばらくすると、出てきて、

「飛脚屋、はいれ。——脇差わきざしは、門番小屋へ預けて、拙者のあとに尾ついて来い」
檜並木ひのぎの奥まった玄関である。そこを、横へ廻ると、書院の縁先が見える。

「おう、江戸の飛脚屋か。遠路大儀であつたぞ。その品の着くのを待ちかねていたところ

じゃ」

と、さきのこうもん前黄門 亀山公の家老、大村郷左衛門は、そこにいて、うしろにいる子息のもんど主水へ向つて、

「これ、早速あれを受け取つて、直じきしゆ手とある送り状へ、わしの印章を捺おしてつかわせ」

「父上、また小箱が来たんですか」

「よけいなことを申さずともよい。はやく捺してやらんか」

「飛脚屋、ここへ持つて来い」

「へい」

と、耀蔵が、何気なく縁の側まで寄つて、それを主水の手へ渡すと同時だった。

「廻し者め！」

床下から、ふいに、伸びてきた手が、彼の脚をつかんだ。うしろに立っていた山侍は、同時に、彼の襟がみを掴んでいた。

「あつ！ ……な、なんとなされます」

「黙れッ」

大村郷左衛門は、ぬツくと立つて、怖ろしい眼で彼を睨ねめつけた。

「其方は、塙江漢はなわこうかんとやらいう老いぼれの無役者むやくものに加担かたんいたして、畏れ多くも、前黄さきの門龍山公のご隠居所うかがを窺うかがいに來た犬であろう」

「やつ？ ……」

耀蔵は、あまりのことに、口がきけなかつた。——どうして、こう早く、自分が着かないうちに、自分の素性が観破くわんぱされてしまったのだらう？

「それつ、縛からめろ！」

悠々ゆうゆうと、郷左衛門が、第二の喝かつせい声を吐いた時には、もう山扮装やまいでたちの侍たちが、蟻あまのように、彼の周囲を取りかこんでいた。

「チエツ、残念」

彼は、地だんだを踏んだ。

「ばか！」

「たわけ！」

「間拔まぬけめ」

あらゆる罵詈ぼりと乱打が、彼を、地上に蹴ころがした。それを、大村父子おやこは心地よげに見下ろしながら、

「わははは。智恵なし同心め、自分の来るよりもはやく、江戸の方から、種明かしの密書が、宿場次ぎの早飛脚で、飛んで来ているとも知らずに、化け澄ましてきたのは笑止千万だ。——それつ、霧谷の岩牢へ、こやつを抛りこめ」

山扮装の侍の群は、耀蔵のからだを引つ担いで、四明ヶ岳と如意ヶ岳のあいだにある、谷間へ降りて行つた。

俗に、霧谷とよぶくらい、そこは、二六時中、霧の霽れたことのない陰湿な沢だった。ばり、ばり、と枯木や、落葉を踏みしめて来た谷間の岩窟——陽あたらずの岩壁——魔の口のような真つ暗な岩屋牢。

耀蔵は、その中へ、抛り込まれた。

暗い！ 夜よりも暗い！ 外は絶えずぼやつと霧が煙っている。

「番人なしで大丈夫か」

侍たちは、しばらく、外で騒めいていた。

「なに、この嚴重な鉄の柵が破れるものか。——それに、見張は、如意ヶ岳の山の主が、ちようど、真向うから見張っているんだ」

「ウム、炭焼の作兵衛か。なるほど、あの炭焼小屋からは真正面だ」

「しかし、幾日で死ぬだろう」

「まあ、十日も保つか」

「水があるから、案外長く生きてるぞ」

「それにしても、二十日か、二十四、五日もたてば、この湿気だけでも、余病を起してくたばるに違いない」

「では、三十日目に来てみるか」

「その頃には、白骨になつていても知れん」

そんなことを言い合つて、ぞろぞろと、立ち去つてしまった。

——話の様子では、明らかに、自分を餓死させるつもりであることが、耀蔵にも分つた。案の如く、それつ切り、訪れる人間はなかつた。絶対に、一粒の米も運ばれなかつた。無論、岩窟いわあなの中には、何ら口に入れるような物はない。

ただ、滴々てきてきと、からだを打つものは、岩壁の肌から乳のように絞られる清水しみずである。

三日——四日——七日——九日——彼は上を向いて落ちてくる清水を口にうけて、生きていた。

ある夜は、凄い暴風があつた。ある夜は、谷の霧が、海の底のように見える月夜だつた。

——そして半月、そして二十日^{はつか}。

死は、一日ごとに迫つて来た。

湿気のために、皮膚いちめん、妙な腫物^{しゅもつ}ができて、瀕死の彼を苦しめた。胃も腸も、空っぽである。胃液は、もう消化する何物もないのに、まだ主体を生かさんために、胃壁そのものを溶かしはじめた。自壊^{じかい}自給作用である。それは堪^{たま}らなく不快な嘔吐^{はきけ}気と激痛とを発作的に起した。——眼はくぼみ視力は衰退し、爪は白っぽくなって、肉の削^そげた細い指の先に、一枚一枚、ぼろりと落ちそうについている。

「死んではならぬ！ 死んではならない！」

彼は、その一念で、生きていた。

また、栄養なく、ただ剃^{かみそり}刀の刃みたいに鋭くなった頭脳^{あたま}の中は、一日一日と、暗黒に空虚に、消えてゆく日のことだけでいっぱいだった。彼は、岩窟^{いわあな}の外の光線によって、毎朝、岩壁へ爪の先で深く一筋ずつ印^{しるし}を彫つていた。

「ああ……今日でもう二十二日」

岩壁^{いし}の曆^{よみ}の筋は、今朝で二十二本になった。

江戸を立った時からの日数を繰ってみると、もう四十日近い時間が空しく、まったく空

しく、消えているのだ。

「ええ、どうしよう！」

彼はもだえた。いや、悶える力すらも、今は一刻ごとに、その肉体から失くなって行くのだ。彼は、コツコツと、自分の心臓をたたく死の音に恐怖した。

「俺は生きたい！俺が生きて、もういちど江戸表へ帰らなければ、老先生は自滅だ。——ああ、それもわずかのうちに」

絶望絶叫

岩壁の層は、また一本、数がふえた。

——二十三。

今朝まで、からくも、彼の生命を繋いで来たのではないかと思われる岩肌の青苔も、すべて、彼の爪に搔きとられて、牢内に、青いものは失くなった。

彼は、土を削って、口に入れたが、しばらくすると、胃の激痛と共に、吐いてしまった。曆を記録すると、一日の仕事は、何を食うべきかということだった。彼は、すばらしい

僥倖^{ぎようこう}を掴んだ。一念になつて、牢中の石ころを剥^{めく}つているうちに、一匹の蟊^{がま}を見つけたのである。また吐くといけないという要心から、その日は、蟊の片股を食い、晩には、皮を食い、翌朝は、すべてを食べた。

——岩壁の暦、二十四。

蟊に味をしめて、彼は、夕刻になると穴の奥から外へ出て行つて、また歸つて来ては穴の奥に貼りついている蝙蝠^{こうもり}を捕る工夫をこらした。蝙蝠が食えるか、食えないか、そんな常識は、彼にとつて問題ではない。

——岩壁の暦、二十五。

今日まで、生きていられるのは、水と苔と、蟊^{がま}のおかげである。蝙蝠^{こうもり}はなかなか捕れないが、彼は、牢の鉄柵^{てつさく}のそばまで這い出して、数匹の昆虫を捕つて食べた。また、柵から手を伸ばして、石楠花^{しゃくなげ}の葉を五枚ほど^{むし}り取つた。それは、口のなかで噛みしめていると、何か、非常に力になる気がした。

——岩壁の暦、二十六。

「やつ、まだ生きてるぞッ」

「えつ、生きてる?」

「ほれ、ごらんなさい。主水様もんど」

「なアるほど、眼ばかりぴかぴかさせておるな」

「強情な奴ではある」

「飢え死になどは面倒くさい。父上に言つて、翌日あしたは、長槍を持って来て、外から突き殺してしまつたがいい」

「槍では、奥へ逃げると、届きません」

「では鉄砲がよからう」

「そんなに、楽に殺しては、この後の見せしめになりません」

「なに、もうたいがい、見せしめにはなつてゐる。翌日あしたは、わしが撃ち殺してやる」

郷左衛門の子息、大村主水の声だった。四、五人の山侍たちと、中を覗いて、こんなことを言いながら立ち去つた。

その晩は、電光雷鳴、山も谷も樹木も、押し流されるような暴風雨だった。

——岩壁の暦、二十七。

颯たいふう風の後のせいか、めずらしく、霧がなく、谷間にも少し陽が射した。

「やっ?」

眼をさますと共に、彼は、氣絶するほど吃驚した。

誰だ？ 誰の仕業だ？

鉄柵の内側に、何者か、一箇の白い握り飯を入れて置いてある。彼は、驚喜してとびついたが、はつと、手を竦めた。

「止そう！ 鉄砲のかわりに、俺を毒殺する計略だ」

——岩壁の曆、二十八。

今日はもう、また、深い霧だ。

昨日の握り飯がないと思うと、また、新しい握り飯が置いてある。見ると、それを乗せた竹の皮に、一枚の紙片かみきれが挟んである。何が書いてあるのかと思うと、

後三十一日也。

と、謎みみたいな六文字が記してあるだけだった。

「はてな？ ……後三十一日也？ 何のことだろう」

と、耀蔵は首をひねった。

「後三十一日也……後……あつそうだ。今日は日をかぞえれば七月の十五日、老先生の百日の期限までには、ちょうど後三十一日だ。不思議、不思議、誰がどうして、そんなこと

まで知っているのだろう。そしてこの握飯むすびをおれにすすめるのだろう」

彼は、怖々こわこわと、十粒ばかりの飯を、奥歯で糊のりのように嚙んだ。べつに、毒の作用も起らなかった。しかし久しい間、空っぽの胃ぶくろに、一箇の握り飯をふいに入れることは危険だった。時折、幾つぶ宛ずつかを根気よく嚙んでは、そつと喉へ通した。

——岩壁の暦、二十九。

朝、昼、何事もなかった。

夕方である。不意に訪れた登音だった。

「なるほど、生きてるぞ」

「執念ぶかい奴だ。——では殺やつてしまおうか」

「鉄砲は」

「三挺ちよう持ちつてきた」

「ここへ並んで、筒つつぐち口くちを揃そろえろ」

大村主水もんどを先頭にして、そろそろと尾ついてきた含月荘の山侍、ぎつと、十人ほど。

中の三人が、鉄砲の筒をならべて、折敷おりしきに構えた。三ツの火縄が、牢の中うちにいる耀蔵の方からも赤く見えた。

「駄目だ！」

耀蔵は立った。

「老先生——つ。おゆるし下さい。遂にご使命を果たさず、加山耀蔵はここで殺されます。この無念は、夢枕に立って、お詫びをつかまつります」

と、さんぜん濟然と泣いて顔を掩った。

「見ろ、何か、喚わめいているぞ」

「発狂したんだろう」

「撃てッ」

と、もんど主水が命令した。

作兵衛小屋

どかん！ と並んでいる銃身の筒口から、三つの弾たまが、同時に、鳴った。

だが——いわあな岩窟の中の耀蔵は、たお仆れなかった。一発は彼の脚を掠かすめ、一発は、岩窟の肌にあらずと通った。——そしてあとの一発は、不発だった。火縄もろとも、銃は侍の手を離

れて、宙へ躍り上がっていた。

「やッ、斬られた!」

血汐ちしおである、血煙ちけむりである。夕闇なのと、深い霧で、よくは分らないが、温ぬるい血液のか

たまりが、ぱつと、側の者へ刎はねかかった。

どさつと、続いて、誰か仆れた。

「わっ、誰だッ」

「何者だッ」

「一同。——気をツ、気をつけろ」

大村主水は樹の上へ逃げ上がった。それはすばらしい迅さと鋭さを持った一本の山やまがた

刀なだった。いきなり、横合から斬ッてかかって、その人影の誰なるかを問わず、滅茶滅

茶に、振ッて振ッて、振り廻すのであった。

ところへ、更に、また一人。

野獣のような怪老人が、鉞まさかりを振りかぶって、山侍の頭蓋骨づがいこつをたたき廻った。主水の逃

げ上がっていた樹は、たちまち、怪老人の鉞で根元から伐きられた。めりつと、彼の体に乗

せたまま樹の倒れて来るところを、雷撃一閃! 鉞はおどって、

「この！ 悪党の餓鬼め」

と、打ち下ろした。

主水の顔は、柘榴ざくろのように割れた。

「みなごろしだ！ わははは」

怪老人は笑って、次に、岩窟いわやの鉄柵を打ちくだいた。

その間に、一人の若者は、早くも中へおどり込んで、まだ茫然と、棒立ちになっていた耀蔵を背中に背負って、谷から峰へと、一目散に駆け出した。

振り顧かえると、谷間は、炎々と焼けていた。

「あつ、山火事」

「なに、溪川たにがわがあるから、ひとりでに消える。あれで含月荘の侍たちが消しにくる頃には、死骸はみんな灰になる」

怪老人——それは如意にょいヶ岳たけの主ぬしといわれている作兵衛しんべいと、もう一人は、何ぞ知らん、この炭焼小屋かまの竈かまで、かつて大村父子おやこと山侍たちのために、蒸殺むしころしの刑にかかって、とうにこの世に生命いのちのないはずの江戸表の同心、加山耀蔵とは同役であり、無二の親友だった波越八弥きりが、昔に変わる樵夫きり姿で、まだ立派に生存していたのであった。

「さ、八弥様。病人はそのまま、小屋の中へ寝かせたがいいだ」

作兵衛小屋へ着くと、山の主ぬしの爺おぢは、すぐに小屋の中へ筵むしろを敷いた。

耀蔵は、八弥の背中で、匆はね返つて、

「いや、俺は寝ない。俺は病人なんかじゃない」

と、呶鳴うなづつた。

「おや、えらい元気じゃな」

「誰だ！ 誰だ！ 俺を救ってくれたのは、俺は、それが知りたい。俺を背負おぶっているのは誰だ」

「加山！」

と、波越は、彼を下ろして、痛いほどな力で、その腕を握りしめた。そして、眼まばたきもせずじつと見つめる彼の眸ひとみの前へ、自分の顔をつきつけて、叫んだ。

「加山！ 俺だ！ 波越八弥だ」

「げッ」

と、耀蔵は驚倒した。

「波越ッ」

「加山ツ」

「ど、どうして貴様は」

「奇遇だ！ どうしたって、悪人ばらの往生を見ぬうちに、死んでたまるか」

「そうだ！ 死んでたまるものか。——だが貴様が生きているとは思わなかった。イヤ、俺さえ助かったのが夢みたいだ」

「何を隠そう、今だから言うが、実は拙者は、この春、单身この含月荘へ乗りこんで、見事に大村父子や玉枝の秘密をつかんだのだ」

「ウム、ではこの先陣は、貴様だったのか」

「ところが、かえって、悪人ばらの陥穽かんせいに墜ちて、この炭焼小屋の竈かまの中に抛り込まれて、彼奴等の眼前で、蒸焼きにされてしまうところだった。——それをここに居る作兵衛が、際きわどい瞬間に、拙者の体を、竈から出して、人間の身代りに、この小屋に飼われていた猿を抛りこんで火を放つけたのだ。猿が、中で暴れるのを、俺が苦悶するものと思つて、彼奴等は、凱歌がいかをあげて引き揚げた。それから後、おれはこの小屋に、樵夫きこりとなつて同居しながら、含月荘の探索をつづけていた……」

「だが、どうして、老先生の百日の期限のことまで、分つたのか」

「江戸の事情は、また審つぶさに、問とい糺ただす人間が、この小屋へ戻つて来たのだ。今、それにも引き会わせるから、こつちへ来い」

こうもんこうげざん
黄門公下山

加山は昂奮して、疲労も何も忘れていた。

八弥と作兵衛じい爺の後に尾ついて、薪たきぎ小屋の中へはいつてゆくと、そこに、一人の男が、後ろ手に縛しばりつけられていた。

一目、その男を見ると、耀蔵はまた、愕がく然ぜんとして、

「やつ、この男は、江戸にうろついていたあの唾つ嚢じやないか」

「そうだ。吾々は、名も分らないので、唾つ嚢じやと呼びつけていたが、今日こんにちでは、彼の名は、岩いわ松まつということが分つた」

「岩松？」

「そうだ。そしてこの岩松こそ、実に、そこにいる作兵衛おやじ爺せがれの倅がれであった。——生れつき愚鈍ぐどんのために、何者かに強迫されて、江戸くんだりまで、連れて行かれ、つい五、六日前、

神隠しに遭つたように、ボンヤリと、この小屋へ戻つて来たのだ」

「じゃ、矢張り、悪人たちの手で、傀儡に使われたのだろう。しかし、そのわが子を、作兵衛は何でこんなに窮命するののか」

「作兵衛は、この山の主といわれる正直者だ。不正なことは大嫌いな頑固者。だから、わが子の岩松が、悪人どもと何かしたのではないかと見て、三日三晩、この薪小屋に縛りつけて、何もかも白状するまでは許さない。で、とうとう、唾の岩松も、知ってる限りのことを、爺の前で懺悔してしまった」

「待つてくれ、岩松は唾で聾。どうしてそんな白状をしたり、訊ねたりすることができるのか」

「それは、作兵衛爺だけには出来る。なぜと訊くのも野暮ではないか。作兵衛爺は、岩松の親だ。乳呑児の時から男の手一つで育てて来た親だ。眼のいろ、唇のうごき、手真似、身振だけでも、話は立派に通じるんだ」

「なるほど」

「その結果。貴公がこつちへ来たらしいということ、また、老先生が百日の期間のうちに、事件の解決を約して、それが果せない時は、郁次郎殿も処刑をうけ、ご自分も、腹を切

つて死ぬお覚悟だということも分つた。——しかもそれが、おととい一昨日の雷雨の晩のことだ。夜明けと共に八方、貴公の行方を尋ねたところが、つい谷向うの、いわやろう岩窟牢にほうこ抛り込まれているじゃないか」

「ああ、有難い！ 神はまだおれ達を見捨てない」

「そうだ。正義はきつと勝つよ」

「すぐに、江戸へ行こう」

「ばかを言え、その体で」

「なにくそ！ 行ける！ 歩ける！」

「いかにいかに。そう気ばかり立つても、肉体が承知しない。まあ、二、三日、静かに寝て、体をこしらえろ」

「愚図愚図していると、もう日がない」

「何、まだ一月はある」

そんなことをいつてる間に、山火事はひろがった。作兵衛は、含月荘の山侍がここへ来ては大変だからと言って、二人を、べつな薪小屋の中へかく匿し、自分は何食わな顔をして、火事を消す手使いに駆けて行つた。

間もなく帰つて来て、

「奴らも、今日はよほど慌てている」

と、言つた。

「なぜですか」

と、八弥がたずねると、

「どうやら、含月荘の高楼たかどのにいる黄門様が、翌日あしたは、江戸表へご発足になるらしい」

「えつ、あの、九年間も高い櫓やぐらの上に住んで下界へ降りたことのない龍山公が、江戸表へ

ご出府になるつて」

「そうじゃ。偉いこつちや。亀山かめやま六万石のお家も、とうとう、お世継よつぎなしで、この秋は、

絶えるかも知れんでのう」

「それは一体、どういうわけで」

「いつかも、八弥様には、話したことじゃが、黄門様のお側女そばめの血すじの者が、この世の何処かに、四人はたしかにいるはずだが、もう幾年となく尋ねても、それが分らぬ。――

とこうする間に、この秋ではや十年。その十年のご猶予ゆうよが切れれば、六万石にのしを添えて、幕府へ、家名をご返上せねばならんのじゃ。――で、いよいよ、お血統探ちすじさがしは諦めあきら

て、幕府へ家名のご返上に出府することになったんじやろう。何としても、お傷^{いた}ましい」

「ははあ……」

と、加山は初めて聞いた話に、何か、じつと考えこんでいた。

と、——改まって、急に、

「波越」

「なんだ」

「まことに濟まないが、貴公、これから俺を背なかにかけて、発^{ほっそく}足してくれ」

「どこへ」

「無論、江戸表だ」

八弥も何か考えていたが、

「よし！ 命がけで出かけよう」

「おやしおやし、爺、水みたいな粥^{かゆ}を煮て、竹筒へ入れてくれ。それを吸いながら、俺は江戸表へ行く！

這つても行く！」

「まあ待て。もう半日寝て」

「半日は重大な時刻だ。寝てなどいられるものか」

「いやその間に、粥が煮える。また、拙者もその半日を、無駄には費さん。少し考えがあるのだから」

と、何か密談を凝した後、八弥はやがて耀蔵と連名して、一通の書面を認め、その署名の下へ、血判を捺して、

「じゃ、行ってくる。その間だけでも、体を休めてくれ」

と、飽くまで友達思いのことばを残して、薪小屋から一本の矢と、竹弓を持って、それを小脇にかかえるが早いか、何処ともなく飛び出して行った。

乾坤堂の客

前黄門 松平龍山公の世にも薄命なる隠遁の高楼、含月荘の楼上に今宵もまた、ポチと夕ぐれの燈火が哀れに点いた。

——と、どこからともなく、風を切つて飛んで行った一本の矢文が、ぷすつと、その灯のついた窓の柱に立った。

矢文！

気がついたららしい。

お小姓こしょうの蘭之助らんのすけか、杉太郎か、それとも黄門公自身の手か、窓がほそく開くと、抜きとつて、すうつと、内へ引き込んだ様子であった。

「しめた、お手もとに届いたな。——あれをご覧になったお答えは、灯でご合図を願いたいと書いておいたから、あの窓の灯が、消えればご不承知。左右にうごけば、こっちの計略を、ご承認くださることになるわけだが……」

と、峰の一角に隠れて、片唾かたずをのんで見つめているのは、いま矢を放した波越八弥。

やがてしばらく——

高樓たかどのの窓の灯が、左右に、静かにうごいた。

「あつ、ご承諾だ。ありがたい」

それを見届けると、八弥は一散に、作兵衛小屋へ帰つて来た。

重粥おもゆをすすり、久し振りに、藁の上で一睡した耀蔵は、だいぶ元気になって待ちかねていた。

「波越、遅かったじゃないか」

「一刻ひとときでも、貴公が体をやすめるように、わざと日暮れまでぶらついていたのだ。しかし

欣んでくれ、矢文の願意は、お聞き届けになった」

「そうか。ここまで事を運んで帰れば、老先生もさだめしお欣びだろう。夜にまぎれて、早速立つとしよう」

作兵衛は、松明たいまつを持って、ふたりを叡山えんざんの近くまで送った。そして別れ際に、自分も、

もうあの住み馴れた山にもおられなくなつたと言つて、老いの眼をうるませた。

× × ×

この頃、急に評判が立つた。——よく中あたる、実によく中あたる。そういう噂で、ひどく流行りだした乾坤堂けんこんどうという売卜者ばいぼくしゃ。

毎日を出ないが、三日、五日、七日に出る。場所は蔵前の閻魔堂えんまじょうの境内。九尺二間の借家が出張所で、今日は、月の三日にあたるので、もう朝からだいぶな客があつた。

「先生、もう今日はこれぐらいでいいでしょう」

下足番の男も疲れたとみえて、暮六刻くれむつが鳴って客足が少し途切れたところで、こう言い出した。

「開けていたひにや、限りきがありませんぜ」

「そうだなあ。七刻仕舞ななつじまいが規則だが……。きょうはだいぶ見料が上がった。早仕舞いとして、一杯飲もうか」

「たまには、そんなことがあつて、ようがすよ。先生のように、金を儲けちや、仕舞い殺しにするばかりが能じやありませんぜ」

「あははは。では、ぼつぼつ片づけるか」

と、筮ぜいちく竹たけを袋ふくろに入れかけた時である。

「あの……乾坤堂けんこんどうの易者様は、こちらの先生でございますか」

門に、女の声がした。

下足番の男は、舌打ちをして、

「もう今日は、仕舞いました。また明日じゃねえ、次の、五の日にでもおいでなせえ」

「あ……これこれ」

と、奥の机から首をのぼした乾坤堂は、四十をやつと、二つか三つ越したくらいな年配、総髪そうかみをきれいに後ろへ撫ひげで、髻ひげの手入れもとどいて、すこし赭あから顔がおに、鼈べっこう甲こうぶちの眼鏡めがねをかけている好色家らしい人物だ。

「まだ七刻前ななつじゃ、観みて進すすめる」

「あれだ……女というと」

下足番は、呟いて、不承不承に女を通した。女は、秋には早い、頭巾をかぶって、そのまま机の前に坐った。下足番が嫉ま^{ねた}しげにつぶやくほど、眩^{まぶ}しい若さだった。

「ははあ……」

と、乾坤堂はじつと見つめて、

「観てもらいたいというのは、男女のことでござるな。恋でござろう。そうらしい」

「ま……それもございますか」

と、女は顔を紅^{あか}めて俯^{うつむ}向きながら、

「ほかにも、もう一つ、大きな願い事が」

「ウーム、その願^{がん}望^{もつ}ならば、かないましょう。いやきつとかなう。ご安堵^{あんど}なされい」

「ほんとに、かないましょうか」

「今に、西の方から、福音が訪れましょう」

「西の方から。——していつ頃」

「遠くはござらぬ。ここ一月ばかり以内」

「少々、思いあたる場合がございます。ですが、その願望が成^{じょう}就^{じゆ}した後、私はある男

から、去られることはないでしょうか」

「今の良人おつと……とは言えぬ、まあ、約束をしたお相手じやな」

「はい」

「手をお見せなさい。——イヤ、左の手」

と、女の手相をしげしげと眺めていたが、ひよいと、指の爪を調べて、

「おや、貴女あなたには、妙な爪がある。この黒いのは」

「あ……そ、それですか。それはあの……何でもございませぬ。鉄漿おはぐろを解く時に、指を入れて、汚したまま、つい拭きもせずに置きましたので」

「あ、そうか」

と、乾坤堂けんこんどうはつまらなそうに、手を離して、

「あなたは、愛してござる男と、絶えず離れておる象かたちじや。それがよくない。去る者うとしという例たとえに洩れぬ方じや。なるべくその男の側を離れぬがよい。殊に、土地を離れたら

この縁は切れますぞ」

女は、くどく様さま々な問を出して、やがて帰って行った。下足番の男は、すぐに戸を閉めて、

「老先生、何だつて、網にかかつてきたあの玉枝を、みすみす返してしまつたんです」と、食つてかかるように問詰つた。

同時に、隣の部屋からも、

「惜しいことをした。今に、老先生が、それつと言つたら、ふん捕まえてやろうと腕をさすつていたのに」

と、言いながら、出て来た者がある。

それは舟辰ふなたちであり、下足番の男は、千吉だつた。

四十二、三の好色家らしい売卜ばいぼく先生は、実に、白髯はくぜんを剃り落して、頬綿ほおわたをふくみ、音声まで巧みに変えた埤江漢はなわこうかんなのであつた。

「いや、それはいけない。——あの女の住居すまいの近くに、こんな売卜ばいぼくをはじめたのも、玉枝を誘おびきよせる手段には違いないが、今ここで女に繩を打てば、すぐ一方の敏感な悪魔の首領を逃がしてしまう。玉枝の烏爪は見届けた。まずそれだけで結構としておこう」

「ですが、老先生、もう今日は八月の三日ですぜ」

「そうだ、百日の期限も、あと十二日になつた」

「一体どうなさるおつもりなんで……」

「天なり命なり、今に、加山から何とか吉報があるろう。その便りが来ないうちは、いかに江漢でも、手の下しようがない」

「あの耀蔵さんも、一体、何をぐずぐずしているんだらう」

こう言い合つた翌々日である。

加山耀蔵、波越八弥、二人は江戸へ歸つて来た！

すぐその翌々日は、前さきのこうもんこう黄門公、松平龍山公びこう微行の列が江戸表へはいつた。

相前後して、たつた二日ちがいである。

だが、その黄門の龍山公は、どこを宿所に定められたか、まだ、辰の口へも届け出がない。江戸の上屋敷も下屋敷も、あるにはあるが、十何年間も閉めつ放しで、到底、一時の宿とするにも足りない荒れかたである。

奉行所では、しきりに、たずねていた。

それは、南町奉行自身ではなく、所内にいるらもんとうじゅうろう羅門塔十郎が、龍山公の出府を機会に、ぜひ拝謁したいというので、あつちこつちと訊き廻つていたのであつた。

東儀与力は、またこのところ、老先生のすがたが、消えたように江戸から見えなくなつたので、しきりとそれを気にしては、

「もう近いぞ、近いぞ」

と、口癖くちくせのように言っていた。

そのうちに、とうとう、期限の百日もあと一晩、九十九日目が出来てしまった。

羅門も、この日は、何かあるかと緊張した面持で、奉行所につめていた。

ところが——昼——夕刻——になっても塙江漢の方からは音も沙汰もない。

つきむか
月の迎え

「なあ羅門らもん氏。江漢はどうとう、夜逃げをいたしたらしいぞ」

「いや、そんなお方ではない」

と、羅門は、この間際まぎわになっても、決して相手の老先生を侮あなどらなかつた。尊敬の気もちを、ことばにも、忘れなかつた。

「しかし、今に至つても、沙汰のないのは如何いかしたものだ。拙者の考えでは、吾々に会わず顔がなく、逃亡したか、でなければ、老腹おいばらを切つて、今夜あたりは何処かで死んでおるんじゃないかと思うが」

「まだ分りますまい。明日の晩——そして夜明けの鐘が鳴るまでは」

「あと一日や半日で、どうなるものではない。もうそろそろ、郁次郎の首斬り道具を、並べておいても間違いはない」

「それはそうと、亀山の龍山公は、どこへ宿所をおとり遊ばしたかなあ。ぜひご拝謁を願いたいことがあるのだが……」

「羅門氏は、そればかり気になすつていますが、何か火急のご用事なのか」

「お世継よつぎの問題で、六万石のお国許くにもとの浮沈にかかわる一大事なのです。この羅門も、かねてご依頼をうけていることゆえ、安閑と、よそごとには眺めてはおられません」

「そうそう、いつか承った。龍山公のお血統ちすじを探すについて、尊公そんこうが内々その詮議せんぎを仰せつかつているというような話を——」

「されば、それについて、非常に心をいたためておるが、昨年来当奉行所かかわにあ関り合つて、意外な難事件たすさに携たすわつたため、その方がすつかりはかど撈はらずにいるのです。こんどのご出府には、まず何よりまつ先に、そのお詫びからいたさねば気がすみません」

「ご尤もな心配じや。しかし、幕府の方は、御老中や要路の役人方へ、相応な黄白こうはくをもつてご挨拶いたせば、まだ二年や三年のご猶予はして下さると思うが……」

話しているところへであった。

「羅門様、ご書状です」

と、下役の者から、届けられた一通の密封。——はつとして、羅門の顔が紅あかくなった。

「オオ、龍山公から。たつた今、噂うわさをしていたところ……」

と、押しただいて、封を切つた。

紛まぎれもない、直筆じきひつ。前黄門さきのこうもんの品位のたかい書風であり、それに、有名な能筆なの

ですぐに分る。

「お使者の方に、相違なく、明夜は参上いたしますと、お答えしてください」

こう返辞を伝えているのを聞いて、東儀は、

「明夜？ 明夜は郁次郎の首を斬る日だのに、尊公が、立ち会わぬのは甚だ困る」

「いや、夜明けまでには、立ち帰ります」

「して龍山公は、どこにおられるので」

「ご親戚だそうで、八重洲河岸の小笠原左近将監様のお屋敷に、ご滞在ということでは

す。ご隠居のお身ではあり、ご微行びこうのことなので、よほど、質素にお住居すまいと見えます。――

――折から、明夜は八月十五日、ご邸内に名月の宴えんが催されるから、月見がてらに、訪ねて

参れという有難いおことばなので」

「あ。なるほど、あしたは十五夜だ」

東儀は、去年の名月を思い出して、なんとなく、戦慄された。

翌日の夕刻になると、羅門は、常になくいそいそとして、黒龍紋くろりゆうもんの袴かみしほかま、袴はかま、身みなり扮なりも

隙なく、若年寄小笠原左近将監の邸へ出向いて行った。

龍山公は、待ちかねておられた。——彼の通されて行った月見の大広間、松洩まつもる月の影

が、銀波のように、百畳の間いっばいに映うつっていた。

廊下に照る月、泉水に映はえる月、庭の夜露にかがやく月、燭しよくはなくとも、明るかった。

「へへっ……」

正面の老公を仰いで、羅門は、ぺたりと平伏した。それは、君臣の礼儀ひとに等ひとしかった。

「羅門」

と、老黄門は、厳おごそかに会釈をうけて後、その白銀を植えたような長髯ちようぜんの先を指でま

さぐりながら、

「余が今度の出府、なんの為か、存じておろうが」

「恐きよう察さつ申しあげておりまする」

「いかがいたした、詮議せんぎの事は。——かねて国家老大村郷左衛門より、そちの技倆ぎりようを見込んで、篤とくと申しつけてあったに、遂に今にいたるまで、何の効もあがらぬではないか」

「不肖ふしょう羅門塔十郎、不才をもつて、老公のお眼鑑めがねを身にうけ、ここ数年来、寢食を忘れて苦心はしておりますなれど、何せよ……」

「その言い訳は、郷左衛門からも聞き飽きておる。しかも、すでにそれは遅い。幕府へのご誓約に対しても、この秋には、亀山六万石の家名はご返上せねばならぬ時機ときに迫つておるのじや」

「しかし、羅門の承知しますところによれば、それは要路の大官方へ、何らかのご方法をもつてお願いいたせば、まだ兩三年の……」

「だまれ、だまれ！」

老黄門は、千軍を叱咤するように、声をあらげて、

「九年の間、雲閣に坐して、身は老衰隠居いたしても、前黄門さきのこうもん松平周防守すおうのかみであるぞ。左様なこそくな手段ができると思うか、うつけ者め！」

「へへッ」

と、さすがの才人羅門塔十郎も、威圧されて一言もなかった。

「数年の間、身が落胤らくいんをたずねるために、国家老郷左衛門の手を通じて莫大なる手当を与えておいたに、汝は、それをよいことにして、空むなしく、徒食しておったのであろう」

「滅相めつそうもないおことば」

「では、今日まで、何をいたしたか」

「実は、まだ確証の揃うまではと、ご披露はいたしませぬが、たった一人、ご落胤らくいんの女によし性を、見出してはござりまするので」

「なんじや？ ……」

と、龍山公はたちまち、喜悅きえつを満面にみなぎらして、脇きょうそく息から乗り出された。

「羅門、それは真まことか。なぜ、そうならそうと早くいわぬ。——この際いまじや、きびしい証あかしは多く要らぬ。何ぞ一つでも、たしかに、この龍山の血統ちすじじやといえる印しるしさえあればよい。

してその女は、いずれにおるか」

「ただ今は、蔵前くらまえ片町かたまちのほとりに、侘わびしくお住居すまいでござります」

「ほう……何をして」

「鷺江雪女さぎえゆきじよと申す笛師の弟子となつて、舞曲を習つておりましたが、てまえが、それと知りました後は、世間に知れては悪あしと存じて、何事も遊ばさずに」

「年は。また名は」

「ちやうど二十四歳。お名は、玉枝様と申しまする」

「何か、血統ちすじという証拠は」

「ご系図一卷」

「なに系図書かぎ、それは立派な証拠だ。ほかには」

「そのご系図かぎに書いてあるのを見ますと、四名のお孫様は、みな女によしやう性せいでござりました。そして、ご姉きやうだい妹いの年順に、まだ乳呑児のうちに、左の指の爪へ、漆うるしのごとく、お鉄漿はくろの入墨いれずみをなされました」

「爪へ、入墨をしたとか。それは、何の為に」

「恐らくは、高貴のご血統けつとうたることを、子孫から子孫へ、遺のこすためではないでしょうか。尤も、小普請こぶしんの石川家には、昔から女子は夭折はやしにするという遺伝いでんがあつて、それには、左の指の爪を、齒のように、鉄漿かねで染めれば育つという申し伝えもありましたのです」

「ふーム……。さては、わしの正腹しょうふくの嫡子ちやくしのないことを、石川家の方でも薄々心にとめていたものと見える」

「まさか、その石川家が断絶して、ご姉きやうだい妹いがみな、離散りさんなさるとはお考えなく、ただ

後日に、何かの証しるしともなろうかという親心から、なされたことではあるまいかと考えまするが……。その黒い爪が、てまえの見出した、玉枝様にもあるのをござります」

「とにかく、その女性に会いたいものじや。たしかに、血統ちすじとわかれば、他家より養子を迎えても、亀山六万石は安泰なわけじや」

「では、折を伺つて」

「いや、早いがよかろうぞ。……今宵のうちに」

「したが、大事なご対面です。今夜というのも、余りにご性急、わけて、本人は寝耳に水でもござりましょうゆえ」

「いや、苦しゅうない。羅門、孫へ手紙を書け」

龍山公はもう有頂天な喜びかたである。何でもすぐに、ここへ迎えようと言う。

羅門もやむなく、玉枝へ宛あてて、手紙を書いた。

小笠原の家臣は、華麗かれいな鋺びょうのりもの乗物を支度して、月下を燦きらきら々と、龍山公のお孫を迎えるべく蔵前片町へ出向いて行った。

月はいよいよ冴え、月はいよいよ天そらに高い。

一点の雲もない仲秋。

宴は別間にひらかれた。そして、龍山公のお孫の着くのを、名月の席に待つのであった。鼓は鳴る、笛は鳴る、酔はめぐる。——ただ羅門塔十郎だけは酔えなかった。余りに厳肅な龍山公の前では、窮屈に坐ったきり、膝を崩すこともゆるされぬ。

迎えの駕は、なかなか帰らない。

「まだか」

と、龍山公は、幾たびも、近侍に訊ねた。

二更は過ぎた、やがて、三更——

羅門はそろそろ、明け方が気になりになって来た。郁次郎の処刑——そのことである。

塙江漢は、果たして、今夜のうちに、郁次郎を救うべき確証と罪人を挙げて、奉行所の門を叩いたろうか。

東儀は、立会いの自分が戻らぬため、さだめし、気を焦っているだろう。

あれや、これ、彼の面持は、落着かなかつた。

ところへ——

「ご老公に申しあげます。只今、お血統の玉枝様を、お伴れ申して参りました」と、小笠原家の用人が、それへ来て、うやうやしく両手をついた。

明めい月げつ大だい吟ぎん味み

「才、これへ。すぐにすぐに」

と、龍山公は、待ち焦こがれていた氣持を制しきれなかった。ほとんど、他愛がないほど、うれしさを表あらわ情わして、

「褥しとねを。脇きようそく息をを」

その位置まで、近侍たちへ、指さし図ずした。

やがて、伴われて、楚そ々としてそこへはいつて来たのは、月夜の衣裳には余りに寒い！
白絹の小袖に、白絹のかいどり、帯までが白い——死し装しょう束ぞくの麗れい人じんであつた。

ただ黒髪が、ふっさりと、うしろへ垂れたほかは、その頬、その手、雪よりも白く、ちらちらと姿にうごく、月の斑ふよりも、まだ白かつた。すらりと、そこに坐る。

「羅門！ 玉枝とは、この女か」

「はっ……左様にござります」

「相違ないか」

「相違ござりませぬ」

「たしかに見よ」

あまり老公が念を押すので、羅門は、形ばかりに、そつと上眼うわめをあげた。

「——たしかに、玉枝様にござります」

「はははは」

と、老公は、何を考えられたか、白髯はくぜんをゆすぶつて、大きく笑いだされた。

「羅門。おまえの眼も、今宵にかぎり、少々どうかいたして来たな」

「えっ」

「もういちど見直すがいい。玉枝はおまえの情婦ではないか。いくらふだん、他人に似るように、作り化粧をさせているにせよ、情婦の顔を見違えるたわけがあるか。明皎めいこう々たる名月の光をもつて、よく、胆きもと眸ひとみをすえて見るがよかろうぞ！」

雷らいの吠えるような老公の声に、羅門はハッと竦すくみながら顔を上げた。

とたんに、彼は大地から大きな震動で匆はね上げられたように、

「あッ、違ッた！」

と、絶叫して、膝を立てた。

「うごくな！ 下郎ッ」

こはそも何たる凛絶りんぜつな声だろう。

突然、はつたと巨眼をいからして、羅門を睨みすえながら、ぬツくと立ち上がった眼前の人は、龍山公その人と思いのほか、白蛾はくがの眉、長い腮髯あごひげ、鬘かずら、被布ひふ、ふくみ綿、すべの仮面を一時にかなぐり捨てれば、それは父性愛の権化ごんげか、捕物の神かとも見える老先生、埴江漢はなわこうかんなのであった。

「あつ」

と、羅門はまたも、胆きもを挫ひしがれて、思わず、ほとんど意識なく、ばツと身を退ひくと、老先生は手をあげて、

「卑怯！」

と、呶鳴なうめいった。

「——逃げるか羅門。イヤ、覆面の男、悪魔の首領！」

「な、なにッ」

「汝が生涯の智慧をしぼって劃策かくさくした悪の大事業は、なんの因縁か、名月の晩にはじまって、名月の晩に崩くずれた。敗軍の將兵を語らずというから、その口では申されまい。この

江漢がすべての魂胆を割ツて申そう」

「ウーム」

と、羅門は蒼白になつて、全身をぶるぶると顫ふるわせながら、ただ、呻うめくばかりだった。

「聞け！ 花世」

老先生は、やさしく、声を落して、雪のかたまりのように、坐っている、花世に向つて言つた。

「まるで、お前の分身のように、瓜二つに似せて、悪の手先になつて働いていた玉枝という女は、あれは、故意に、そなたの姿や顔に似せて、作り化粧をしている妖女だ。——なぜそんな真似をしたろう。それはおまえが真の龍山公のお血統ちすじであるからだ」

「えつ、私が、私があのだ……」

「おう、そなたは、自分の爪を見るがよい。また、亡き養父の五百いおのしん之進殿の日記を後あちたで検めてみるがよい」

花世はわつと泣き伏した、なぜかなぜか、いつさんに、悲しさがこみ上げて来たのである。自刃した父の気持が、余りにも強く、余りにはつきりと、胸を衝うつて衝うつて熄やまないものであった。

老先生は、厳かな語調をついで――

「しかも、そなたのほかの姉妹は、三人とも、皆この悪魔の首領、羅門塔十郎のために殺められた。お半を殺害したのも羅門のしわざ、江の島の巫女殺しも羅門のしたこと。

――また溯つて、女笛師の雪女を殺したのも羅門塔十郎以外の何者でもない！」

「だまれツ、江漢」

鋭く、ふるえを帯びて叫ぶのを、老先生は子供の頭を抑えるように、静かに、沈痛に、

「余人の眼はくらませても、この江漢の眼は晦まされん。――なぜ殺したか、その証拠は歴々と数えることができる。しかし、わしは吟味役ではない、ただ重要なところだけを抉つておけば足りる」

「えいッ、老耄め。汝の子の罪悪を、口賢くも、この羅門に塗りつけようとするか」

「羅門よ。それはおまえのことだ」

「証拠があるか」

「ある！」

「なにッ、聞こう！」

「おう、言わずにおこうか。抑 《そもそも》、其方が大それた悪事を目企みはじめた

のは、いうまでもなく、龍山公のお血統ちすじの詮議を依頼されてからのこと。次に、その血統の四人を、すべてこの世から亡ない者にして、玉枝一人を代え玉につかい、龜山六万石を乗っ取ろうとしたのは、国家老大村郷左衛門のふところに抱き込まれてからのことじゃ」

「見たような嘘をいう奴だ。なんでそれが証拠になる。世襲よまいごと言も、ほどにいたせ」

「だまれ、静かに聴け」

と、一蹴いっしゅうして、

「その密約が成り立つと、汝は、指一本を、千金に売った。郷左衛門は、その指一つを手にすること、龍山公の血統ちすじが絶滅してゆくのをよろこび、やがて、伴せがれの主水もんどを、主家の世継よつぎに立てる悪謀を夢みていた。その悪謀につけ入って、汝は、おのれの情婦としている玉枝を、偽落胤にせらくいんに仕立てあげて、主水の正室にすることを約束している。——そして龜山六万石を、あの愚か息子と、芸人上りの玉枝とで、二つに頒わける魂胆であった」

「う、うぬ。——まだ申すか」

「汝に代つて、懺悔ざんげをしてつかわすのだ」

「懺悔？ 片腹いたいことを申すな。おのれの一子郁次郎の罪悪はつつんで」

「あれにも落度はある。しかし、法を犯したものではない。女笛師のお雪が、旅芸人であ

つた頃、彼はふと、遊学先の長崎で、その美貌にひき込まれて、恋に落ちたまでのことだ。彼は、気が小さい、そして善人すぎるために、わしにそれを打ち明け得なんだ。そして、この江漢には、まだ江戸表へ帰らぬていにしておいて、許嫁の花世どのに、苦しい胸を打ちあけた。それが、五百之進殿の耳にはいったため、すべてを婚儀の前に、内密に済まそうとしたのが間違이었다。——長崎以来、雪女の女中弟子でしになっていた玉枝が、羅門へ仔細しさいを通じたので、悪の首領たる其方そのほうは、得たり賢しと、善人の郁次郎を、誰が目にも、すべての下手人であるように仕組んで、まず第一に、雪女を殺した」

「待てツ、江漢」

羅門は、かつて彼が吐いたことのない呪号どごうで罵った。

「貴様は、驚くべき嘘の天才だ。大山師だ。よくもそう根も葉もないことを、すらすらと言えたものだ」

「これでも根も葉もないことか」

老先生はかりつと、羅門の眼の前へ一箇の小箱を投げ出した。血の干乾ひからびた雛妓おしやくの小指が、はいつていた。

「これは何だ！」

羅門は傲然ごうぜんとして冷笑した。

「何だ、この子供騙こどもだまみたいな物は」

「そうだ、いかにも子供騙しにちがいない。しかし汝は、これを玉枝の手から大村郷左衛門へ送らせては、数千金の金を取ったではないか」

「覚えはない！ 左様なこと」

「佐渡平——」

と、老先生は右わきの襖へ向って呼んだ。

「為替台帳かわせと、荷為替の送り状帳を揃えて、この素浪人に見せてやれ」

「へい……」

佐渡屋和平は、畏るおそ畏る、数冊の台帳を持って羅門のそばへさし出した。

「見たらどうだ、羅門、遠慮はいらん」

「知らん！」

きつく、首を横に振って、

「拙者は、上方の与力羅門塔十郎だぞ。江戸の無役者むやくものに、吟味をうけるいわれはない」

「そうか」

老先生は微笑して――

「しかし、まだ生き証拠はいくらもおるぞ。――波越八弥、隣室にいる作兵衛爺と、唾の岩松を連れて出い」

羅門はその方をじろりツと一眇いちべんして、

「どこの乞食こじきを買い集めて来たか」

と顔を歪ゆがめて、苦笑した。

「では、乞食と言わさぬ生き証拠を出そうか」

「おう、見よう！」

と、羅門は、血走つた眼をつり上げて、じりじりと、老先生の方へ、開き直つた。その血相！ まるで、眉間みけんから、蒼白あおしろい燐が燃えあがっているようである。

兇刃きようじん咄とつさ！

老先生は、もう完全に、羅門の心理を掴つかんでしまっているように、
「いや、こつちではない」

と、彼の殺氣の先を、自由自在に翻弄する。

「あちらを見よ」

と、庭を指した。

羅門は、研ぎ澄まして行く気を折られて、

「え？」

と、思わず、うしろを振り向いた。

見ると庭上の松の樹に、いつのまにか、玉枝が縛りつけられていた。最前の迎え駕は、実は、召捕りの駕であり、それに代る花世は、今宵の最後の対決一つで、死か生かの運命の極まる老先生と郁次郎のために、すでに、殉死を覚悟して、死装束でこの屋敷の一間につつしんでいたものに違いない。

「ううむ……ここまでふかく計っていたのか」

羅門は、絶望の闇へ、どつかりと観念の腰をすえた。そして、ぎゅツと、無念そうに噛んだ唇から、たらたらと、血の糸がたれた。

「もう、これまでだ」

「恐れ入ったか」

「勝手にしろ」

眼を閉じて、無言。呼吸は大きく、肩に波を打っている。硬ばった顔の筋だけが、青白い蚯蚓みみずのように、びくびくと、うごいていた。

勝手にしろ！ 何というふてくされた、悪覚らしい一言だろう。それが悪人のすべてを終局にした最後の声だった。

老先生も、ずいぶん悪人は手にかけてが、こんな不敵な曲者くせものはまだ見たことがない。呆れたように、彼の態度を眺めていた。

無言と無言——

もう何をいう余地もない。正邪、明らかである。これ以上追及はいらない。と——老先生が眼を反そらしかけると、突然、しゆくツと、男泣きの声が、足もとで聞えた。

「老先生！ 慚愧ざんきにたえません！ 事ここに至つては何事も及ばないことですが、羅門塔十郎、今初めて、多年の迷夢がさめました」

裾すそにすがつて、言うのであった。

ああ、かほどな悪人も、遂に、性は善であったかと、老先生は憎いうちにも、ふと、哀れを感じた。

「この上は、獄門、さかさはりつけ逆磔、いかなる極刑きよつけいも甘んじてうけますが、どうせの罪ほろぼしに、公儀の大事にかかわるもう一つの陰謀を、併あわせて自白したいと存じます。そして、心涼しく刑をうけたい願いにござります」

「神妙じや。——したが公儀にかかる陰謀とは」

「党類あまたも数多あつて、諸藩へもかかわることですから、願わくば、別室を拝借して、ひそかに申し上げたいと思ひますが」

「フーム」

と、老先生は、ちと、むずかしい顔をしたが、羅門の悔悟かいごが、偽りではないらしいと見て、

「よろしい、何事か知らんが、ここで言われぬ事とあれば」

と、別室へ連れて行つて、二人きりで、対座した。

さすがに、恥を知るか、羅門は、両手をついたまま、いつまでも、ひれ伏していた。けれど、余りにそのもじもじしている間が長いので、老先生も、少し、焦じれツたくなつて来た。

すると——ギリギリギリ、と遠い書院か何処かで、時計の音がした。老先生は、はッと

した。今のはもう、夜明けに近い、六刻前の時計ではないか。

さては、この底の知らない極悪人は、わざと、最も深刻な故意と用意をもって、自分の時刻をつぶしているのではあるまいか。やがて程なく、夜明けの六刻が鳴るとたんに、郁次郎は奉行所の牢獄の前で斬られるであろうことを心のうちで、待っているのだ。

それは、間接の刺し殺えになる。羅門は、そう計っているのだ。そうに違いない！　これは一大事だ。

老先生は、居たたまれなくなつた。

「羅門、その話は、いずれ白洲で訊くといたそう」

と、言い放つて、立ち上がった。

「あつ、しばらくツ」

と、顔を上げたとなんに、羅門は、つつつと、老先生のそばへ摺り寄つて――

「おのれツ、老耄」

と、前差の短刀を、抜くがはやいか、老先生の脾腹を目がけて、柄も、拳も、突き通れと、刺し込んだ。

愛あ涙い燦さん爛らん

「ウームツ……」

と、老先生の苦しげな絶叫が、血しおと共に、障子を震わした。

「あッ——お父様が」

花世がさげんだ途端に、夜叉やしやのように、血刀を持った羅門が、

「えいッ、汝も」

と、彼女へ向って、躍って来た。

「出合え！」

「羅門を召捕れ」

すぐ隣室には、万一の場合にと、七、八名の武士が詰めていたのにこの不覚だった。武士たちは、八方から、どこどかと、羅門へ集った。そこから、再び血が飛んだ。二人ほど仆れるのを見て、羅門は発狂したように、刀を振り廻して、大広間へ出た。

その途中、彼は、幾つもの燭しよくだい台たいを蹴倒けたおした。騒さわぎに乗じて、火災を起すつもりらしい。残月の庭は、たちまち、入りみだれる剣つるぎと、人影と、そして時々、それを掠かすめる蛍ほたる

火びのような火の粉と、黒煙が流れた。

「八弥！ 波越八弥！ 八称はおらぬか。八弥を呼べ……」

脾腹ひばらの血汐を抑えながら、老先生は、必死な声で、求めていた。

「オオ！」

と、色を失って、駈けこんで来た八弥は、苦悶に転々する彼の老軀ろうくをかかえ起して、

「老先生、八弥です！ 波越です！」

「八弥……。わしの傷は浅いぞ。わしは死なぬぞ」

「は、はい、浅うござります」

「縛れ。わしの傷口を、かたく、かたく、縛れ。——そして大急ぎで、わしのからだを、

南町奉行所まで連れてゆけ」

「うごいてはお悪うございます。老先生、どうか、静かに」

「ええい、たわけめ。そんな場合ではないわ。花世はおるか、花世、花世」

「はい……お父様。わたくしが、しっかりとこう手を握っているのがお分りになりませんか」

「オオそうか……。分る、分る。わしはまだ死なんぞ。花世、わしはこれから、夜明けま

でに、目出度い、目出度い、おまえ達の婚礼の席にのぞまねばならんのじゃ。おまえの死装束は、幸いにも、そのまま目出度い晴れ着になる。……わしを抱いて起してくれ。そしてわしを歩かしてくれ」

「だ、だい丈夫ですか。先生。老先生」

「八弥は、右の肩を助け、花世は左を貸してくれ」

「それならば、お駕を、お駕を」

三つの駕に、小笠原家の武士たちが従^ついて、駕は、南町奉行所へいそいだ。

そこには、手筈^{てはず}をうけて、加山耀蔵が門前に立っていた。駕を見ると不審そうに、

「波越、どうしたのだ」

「老先生が、斬^やられた」

「えっ！ だ、だれに」

「羅門だ」

「畜生ッ」

と、足^{あし}ずりをして、

「よし、俺^{おれ}が、召^{めい}捕^とってくる」

と、駈け出した。

「ご門番！」

波越は、割れるように、門をたたいた。

ほとんど、乱入するように、開けると同時に、駈けこんだ駕は、奥の藪牢やぶろうの前まで乗り入れて、

「郁次郎様、郁次郎様」

と、声をあわせて、叫んだ。

見ると、その郁次郎の獄舎ひしやは、開あいていた。四、五人の獄卒が中へはいつて、今や、彼をふたたび百日前の死の筵ひしに、坐らせようとしている瞬間だった。

とても、江漢老人の方からは、音沙汰のないものと、多寡たかをくくっていた東儀与力は、水桶の支度や、血穴を掘らせて、煙草たばこをくゆらしていたところであつたが、それを見ると、

「何者だ」

と、呶鳴なうつた。

「老先生です」

と、八弥が答えた。

「なに、江漢老人が？——」

と、一度は恟ぎよツとして、狼狽したが、彼の癖として、すぐに虚勢を張った。

「誰であろうと、駕のまま、奉行所へ乗り入れるとは不埒ふちちである。駕を戻して、歩き直して来い」

「いや、老先生は、ご重態です。一步も、歩行はできません」

「やつ、病気か」

「太刀傷たちきずです。仔細はあとでお聞きなさい」

八弥は、対あいて手にしなかつた。何よりも、老先生の容体が気づかわしい。荒い呼吸いきづかいは、ここへ駈けてくる間にも、聞きとれたくらいである。

「郁次郎、郁次郎はいるか。郁次郎は達者でいるか……」

花世と八弥に、抱え出される間にも、老先生は、囁うわごと言のように、口走っている。

「オオ！ 父上」

「世せがれ
伴かか」

「ど、ど、どうなされました。この血は、おお、この血は！」

「驚くな、伴よ。こんなことは、四十年間十手をとっていた生涯の間に、とうにあつてよ

いことだ。……おまえと、花世の婚礼に、わしは、世の中の何ものよりも強い、何ものよりも真実な、真つ赤な、神の美酒うまさけをここへ湛たえて来たんじや。驚いてくれるな」

老先生は、だんだんに落着いて、左に、花世の手を握った。右の手に、郁次郎のほそい手を握った。

「ふたり共に、わしの見ている前で……わしの息のあるうちに、婚儀をあげてくれ。おお！ 一献いっこんの酒も、一荷いっかの祝いもないと、嘆いてくれるな。わしはどうしても、ここで、そなた達二人を、若い未来へ、幸福な生涯へ、見送らねばならぬ義務がある。それは、富武みたけいおのしん五百之進殿に対して誓ったことばがあるからだ。瀕死ひんしの老人でも、まだわしが呼吸いきをしているうちに、二人を結ぶことは、どんなに心強いかわれまい。……よいか」

「お父様……」

「父上……」

「なぜ泣く。強く生きよ。いいか。幸福に行けよ！ いいか」

「は、はい……」

「郁次郎は、気が小さい。世間に弱い。社会にうとい。それを直せ、修業しろよ」

「ご苦労をかけました。父上、この、不孝の罪を、何とおわびしてよいか分かりませぬ」

「花世！ いや、伴の嫁よ」

「はい……」

「いじらしい、牢獄の花嫁よ！ そなたは、何という薄命だったろう。だが、これからは幸福になれる。きつとなれる。わしが、あの世からも守ってあげる。よい嬰兒ややを生みなさい。よい母になっておくれ……。そうしてくれれば、五百之進殿へ、わしは心の責めが幾分かすむ」

「わかりました、お父様！ どうぞ、安心してください。安心して……」

多くの、みだれた蹠音れいめいが、黎明ひびの陽と共に、牢獄の中へ駈けこんだ。小笠原左近将監のすがた、奉行の榊原主計のすがた、舟辰、千吉のすがた、また加山耀藏のすがたも、そこにあつた。

人々は、血の垂たるる、一箇の生首のもとどりを掴つかんで高くさし上げながら、正義の凱歌がいかを揚げるように、声をあわせて告げた。

「老先生！ 老先生！ 羅門塔十郎は自殺じしんしました。羅門は遂に自刃じじんしました」

——だが、一代の名与力はなわ、堀江漢は、その人々の声も、今は遠いところに聞くように、片手を、郁次郎の手へあずけ、身は、雪のごとく真つ白い花嫁の膝ひざに抱かれたまま、さも

幸福そうに、すやすやと、死を迎えているのであった。

青空文庫情報

底本：「牢獄の花嫁」吉川英治歴史時代文庫、講談社

1990（平成2）年6月11日第1刷発行

1993（平成5）年11月19日第5刷発行

初出：「キング」大日本雄辯會講談社

1931（昭和6）年1月～12月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

※「蟋蟀」に対するルビの「きりぎりす」と「こおろぎ」の混在は、底本通りです。

入力：川山隆

校正：トレンドイースト

2016年12月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

牢獄の花嫁

吉川英治

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>